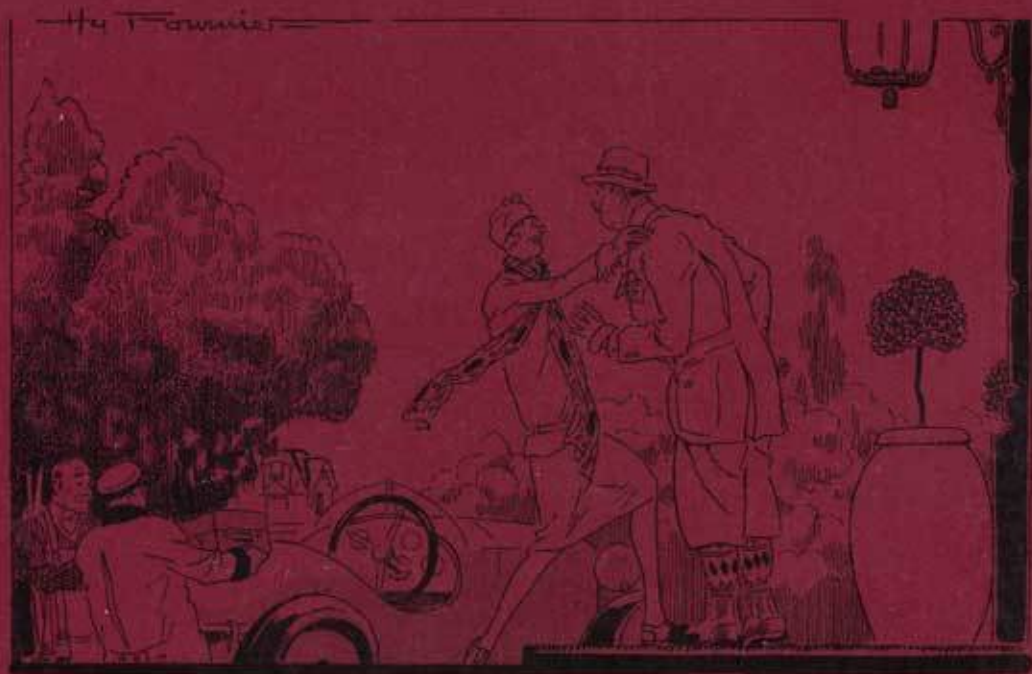


# 奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

12月号



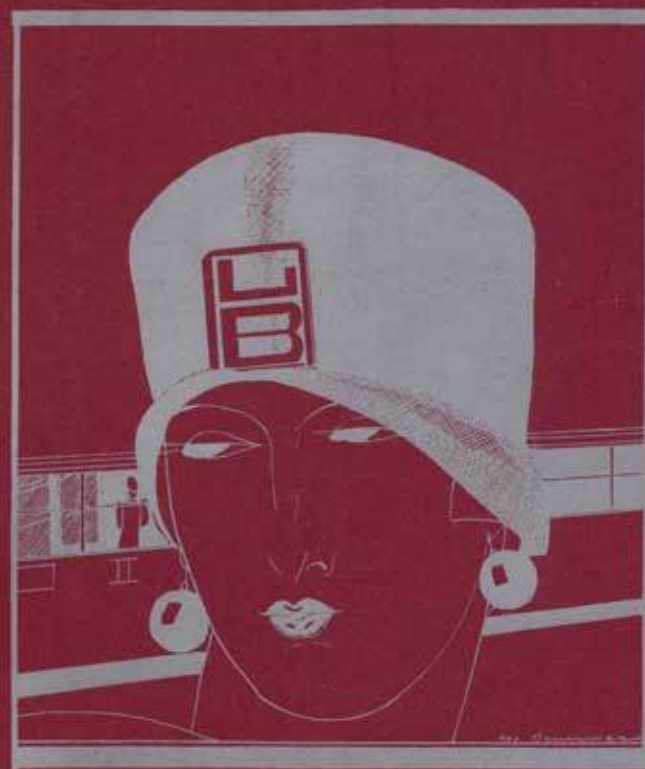
12-DECEMBER '66

昭和四十一年十一月二十日印刷 昭和四十一年十二月一日発行 十二月号 第三千五百六十六号 毎月一回一日発行 昭和四十一年四月二十日第三千五百六十六号 昭和四十一年五月十七日印刷 大阪府大阪市東区東本町二丁目二番

奇譚クラブ

昭和四十一年十二月号

THE KITAN CLUB  
Published Monthly By Tenseisya  
Osaka Japan



定価 三五〇円

12月号 ¥ 350



アルバム「美しい縛しめ」第九集

「女性刑罰拷問特集」『西洋篇』

革具に拘束される女

完成！好評発売中！

「革具に拘束された美女の媚態七十二葉の豪華版」

「女性刑罰拷問特集」日本篇「略号5」の姉妹篇として、待望の「革具に拘束される女」特集のグ  
ラビア印刷写真集をここに完成  
いたしました。真白で豊かな肉づ  
きの女体が、黒光りする革具、或  
は褐色の牛革具によって厳重に縛  
しめられるさまを七十二枚の大小  
の鮮明なるフォトによって、とっ  
くりとごらんいただけます。

内容

○T型に際れた女正面像（くさ  
り、尾錠付革具使用）△三葉  
○皮張椅子に拘束された女（手枷  
革具くさり付、首、胸、腕、脚、  
膝、足首固定革具使用）△二葉  
○革製猿ぐつわを噛まれた女性  
（全身縄縛、革箱口具使用）  
○皮張椅子に固定仰臥させられた  
女性のアップ△二葉  
○黒覆面（革製）並に黒革褲（チ  
ヤック付）着用、両前手錠及び黒  
革褲単独着用△四葉  
○黒革猿ぐつわ、首締め股間括り

両手、膝、足首拘束△五葉  
○電気椅子に固定された女死刑囚  
△四葉  
○口腔検査△三葉  
○女死刑囚の生体実験△一葉  
○黒革覆面貞操帯着用にて前手錠  
立姿の女△一葉  
○並に同じ姿にて  
の各種ポーズをとる女△五葉  
○革製猿ぐつわ、首輪、股間並に  
膝固定立柱括り前手錠△二葉  
○全身革具に固定される女の正面  
背面仰臥姿△八葉  
○貞操帯着用にて黒革製長椅子に  
仰臥固定される女△四葉  
○牛革製箱口具、股締め、股間固  
定全身拘束に呻く女△五葉  
○首輪、両手枷、両足枷を鎖で  
繋がれた女△一葉  
○牛革具に拘束された女性の正面  
背面側面各種姿△七葉  
○首輪、両手枷、両足枷に鎖をつ  
けられて引回される女△三葉  
○貞操帯を着けた女△二葉  
—以上—

限定版グラビア印刷M結集版アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇〇〇円（送50円）

略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真集

待望久しく、今回初めて刊行さ  
れるM派ばかりの限定版グラビア  
写真集です。今迄熱心なファン  
の方々から強く要望されていたの  
ですが、従来の例ではM傾向の需要  
が極端に細いので、刊行を躊躇し  
ておりました。初の試みとして企  
画したものであります。どうか  
一冊お求め下さい。全部M傾向の  
ものばかり結果しております。  
今迄、本誌の男性モデル募集に  
応じてきた男性モデル諸氏を駆使  
して、それらM男性が女王様に奉  
仕し飼育される生態のかずかずを  
豊富な写真資料によって提供しま  
す。いずれも本限定版写真集刊行  
のために特に撮影したものに、更  
にM傑作フォトの秘蔵版を収載  
したもので、未発表の作品ばかり  
です。印刷部数が限定されており  
ます。故、売切れにならない中、お  
早くお申込み下さい。一旦売切れ  
になりますと、本集の再版は不可  
能です。御承知下さい。

内容

○女御主人様の素足の脂を丹念に  
舌舐めさせて頂く奴隷男

○女御主人様が御手ずから奴隷男  
を縛りあげて弄ぶところ。  
○飼犬の男に、女御主人が足の股  
に食物を挟んで与えているところ  
と、そのあとで、足の指を舐めさ  
せているところ。  
○首輪をした犬男が、くさりを女  
御主人様に握られているので、ど  
うにもならず、さんざんに足蹴に  
されて翻られていくところ。  
○女御主人様に縛られて、その上  
流腸されているM男。  
○女御主人様の大きなお尻の上で  
呻めている哀れな男の表情。  
○女御主人様の激しいムチの下で  
苦痛に喘ぐ男の恍惚境地。  
○二人の女御主人様から、いたふ  
られる幸福なMモデル志願者。  
○女御主人様の背中に乗せて這い  
ずり回る男奴隷。  
○女御主人様の飼犬飼育ぶりと調  
教ぶりABC。  
○女御主人様のSぶり発揮と犬男  
のMぶり発揮。  
○女御主人様の豊満な柔肌の重圧  
に包まれる男奴隷。  
—等々—

アルバム「美しい縛しめ」第十集 完成

責められる美女百態

一部 一〇〇〇円（共） 略号「美10」

特アイト紙グラビア印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

「出演モデル」 ○一宮百合子 ○東浦ひかる ○美木乃々子

○増田みゆき ○木村洋子 ○大塚啓子 ○絹川文代 ○山原清子

○長野良子 ○玉田美佐子の十名の美女

ビチビチとした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に厳しく掛った  
縄目。これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり  
百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊にて  
十名の美女モデルの緊縛姿態一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届く  
のです。特製アイト紙に対する極鮮明なグラビア印刷の女体緊縛のフ  
ォトを、心よりお楽しみ下さい。

美しき縛しめ「第十集」責められる美女百態内容

全身緊縛首攻めの場面（東浦）  
縄でくびる豊麗な女身（東浦）  
足首で引回される女（東浦）  
ムチ打ちに悶えぬく（東浦）  
少女羞らいたの緊縛裸像（一宮）  
剥かれたパンティ（一宮）  
Pタイルに転がされる（美木）  
逆さ吊りの緊縛女体（増田）  
インナーベルト縛り（増田）  
M女性の陶酔の表情（木村）  
脚線美も露わな女体（木村）  
脚線美も露わな女体（木村）  
立木の枝から逆さ吊り（木村）  
30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16  
色づいた乳首を晒す（大塚）  
全裸後手縛り豊満女体（玉田）  
二の腕に喰い込む紐（木村）  
鏡に写す縛られた裸身（大塚）  
細目と猿轡にあえぐ（東浦）  
全裸後手足首連繫縛り（玉田）  
長髪をアップにして（長野）  
華麗な刺青裸身強縛り（山原）  
後手縛りに空ろな表情（木村）  
後手縛りに喰い込む紐（山原）  
後手縛りの美女裸体（絹川）  
片足吊りにあう女体（一宮）  
後手吊りに喰い込む紐（大塚）  
緑の柱に晒された女（玉田）

65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31

女ドレイの品定め（大塚）  
強烈股間縛りに泣く女（東浦）  
初めての縛りに恥じる（一宮）  
隣室に見た驚異の縛り（大塚）  
乳房の巨大なる縛り（山原）  
乳を嫌がるモデル嬢（玉田）  
吊りを嫌がるモデル嬢（玉田）  
真紅の腰巻でポーズ（山原）  
驚つかみにされた黒髪（東浦）  
麻縄縛りにのびた女体（大塚）  
開口器による鼻責め（東浦）  
エビ責めに耐えぬく女（長野）  
豊胸を黒帯に托して（長野）  
雪白の柔肌を晒す縄目（大塚）  
人身御供の緊縛全裸像（大塚）  
股間縛りに投げ出す脚（一宮）  
エビ縛りに苦悶の表情（大塚）  
伸びやかな二本の脚線（一宮）  
滑車後手吊りの準備（大塚）  
みゆきの素顔と緊縛像（増田）  
竹に拘束された洋子嬢（木村）  
離家の縁に縛られる（大塚）  
輝く白肌を晒す全裸身（絹川）  
身動きできぬ後手縛り（大塚）  
腰巻を剥ぎとられる（木村）  
大の字逆さ吊り女体（増田）  
美しい裸身にからむ縄（美木）  
若肌の手を晒して（一宮）  
後手股間足首縛り（東浦）  
浴室の荒縄縛りにあう（山原）  
股間縛りと腰縄縛り（木村）  
緑色の庭を背景にして（大塚）  
立木で両手吊りにあう（大塚）  
縄の反応とその表情（一宮）  
強烈縛りとなる弓反り（大塚）  
麻縄は豊かな肌を抉る（東浦）

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66

恍惚境のMの表情（山原）  
胡坐縛りでもたえる（絹川）  
股間縛り正面で立つ（大塚）  
ムチ打ちを願うポーズ（木村）  
伸びやかな女体の縄目（一宮）  
責めぬかれた股間縛り（一宮）  
後手滑車吊りにあう女（大塚）  
縛られて歩かされる（大塚）  
亀甲縛りと股間縛り（木村）  
正座で放置する縛体（増田）  
夫から鼻責めを受ける（増田）  
可愛い小悪魔の表情（一宮）  
徐々に吊られる片足（大塚）  
強烈縛りを受ける鼻責め（美木）  
均斉のとれた美麗縛体（大塚）  
室の隅に逃げた女奴隷（美木）  
首縄股間縛り猿轡の表情（美木）  
可愛い裸身の鑑賞（木村）  
セーラー服の後手縛り（大塚）  
後手股間縛りで引回し（一宮）  
海老責めで耐え忍ぶ（木村）  
縄でくびった柔肌地獄（大塚）  
エビ縛りの苦悶と戦う（山原）  
台上に晒す緊縛裸身（大塚）  
火あぶりであう女体（大塚）  
アグラ縛りで頑張る女（東浦）  
がっちりした後手縛り（山原）  
柱縛りでもがく清子（山原）  
石橋の上に放置される（玉田）  
ムチ打ちに悶えぬく女体（大塚）  
猿轡を三面鏡に映す（大塚）  
庭園を背景に映す（山原）  
首縄にあえぐ哀婉表情（大塚）  
太腿が柔肌をくびる（大塚）  
大の字荒縄ハリツケ（山原）



本誌モデル陣総登場!! 豪華写真集

緊縛美態代表一二〇葉

十一月 上旬 完成予定

アルバム 美しき縛しめ 第十一集 予約分譲

一部 一〇〇〇円 (T共) 略号「美11」

特アート紙グラビア極鮮明印刷、女体緊縛120ポーズ

出演モデル 伊吹真佐子。田中美佐子。若原明子。春丘リル。益田房子。山路ミヨ子。熱海容子。前本妙子。加茂良子。桜井葉子。東浦ひかる。梨花悠紀子。須川令子。田原美佐子。川辺砂登子。花本京子。花坂道子。村田那美子。萩千恵子。四方清美。木村洋子。竹野ひろ子。関谷富佐子。新井マリ子。愛川悦子。中塚文子。水本茂美。川端多奈子。美木乃々子。館典子。長野良子。絹川文代。大塚啓子。山原清子。厚狭春江。雲井久子。津川路子。大井小夜子。柳初子。杉美美。○嘗て本誌上の緊縛女体モデル嬢たちの、代表的未発表ネガを基にして、ここに絢爛たる緊縛女体絵巻を企画しました。四十人に余るモデルによる一二〇態のフォト集です故、モデル一人当りの割当数三枚という僅少のため、数千枚の保存ネガの中から一二〇枚を選びだすのに大変苦労いたしました。しかし、それだけ厳選された代表的傑作というものが出来ます。どうか、この一二〇態の美女緊縛フォトによって、平常の渴をおいやし下さるようお願いいたします。

◎美しき縛しめ第十一集 「縛られた美女」 一二〇態内容抜粋

○股間しばりの全裸媚態 (田原) ○全裸のエビ縛りに喘ぐ女 (関谷) ○投げだした脚線美を縛る (竹野) ○首筋近く挙げた後手縛り (田中) ○浴室での股間縛り正面像 (中塚) ○両手吊りの裸身くねらす (梨花) ○豊満なヌードに映える紐 (長野) ○麗しの素肌がもかく緊縛 (絹川) ○真白な裸身をくびる縄目 (大塚) ○亀甲縛りの緊縛感に呻く (関谷) ○豆絞りがよく似合う縛り (館)

○展示された美しき縛人形 (津川) ○首絞めの裸体をさらす柱 (山路) ○縄目の疼痛にもかく女体 (熱海) ○汚れた縄が美肌を痛める (絹川) ○両手吊りの裸身に羞らう (前本) ○ポリウムに挑戦の股間縛 (桜井) ○高々と背後に締った後手 (水本) ○柔肌をくびり切る依縛り (東浦) ○神妙なる縛しめの全裸身 (長野) ○縛られて諦めきった裸身 (若原) ○立木に縛りつけられた女 (梨花)

○後手縛りの痛さに耐える (大井) ○縛られたうめく刺青女体 (山本) ○木馬責にうめく刺青女体 (山本) ○破られた顔をゆがめる疼痛 (春丘) ○美しき顔をゆがめる疼痛 (春丘) ○豊かな裸身の手吊り晒し (玉田) ○緊縛の自分の姿に羞らう (加茂) ○引き回しにうめく刺青女体 (山本) ○裸身の間に洩れ陽に映える (絹川) ○裸身に厳しき縛り (山路) ○すくみと全裸の縛り (山本) ○S好みの全裸縛り (山本) ○菱縄抱きの縛り (木村) ○恋人との縛り (新井) ○乳房強調の縛り (愛川) ○後手縛りの裸身 (関谷) ○両手吊りの足挙げ万歳縛り (桜井) ○雨中の庭園での全裸縛り (愛川) ○荒縄による強烈縛り (梨花) ○股間縛りの美体縛り (中塚) ○叢の中に逃げた縛り (村田) ○拷問に責められた縛り (美木) ○柔らかな裸身に紐かかると (益田) ○絶妙の悲愁な縛り (春丘) ○フレッシュな縛り (若原) ○猿ぐつわを噛まされる女 (四方) ○上半身を五つにくく縛る女 (木村) ○遊園地にて全裸縛り (山本) ○入墨姐御全裸縛り (山本) ○片足器の全裸縛り (山本) ○浣腸器の全裸縛り (山本) ○拷問柱のある全裸縛り (山本) ○豊満な裸身の縛り (山本) ○美貌の裸身の縛り (山本) ○乙女の裸身の縛り (山本) ○ながし目の縛り (山本) ○全裸を責める縛り (山本)

○カニ縛りに這いまわる女 (雲井) ○椅子縛りに這いまわる女 (雲井) ○二つ折りの縛りに這いまわる女 (雲井) ○エビ縛りの縛りに這いまわる女 (雲井) ○猪吊りの縛りに這いまわる女 (雲井) ○猿吊りの縛りに這いまわる女 (雲井) ○黒縄の縛りに這いまわる女 (雲井) ○敷布の縛りに這いまわる女 (雲井) ○縛られし女体 (雲井) ○両足揃えの縛り (雲井) ○強烈な股間縛り (雲井) ○強快なる股間縛り (雲井) ○いたぶる全裸の縛り (雲井) ○浴槽中の全裸の縛り (雲井) ○初々しき全裸の縛り (雲井) ○威大なる全裸の縛り (雲井) ○哀愁の全裸の縛り (雲井) ○ガンジガラの縛り (雲井) ○破られたシミの縛り (雲井) ○黒皮の縛り (雲井) ○泥にまみれた縛り (雲井) ○美しき裸身の縛り (雲井) ○荒縄の縛り (雲井) ○樹間の縛り (雲井) ○激しい縛り (雲井) ○ロソクを打ちつける縛り (雲井) ○水に濡れた縛り (雲井) ○縛られる縛り (雲井) ○猿轡の縛り (雲井) ○陽の降り注ぐ縛り (雲井) ○可憐な縛り (雲井) ○S的縛り (雲井) ○荒縄の縛り (雲井) ○黒縄の縛り (雲井) ○後手の縛り (雲井) ○裸身の縛り (雲井) ○エビ縛りの縛り (雲井) ○麗しの縛り (雲井) ○淫らなる縛り (雲井)







☆増田みゆき夫人双胎八カ月作品分譲

八カ月妊孕腹鑑賞

大手札四枚一組 略号(ほち) 五〇〇円  
増田みゆき

七カ月でも、これほど大きなお腹と驚かされた増田夫人の腹部であつたが、あれから早くも四十日を経た八カ月腹は、まさに太鼓腹さながらに美しく見事である。

懐胎八カ月の大写

大手札四枚一組 略号(ほり) 五〇〇円  
増田みゆき

鮮鋭なるピントによつたクロード・デッセルに至るまで、微細な皮膚のデテールに至るまで、まるで手にとるやうに判つきりお見せする。

受胎女腹の妊娠線

大手札四枚一組 略号(ほぬ) 五〇〇円  
増田みゆき

従つて、あれ上つた臍窩から正中線に有る妊娠線が膨大な腹部のほりきつた皮膚に印されている。

妊婦の乳房と腹部

大手札四枚一組 略号(ほる) 五〇〇円  
増田みゆき

益々大きさを増した乳房、黒ずんで盛り上つた乳暈、はんにんに張りの胎動が聞かれるというすでに胎児の乳房と腹部の均整美。

後手縛りの妊孕婦

大手札四枚一組 略号(ほか) 五〇〇円  
増田みゆき

両腕を背後に高々と縛り上げられて、前面にある乳房と腹部が前に突き出されて一層その大きさを誇るといふ、妊婦に対する貴重な緊縛実験のフォトである。

八カ月の菱縄縛り

大手札四枚一組 略号(ほわ) 五〇〇円  
増田みゆき

首から胸、二の腕、後手首と正面菱縄縛りになつた妊婦の胸と腹部は、素晴しい縄目を肌を喰ひ込ませ、その豊かなさを発揮し、妊婦縛りファンを魅了してしまふ。

妊婦の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 略号(ほよ) 五〇〇円  
増田みゆき

小山のようなお腹、只でさえ丘のやうな二つの乳房、この妊婦をいのに、厳しい縄目が、更に猿轡の後手高小手に拘束し、更に猿轡つわが無惨にも口を割る。

岩田帯をする妊婦

大手札四枚一組 略号(ほた) 五〇〇円  
増田みゆき

可愛い初産婦の便々と突き出た大きなお腹に真白い晒の岩田帯がぐるぐると巻きつけられてゆく過程を描いた妊婦特有の儀式。

懐妊の生態を探る

大手札四枚一組 略号(ほれ) 五〇〇円  
増田みゆき

子供を孕んだ女性の裸身の秘密を、あからさまにさらけだすため、シャープなピントのレンズによつて、その動物的な生態をホモサピエンスの牝として把握する。

全裸の妊婦鑑賞

大手札四枚一組 略号(ほそ) 五〇〇円  
増田みゆき

初々しい全身に羞らひを見せながら、一糸まとわぬ八カ月の妊婦は、らも、その巨大な腹部をむしろ誇らしげに突き出している。男たちの鑑賞の目を楽しませるのだった。

股間縛に喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 略号(ほつ) 五〇〇円  
増田みゆき

首から女体の中心を二つに割つて、走る縦縄も異様な妊婦腹によつて、その様相は一段と変化し、二度と得難い緊縛資料を提供する。

浣腸地獄の妊産婦

大手札四枚一組 略号(ほな) 五〇〇円  
増田みゆき

妊婦は、いよいよ分娩の前には浣腸されるという、その予行のため、妊婦の浣腸フォトである。

妊孕腹の凄愴切腹

大手札四枚一組 略号(ほら) 五〇〇円  
増田みゆき

実質的には臨月にも比すべき豊満な孕み腹をドキドキとする白刃によつて今まさに切り裂こうとする凄惨な妊婦切腹の実写は又と得難い資料を提供するでしょう。

八カ月腹を誇張す

大手札四枚一組 略号(ほろ) 五〇〇円  
増田みゆき

八カ月といつても普通の妊婦から見ると産み月ぐらゐの大きさである。これを短焦点とカメラアングルによつて一層誇張してみた。

便々たる初産婦腹

大手札四枚一組 略号(ほま) 五〇〇円  
増田みゆき

初々しいさと若々しさとを兼ね備えた初産婦は、その美しくも威大な腹部をこれ見よがしにほり出して、今まさに露出的な女性の本能を自ら満足させている。

羞らしいの妊婦媚態

大手札四枚一組 略号(ほこ) 五〇〇円  
増田みゆき

初めての妊娠という経験は、只でさえ恥しいのに、その大きな腹部や乳房をかくすことの出来ない裸身に羞らひをかくすことの出来ない媚態をファンの前に展開する。

初産妊婦開股縛り

大手札四枚一組 略号(ほえ) 五〇〇円  
増田みゆき

両脚をもうこれ以上開くことは出来ないと思われる位強烈な縄目が膝頭を固定してしまふ。喘ぐ膨大な腹部が両股の間から息つきながら苦痛に耐えている。



十月号の読者通信でM女性の通信が載っていたとかで、それに対する返信が殺到、十一月号では、その極く一部を掲載したが、花嫁一人に婿十人どころか、それ以上の競争率で、とても全部掲載することは出来なかった。未婚既婚を問わず多くの男性が、如何にそういう傾向の女性を求めているか、ということを実に示している。家内にはこういう傾向がいささかもないので、という既婚者の方の述懐が一層憧れの女性に対しての執着を強くしているように思われ同情を禁じ得ないが、又或る反面、「私はマゾ女性です」という書き出しの手紙に接すると、こういう悩みを持つ女性も案外少ないのじやないかと考えさせられるのである。私はつとめて時間の許す限り、そういう便りを寄せられ



る女性と逢って話を聞いてみることにしている。しかし、多くの女性には自己の傾向を分析し、且つそれを要領よく整理して第三者に伝達するという能力に欠けているため、初対面の彼女から、得るところのものは決して多くはない。どんな絵が好きだとか、写真が好きだとか、小説や記事の題名を挙げて好き嫌いをイエスカノーで答えては貰えるが、少しこみいったことになる、わからないと言つて微笑む。その点、男性側の好みとなると千差万別、全く容貌が異なるように一人一人違つていて、それを判つきり意志表示する。女

性はパートナーの好みに従つて、方円の器に沿う水の如く、変化してゆくのであろうか。

生れながらにして、十八才か十九才にしてMの傾向を抱く若い女性に何んとか告白を書いて貰おうと努力するが、多くはその能力を持っていないと思われる。最後の手段として面談によつて、何とか手がかりを掴もうと思つても、こちらの質問も殆どは羞らいと微笑にまぎらわされてしまう。

要は緊縛の厳しさに耐え、鞭打ちの痛さに耐える現実の女性が、ここにいるのだから、いいのではないか、ということとで胡魔化されてしまう。私の体であなたの質問は自ら解決したらどうなの？という体当りの回答が、多くの女性の面上にありありと現れているのを見せられてしまうと、こちらの方が反つて狼狽してしまう。

サジスチンと自称する女性にしてもそうである。誌上の通信に姿を現わすのは一部ではあるが、それにしても女王様のテストに志願

したいというM男性からの便りはワンサと舞い込んでくる。身元が確実に重宝な下働きの男を二、三人紹介してほしいという女性からの依頼を受けたときは、心当りの志望者にはこと欠かないが、さてとなると、いささか考えさせられてしまうことがある。

病室十数室を有する郊外の産婦人科病院で(オトコシ)が死んだので後釜を欲しいと言つていた。若いピチピチとした看護婦たちに顎で追い使われて、この前の男は結構幸福に暮らしていたが、身寄りがないために、結局この病院の下男部屋で悔なき一生を終つた。

観念的には肯定し得ても、実際に身を投じてそういう生活をする人は殆どいないだろう。又それでよいのだと思う。本誌の立場からすれば、SにしてもMにしても、急進的な実行派は、どちらかといえば、重要な読者であるとは言えないように思う。やはり大部分の読者は読むことによつて自己の欲求不満を充足される方だと思ふ。ささやかな本誌の記事が、いささかなりとも、そういう方々の夢に曙光を与え、欲求不満解消のよすがともなれば幸いこれに過ぐるものはない。

## S と M の 双 曲 線

編 集 子





## 私の浣腸レポート

笠井世津子

便秘でもない私が時々薬局でイチヂク浣腸を買ったり、グリセリンを求めたりするのは、人から見たら随分奇異なことでしょうが、本誌で知った浣腸プレイのとりこになった今は、もうとても止められそうにありません。

私は二十二才になるBGですが比較的自由な環境にありますので一層このプレイに耽溺する結果となったのでしよう。私がプレイに入った半年間の体験から他の方々のご意見をおききたいことが出来ましたのでペンをとりました。それは、(イ)、グリセリン浣腸の習慣性について。(ロ)、グリセリン

よりも強い浣腸剤について。(ハ)、浣腸マニアの会について。の三点なのです。一番関心があるのは、(イ)の習慣性の問題です。私の場合を報告しますが、他のマニアの方の生理状態(浣腸の)を知りたく存じます。現在の私は、イチヂク浣腸やグリセリン浣腸ですと一度にかなりの量を注入しましてもほとんど便秘はおこりません。成人してから、胃腸は比較的丈夫な方で、下痢や便秘などめったにしないことではないのですが……。半年ほど前、この様なプレイのあることを知り、やっとの思いでイチヂク浣腸を求め、はじめて使

用したときの感覚はまるで現在とは異質のもののようにでした。スリッパと入ってくる冷たい薬液、つづいて灼きつくような便意に耐える間もなく、トイレに逃げ込んだこと。そして嵐が去ったあと、生れてはじめて感じた爽快感などが、昨日のことのように思い出されます。いろいろな都合から、土日月の三日間を浣腸の日と決めて、夜床についてからしています(但し生理とおつかるときは中止)はじめはイチヂク浣腸を大箱入りで求めていました。

そのうち、薬局ですすめられ浣腸用のスポイトを使うようになりました。スポイトはグリセリンをきらせたときなど、水にオーデコロンをまぜたりして使えますので大変気に入りました。ところが、こうして楽しんでいっているうち先月のはじめ頃からグリセリンの感度が落ちたのに気づいたのです。そこで念のためイチヂク浣腸をためしってみました。以前の様な激しい作用はなくて、ごく弱い便意があっただけでした。次に薬を強くしたらと考え、ドロドロのグリセリン原液を、そのまま使用しますと、かなりの効果がありましたので、現在まで原液を使用してきた

## 編集部だより

○増田御夫妻の御好意により九月十一日、待望の妊婦フォトを撮影したが七カ月にしては異常な大きさの腹部に驚いた。しかし、さすが月が若いので大きいことは大きいが、お腹が大分上を向いている。○妊娠月の計算は一月が二十八日だそうだから、今月あたりが腹部も最大になるだろう。差し当りの予定は、十月中旬、十一月中旬、十二月上旬、の三回に亘って撮影したい。次第に腹部も大きさは別として月が経るに従って下向してくることだろう。

○単なる妊娠腹、妊婦の緊縛からカラーフォト、浣腸、切腹、等の趣向も撮影したいものだ。

○SMカメラハントの次号は、山田チヨコの「可愛い悪女」が登場する。美貌の女性千代子がプレイボーイ辻村隆の手によって如何にしてハントされたか、豊富な写真資料によって、お楽しみ頂けることと思う。

○今更「見る雑誌」の講釈をするまでもないが本誌の「読む雑誌」としての成果は着々として挙りつ





## 〔女の生首〕

〈提供〉

前川成雄

真赤なるしとねの上に投げだされもがけど  
空しいましめの身は  
後手の縄尻とられ寝室に引きたてられぬあ  
われ美少女  
手と足をベッドの脚につながれし大の字の  
まま涙ながしぬ  
いとけなき肌に喰い入るいましめにもがけ  
どかいなし花は散りゆく  
むくつけきおとこの群にとらわれて素肌も  
かなし縄にくぼみて  
縄尻を引きたてられて寝室の並びし枕目に  
いたくしむ  
思わずも口つきいでし呻めき声となり人に  
のひそむ心配す  
地獄にもおちたる思いみだらなる視線を浴  
びて足すくめいる

## 〈短歌〉「落花」 高村初子

のです。  
この頃、浣腸した翌朝、自然便  
がなくなりました。三日間連続に  
浣腸しますので便秘して過すのは  
一日だけですが、終日直腸に便を  
ためていきますと、たえず肛門が意  
識されて、不思議な快感がありま  
す。この点からも、便秘の人には  
案外肛門性感者が多いのではない  
でしょうか。浣腸をやめれば正常  
にもどるのですから私の場合、便  
秘にかかったとは思えません、

他のマニアの方々の体験を知りた  
く思います。  
(回)のグリセリンよりも強い浣腸  
剤ですが、これは浣腸作用のこと  
でなくて、より強い刺激のある薬  
剤という意味です。浣腸のたのし  
さは便意を刺激する強さにあるの  
ですから、極端に言えば刺激さえ  
あれば排便はなくてもいいわけ  
です。ところが現在私の場合、これ  
が逆になっていきますので、より強  
いお薬がありましたら、ためして

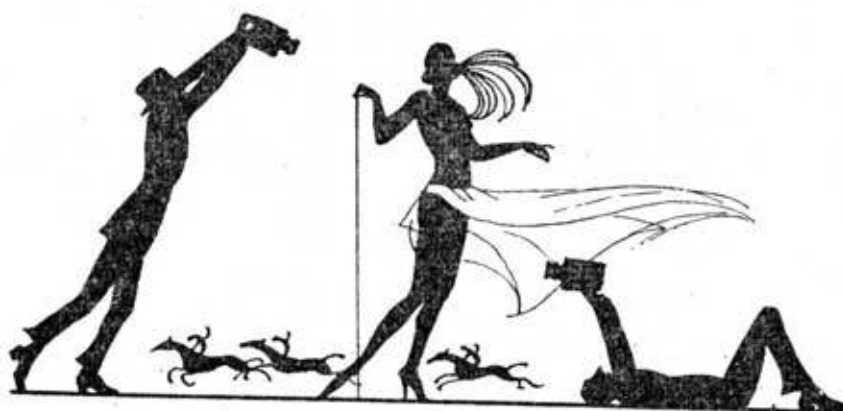
みたいのです。  
いのマニアのつどいについては  
存在していても参加する勇氣はこ  
ざいませんが、文通でも、いろ  
いろ浣腸の生理について語りあえ  
る機関があったら、すばらしいと  
思います。  
以上とりとめのないことを記し  
ましたが、マニア諸兄弟姉のご意見  
を誌上にてお聞かせ願いたいもの  
と存じます。  
(横浜・笠井世津子)

つあるのは喜ばしい。今後は更に  
一層の努力を内容の充実に注ぎた  
い。グラビア・ファンの方々は  
卒、限定版写真集にて御満足願  
い、この方は続々と各種刊行す  
る予定である。  
○次号新年号からは、今年十二カ  
月に亘って親しまれた表紙の構図  
を一新、用紙もアートポスト紙を  
用いて保存するに足る文献誌とし  
ての体裁を整えたいと思う。  
○一枚の挿絵の掲載について、そ  
の可否を検討すること十数日とい  
う例も少しとしない。春川ナミオ  
氏の傑作M画、遂にそういったわ  
けで今月号の掲載に間に合わな  
かった。慎重な態度についての意見  
も多々あると思うが、今後発行  
される本誌の内容をごらん頂いて  
御批判賜りたいと思う。  
○投稿頂いた原稿に対しては極力  
採否のお返事を差し上げたいと努  
力しているが、採否の決をなす者  
の繁忙のため心ならずも遅延して  
いることをお詫びする。  
○只今手元に若干手を加えれば発  
表可能な文章が相当溜まっているの  
で、整理できたものから順次誌上  
を飾ってゆきたい。そして八奇ク  
サロンVの充実が差当り新年号か  
らの課題である。



# ＜M雑感＞絵のない絵本

田代俊夫



ボツを覚悟の投稿が、どうい  
わけか度々掲載の榮に浴すので、  
少々図に乗り誌面を汚す駄文ばかり  
製造しています。いい加減に止  
めたいのですが自分の文章が  
活字になるといことは何といっ  
ても大きな魅力なので、一向変り  
ばえせぬたわごとをセッセと書き  
送る羽目になってしまいます。同

情心厚きM派諸兄よ、寛容と忍耐  
の精神を持ってしばしこのピンボ  
ケ文章に我慢されんことを。

2

御覧になった方も多いと思いま  
すが、「唇からナイフ」という映  
画、もちろん私も見に行きました。  
△不毛の愛▽女優モニカ・ビッテ  
イ扮する、稀代の女賊モデステイ  
(ノ)・ブレイズ。この女賊、太  
モモにさそりの刺青をしたお色気  
満点の美女ときている。この女優  
はいつもヌメヌメしたムードで好  
みに合わないタイプなのですが、  
全身を漆黒の革タイツにピッタリ  
つつんだところなどは、充分ウレ  
シガラセてくれました。△不毛の  
愛▽などというアホらしい寝言を  
いわずに、いつもこんな役を演じ  
てくれるといいのですがね。

この映画で我々M派をドキリと  
させるシーンあり。モニカ女史と  
張合うオトボケムードの大悪党ダ  
ーク・ボガード先生の細君、これ  
が大変なS女性で、味方を裏切っ  
た配下の男を、いともアッサリ消  
してしまいます。その消し方たる  
や、M人士を最高にシビレさせる  
トッテモいい方法。助命嘆願のそ  
の男(道化役らしい)をブン殴り  
投げ飛ばしてダウンさせ、四つん這

いになったところをその背中の上  
に脚を開いて立ちはだかる。この  
時彼女ビキニスタイル、件の男、  
身を反転させて恐る恐る女サディ  
ストを見上げた瞬間、首筋をギョ  
ツとばかり太腿に挟みこまれ、グ  
イグイと股間で締付けを頂戴して  
哀れ一巻の終り、ハイ一丁上りと  
は相成る次第。美女の股間に圧死  
するはM諸兄垂涎の的たらんや。  
ところでこの女優(名前不明)い  
ささか腺病質な感じの顔立ちが食  
い足りない。女死刑執行人の役割  
はやはりソフィア・ローレン、ア  
ニタ・エクバーク級の量感溢れる  
キングサイズグラマーにお願い  
したいところ……なに、死刑囚  
のくせに贅沢いうなって? いや  
ゴモットモです。

3

この映画のラスト近く、先程の  
S女性とヒロイン・モニカ嬢との  
間に肉弾相撃つ大格闘が演じられ  
ます。ところがカメラアングルが  
悪い。せっかくの女レスリングを  
アップでばかり写すものだから、  
相手を組敷いているはずのところ  
がよく分らない。何たるサービス  
精神の不足かと、大のプロレスフ  
ァンたる私をガッカリいたさせま  
した。女の組打ちといえ、本誌

十月号奇クサロンで原口慎一氏の  
迫力ある女斗図入乳房責▽(二十  
二ページ)が掲載されましたが、  
説明文では「図8まで相手を一方  
的に押えこんで……勝名乗りを挙  
げるまで」とあるのに、肝心の図  
は二枚しかありません。残りの六  
枚はどこへ行ったのか知らん、或  
いは十一月号に回されたのかな、  
との希望的観測もアウト、本当に  
心残りです。何とかならないでし  
ようか。ついでに編集部の方へお  
願いを一つ。分譲写真の簡にして  
要を得た見出しと説明文には感心  
するのですが、今一つカッコソウ  
ヨウの感なきにしもあらず。特に  
M系統やメトミものでは両者の姿  
勢・ポーズ・体位などが決定的ポ  
イントになるその点の説明を  
もう少し明確にしてほしいと思  
います。たとえば八男を馬乗りに組  
敷いて……▽とあれば、(1)あおむ  
けなのか、うつぶせなのか、(2)正  
馬乗りか、逆馬乗りか、(3)腹・胸・  
首、のどの部分を尻に敷いていの  
か、(4)視線の向きはどの方向なの  
か、等の眼目を知りたいわけです。  
この点同感の諸兄も多いかと思  
います。

4

私の好きなM画(写真)三態。



千草氏の表現を借りれば△形象化せられたるペルソナ▽

人物——女(W)は二十五才くらいの理知的、且つS的ムードの美女。堂々たる肉体美。男(M)は十七、八才くらいの華奢な体つきの少年。

第一図△胸乗り▽——床の上に  
あおむけに横たわるMとその胸に

## 女のせり市

朝立ち(二)

沼田市郎

お米を先にして一本の麻縄で五人の手錠をつないだ。手甲、脚絆に白足袋をはき、ゆいつけ草履に着ているものは赤い襦袢と腰巻だけの哀れな姿だ。

「あのう、すみません、なにかもう少し着るものを、それにこんなことしなくても決して逃げたりはしませんから」

「なにッ、言わしておきや、いい気になりやがって、あまったれたことを言うな。親分さんのお情で裸でないのがせめてもと言うところよ。そんな面は、てめえ達の亭主や親にしてくれ。なにも親分はす

正馬乗りに跨がって敷くW。Wは両手を腰にあてがい、左右に拡げたMの両腕を両膝でしっかりと踏敷く。勝誇った表情で悠然とMの顔を見下すW。服装はWはスカート、ストラックス、乗馬服、水着、タイツ等、裸身以外なら何でもよく、Mは裸のほうがいい。

第二図△首乗り▽——Mの咽喉

の上に跨がりむき出しの太腿の間にその両頬をぴったりと挟みつけて絞めあげるW。その他の点は第一図に同じ。但しWの両脚は完全に肌が露出されていること。三十四年四月号「変ないたずら」の挿絵がこの第二図とほとんど同じ構成でした。

第三図△顔乗り▽——いわゆる

顔面騎乗のポーズ。第一・二図とは反対に逆馬乗りのほうがいい。前向きに跨がると脚のおき場所に困ること、Mの体を見下せない等の難点があるからです。その他は第一図と同じ、Mの顔は真上を向き、Wの臀部に完全に覆われていること。Wの腰部の線があらわになっていることが不可欠。

き好んで、てめえ達を売るんじやねえ。みんな甲斐性のねえ亭主や親を持ったのが、身の因果とあきらめるんだ」

と同様だ。女達は一樣に声をのんで、肩で大きく息をついた。「親分、仕度が、できやした」「おお出来たか、では出かけるとするか、馬の用意はいいな」「へえ、おい、さっさと歩け」



辰はしんがりの太った女を青竹でこずいた。大工の女房お米を先頭に、敷居をまたぐ女の足は重かった。ひっぱり合った手錠が、ガチャガチャ音を立て、その度に痛みが背すじを走る。

東の空が白みかかった頃とはいえ、物見高いは江戸の常、ただならぬ気配に、近所の人が集ってくる。恥しきでいっぱいの女達は、顔をできるだけ胸にうずめて、観念したかのように歩いた。

お米の手錠は金平が乗る馬の鞍に鎖でつながれた。辰は右手に青竹、左手でしんがりの太った女の腰縄をとった。こうして馬上の金平に続いて手錠でつながれ腰縄を打たれた女五人を間に、辰が後から追いたて女達を熊谷まで歩かせたのだ。



## 映画通信

## 最近の

## 縛り映画から

## 東山映史

最近の緊縛映画の白眉は、小森白監督の「拷問」それに、奇ク連載の「続花と蛇」より「骨まで縛れ」また若松孝二監督の「裏切りの季節」また、大映の「大魔神大いに怒る」で、藤村志保の「火あぶり」のシーンを見せるなど仲々盛況である。

新東宝一〇〇本記念作品の「拷問」は「日本拷問刑罰史」の続編ともいうもので、前作のヒットに気をよくして、柳の下の一匹のどじょうをねらったもの。それだけに、拷問に泣きもだえる女優にも「赤いしごき」の香取環をはじめ、新高恵子、それに「夜開く花」などで最近売出している加山恵子、志摩はるみなど、スターを揃えている。

今回は三話にわかれ、戦国時代、

寛永時代、元禄時代と三つのオムニバス形式をとっている。

第一話は築城にからむ秘話で、築城奉行の娘の、人柱からはじまる。白衣で、縛りあげられ、吊り上げられ、そして、父を「鬼」とののしりながら地中へ生き埋めにされる。清純の中に残酷味を味わわず。つづいて、その絵図面を盗みに入った、くの一、女忍の萩江が捕えられる。そして、問題の拷問がはじまる。半裸にむかれ、太縄でぎっちり縛られた女忍は逆さに吊り下げられる。さすがに女優も苦しそうで、足首、また、後手の手首にも白いほうたいがまかれており痛々しい。

それでも白状しない。つぎに、大の字に縛られ、白い剣をたてつらねた板の上に静かに、おろされていく。乳房に、剣の先が下される。ギャーッと悲鳴があがる。そして最後に釜ゆでの刑に処せられる。腰巻一枚の半裸で、後手に緊縛され、足も縛られ、モッコの上にのせられて、熱湯のほとばしる釜の中にほりこまれる。そして奉行も壁の中にぬりこめられる。

第二話は、キリシタン女囚の拷問である。

徒お小夜は転向せよと、吊し責めにあう。吊り下げられ、蛇でピシピシと打たれる。そして、蛇のニョロニョロする桶の中に押しこめられる。

遂に女牢にほりこまれる。この女牢の牢名主が香取環のおかめである。油ののりきった豊満な肉体を囚衣でおおい、お色気満点である。お小夜も白い尻をむき出しにされ、キメ板で、ピシピシ打たれる。

ふとんむしで殺される女囚もある。それを助けるお小夜は牢の柱に縛りつけられる、リンチにあう。

「ふとんむしで、殺した者はだれだ。白状せよ」と、牢名主のおきぬが拷問される。白い盛り上った香取環の乳房に荒縄がくいこみ、美しい惨虐美を盛り上げる。

吊し上げられ、土間につきおとされる。カラーだけに美しい。最

後にお小夜は引き廻わしにあい、股ざきの刑にあう。

第三話は、爛熟期の元禄時代の姦通を扱ったもの。恋しい番頭のことを思いきり、武家の妻になった新高恵子の七重は、下男との仲を疑われ、拷問にあう、胸ははが







れ、乳房を見せて吊り下げられた七重の吊り責め、そして下男も横で吊し責めにあう。

そして最後はシナであったという六所斬りの刑にあう。

夜の木に立縛りにされ、両手もひろげて青竹に縛りつけられている。

最初に、鼻、乳房、ホモ(局所)そして、両手、両足と斬られていく、ほとばしる血潮、そして、手

首が庭上に散る。惨虐という語でも語れないすさまじさだ。

○

京都で「拷問」の上映の「田園キネマ」では、これに「惨虐ヌード」と銘打って、ストリップをやっていた。「惨虐物語」二景と、アナウンスして、幕があくと、長襦袢一枚の女が、十字架にかかっている。ひろげた両手は縛られている。その足元に、これも長襦袢

一枚の女が横たわっている。そこへ、日本髪の女が出てきて、ムチの女をムチ打ち、「ピシピシ」と、音がするたびに、十字架上の女は、苦痛に身をのけぞらし、打ちふるえる。映画「拷問」にふさわしい、ストリップだった。

○

本誌連載の団鬼六の続「花と蛇」よりの、「骨まで縛れ」は、バーのママが静子になり、恋人のバーテンを奪われた、ホステス達の復讐物語になっている。

る。ホステスに誘拐された静子は、田舎の納家に、閉じこめられる。

裸体にむかれ、前には手拭一枚をおおい、乳房の上下を黒白の縄で

しめあげられ、吊り下げられている。そして、旦那に自殺したと遺書

をかけとおどかされる。女優の小岸綾子は、着物の似合う清楚な

感じ。それが、鼻責め、耳責めにあい、いたいたい。遺書を書か

ねば、さかさにして吊り下げられ、おどかされ、書く。最後に、後手に縛られたままで、バー

テンにおかされようとする時に、恋人が助けにくる。香取環が探偵

の京子のような役で少し登場するが、いいところはない。「花と蛇」

のように、静子と一緒にいじめ抜かれる所がなかった。それに、

静子は、ただ、天井からの吊り下げだけだったが、エビ縛りや、柱

への立縛りなど、変った縛りもほしかった。

○

若松孝二監督の「裏切りの季節」は、日本映画ではじめての「拷問と恐怖」の連続と、大いに宣伝していた。

○

ヒロインは、谷口朱里、ベトナム戦争を扱った、異色の作品。ベトナム戦争の写真カメラマンの恋

人が死ぬ。その友人が彼を殺したということから、彼に白状させようと試みる。彼はまた秘密結社の一員で、そのフィルムを出せと拷問されるが、そのために、彼女も拷問にあう。

半裸にむかれ、椅子に縛りつけられ、かたい縄でムチ打たれる。また、後から猿ぐつわをはめられ後手に緊縛され、さいごは、さかさに吊り下げられ、逆エビ縛りにされ、打たれる。全巻これ、縛りというものすごいものだった。

谷口朱里の苦痛にあえぐ顔のクローズ・アップが印象的で強烈だった。

○

大映の「大魔神怒る」のラスト・シーンで藤村志保の早百合姫がムリヤリ十字架にかけられ火あぶりにされようとする。

地上には、本郷功次郎らに、二人の女性も、柱と縛りつけられて

いる。

怒った神田隆の悪城主は「火をつけ」と命じる。燃え上る炎、煙

にむせ、苦痛にゆがむ志保の顔。柱に縛られた二人の女性が身もだ

えるするアップもよかった。乳房の上にかけた縄も強かった。



## サロソ樂我記

(第三十回)

辻村 隆

奇クサロン欄で、数月前より登場した夫婦プレイのニューフェイス、須磨松男氏と連絡がつき、先日、彼の訪問をうけた。二年前に結婚した奥さんとのプレイ・オンリーであるが、それが夫婦プレイの正道であるのかも知れない。モノクロのD・P・Eはいうに及ばず、カラープリントも自分で研究して、手掛けておられる。その時々々の色温度によって、多少カラーの色合いは違うが、何れも鮮やかにプリントされていて大した腕前である。唯今八ミリの反転現像も研究中というが、自信の出来た暁は、奥さんを対象にして、バリバリ、8ミリをとりまくるとかいっておられた。

何しろ坊ちゃん育ちの、お金に扱いといたない結構な御身分だから、金と暇にあかせて撮影技術や、現像の研究に没頭されているらしい。彼のその時持参した百枚近くのフオトは、勿論よりぬきでもあろうが、玄人はだしの腕前であった。靴フェチの彼のフオトは、すべてが靴、華麗なパンティ、猿轡

というアクセサリに終始しているがこれから徐々に変わった方向のものも撮ってゆきたいと仰有る。結婚二年にして、未だ妊娠したことの無い奥さんのスタイルは、若々しく、娘さんのようにつやかに張り切っている。

カメラ・ハントしたいという夫婦帰って妻に相談した上御返事しますと仰有ったが、自分一存できめないと仰有るなど。やはりフェミニストである。十中八九、妻は承諾するでしょうとの確答を得たが、大いに楽しみ。

先月東京のS氏と痛飲し、その折ヒョータンから駒が出て、飯塚千鶴子さんを撮る、羽目になったが、その夜彼のたつての懇望で小原真澄を秘書にと請われ、彼女がそんな柄でもなく、さしたる教養もない事を百も承知で、遂々東京へ招き、文京区にアパートの一室を借りてやり、愛するペットとして片時も離さず、専ら飼育に憂身をやつすことになった。変貌したマスキに一度逢ってや

拝啓

編集部様

半田次郎

拝啓

初めてお便り致します。私は二三年前より時々貴誌を読みSMに興味を持って居る者で、以前よりどなたかとプレイしたいと思っていました。しかし、どうにも相手がみつからないので、一人淋しく夜になるとS的絵画を描いて慰めています。

同封の絵三枚、拙いものですが若しよろしければカット代りにでもお使い下さい。十月号を久しぶりに購入した所、桜台の香山様のお便りを拝見しまして、何とか連絡をとりたいたいと思い筆をとったわけでありました。私は新宿の諏訪町に住んでいますので、桜台ならそれほど離れていないのです。もし彼女とプレイ出来たら、こんな素晴らしい事はないと、今から心を高鳴らせております。若い女性を思いきり縛れること



が出来たら、どれほど楽しいかしれません。ムチ打ち、逆さ吊り、あらゆる責めが私の頭に浮かんできます。どうか、香山嬢と連絡がつくように編集者をお願い申し上げます。連絡方法は、私も家族がいて家人に知られては困るので、香山嬢と待ち合せる事が出来たらうれしいです。それで貴誌の通信欄を利用させていただきたいのです。十一月六日、午後一時、池袋駅東口丸物デパート前広場の公衆電話の端で女性週刊紙を脇にかかえて待っていてほしいのです。私はスケッチブックを脇にかかえて





ってくれと、一昨日電話があったが、そのためわざわざ上京するのにも億劫で、その気にもならないが、S氏の有頂天のさまが、電話でも歴々と手にとるようで、内心少し惜しい気がしてならない。かねて箕田氏より分譲フォトのモデルに頼むと依頼されていてその俤になっっている手前、箕田氏に悪いような気もするが、マスマ自身、すっかり今の環境が気に入っているのか、あれこれと便宜を計ってやったのに、ウンともスンともいってこない。近頃の若い娘は、兎角眼先だけの享楽に走っていて、自己中心本位なりであろうか。秘書とはいっても、恐らくは名許りのことと思うが、私はマスマの将来に對して、果していい事をしてやっ

たのか、悪い方向へ進ませたのか、どうも判っきりしない気持の俤である。かつて千日前でフト知り合ったマスマもユリコも、今は遠い過去の人となってしまうた気持ちしきりである。

ユリコは箕田氏に——マスマはS氏に、そして私自身には何も残っていない。それでいいのかも知れない。その私は私で、又明日に向って、新しいカメラ・ハントの取材に、汗を垂らしながら、巷をかけずり廻っているのが、最も私にふさわしいスタルであるのかも知れない。

(追記) 送稿後三日目に、一宮ユリコとのカメラ・ハント紀行ありましたので、前文を少し訂正しなければならぬと思います。

待っています。

私は二十二才の男性で身長一六五センチ、やせ型です。編集部の方、よろしく頼みます。

住所を書いてない事をどうかお許し下さい。では、これからも益々

編集に力を入れられて、素晴らしいKK誌が発売されます事を祈っております。

敬具

半田次郎

KK編集部皆様へ

## 齊藤夜居氏について

—伊藤晴雨ノート・を読む—

久我庄一

発禁本研究家の城市郎氏の名は高い。その桃源社より出版された「発禁本」正・続は静かなブームを続けている。それと対照的な存在として風俗誌研究家、齊藤夜居氏がいる。夜居氏は城氏のように一般的ではない。私家版が多い。しかし、「書物探訪」「カストリ雑誌考」などの編著によって、一部愛書家の間で、その研究は「足で書く」という生きた文献として高く評価されている。(筆者の知る所「伝奇・伊藤晴雨」は唯一の書店出版である)

精神分析学者、高橋鉄氏との親交は、その著「高橋鉄入門」の文章がある位だ。その夜居氏が本誌

十一月号に、どのようなきっかけによるか「伊藤晴雨ノート」を発表した。氏のファンでもある私にとって嬉しい快挙である。夜居氏は現在「愛書家くらぶ」を創刊しその編集兼発行者として、この九月に第二号を出している。氏は月号に「戦後艶笑誌、街娼その一」を執筆し、本誌の寄稿家でもある中康弘通氏が「ある遍歴」を掲載しているのも興味がある。

◇夜居氏は目下、風俗出版界の異端児、梅原光明が華々しく活躍した、いわゆる大正末期より昭和初期にかけてのエロ・グロ・ナンセンス時代を題材として風俗誌研究出版の準備中とのことである。



## マニア通信

## 「花盗人」

麒麟児久

花盗人——辻村氏は、くどき文句がお上手だ。氏の如き大物から「本当に有難く思っております」といわれると、ぼくは返答に困ってしまう。男のぼくでもコロリと参ってしまうのに、ハカメラ・ハントVのお嬢さん方は、如何ばかりか、と羨ましくさえなってくる。ペンには剣よりも強しというけれども、ぼくには、れい子嬢はペンよりも強い。彼女の前では奇クの如何なる名作も消える。れい子嬢だけが残る。ぼくの大好きだった文代嬢や悦子嬢が、いまでも残された写真のように美しいか、どうかぼくは知らない。しかし、彼女たちは花の盛りを奇クに捧げた。だが亜紀子嬢やれい子嬢は一度着物を脱いだけで、ぼくらの前から消えてしまった。

ぼくには、一人の天才的作者が奇クに誕生するより、一人のれい子嬢が奇クに誕生する方がはるかにうれしい。△恍惚抄△はモデル嬢と花盗人とのアウンの呼吸が合わなくてはできない傑作である。△続恍惚抄△が、一日も早く見たい。読みたい。花盗人の撮った彼女のあで姿は花盗人のものだ。公開はできないという。ぼくらは新しい分譲フォトで我慢しよう。かつて編集子が責画の中に判じ絵式に張形をかくした伊藤晴雨氏のサーピス精神を褒めたことがある。もちろんぼくは、かかる構図を辻村氏に希望するほど無作法ではないけれども、晴雨氏の後継者である辻村氏の作者精神に訴えて是非とも分譲フォトをものさされることを氏の義務だと思う。

花盗人は、可愛い小悪魔の写真のように、あわれなれい子嬢の乳房をわしづかみにするか、れい子は「泣かないのよ」と目をとぎすか。ぼくは花盗人が憎い。やっぱり妬けて仕方がない。が、奇クのために、親愛なる読者諸君のために、いや、ぼく自身の好きごころのために、花盗人の△続カメラハントVを許そう。

○夜乃探郎氏へ

「僕のイメージ画集」

室井亜砂路



美しい少女は、それだけでサジズム的な対象である。その少女が幾人かの子供を生み、生活に疲れてグチをこぼす姿など、どうして考えられようか。ぼくの鞭の下にひとりの少女が、いつか大人となり、老人となり、みにくい悲鳴を挙げるまで、ぼくは休みなく、その鞭を振りつづけることなど出来るようか。

SM的自殺論気に入りました。氏のいうSMの美を神経質に考える必要はない。ぼくはただ、その

刹那的な全文から漂ってくる虚無の美に、酔い痴れるだけで満足である。氏のヤブレカブレの詩が、ぼくの魂に共鳴を呼ぶのである。△わたしの乳房は小さくてごめんなさいね△は、ぼく感覚になんとサジスチックに響くことか。

○保藤久人氏へ

別稿△1△は非常に参考になりましたし、貴兄の(A) (G) (I) (H)の内容、読者層がよい意味で妥協し、協力し合うならば奇クの伸び悩みを解消するカギにもなると思



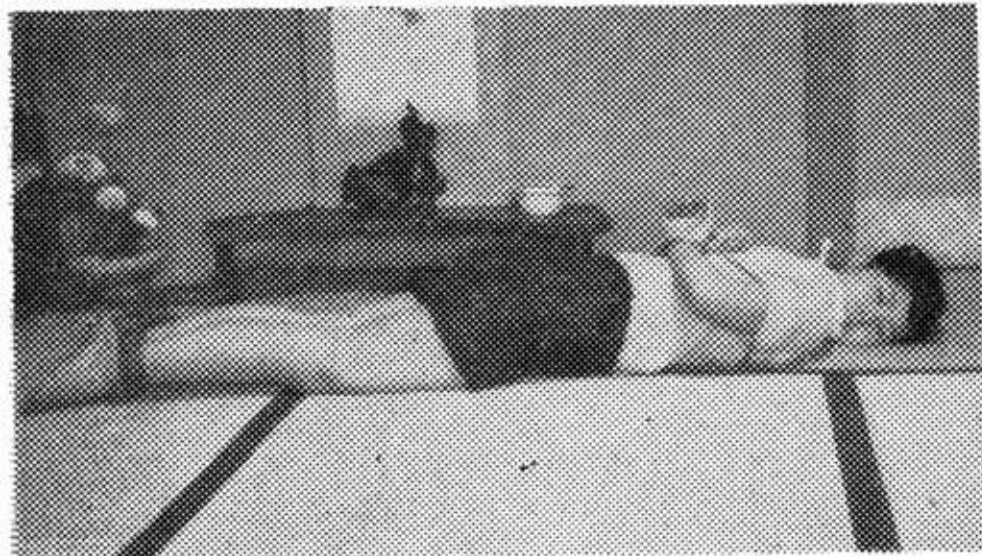
## ボクの責め方

宝塚二三夫



白とか黒とかの原色の服がよく似合う慶子は、肌の色が抜けるように白くてへえくぼVの可愛いOLである。ボクが冗談を言った

りすると、途端にポツと頬を染めてたまらない羞らいを見せる。  
彼女を始めて縛ろうとしたとき「わたし、案外そんなことが好きになっちゃいますかもう知れないワ」と平気な顔をしていたのに、いざ後手に紐をかけると、しなやかな全身をくねらせて盛んに抵抗を試みた。紐が掛ってゆくに従って洋服に掩われていない彼女の肌が真赤に紅潮しているのを発見して「彼女は好きなんだナ」  
とボクは、柿のように真赤になった彼女の襟足を見ながら、心の中であらう思った。彼女を後手に括っただけで真白い足を手にとって十分鑑賞した。胫から踵、踝から足の甲、足の指に亘ってボクの好みにマッチしていたのは嬉しい。



います。拙稿の御批評についてはありがたく拝聴しました。おっしゃりたいことを半分寛容くださった御温情に感謝します。もともと我が作品は悦子恋縄譚Vの併合フオトの黒線部分がすべてであり、御批評を受ける価値もないものですので、ぼくには批評されるだけで無精にうれしいのです。  
△この「変身」はすべてではなく

序章であるVは橘氏の名批評の一節ですが、ぼくはそうは思いませんでした。これ以上の作品はそうさらに書けるものではない、というのが、ぼくのいつわらざる感想でした。八月号では花山氏の「低俗より脱せよ」という御意見があった。ぼく自身は大部分反対だけれども、ぼくは△変身Vを花山氏の意見に合致するものと解してい

ます。  
△東山の慕情Vについては、ぼくは五月末、編集部への私見として「変身の文章は最初から作風を計算に入れた文章であり、今回の作品はしっかりとした情感がある」と述べました。よく調和がとれ、素足の描写にも、ほんのりとした△美Vが感じられました。  
△西陣の妖精Vは特に制約下とい

う情勢下で判断しなければならぬけれども、総合的には生ぬるい印象でした。描写も鋭さを欠くこの作品の力を弱めたのは、作者が美意識に捉われすぎたことに原因があるのではないでしょうか。しかし、いずれの作品も大衆席のぼくにも理解できることを、ぼくは幸福に思います。



## サロンの展望台

## 女の悪智恵

目出鯛三

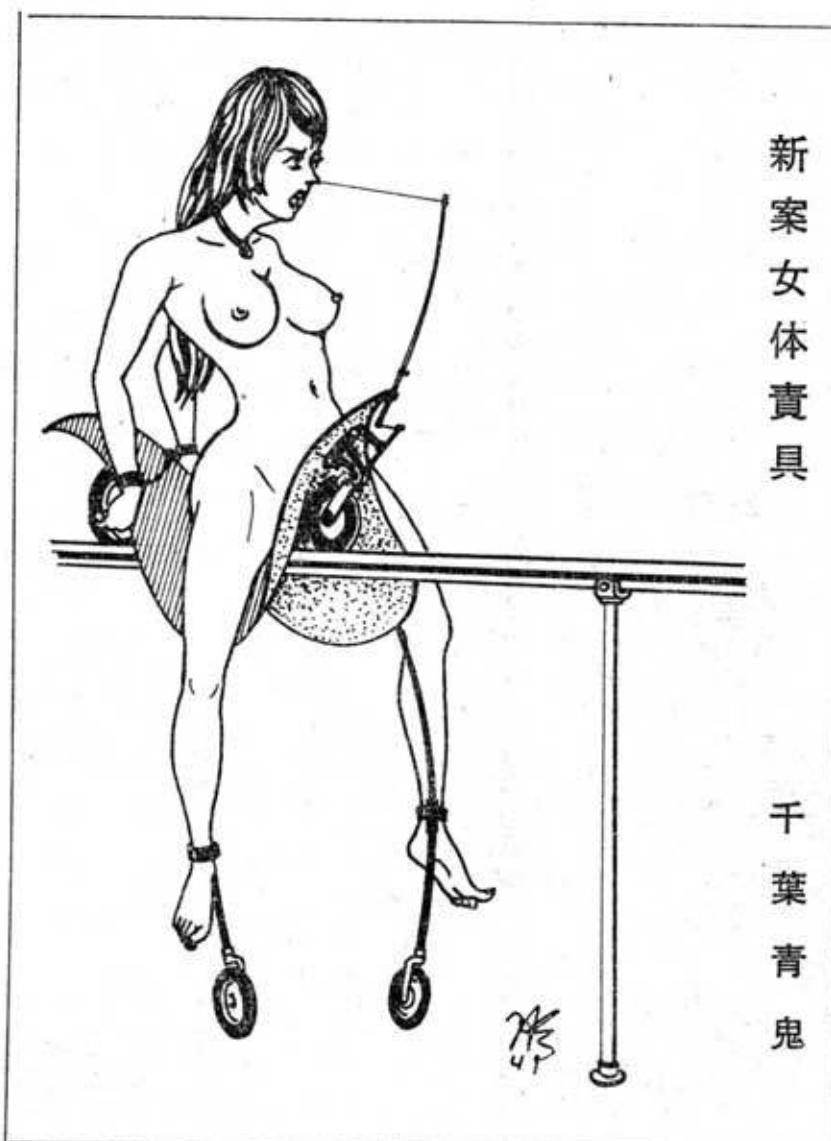
原宿の某洋裁学院の寮近くにある薬局から聞いたのだが、この頃寮生で浣腸器を買っていくのが非常に多いというのだ。女性と便秘と云うのは、つきものみたいだから、本当は不思議ではないが、実はこの使用法が別な面にあることが判ってビックリした。おつむの回転の早いご仁はすでにお判りのことと思うが、つまりセルフサー

ビス用として使用するのが真相でそのためイチジク浣腸の売れゆきがいいと云う。あの使用法を考えればピンとくるだろうが、それにしても女性と云うものは、こういうことにかけてはイイ知恵を出すものだと感じた。だが世の中には、本物がいくらでもコロがついてると云うのに……。

これは「漫画エース」九月二十

## 新案女体責具

千葉青鬼



三日号のピンクトピックスから引用したものです。

特別、浣腸に興味のない私ですの、従って浣腸については、本誌から得た知識が関の山。只この記事を読んで先ず感じたことは浣腸器（この場合、どうもイチジク浣腸を指しているものと考えられるが）が、ずい分変わった方面でも活躍させられ、若いお嬢さんたちから、重宝がられているということです。

浣腸器と云えば便秘治療か整腸或は奇ク流に言ってみればプレイ用の小道具である。それが一部の女性の間では、浣腸器本来の使用目的から隣りのよしみで思わぬ門をくぐり抜けようとは、矢張り世間は広いものと申せましょう。

セルフサービスとは、つまり自らの手で自らを慰める行為にほかならないのですが、それにしても女の悪智恵には、マイッタマイッタ。もっともソーセージやバナナでは味わえぬよさがあることもうなずける様な気がしますネ。何故なら、オーバーヒートの極点で内

## 代理部だより

○十一月号のこの欄にて紹介しました本誌モデル嬢総登場の限定版グラビア写真集、ネガが余りにも多いため整理に手間どりましたが、鋭意作成中です。十月中には、何とか完成するものと思えます。ハ略号「美11」Vです。それから、せいせいお申込み下さい。

○尚、連載小説「花と蛇」続篇の単行本化、限定版にて刊行するか或は前篇のように、臨時増刊号のような形にて発売するか検討中でしたが、いずれにしても出来れば年内に完成したいものだと考えております。

○御送金の切手代用は結構ですが小額のものにて一割増にお願いいたします。尚切手は絶対に紙に貼りつけて下さい。

○雑誌は三カ月分以上予約下さる時以外は、一冊につき20円の送料を頂戴いたします。何卒お含みおき願います。

○分譲中止にしました「女体緊縛コレクト・フォト集」V E組百花選は、その後依然として申込みが絶えません。故、当分の間、再び分譲



## モデル通信



## 小野田順子さんに寄せて 中 徹男

味をピューツとやれば、案外本物以上の実感が有終の美を飾って、面倒みたよとなるのかも知れませんが、女性の下着にあこが

れ、おパンティの移り香に酔い痴れながら、自らを慰めたいと願っている私も、大そうな口がきける方でもありませんが、浣腸ファンの女性の皆さん、たまには門前の

門前を愛してみたら、いかがでしょうか。洋裁学院の近所の薬局でよく売れる筈ですよ。何んたって、校門の近くですからね。

手の手を肩から上へねじながら上げる訓練ですが、恐らく日ならずして素晴らしいものとなり、梨花嬢などでも寄りつけなくなる位と思います。

本年十九才という若さにも拘らず写真掲載を承知の上、堂々とモデル志願をされた小野田順子嬢の勇氣には感心致しました。出来れば何とか彼女の希望にそってやって見て貰えませんか。

せた女性は、身体がやわらかく、それに十九才という若さは訓練すればする程柔軟さを加えて参り、丁度生きたゴム人形を責めているようなものになると思われますし又、そのように訓練する必要がありますと思います。

成程身長一六一釐に体重四十三斤は軽すぎますが、この程度であれば写真にうつせば大して見劣りはしないと思います。私の最も好みの女性である梨花嬢も恐らく、これに近いと思われるし、眼元も中々澄んでおり、すばらしい女獣になると確信します。総じてや

勿論、小野田嬢もかくとして志願したのでから、如何にすればSの男性を喜ばすかを考え、どのような責めの為の柔軟訓練にも耐える必要があり、ひいてはこれが貴女のMを満足するものです。今更いうまでもなく、まず第一に後

次にエビ責訓練ですが、足首が首の所迄曲げるのでなく、当然背中迄届いて手首と一緒にする迄必要です。次にこれは早急には参らぬと思いますが、逆エビ責訓練です。アクロバットダンサー迄が理想ですが、難しいですね。その他股裂き等色々ありますが、遠慮せず訓練を積まれては如何ですか。若し貴誌で困難であれば、私が訓練して撮した写真を送付しても良いですが、私の方に間違いないと思っても責任上貴誌の方でも中々難しいと思われるので遠慮しますが、何とか希望をかなえてやるよう努力して下さい。尚、写真が出来ましたら、一番に買わせて戴きたく思いますので、案内欄に記載の件よろしく願います。

を継続いたします。御希望の方はこの際御注文願います。

○最近、局留にて郵便物を受領される方が増加しておりますが、殆ど順調に受渡しが行われております。只、局名を間違えて書かれたりして、途中で変更を求められる方がありますが、一旦発送してしまつと訂正がききませんから、必ず郵便局の正式の名前(門札に書いてあるもの)をよくお調べの上御指定願います。

○度々お願いしていることでありますが、お届け先は楷書ではっきりとお書き願います。局留のときは封筒にも局名とお名前をお書き下さい。封筒にデタラメの住所をお書きになるのは誤送の原因になりますから御注意下さい。

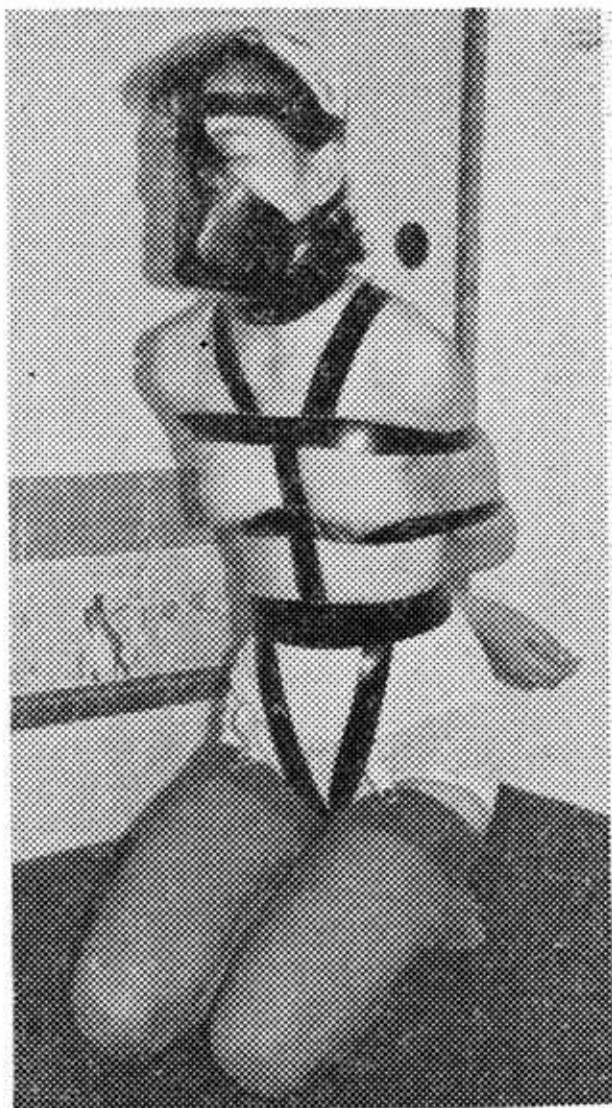
○只今代理部分譲品目録は作成いたしておりますから、御注文はすべて本誌最近号誌上に発表しました広告により願います。御注文はハ略号Vにて御指定下さい。○売行きを心配しておりますM版グラビア写真集、Mフォト・オンパレード「女王様に飼育される日々」略号ハM特Vは、尻上りに注文が続いておりますので喜んでおります。印刷部数が多くありませんから、今のうちにどうぞ。



## 【夫婦プレイフォト】

## 革具利用の責め

おさ  
長田  
だ  
実  
みのる



最近の奇クに、投稿される皆様は、以前にまして充実したよい作品が出ており、愛好者として何時も期待して読ませて戴いております。夫婦プレイ者の数多いことで、私としても、心強く感じております。近頃の投稿作品はどれもこれもよいので、私ごとき者の作品ははさくして出せないくらいです。しかし、私も同好者の一人として度々投稿していますので勇気を出して、今回お届けします。最近のロープによる縛りにあ

きましたので各種の責具の製作に掛っています。責具を使用する場合は、どうしても洋装になり勝ちになります。今回投稿の写真も洋装式になっています。その責具も皮を使って作製しています。全身拘束具、さるぐつわ、股責用、パンティー、手錠、足鎖、など。身体の一部に使用できるものを、ほとんど黒皮にて作っています。今度にも数十点作りましたが、マニヤの方に分けています。ロープを使用するより

## マニアの手帖

## Sの桃源境

## 求む

山岸三郎

この度皆様のお仲間入りをさせていたかどうか、始めて投稿する者です。私の奇ク歴は古く、もう七年になります。この間、グラビア華やかなりし頃のグラビア頁だけをピックアップして綴じ合せ一冊にしたものも十冊程になりました。私はSに興味を持つ者です。特にSフォトやS画に対し強い興味を抱きます。

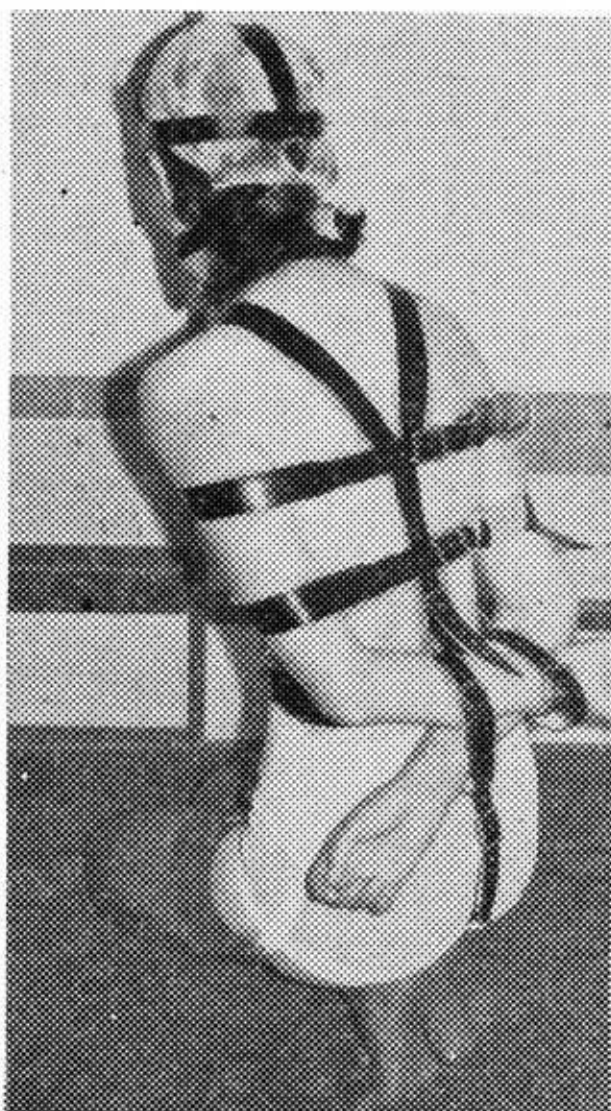
グラビアの無くなったのは残念ですが、「花と蛇」「痴人の糧」などといったS小説が健在です。余り淋しくはありません。殊に辻村隆氏のカメラハントが、Sフォトマニアとしては唯一のなぐさめとなっています。Sの桃源境を求めて只ひたすら彷徨を続けております



が、未だにその機会に恵まれません。

私の夢としては、良きM性女のパートナーを得て、心ゆくまま責めの境地に心酔し、人生のアルバムにカラー頁を満載し、その思い出に浸りたいのです。本日は去る十月号の通信欄に投稿されました香山玲子さんにお便りします。映画の紹介にSシーンが入っていると知ると、どんな遠い所でもつい見に行ってしまう様な気の良、本当にSの好きな私が、貴女に一度だけでも良いですから、プレイのパートナーになって欲しいと切望して呼びかけます。期日と時間をお知らせしますから来て下さい。10月30日午後1時から1時半まで西武池袋線桜台駅改札前に





も、皮の方が緊縛感が一層強く出ますので貴としては最高です。緊縛感が強い割に肌に傷や後型は残りません。もっとも有効な貴用品であると存じます。

ただ作るのに小道具の必要と原材料の皮が高く付きますので、製作品も高価になり勝ちで、困ります。又付属金具も色々必要とします。数々製作したので皮のあつかい方や、加工方法も大分勉強しました。

もっと、経費を掛けて製作すれば、外国製のように立派なものができますが、加工に高く付きますからやめました。あくまで実用本位に強いことを目的に使っています。

すので見場はあまりよくありません。SM夫婦プレイ者で、話し相手になって下さる方はお便り下さい。貴具製作のアイデアについて話し合ってもっと改良して行きたく考えています。もっと数々の変った貴具を作りたいと存じますので、アイデアのある方もお便り下さい。

外国には立派な貴具が数多くありますが入手困難や高価のため購入できませんので、不出来な自家製品で満足しています。その不出来を友と語り合っても、よりよい物にして行きたいと考えています。同好の皆様、奇クを通じてお便り下さい。お待ちしております。

## オムツ……マニア

宇都宮 武

キャノンFXを肩から提げてそこに居ます。貴女の方で傍観の上、良かったら声をかけて下さい。私は単身上京し、都内の寮に住んでいる25才の小柄な一見平凡な男です。態度はいつも真面目です。

から御安心下さい。是非私の夢をかなえてくれるよう望みます。数枚、自作の画を同封します。お恥しい拙作ですが、カットがわりにでもお使いいただけたら光栄に存じます。

う恥しきで、黙って六百元を出して買い求めた。

私も実のところ、中学生頃からオムツにとりつかれ、奇クの頁をめくるまでは、自分一人の、この世で自分一人の性癖だと、自己の特殊性、風変わりな存在に、肉体的な優越感を懐いていた。しかし、こうして同好のよしみが見出された以上、過去の自己を告白する義務があるような気がする。

私がオムツを当ててみたいと思ったのは、中学一年の時だった。その動機は全く今もってわからない。潜在的な自己意識が何かの拍子に突然外面に現われたとしか、説明のしようのない事だった。家人の留守にぼろ布を取り出し、それをオムツのように当てて一人喜ぶ自分に何の疑問も抱かず、ただどうしようもなく楽しい、そんな気持ちで心が支配されていた。

(未完)

本を読むことが好きなので或る古本屋の店頭を漁っていると、無意識的に追っていた活字の中に、一瞬心をときめかしたのは、オムツという文字だった。人が見てやしないかと、まわりに気をつけ私はもう一度その頁を開いてみた。確かに襁褓のことだった。それと知った瞬間、私は何か嫌な気持ちに襲われた。その時の正直な気持は「なんだ、他にも僕みたいな人間がいるのか」ということだった。その場では気になってゆっくり読むこともできず、裏の定価二百円を確かめてから店員に本を渡したところ「六百元です」といわれた。「畜生！インチキだ」と思いつつも、その時はただ、その本を買



## △私のアイデア▽

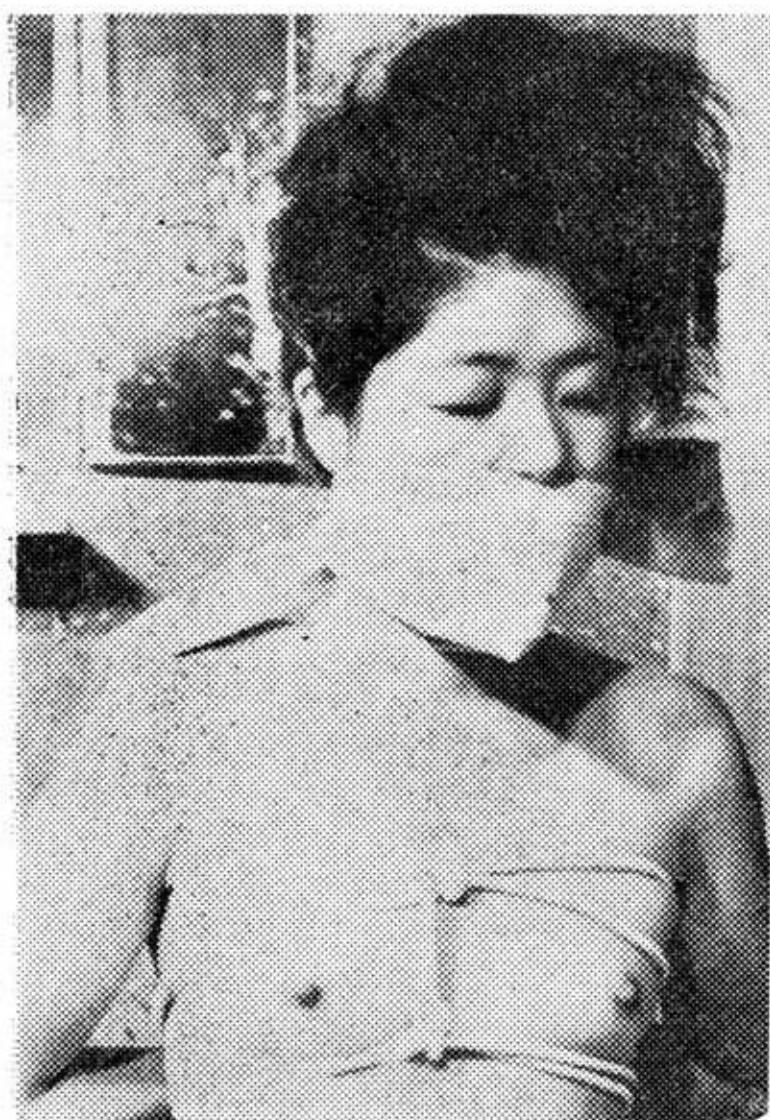
## 「塩袋」の猿ぐつわ

山田育男

私は鞭打ちの様な外面的な責めも好むが、女性の持つ真の美しさを引き出す為と、肌に傷をつけない為に内面的な責めの方をより好む。しかし、この責めは心身共に極度に疲れるので常用は慎まなければならぬ。それに唾液や吐いた汚物で衣服をよごす恐れがあるので、必ず全裸にして縄を掛ける事が肝要である。

苦しみの為に、死にものぐるいで暴れるので、ゆるく縛ってはならないが、あくまでも苦しみ悶える過程を観察する事に目的があるのだから、本縛りに縛ってはならない。手首を背中中で括って完全に自由を奪えば、胸、足、腰等は少しぐらいゆるく縛った方が、かえって効果があるものである。

猿ぐつわとは、布切れを口の中に押し込めて、その上を手拭で縛



るのが常識であるが、今回は布切れの代りに塩をポリエチレンの袋に包んだものを使った。(この袋には、あらかじめ小さな穴を数カ所あけておく)これを先程の様に全裸にして椅子に座らせ、縄を掛けた女性の口に噛ませるわけである。勿論、鼻には脱脂綿とパテを貼り合わせたものを詰めてゴム栓でこれを押さえるので呼吸は口でだけしか出来ない。

口で息をすれば水蒸気がポリエチレンにつき、それが塩と混って喉をしびれさす。この為女性は縄のかかった足をばたつかせ、乳房をふるわせ、全身から汗をにじませ、声とは似ても似つかぬ打ちひしがれた音を出して、死にものぐるいで暴れる。普通の人なら十分余りで汗が脂汗に変わり、むせ返った咳の次に、吐き出した唾液で猿ぐつわを濡らす。

この時の姿は、女性の持つ姿の中で最高のものであると、私は信ずる。又、縄の間から顔を出した乳房が一番可愛い見えるのも、この時である。このプレーの後は、汗や脂や胃液の他に、女体の放つ甘酸っぱい香りが部屋中に充満する。それは何とも言えない素晴らしい香りである。

## アブストラクト

▼恋しい人の身につけているアクセリーを慕わしく思うのは、あたりまえであるが、相手の身体の一部又は附属物に対して、本人と同じ又はそれ以上に執著するようになればフェチの傾向がある。

▼フェチシズムは、マゾヒズムの潜伏型の一つといえる。

▼人は他人を覗き見たいという本能を持つ。週刊紙の暴露記事は巧みに人の持つ窃視意欲を利用しているといえる。バルビュスの八地獄の如き鍵穴小説は、これから大いに活用されるだろう。

▼日本の富国強兵主義をスポイルさせるために派遣されたアメリカの尖兵スリールは、スポーツ、スクリーン、そしてセックス。今やその効果がきめんにあらわれて日本の国民一億は幸福になった。

▼不断の自己満足(自慰)は自己愛より発してやがて異性愛に発展する。途中で同性愛に寄り途しても普通は本筋に戻るものである。

▼ハ刺青は肉体の一部であるところに意味がある。潜在的な性的欲求が表面化した典型的なものである。

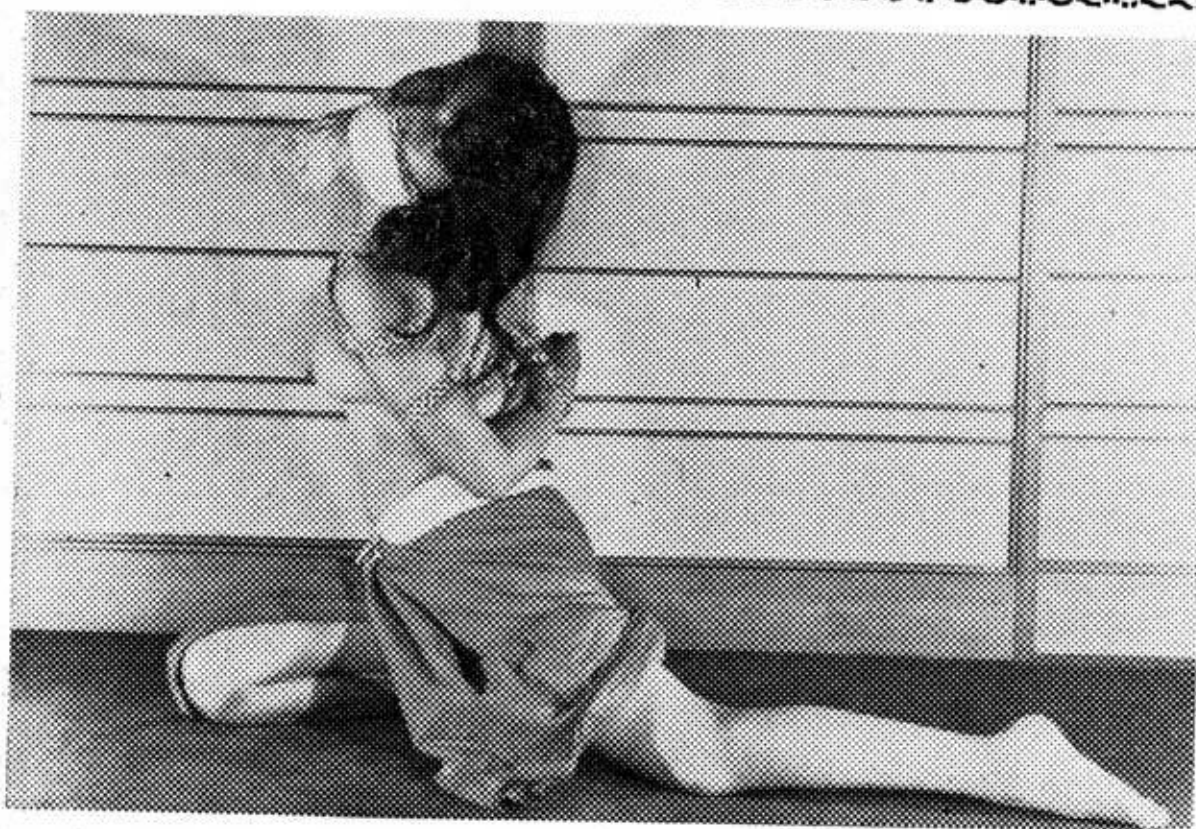
(南)



# 奇譚クラブ

昭和41年12月号

(1966年・12月号〈第20巻第12号・通刊第221号〉)



## 本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 女性の羞恥願望を衝く

三 木 徹 朗

教頭がそのことを話し始めたとき、十二人の先生方の示した反応は、それぞれに違っていた。

おばアちゃん先生は眉をよせ、中年の男教師はニヤニヤと崩れた態度を見せた。そして若い独身教師の一人である私は、内心どきどきしながら平静をよそひ、唯一人の独身女教師の平松先生をチラチラと見やっていた。その平松先生は真赤になってうつむいたままであった。

終戦后四年程経ってはいたが、街には進駐軍が幅をきかし、GHQの教育担当官が、ま

れにこの小さな女子高校へやって来て、教師の女生徒に対する扱いが粗暴だとか、授業中は黒板に字を書く時といえども生徒に尻をむけてはならんなどと勝手なことを言い、それが又ごむりごむりとも通る時代であった。従って教師もいささか自主性を失っていた頃のことである。折柄いつも生徒達の身体検査を依頼している近くの大学病院から、今年的身體検査には研究上、骨盤計測をやらせてもらいたいという申し入れがあったのである。別にそれは進駐軍命令でもなく、単なる大学病院の依頼なので、ことわってことわれない

ことはなかったが、安い費用で身体検査を毎年やってもらっている手前、何とか生徒達にショックを与えない様にしながら、この申し入れを受け入れられないかというのが教頭の説明であった。

「骨盤計測といっても婦人科の検査をしようというのではなし、いいんじゃないですか」

と、これは数学の老男性教師N先生。

「そうはいっても、場所が場所だけに生徒達には相当ショックだと思いますよ」と既婚女教師のF先生が渋い顔でいう。

「オヤ御経験がありますのね」





「ええ、ええ、これでも二児の母親ですからね」

「骨盤計測というのは、どんな姿勢でやるんですか」

「そんなこと、この席では言えませんよ」

「じゃ後で、こっそり教えて下さい」

皆がふき出してしまった。

「冗談はさておき、我々男性は骨盤計測なるものがどんなことをするのか知らないのだしそれを生徒達に受けさせていいかどうか、判断がつかないと思います。ひとつ女の先生、どなたかが大学病院へゆかれて、その検査方法をきいてこられて、御説明いただくわけに

はゆきませんか」

いつもの職員会議で良識的な発言をするま  
とめ役のA先生の発言だから、忽ち賛成意見  
多数となったが、女性側には甚だうけが悪か  
った。しかし教頭の唯今のA先生の御意見に  
従うより仕方がないという発言で、それなら  
どなたにこの大役をお願いするかということ  
になったとき、冗談ずきのK先生が半ば本気  
ともつかず

「それは何といっても生理衛生担当の平松先生でしょう」

からかう様に平松先生を見ながら提案したのである。私はその会議の途中から耳は皆の

発言をききながら  
眼は絶えず平松先生を追っており、  
このとき見せた平松先生のまさに消え入りそうな態度を見、女性の羞恥にあえぐ姿を、こんなにも美しいものかと思ったのである。

実を言えば私と

平松先生とはひそかな恋仲であり、もとより恋愛はきつい御法度の女子高校で、せいぜい一緒に居残りして採点する程度のことであったが、気持はお互に何とはなく通じあっていたと今でも思う。この平松先生の窮地に本来なら先輩の女教師達が助け船を出すべきであったが、恐らくは自分がその役を引き受けるのがいやなのと、若く美しい同性に対する嫉妬からであろう。平松先生は見殺しにされ結局この大役を引きうけさせられた。私はと言えば、おはずかしいことに胸が高鳴り、のどがかわき、とても助け船どころではなかったのである。

「どうするつもり？」

翌日の昼休み、私はとなりの席の平松先生にささやいた。

「だって、仕様がなんでしょう。でも男の先生っていやアね」

「僕だけは別でしょ。ところで、いつゆくつもりなの？」

「明日の午後は、授業がないから、明日にするワ」

「僕も一緒にいってあげようか」

「バカ」

たわいのない会話がまた楽しい二人でもあ



った。

翌日、少しおそく迄明日の教材を揃えてい  
ると後から平松先生の声がして

「いって来たワ。とにかく相当なものよ」

彼女の言う所によると、普通妊婦等の骨盤  
サイズを計るには、ベッドの上に寝させて仰  
向けたり、横向きにしたりして計るのだが、  
今回の検査では立ったままで計る。それも普  
通の身体検査と同じく浴衣をきたままでいい  
という。

「それじゃ、どうっていいこともないじゃな  
いの」

「ううん、それからが大変、胸囲を測るとき  
の様に浴衣の前をひらいて看護婦さんの前に  
立てばいいんだけど、看護婦さんはズロース  
を下まで下げてしまいうんですって」

「へえ、生徒達おとなしくしているかしら」

「そんな格好で横をむかせたり前をむかせた  
りして測るの。時間はあまりかからないらし  
いわ。でも、よく生徒達にいつてきかせて、  
納得させておかなくては無理ね」

二三日前の職員会議の時とはうって変って  
平松先生は、すっかり落着いている。

この平松先生の報告が翌週の職員会議で行  
われたが、彼女のはきはきした悪びれないも

の言いに、かえって聞いている方が気押され  
て、にやけた雰囲気にもならず、そして平松  
先生が単なる研究のためだけでなく将来生徒  
達が結婚した場合にも役に立つという説明を  
あっさり承認して結局、平松先生が各教室を  
廻って生徒達に十分納得させるといふ条件づ  
きで満場一致で、この大学病院の申し入れを  
受けることになったのである。

「いやいや、どうなることかと思っていまし  
たが、女性に分らぬものだネエ。あんなには  
ずかしがっていた平松先生が、ああいう説明  
をするとはネ」

会議後にA先生が言った言葉が、皆の正直  
な気持であったかも知れない。

それから平松先生は緊張した面持ちで各教  
室を廻っていたが、生徒達に心配された動揺  
もなく説得は順調に進んでいるかに見えた。

「うまくいつているらしいじゃないですか」

「ううん、そうでもないのよ」

平松先生は一寸憂鬱そうな顔を見せた。

「何といつても恥ずかしがかりの年頃だから  
仲々大変よ。特に三年生がうるさいわね」

近くの先生方の耳を意識して平松先生は小  
声でつづけた。

「特に先生の組に手古ずらせるのがいるわ」

私は三年二組の担当である。本来は私の様  
な若い独身の教師は、クラスをもたなくても  
いい事になっている。それが先輩の先生の長  
期入院で、いわばピンチヒッターとして、一  
番むつかしい卒業を控えた三年生を、もたさ  
れたわけである。

「玉置ですか」

「御名答」

「玉置が何か言いましたか」

「私が一通り説明を終つて何か質問はといつ  
たら、彼女立ち上つてね。先生、私達にその  
様な検査が絶対必要と言わぬまでも、有益で  
あることは分りました。しかし私達に有益な  
ことは同じ未婚女性として先生にとつても有  
益と思いますが、どうですかつて言うのよ。  
私、返答につまっちゃつて、勿論私も検査を  
受けますつて返答しちゃつたの」

「……………」

「何をニヤニヤしているのよ」

何もニヤニヤしていたわけではない、作り  
笑いでもしていなければ、心臓の鼓動がさと  
られてしまう様に思えたからだ。

この体当りの説得は生徒達のショック防止  
には役立ったが、いつか教員室に伝わり先生  
方の間に微妙な波紋をまき起した。あのはず



かしがりやの平松先生が、生徒達の先頭に立って羞恥に堪えながら骨盤計測をうけるという、それだけで職員室にはいとも悩ましい雰囲気だ。ただよって来た。K先生などは

「僕も医者になればよかったな」

真面目な顔で言えば

「おあいにくさま。計るのは看護婦さんですよ」

と、おばアちゃん先生にたしなめられる一幕もあった。その間、平松先生は不思議な微笑をもらしながら一言も言わなかった。あれから十数年経った今、私はふとその頃の平松先生の心境のうつり変りを、首をひねりながら思い起すのである。極度の羞恥は同時に、その様なげいししい羞恥をうけたいという願望となり合わせではないのか。それは露出狂というには、もっと微妙で複雑な女ごころではないのか。

さていよいよ明日が当日という日の授業で私は自分の担任の生徒達に明日はいつもの身体検査の時と同じく浴衣を忘れない様にと注意した。ゆっくり教室中を見廻したとき玉置がいた。そうに笑いながら手を上げた。

「先生、明日の身体検査は、生理日の者はどうするんですか」

教室中が机をたたく音と、キャアキャア声につつまれて、その間に人権じうりんだわの声も飛び出し、私は教壇の上で全く立往生のありさだった。

「平松先生は、何とか言われなかったのか」

「平松先生は、明日は生理日ではないンですよ」

玉置の声が鋭くかえって来た。教室が又喧騒につつまれ、私は、ほうほうの態で教室を出た。

教員室へ戻るや私は平松先生をつかまえ、今の一部始終を話して何とか話してもらいたいと詰問する様に言った。顔をやや赤らめながら聞いていた平松先生は

「話してあるンですよ。検査のときに看護婦さんにそう言えば心配ない様にやってくれるンです。先生がからかわれたンですよ」

その様なきわどい冗談で受持教師をからかうなどということは当時の私には全く不可解であったが、しかし同時にこの不思議な心理の持主の玉置という生徒に特別の関心を持たざるを得なかった。教師が受持生徒の中の特定個人に興味を持つのは禁物だが、教師としても人間であり特に若い男性である私は生徒を異性として意識せざるを得ない時もあるのだ

ある。

ただ教師としての理性が具体的行動をからくも抑えている時がしばしばあった。実を言えば玉置という生徒には前にも生々しい思い出があった。前年の秋、運動会がささやかなりながら開かれた時、折柄残暑のきびしい日で朝から太陽にさらされて皆些かグロッキーになっていた頃、玉置が見物席で崩折れる様になつたのである。私は意識を失って重くなった彼女をひとりで背負って医務室に運び救急措置を保健婦にまかせ校医に電話をかけた。医務室へ戻ると胸元をひろげ丸いふくらみの一部をのぞかせながら真赤な顔であえいでいる玉置を、保健婦がせつせと冷したり、あおいだりしていた。

「日射病らしいですね」

「そうですか。校医さんが間もなく見えますよ」

私は玉置の胸のふくらみから、あわてて眼をそらしながら言った。間もなく校医が見えたのを機に医務室を出ようとする私へ

「先生、ここに居て」

玉置が声をかけた。自分が医者診察されるのを、異性の私に見せようというのか。后日機会があつて、その時の気持を玉置に聞い



てみたら、思わず口から出たのよと笑っていたが、私には長い間その心理の深層は分らなかった。

「じゃ向うで待っているよ」

医者や保健婦の手前、私はついたてのむこう側へ行った。椅子に所在なくかけながら全神経はついたての中へ注いでいた。胸に聴診器をあてているらしい様子だったが間もなく「日射病の様ですね。苦しいかね」

「……………」

「うん、熱が高いからね。冷やすより方法はないんだが。若し苦しい様なら急いで熱を下げる為に冷水灌腸という手もあるがね」

「……………」

「しかし、ここではいやでしょう」

「……………」

「それとも思い切っていますか」

「……………」

「うん、それじゃ、僕の鞆の中に消毒したのがあるんだが、ええと、この水道は飲めませんね」

保健婦にたずねる声がしてやがてカチカチというガラスのふれ合う音に変わった。私は衝立のかげに身を固くしながら、もっと固くなっているであろう玉置の顔を思い浮べ息をひ

そめていた。

「横をむいて、そうそう……一寸下ばきを下ろしてやって下さい。ええ、その程度でいいでしょう。すぐすむからね。膝をまげて……そう固くなっちゃだめ、口で息をしてごらん。大きく息をして、一寸いきむ様にして、ハイ、もういいですよ」

「これはすぐ出してもいいですが便器ありませんね。出したら、もう一本しておきますか。早く熱も下がるでしょうから」

やがて便器を用意する音がして

「一寸私、となりで煙草吸ってくるから、ゆっくりなさい」

校医が衝立のこちらへ姿を見せたとき私は「先生、大丈夫でしょうか」

と一応の挨拶をした。校医は私がそこにいることを、大して意にも介さぬらしく、煙草に火をつけながら

「もう直ぐ熱も下がるでしょう。そうすれば歩いて帰れますよ」

と言いながら

「もう済んだかね。済んだらベッドにもう一度寝ていなさい」

と声をかけた。そして煙草を吸い終るやゆつくりと又衝立の蔭に入った。

二度目の洗腸を終えて医者が帰り、排泄も終わったのをたしかめて、私は玉置の枕元に立った。

「大丈夫か」

玉置は手で顔を覆ったまま、何も答えなかった。

そんなことがあってから私は教壇に立って礼を受けるとき、いつかふっと玉置に眼をやる自分に気がついた。或いは玉置は私にほのかな慕情をいだいているのではないか、そんなことを下宿の二階のつれづれなるまま考えたのは若い教師のセンチメタリズムであつたろう。私の心はといえば、あの一寸勝気でそれでいて私と二人のときは俄かにくだけた態度を見せる平松先生に完全にひかれていたのである。

さて検査の当日、私は体重測定を受け持った。小数の教師しかいないから、独身教師の私といえども何かを受け持たねばならぬ。身長や体重が一番無難なものであった。胸囲の測定になると、どうしても生徒達の乳房に手をふれないわけにはゆかない。そして冗談に中年の男教師が志願するが大抵は女の先生に落付くのである。又男の先生では生徒達も恥かしがり仲々浴衣の前をひろげぬばかりか、



測定中にも身体をすくめたりして手間どるのである。その他にも眼科耳鼻科内科の診察の結果の記録がある。大抵は異常なしの所へ〇をつければすむ仕事だが、眼科耳鼻科はとにかく内科はともすれば生徒達の水々しい裸が見えることもあり、これも又女の先生の手がある限り女の先生の仕事になっていた。

少数の生徒しかいないといっても三百人近くの検査だから医務室には入り切れず、小さな講堂を使う事になった。骨盤計測だけでも医務室をいう意見もあったが、生徒達にかえて異常な緊張感を与えるのではないかという事で講堂のすみを衝立で仕切り、入口にはカーテンを下げて使うことになった。私は先日の検査場の設営を行ない、生徒達を指図して机を運ばせたりしたが、骨盤計測の衝立の中の机配置等は専ら平松先生が指図していた。時々生徒達が

「いやだわ、こんなところで」

などと口ごもる声がすると

「何でもないですよ。すぐすむし、私もちゃんと受けるんですから」

と平松先生の、しゃんとした声がかえって来た。

私は体重計をその衝立のすぐ近くにおき体

重測定が終わった生徒が次には骨盤計測を受ける様に配置した。その位置は衝立のかすかな隙間から骨盤計測の様子がちらちらとうかがえる位置である。生徒達のはずかしがりようもさることながら平松先生がその立派な言葉に反して、どの様な羞恥にもだえた様子を見せるか私は胸のときめきを禁じ得なかった。

当日、私は体重計の前で生徒達が入ってくるのを待って雑談していたとき平松先生が、看護婦二名を案内して来てカーテンをわけて衝立の中に入った。間もなく先生は看護婦の中に残して出て来た。或いはスカートやシュミーズをまくったままの姿勢で計測を受けたのかと一時どきりとしたが、時間から見てそれは単なる案内であった様だ。やがて一年一組の生徒達がズロース一枚の上に浴衣を着て前を合わせながら、どやどやと入って来た。

一年生とはいうものの満でいえば十五、六のいわば女らしさのめっきり出て来る年頃で、

この様ななまめかしい姿は仲々見たえがある。講堂の別の隅に設けられた同じく衝立でかこった内科検診を終え、更に眼科耳鼻科を終えて胸囲にかかる頃から生徒達の声は、だんだんやかましくなり

「あら、先生、くすぐったいわ」

「何を言ってるの。さア、しゃんと胸を張って——」

「いやだわ、先生、早くして」

「宮島さん、七五・五、ハイ、つぎ」

こんな調子で体重測定になる頃は、生徒達も大分口が軽くなっている。

「後藤さん、五四・〇キロ」

「あら、そんなにあるんですか。いやだわ」

「大分ふとったな。おしりぶとりだろう」

「先生、大きい」

後につづいている生徒達が、キャツキャツと笑う。

いつもなら、こんな調子で終わってしまう身体検査も、この後に骨盤計測を控えていてはとたんに無口になってしまふ。おそろおそろカーテンの隙間から中をのぞきこんでいたりしたが、いつの間にかあらわれたのか平松先生に五、六人が一緒に衝立の中へ、おしこまれた。

私は後の生徒の体重測定をつづけながら時々衝立の隙間をチラチラ見やったが、生徒達の華やかな浴衣や看護婦の白衣が見えかくれするだけで様子は殆んど分らなかった。しかし時間がたつにつれ浴衣の前を開いて神妙に立っている生徒や椅子に腰かけて何やら生徒



の腰のあたりに計測器をあてているらしい看護婦の様子がおぼろげながら分って来た。

始め看護婦の方に正面むいて立っていた生徒が測定が済むと今度は横を向いて別の測定を受けているらしい。最初の測定ではこちらからは後姿だけしか見えないが、横を向くときは右を向く生徒と左を向く生徒とがあり、右を向く場合は入口のカーテンの方へやや体がむくせいか右を向く生徒が少い様である。そして左を向く場合には当人達には気づかないが私の位置からは、ひよっとすると、はっきりと彼女達の全身が眼に入るのである。浴衣の前をひろげ、その下にはズロース一枚だけの姿を見せながら横をむいた生徒に看護婦が職業的な無造作さとしてやさでズロースに手をかけ腰骨のぎりぎりの所まで一気にずりおろす。その時の生徒達のある者は蒼白な顔で、ある者は真赤な顔で、そしていずれもしつかりと眼を閉じて、この堪え難い羞恥の洗礼を必死にこらえていた。

午後からになってあとは三年生だけというとき、平松先生が青い大柄な模様の浴衣の上に帯をしめて入って来た。生徒達も他の先生方も一瞬しんとして平松先生を見やったが、そんな一同に眼もくれずカーテンの前まで真

直に歩いて来た先生は、そのあたりにいた三年生四、五人の背中を押す様にしてカーテンを押し分けて入っていった。私は体重測定を生徒達に何気なく一服つけるよと言ひ、さりげない風に、衝立の中が見やすい位置をとった。

青い大柄な花模様がゆれ動いて平松先生が左を向いたとき私は息をとめた。純白のズロース、その上の固くしまった乳房、そしてこの時だけはやや遠慮がちにズロースに手をかけた看護婦が、それをそろそろと下へ下ろした時、やや身じろいだだが、やがて氣をとり直した様にしっかりと浴衣の端をつかんで開いたまま鈍い金属色の丁度水牛の角の様な計測器が当てられるのを懸命にこらえているらしかった。ただ平松先生は生徒達と違い、その大きな眼をしつかりと見開いていたのを奇異に感じたことを今でも記憶してる。それからしばらく経って私の受持の組の生徒達の番になったが、玉置が体重計を下りながら

「先生、のぞいちゃだめよ」

小声で言った時、私は胆を冷やした。何気なく冗談を言ったのか、それとも私の位置がのぞき見に適していることを承知で言ったのか。

玉置が計測される頃を見はからい、私はわざとそちらの方をじっと見つめていたが、玉置は左を向き、そして平松先生よりはむしろ豊かな肉付きをもった裸身をこちらへさらしながら、思いなしか、かすかに微笑している様にさえ思われたのである。

それから数日後、学校からの帰り途、あとから小走りに追いかけて来た平松先生が「三木先生、私、知っていたんですよ」

と、いたずらそうに笑いながら私の顔を見上げて話しかけて来た。

「何のことですか」

内心どきりとしながら、ききかえす私に「衝立のかけから、先生がのぞき見なさったこと」

「……………」

「だから私、わざと、そちらの方へ向いたんです。……私、やせてるでしょ」

私は、とっさに返す言葉がなかった。私の無言の反応をゆっくりとしたしめながら、平松先生はひとりごとの様に話しつづけた。

「本当のこと言いましょうか」

私はいつか停留所を過ぎて平松先生と並んで歩きつづけているのに気付き、生徒に見つかるとうるさいぞと、ちらと思ひながら裏通



りの喫茶店へつれ込んだ。

「本当のことを言いますとね」

平松先生は、コーヒーをかきまわしながらつづけた。

「玉置さんが、あの日、控え室で私が浴衣に着かえているときに来て、三木先生にお氣をつけあそばせ、のぞき見されますよと忠告してくれたんです」

「なるほど、でも玉置がどうしてもそんなことを言っただけですかね」

「蛇の道の蛇ではないんですか」

めずらしく平松先生が、くだけた口調になっていた。

「先生も蛇ではないんですか」

と冗談を言いながら、あの日、玉置もあるいは意識して左を向き浴衣の前を開いて、私の眼に裸身をさらしたのではないかとふっと思った。そして以前に玉置が日射病で倒れ、医務室で冷水灌腸を受けた時のことを何気ない口調で話し、玉置はその様な羞恥に対する願望をもっているのではないかと言うと、大きくうなずいて

「あり得ることですわね」

平松先生は実は自分にも、少しそんな気持がある様で心配だと、つぶやく様に話し出し

た。それでなければ、たとえ生徒がどういおうと自分からすすんで、あの様なはずかしい検査を受けるはずもなく、又先生の眼を意識しながら、わざとそちらを向いて浴衣の前を開いて、やせっぽちの裸を見せるわけがないというのである。

「私のそういう気持は、先天的なものではなく後天的なものの様に思います。というのは女学校五年のとき、生理不順で母につれられて婦人科に行ったことがあるんです。勿論始めてでしたが、大体はどんな診察があるかは知っていました。ですからゆく返は、とてもいやだったんです。それで、いやいやながら行ったんですが、はじめに問診があって、それからじゃ一寸だけ診察しましょうといって先生が立上り、看護婦さんが、どうぞこちらへと検診台のあるところへ案内し、下穿きおとりになって下さいと言われたとき、そのまま逃げ出したいと思ったんです。でも眼をつむって下穿きをとり、言われるままに台に上りスカートとシュミーズをまくられたときは無我夢中でした。娘でしたからでしょうが、器具などもそんなに使われず、ただ肛門に指を入れられた時のへんな気持と、お医者さんの手がさわるたびに、はづかしいよりはど

でもなれといった様な力の抜けてゆく様な感じを、今でも覚えていますわ」

「……………」

「その時の診察の結果では、単純な發育不全で、そのうちによくなるでしょうとのことでしたが、別にホルモン注射をするわけでもなかったのも、お医者さんの方は、それきりになっちゃったんです」

「でも、それ以来少しづつは良くなって来ているものの、未だに完全ではなく時々狂うんです。そんなとき又お医者さんへ行ってみようかなと思うんです。あの女学生時代のはずかしい記憶がむしろなつかしい様な変な気持なのです。私って少し変態かしら」

「別に変態とは思わないが、でもこんな話を僕にするのが変態かも知れないですね」

「あら、それを喜んで聞いているあなたこそ変態でしょ」

二人は声をしのんで笑った。そして

「私ね、二三日中に大学病院の婦人科へ行くのよ。この前、骨盤計測のことで大学病院へ行った時に、応待に出た講師の方に、帰り際に生理不順のこと聞いてみたの。そしたら二十三にもなって不順なのは、どこか異常があるのかも知れない、一度おいでなさい診察し



てあげますっていわれたの。その時は診察なんて特に大学病院では大勢インターンなんかみてるんですよ。真平だと思ったんだけど、骨盤計測を受けたとき、ふと又そんな羞恥に身をさらしたい衝動を感じたの。だから、その先生から骨盤計測の協力についてのお礼の電話がかかって来たとき、私診ていただきたいんですが、いつがよろしいですかと口から出ちゃったんです。その結果報告は、あなたも興味あるらしいから、いつか話してあげるわ」

それから二人は冷えたコーヒーをすすり別々に喫茶店を出た。

しかし、その興味ある結果報告は永久にききそこねた。二人の心の交流が急激に、その日から深まったことは事実だが、態度に出すのは極力セーブしたつもりだったにもかかわらず、生徒達の便所に二人名前の相合傘がかかる様になっては、教頭も一言注意しないわけにはゆかなかったのであろう。こうして二人は親しく口を聞くことさえ、はばかられたのである。

こんなある日、平松先生が学校をやめ結婚すると教頭から聞かされた。私は腹の底からこみあげるいらだたしさを抑えかねて、平松



## 私の生活断片

# 生 尿

(いきによろ)

花 原 竜 子

イキニョウと読みます。詳しい製法は省略いたしますが、これは月のものの前日又は前々日位から、その期間中の女王さまの尿を主成分として、これに九穴から分泌する体液を調合加味し、特殊処理により脱臭滅菌精製しました液体に純粋葡萄糖(市販の葡萄糖を一度溶解して結晶させた薄紫の氷砂糖)を加えて熟成した薄紫色の透明な美しい液体で、ポットに入れて灯にかざしますと、まるで正倉院にある御物のほり器を水にとかしたようにキラキラ輝く優美さは、とても尿が原料とは信じられません。

一種の妖しい芳香と甘美を持ち、ごく微量の酒精分を含有しております。非常な手間と時間にかけてありますので、飲料としては全く貴重で高級なものです。

男ドレイを肉体的に組みしいたり、いじめたりするだけでは、私の征服欲はいらだただけで満足感には至りません。もっと徹底的に征服したいのです。そうかと申していわゆるSのように、むちを加えたりする興味は全然なく、そんな野蛮なことはいやなのです。精神的S傾向と自分では考えています。精神的に完全に隷属させたいのです。ひとりの大の男、それも立派な社会的地位のある男を、私の泌尿器管の付属部品以下の存在にして、徹底的におとしめたいのです。

私を神としてあがめる男に絶対的に君臨することによって、はじめて私の征服感は満足いたします。何という恐ろしい女かとふと思うことがあります、どうすること



先生に、結婚しても子供が出来るんですかとか診察結果はどうでしたとか、せいぜい皮肉をいって見たが、彼女は微笑したまま答えなかった。いよいよ今日かぎりでさよならという日、私の所へ挨拶に来て

「先生のおかげで、学校へ出てくるのがたのしかったわ。先生と趣味が合ったのですものね。ウフフ……」

と久しぶりに笑顔を見せ、最後に

「玉置さんに深入りしてはだめよ」

真面目な顔で言い足早に去って行った。

私は急に学校へ出る情熱を失い、翌年の春玉置達を卒業させると同時に教師をやめてサラリーマンになった。

玉置はと言えば、ある工場のBGになり、事務関係をやっていたが父親の停年退職もあり一家が田舎へひっこすため彼女だけがその工場の女子従業員寄宿者へ移った。そしてサラリーマンとなり、既に教師というきずなから解放された私と時々会う機会があった。

今はもうあれから十余年の年月を経たことでもあり、玉置とはごくまれに会う機会があるが、昔の想い出話をし、お互に軽い刺戟を味うに過ぎない。羞恥願望、それはやはり若さの所産であろうからである。

も出来ない強い力が私をかりたてます。

私の排泄物を原料とした生尿は、一種いようなない芳香を放って、男ドレイを魅了します。彼の体内に流れこみ、全身に行き渡り、その五臓六腑はもとより、瞳の紅彩の中にも、舌の内部にも脳髓にも入りこんで内部から彼を征服してゆくのです。

彼の性格の弱い一つ一つの細胞に浸入していった私の生尿は、ただちに、その細胞核に君臨します。単に肉体的に私にくみしかれていただけではなく、全身全霊を総あげて私に組みしかれていくわけです。

一時間余、私の全身は征服感に燃え上り武者ぶるいにも似た快感におののきます。音楽には△勝利▽の伴奏がともないます。奴レイは被征服感に陶醉し、今はスタミナも使い果し、生尿のアルコールに上気しながら、虫の息で私の膝下に呻吟しております。これでプレイは終わりますが、そのすばらしい一時間半を御想像下さい。

私の勝手な考えですが、世間の普通の男女の愛が、動物的な単純なものに思えて魅力がありません。私の場合は、確かに献身的な愛、宗教的にまで高められた崇拜があり、人間にしかない愛の型ですし、生物として最も進歩した愛の形式ではないでしょうか。

肉体的には単に若くたくましい女性が、社会的地位のある四十男を、膝下に組みしにしているというだけの現象でしかありません。そこには信じられないくらい豊富な内容があります。信じていただけないかもしれないませんが、私はまだ男を知りません。また知りたいとも思いません。

男奴ドレイは目下二人ですが、普通の交際では学問的にも趣味の上でも、私はこの上なく尊敬しております。ただその時だけは女王と豚になってしまうのです。生尿はまるで麻薬のように、ドレイの血液の中から生尿がきれると禁断症状を呈します。まるで飼主に離れた犬か猫のように、心細くたよりなく、恋しさに、泣くと聞かされています。与える回数は月三回で、それ以上はどんなに恋しがっても絶対に与えないことにしています。他人にも自己にもきびしく律するのが女王としての、私の性格なのでございます。



## 「蝉涙のしたたり」

辻

村

隆

「蝉涙のしたたり」

厳しい残暑の陽が落ちて、そっと爽やかな涼気が縁側に忍び込む。風呂上りのビールが最も旨い夕食前の食卓。近頃は又少し酒量が上がって来て一本のビールでは満足出来ない。二本目のビールもあらかた底をつき、夕餉の

菜の皿の中が殆んど空になって陶然となった時、テレビの騒音に消され勝ち乍ら、聞える電話のベル——。画面に夢中の子供等は誰も立たない。己むなく私が出る。

「おじさん?うちや……」

「ああ、マスマか……どうしたの今頃」

「ユリコがおじさんに会って話したいことあるんやて。今から出られへん?」

「これからかい?」

「あかん?」

「そうだなあ、一杯のんで一寸憶劫だが、まあ外ならぬマスマのことだ。何とかしよう」

「悪いわあ、いつも無理許り言うて……」

「いいさ。ところで、東京からいつ帰って来たの?」

「お盆からずっとよ。明日ごろ又東京へ行くうと思ってるんやけど……」

「東京はたのしいかい?」

「まあね、せやけど、あの人(東京S氏のこと)とってもええ人やわ。一寸我俣やけど」  
「東京でのくらし、いろいろと聞きたいな。」

特にプレイのことなどネ

電話の向うで、くすりと笑ったようであった。声はしばらく途切れた。

「もしもし」

「なに、おじさん」

「きいてるんかい?」

「きこえてるわ。プレイのことでしょ。そんなこと電話では喋られへんわ」

「そうだな。じゃあ会ってきくよ。報告の義務があるよ、マスマには」

「こわいこわい。あのねエ、ウチ、社長さん(S氏)から、おじさんに渡してくれて、

ことずかって来たものあるんよ。ウチが開い



て、見たらアカンて」

「何故もっと早く渡さないんだ」

「おじさんに会って渡そう思ってたんやもん。」

「いつか知らんうちに日がたってしもうて……」

「ノンキなやつだあ」

「ほんなら夜八時、近鉄上六終点の、大阪線の出口で待ってるさかい、きつとネ」

「分ったよ」

東京のS氏のことづけとは何だろう。何もいささか頼りないマスマミにことづけなくともいいのに。それとも私とマスマミとをせめても会わすために、わざと送らずに、彼女にことづけたのかも知れない。私はいい方に解釈した。マスマミを掌中の珠のように飼育しつつあることは、S氏の詳細な便りで既に知っていた。今更マスマミの口から聞かなくとも、プレイの模様は逐一S氏より連絡あったが、そのプレイを、マスマミ自身、どう受けとっているかを、彼女の口より聞いて見るのも一興であった。河内地方に残る風習から、彼女もこの盆には、昔風に言う簀入りというやつで、しばらく帰省していたらしい。

一杯のんでやつくつろいだ夕餉のひとつき。私は正直言って憶劫であったが、無理のきいてくれる可愛い小悪魔達のことだ。そ

れにユリコのこと少し気掛りになって、重い腰を上げることにした。わざわざ向うから誘って来たのなら、偶には乗ってもやらざるまい。今更、マスマミとユリコのカメラ・ハントでもあるまいしと、カメラは準備してゆかないことにした。しかし考えて見れば、いつもイスカのハシの喰い違いで、彼女等二人の連縛は、未だに撮っていない。いつか機会あればと思いつつも、彼女等お互いが、相手を牽制し合ってか、一緒にと言うと、仲々うんと言わず、未だにそのチャンスはなかった。どうせ今夜も無理だろう。それに会う時間も少し遅い。それにしても、ユリコが今頃又、思い出したように、何を話したいというのであろうか——。私はフト予感めいたものが走って、或いは箕田氏と何か気拙いことがあったのではないかと思った。

裸になって扇風機に当り、一杯のんでいた体に、又ぞろズボン、シャツを纏うのは暑くするしいことであるが、なるべく汗のかかないよう、のろのろと身支度をととのえると、家内にその旨をつげる。

「今ごろから又、気まめなことですな」

妻は苦笑し乍らも、引止めはしない。

× × ×

宵闇の外は、残暑の熱気が漂っていた。タクシーを拾って上六へ向う。構内に入ると、正に午後八時発のビスターカーが、まばらな乗客をのせての発車寸前である。

眺めるともなしに、改札口にたたずんで、ホームのざわめきを追っている私の肩を、ポンと叩く。振返ると一宮ユリコが、ややはにかんだ笑みを浮べて私を見上げていた。

「おや今晚は——。久し振りだね。ユリコひとり？」

彼女は黙ってうなずく。

「マスマミは来ないの？」

「ええ」

私はてっきり二人揃って現われると、頭から考えていたので、一寸気分をはぐらかされた思いだった。マスマミはきつと気をきかしたつもりであろうが、あの可愛い河内カルメシが現われないとなると、心なしか少し淋しい。それにS氏からのことづけかりものもある筈である。

「マスマミ、どうしたんだらうネ？」

「一緒に来る筈やったんやけど、あの子出ようと思ったら、親戚の人が来はって、出られんようになりましてん。それでこれ渡しというて預かって来ましてん。おじさんによ





ろしう言うといてて、言ってみましたわ」

「そう、それはガッカリだったネ」

「ウチひとりやったら、あきません？」

瞬間、ユリコの眼にジェラシーが走った。

「いやいや、構わないよ。どうせ最初から、

ユリコの話聞く気で出てきたんやから」

「ほんまに勝手な時だけ、呼び出してスミマセン」

始めて会った頃に較べて、彼女はすっかり成長していた。態度やしぐさのはしほしに、女らしさがプンプン匂う感じであった。

芳野眉美、私、箕田京二と、次々三人のそれぞれ異なるプレイヤ―を遍歴して、ユリコ自体、すっかり精神的にも変貌していったのであろうか。芳野眉美の裏話によると、ユリコは既に、それまでも異性を知っていた体であると告げてくれたし、マスキの言葉からも、その前歴の一端はうかがわれていた。

誰か、彼女自身の口から聞いた年齢では、現在二十才である筈だが、ユリコの身辺からは、成熟した、うれた女の匂いが漂っていた。私はマスキからのことずかりものを、無難作に受取り、ズボンのうしろポケットに押し込んだ。封筒の形はフォトに相違なく、固いかたまりが、その手触りで、フォト以外に何か入っている事が察しられた。

駅の構内を出て、兎も角タクシー乗場に向う。さりとて、とり敢えず行く宛もないのでミナミに出てゆくことにした。ユリコは寡黙

だった。この若い娘は何を考えているのか、心なしかなめらかな頬に翳りがあつた。「箕田さんとは、相変らず、よく会っているの？」

ハツとした様にユリコは、伏せ勝ちの顔を挙げた。私を直視したユリコの瞳は、やがて弱く視界を避け、ポツリとつぶやくように、「ケンカしたの、あの人と」

「何故？」

今度は私が驚く。

「あの人、もうウチなんかに興味なくさはったんやわ。何べん電話しても、もう前見たいに出てきはれへんし、ドライブでも連れていってくれはらへん。それでおととい、電話でとうとうケンカしてしまいましたん」

「おだやかじゃないネ。何を言ったっていうの？」

ユリコは黙って、ビニールのハンドバッグをいじくっていた。車の中では、それ以上言いにくいのだろう。それに車も既に日本橋一丁目の交差点を越えていた。千日前で車を止めて下車。

肩を並べて歩く。

「夕御飯は？」

「すましましてん」



「じゃあ、静かな喫茶店にでも行くか」

スバル座横の冷房のよく効いた喫茶Rへ入る。マスマは私の心をやわらかくほぐすが、ユリコはいつしか気づまりになる。二人の持味の違い、雰囲気と感覚の相違と言おうか。

箕田氏も、或いはユリコの持つ、この気づまりの雰囲気、やり切れなくなつて投出したのではなからうか。それはユリコのせいではない。私自身の彼女に対する偏見から来る受取りようであるかも知れないが、マスマのあの開けっぴろげな朗らかななじみ易い性格とは対照的に、ユリコには、何か心の殻を堅く閉じた一種の重苦しいムードが彼女自身を包んでいるように思われた。私との最初の出会いからして、何か私とユリコとは、しつくり行かない異質のものを持ち合っているのではなからうか。

偏見は禁物だし、私は努めてそれを打破しなければいけない。しかも現在、事情はどうあるにせよ、ユリコは心乱れて、私を頼りにしているのであった。

私は今迄の観念を捨てて、彼女を新らしい一人のカメラ・ハントの対象の女性として見ようとした。私自身ももっとフランクにならなうといけなう。

ユリコだって、素直ないい娘なのだ。カメラ・ハントの最初の夜。緊縛のプレイには、私自身、箕田氏にコンプレックスを感じて、甚だ意気上らなかつたけれど、凍結し合った心と心が、浴槽で柔かく解け、しかも芳野眉美の大好物を、ユリコは私にも与えてくれたではないか。夜の河内平野を走る車中で、ユリコは愉しように私の肩に首を凭せかけて生駒の中天高く、鈍い光を投げかけるカサをかぶつた月を車窓から眺めていたのだ。

その後ユリコは箕田氏へ走り、私は専らマスマを相手にしていたので、何時しかしらずしらず隔たりが出来ていたが、それも元をたせば、マスマに対するジェラシーが、ユリコにそんな態度をとらせたのかも知れない。箕田氏に対するコンプレックスが、ユリコに撓ね返っていたのを、私は今更の如く改めて気付いた。マスマの誕生日にプレゼントすることやドライブする事を、あの夜聞き知つて、彼女は

「うちも誕生日に、どこかへつれてってえ」と甘えたことを私はありありと憶い出した。私自身少しマスマの方に片寄り過ぎていたかも知れない。それがユリコを尚更私より遠ざけていたのだらう。彼女に甘えさせる窓口

を、私は開いてやらねばならないのだ。心の窓をピタリと閉め切つていては、ユリコの這入り込む隙間はあるまい。そう思うと急に、眼前で今こうして、意気消沈しているユリコがいじらしくなつて来た。可愛いマスマは既に私の手を離れてS氏の許で、可愛がられていたのだ。とすれば自から心を投げだして来たユリコを捉える。今は絶好のチャンスではなからうか。

「どっちの？」

おどけて、若手の人気漫才師の口真似で聞いた。先ず心をほぐしてやろう。彼女は微笑んだ。

「うち、箕田さんに、ほんまに嫌われましたんやろか——」

「そんなことはないよ。きつと彼、相場で忙しくて、それどころじゃなかつたんだらう。何だったら、今ここから電話してやろうか。その前に聞いておくけど、彼とケンかしたというがネ。何をいつてケンかしたの？」

小娘相手に大人気もなく、箕田氏がケンカする筈もない。独り相撲と分っているが、一応聞いておく必要がある。

「ウチ、箕田さん見たいな、嘘つきの薄情な人キライって言つて、ガチャンと電話きりま



してん」

「それがケンカ？」

いとも他愛がないので私は内心可笑しい。

「きっと怒ってはりますわ」

「怒ってなんかないさ。そんな言葉ぐらいで、どうこう考える程、箕田さんは若くはな

いよ。と言うと、万年青年のつもりの彼には怒られるかも知れないがね」

ユリコも私にそう言われて、神経が鎮まってきたのか、自分の大袈裟さに一寸照れ臭くなってきたようであった。

「電話できいてくれる？」

「いいよ」

気軽に立ってカウンター横の赤電話の穴にポトリと銅貨を落す。

「今、ユリコと一緒にだけど、彼女、あんたとケンカしたというのだが……」

「ケンカ？」

キョトンとした箕田氏の声が返ってきた。

「ちっとも逢ってくれないから、腹を立てて何か言ったらしい」

「あああれか。あれがケンカなら、私は年柄年中モデルとはケンカの花盛りだよ」

「だろうと思った。忙しかったの？」

「ドライブ連れていってくれて言ってくるが、そうそうユリコの相手許りもしておられないしネ。それに株の値動きがひどくて、全く油断出来なくてネ。この処、電話にかかりきりなんだ。ユリコとのドライブのお蔭で、数十万円パアなんていただけませんよ。何ならどう、一度あの娘つれていってやっては」

「ドライブに？」

「そう、凄く好きなんだネ、車に乗るのが。その代り、プレイの方はいいなり次第。超強烈なものでも大丈夫だよ」

「よく仕込んだもんだ」

「あんたのカメラ・ハント、あの娘の時はさっぱりだったでしょ。こちらでひとつ、バァーンと強烈なやつをとったらどう？」

「食指が動くね。でも今度は箕田さんに代って、私はドライブ、ドライブと泣きつかれたんじゃ、私も参ってしまう」

「そこは辻村流に、ほどほどに行くさ」

私達も尚も、ユリコ以外の件で暫らく打合せをして電話をきった。

ユリコは半ば腰を浮かして、私を待ち兼ねていた。話の模様を察してか顔は明るい。

「どうでした？」

「笑ってたよ。株の方が凄く忙しくて、それどころじゃなかったらしい。ユリコ随分ドライブをねだったらしいネ」

「でもたった三度連れてもらっただけよ」

「三度なら、あの忙しい彼にしては、大サービスだよ。何なら私が一度つれてってやろうか——」

「おじさんが……。まあステキ。嬉しいわ」



「よくよく好きなんだネ」

「ウン、大好き」

「どこへ行きたい？」

「どこへでもいいの。車にのってたら、それでいいの」

「その代り、ドライブのあとが怖いぞ」

「えッ、何？」

私は両手で縛る真似をする。

「ああ、あのこと」

分って、パツと赤らむと、大きくうなずいた。

「大分辛抱強くなったそうだね」

「そうやろか。でもウチって妙な性分やと自分でも思うわ。ドライブがスゴく楽しかった時は、あれも愉しいように思いますネン。その代り、ドライブがつまらなかった時は、あれもあんまり気乗りせんと、痛い方にばかり心が走りますネン。変ってますやろ」

「ドライブとプレイは、正比例するってことだね」

「そうなるやろか」

「じゃあ、ドライブでウンと愉しんでもらって、その方もウンと……」

「いじめますか——」

ユリコは晴々と笑った。

私は心が解け合ったと思った。フト思い出して、先程マスマシよりことずかっていた、S氏の封筒を開いて見たい欲望にかられた。

封をはがすと予想にたがわず十数枚のフォトと簡単な手紙。そして舶来のがスライタ一つ。

(ガスライター、御中元がわりの私の寸志です。フォトはマスマシの最近のものから、かなり自信のあるもののみを選びました。あなたの御批判を鶴首します。 S)

フォト十四枚のうち、六枚は、S氏の小金井工場の、電動の捲揚機によって、全裸のマスマシを犂々と縛り、逆吊りにして天井近く地上数米以上も高々と吊り上げた圧巻だった。

その二枚は、S氏のカメラ位置から真上を狙ったもので、六枚は連続フォトとなって、徐々に高々と吊り下って行くマスマシのポーズを惜しみなくとらえていた。

他の八枚も殆んど吊り責めで、吊りの好きなS氏の好みで遺憾なく發揮されていた。

私は無言で、そのあらわなフォトをユリコに手渡した。マスマシの赤裸々なプレイフォトを見るのは、今が始めてであろう。彼女は喰い入るように、その一枚一枚を丹念に見ていた。頬に急激に赤味が増し、フォトを持つ手

は心なしか震えていた。黙って見終って私に返えすと、ユリコに息苦しさうな吐息を胸の奥から大きくついた。

「どう？」

「スゴいわ。うちこんなこと出来るやろか」  
「吊られて見たいと思う？」





ズバリときくと、眼を伏せて、

「分らへんわ。でも箕田さんと一緒の場合、いつもホテルやから、こんなこと出来ないのよ。若しこんな場所あったら、うちかて……」

出来るというのか。

「マスマも一人前やわ」

ユリコはポツリと呟やいた。何を一人前と  
いうのか。それはユリコ自身、自分の被縛と  
対照して見て、或いはマスマ以上に自分を評  
価していたのかも知れない。プレイに対する  
競争心が湧いたことを私は察知した。機会を  
掴めば、ユリコも恐らくマスマに劣らぬ、忍

耐と被虐の情念を燃や  
すに違いない。

「おじさん、ドライブ  
いつ？」

いつと言われても、  
予定もあるし、咄嗟に  
返事が出来ない。スケ  
ジュールとにらみ合せ  
て、必らず電話する事  
を約して、やっとユリ  
コを納得させた。心に  
負担が一つ増えた。し  
かし、この負担は愉し

いものだ。ドライブを刺身のツマとして、そ  
のあとに来る、旨い刺身を、心おきなく啖わ  
ずばなるまい。

× × ×

暑さは残っていても、九月の声をきくと、  
流石に初秋の気配が漂い始めた。

約束してから、二十日許り経っている。三  
度目のユリコからの電話で、やっと私の腹は  
きまった。

その朝、午前十時。近鉄八尾の駅前で私は  
ユリコを待つ。いつかマスマを待っていたよ  
うに——。私のバッグには、いつもとは一寸

変ったものが納まっていた。いずれ追々分る  
ことだろう。

約束の時間きっかり、一宮ユリコは私の車  
に近づいてきた。

グレーのアンサンブルに白い手袋、コニカ  
の一眼レフを肩からさげたユリコのスタイル  
は、春に始めて出会った、あの小悪魔めいた  
スタイルとは、まるで別人のようないでたち  
で淑やかに見えた。髪型もおとなしく真中か  
らわけて、豊かな黒髪をふんわりと束ねてあ  
る。ネックレスやイヤリングも、ユリコにピ  
ッタリと似合った。この半年の間に、眼をみ  
はる許りの変貌である。

約束の時間にピッタリと出逢ったことが、  
私の気持を爽やかにした。待っても、待たせ  
ても、何かいらいらした気分の残る私だから  
である。

「ああ、よかった。辻村さんのお顔みてホッ  
としたわ」

「へえ、どうして？」

「ひょっとすると、スッポかされるんやない  
かと思って……」

「信用がないんだね。約束した以上必らず守  
る男だよ」

「ホント、御免なさい。それで今日、どこへ



連れていってくれはるの?」

「奈良の飛鳥めぐりなど、どう?」

「いいわ、ついでに奈良公園にも廻って」

「よしきた」

兎も角、私もユリコも浮々していた。そのくせ、あらかじめチャンとダメを押している私である。

「ドライブのあとでフोटを撮るけど、いいんだね。私の緊縛は一寸きついよ」

ユリコは大きくうなずいた。言われなくても承知しているといわん許りである。

私はスタートをきった。初秋の日ざしは未だ暑かったが、どこことなく爽やかさが車窓から流れ込んだ。

八尾の駅前から少し走ると太子堂で国道二十五号線に出る。国分で直進すると、ここより国道一六五号線に入る。二上山を越え、香芝町を抜けると間もなく大和高田市だった。高田市内を抜けて、間もなく橿原市に入る。目持す飛鳥地方はもうすぐだった。橿原市の外れで左折すると、二車線の舗装道路が明日香村に続いている。八尾を出て小一時間で、私達は古い、天平、飛鳥の古跡に足を踏み入れている。

秋空の彼方に、耳成、畝傍、香久山の三山

が霞んでいる。ドライブの途中、私達は余りプレイに関する話題を口にしなかった。欣喜としてユリコは、真実愉しげに華やいで、移りかわる車窓の眺めを満喫していた。

こうした雰囲気ではプレイの話はふさわしくなかったのだ。仮りに話を持ちかけたとしても、ユリコは恐らく上の空であつたに違いない。聖徳太子ゆかりの地に建つ、聖徳中学校の細い赤土の田舎道を徐々に上ってゆくと『鬼の雪隠』『鬼のまないた』などの遺跡と共に、かずかずの古墳の名残りが点在している。野辺に立つ石仏の前で車を降り、ユリコは辺りの風景を、しきりにカメラに納めていた。その姿を私は又傍らからとっている。

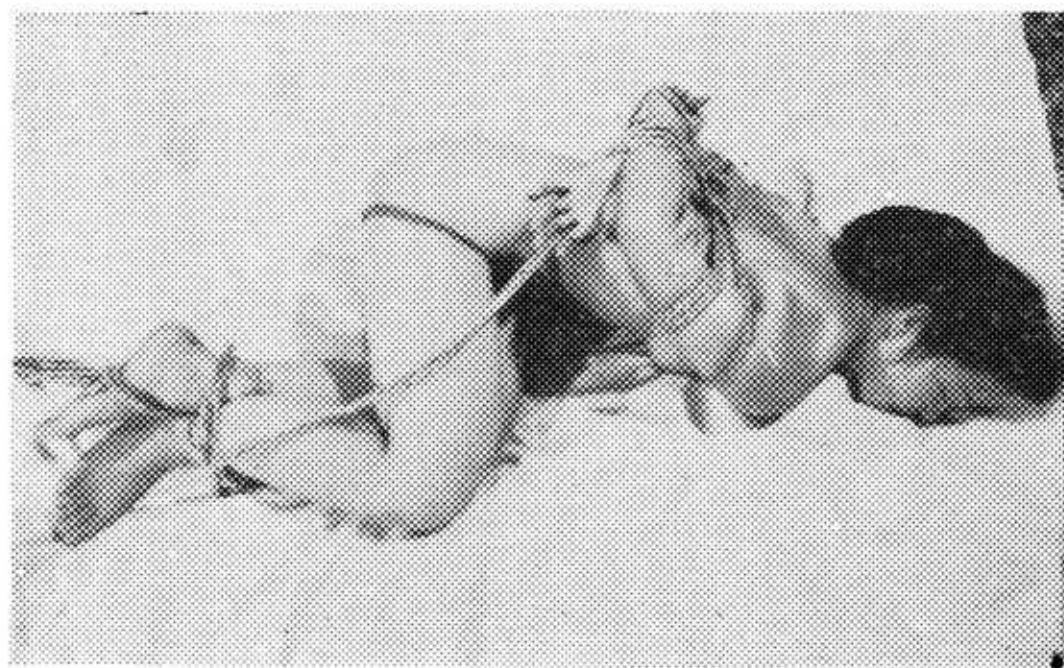
騒音から離れたこの田園風景は、都会の狂燥の中で明け暮れる私にとっても、心の洗われる思いで快ろよかった。

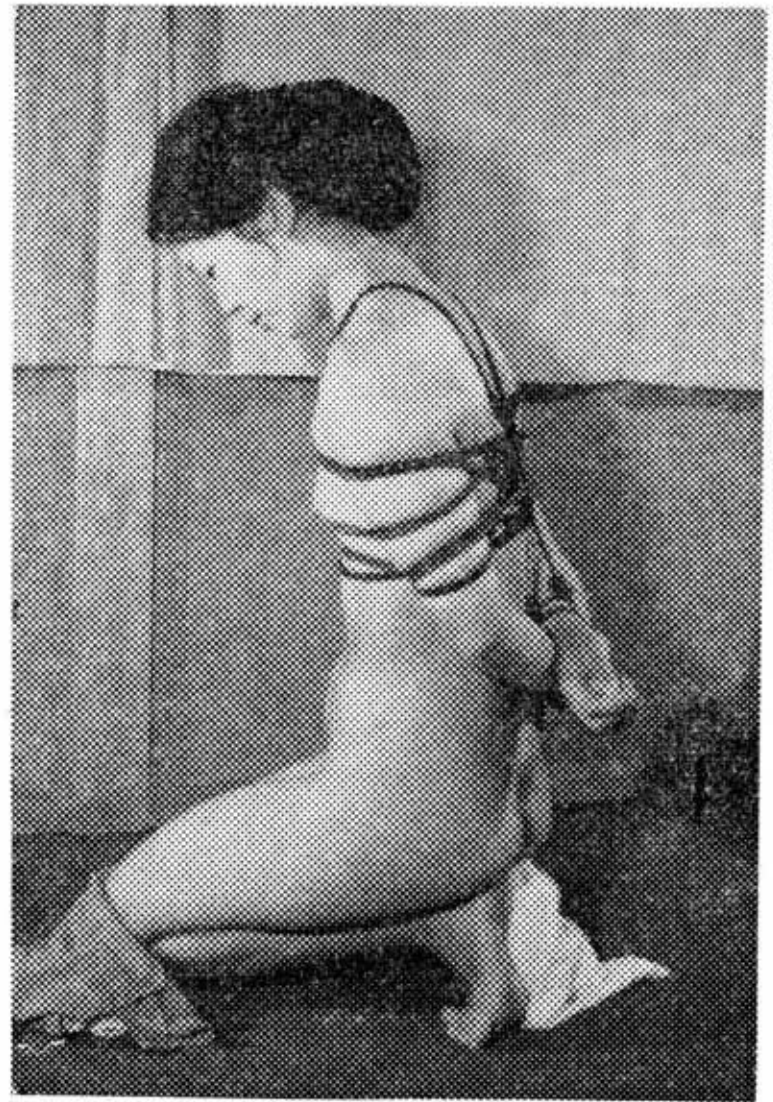
亀石の遺跡、甘樫丘、川原寺、石舞台、飛鳥大仏と、貴重な古えの大和朝廷の遺跡が次々と点在していた。

ユリコに請われる俥に、そのあちこちで車を止める。多少うんざりするが、ここでサーブスしておくことが、あとあとのプレイに澆ね返ってくるのかと思うと、彼女の言う俥に努めて協力してやる。とはいふものの、この

若いユリコと秋晴れの一日、ドライブするとは勿論悪い気持のものでもなかった。

風景や私をとるユリコの姿に、ぼんやり煙草をふかし乍ら、私はここまで来たのだからふと、近くの明日香坐神社へ立寄る気になった。飛鳥大仏から、数分もかからない。ユリコは半ば朽ちて倒れかかったこの小さな古き





社に、さして興味も示さなかったが、社の周辺に林立する、陽根めいた石柱の群に奇異の眼を瞠っていた。私は社務所への道を辿る。石段を降りた社の片隅に、ひっそりと社務所が立っている。一年一度の冬の奇祭が有名なこの神社では、年中訪れる好きもののために数々の珍具を、お守り代りに頒布していた。箸置、手形、お守り、鈴など、小さいそれらはすべて男女のそれを露呈したものだった。私がそのうち数点を神主の奥さんから分けてもらうのを、ユリコは私に寄り添って、頬を

赤らめて、それでも興深げに、そのひとつひとつを手にとって眺めていた。私のような好きものに馴れきっているのか、上品な奥さんは、照れもせず、極く自然にそれらの珍品を次々展示してくれた。その動作は至って事務的であって、平然としている。買う側の私の方が反って半ば照れていた。

明日香村をぬけて、裏道を桜井市に向って走る。舗装路になると、すぐに安倍の文珠があった。ここにも古墳の名残りが歴然と残っている。境内を一周して再び車に戻り、私達は桜井市内近くのドライブインレストランで余り旨くない、そのくせ価格だけは一流並みの食事をとった。午後二時に近かった。桜井から天理をぬけ、樺本の名阪国道のインターを横目に一路奈良へ走る。公園の春日大社、一の鳥居近くの駐車場に車をとめて、公園を散策。ユリコは鹿寄せに

興じ、さして美しくもない、猿沢池の周辺をしきりにカメラに撮した。私も記念写真を数枚とってやる。どうやらドライブの予定はこの辺りで終った。時間は午後三時になっている。引返す時間も考えると、これからそろそろ、私本来の目的のプレイへと誘導しなければならぬ。

「どこかで一服しようか」

一服の意味はすぐユリコにピンときたらしい。この古都にも当世向きのアベックホテルが次々と出来ているらしいが、探すのも面倒なので、猿沢池畔近くの、団体客用向の旅館に飛込みで入ることにした。

私は少しドライブの行程に筆を費やし過ぎた様だ。先を急ごう。

ドライブに対する、私への報酬をユリコは既に心得ていた。私の一服しようという言葉にも、彼女は素直にうなずいていたからだ。旅館の女中は、私達をアベック客と見て、小じんまりした和室の六帖と次の間つきの部屋に案内してくれた。襖に鍵が内側からかかるようにしつらえてある。アベックホテル攻勢に対抗したらしく、その取付錠は未だ新しかった。

「お風呂空いてますけど、どうしはります」



女中の訊ねに私は、汗と埃を落したく思った。

「ユリコどうする？」

「はいろいろかな」

「恰度、家族風呂が今空いてます。何なら御一緒にどうぞ——」

女中は心得て奨める。私達は顔を見合せたが、今更始めてでもなし、思い切って一緒に入ることにした。

「お風呂やトイレは、やっぱり部屋についている方がええわね。その方が気分的に気がラクやわ」

女中が去ってから、ユリコはやや不満気な口調でつぶやいた。私も同感だった。

宿の浴衣に着換えて、廊下をたどり、せせこましい家族風呂へ行く。

ためらいもなく、ユリコはスルスルと裸身を見せて、私より先に浴槽へ飛び込んでいった。肌は豊かに柔かくふくらみ、なだらかな線が全身に流れていた。そこには、すっかり成熟した女体が躍動していた。

「おじさん、あの頃より少し肥えはったわ」

「そうかい、病気で一時やせたけど、近頃又2キロ許り体重がふえたよ。病気は余り気にならなくなった」

「ちっとも病人らしくないわ。おじさん、向うむいて。背中流したげるわ」

私はうなずいて、言われる俚にユリコに背を向ける。第一回のユリコとのプレイの夜はプレイのあとに風呂に入って、なごやかに融け合ったが、今日はプレイの前に既にこうして二人で狭い浴場で体を触れ合せている。

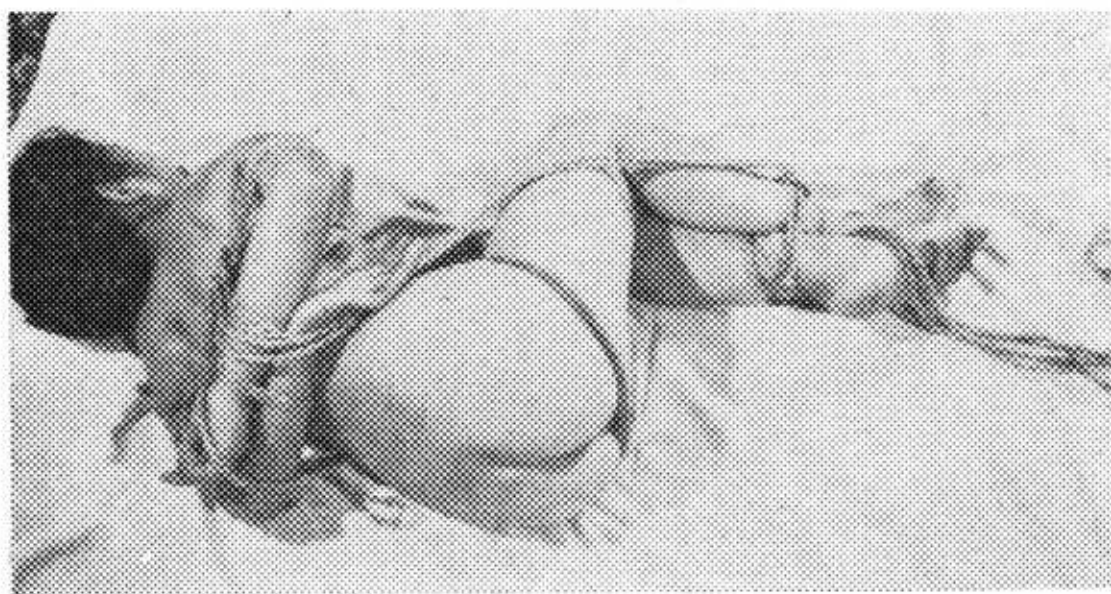
背中だけではなく、首筋から、左右の腕、それに太腿の辺りまで、ユリコはシャボンをよく泡立てて、こまめに洗ってくれた。私はさすが俚に任せて、快よくその陶醉にひたっていた。

「これで全部。あとは顔とあそこだけは自分で洗ってチョーダイ」

「有難う、じゃあ今度は私の番だ」

「いいわ、いいわ」

「まあ、そういわずに」  
遠慮するユリコに背を向けさせ、ごしごし丸ま



っちい背をこすり、ざぶりと湯を流す。若々しい凝脂ののりきった肌は、湯をはじきかえす弾力に溢れている。私は背後からそっとユリコの背中を抱きしめた。その体は心持ち震え、凝固して動かない。うなじに唇をよせると、ピクリと体がけいれんした。

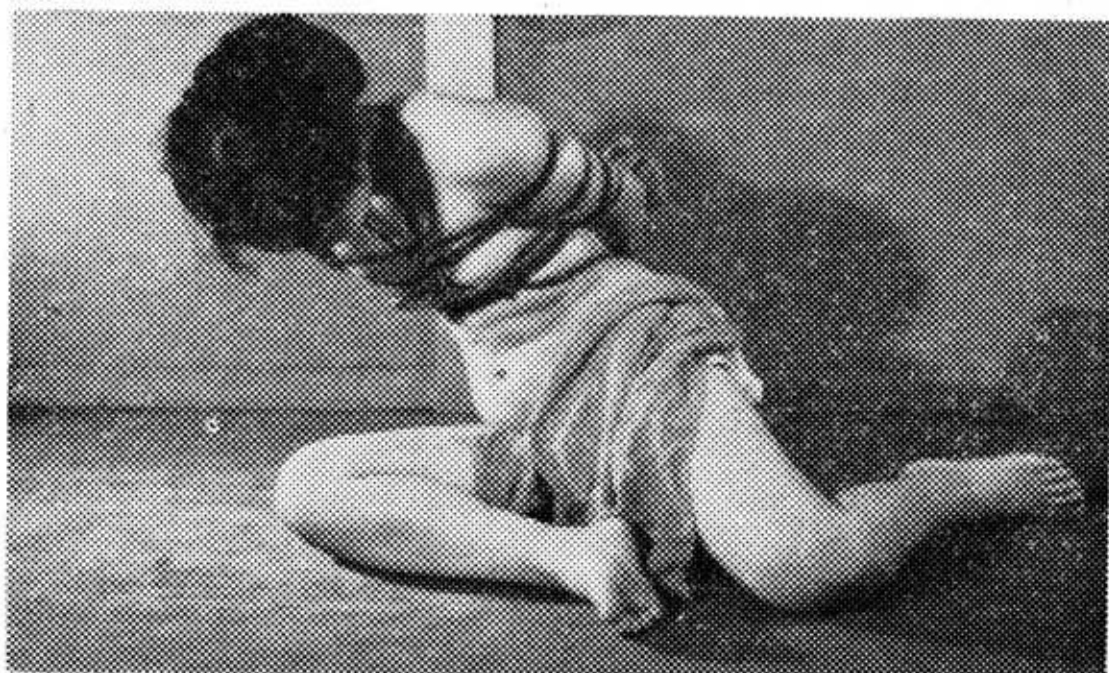
「その長い髪をといて欲しいな」

「ええわ、でも解くと、あとが厄介やの」

「だろうな。でも、私は豊かな黒髪の乱れが好きだ」  
「箕田さんも同じこといったわ」

ユリコは首をねじ曲げて私の顔を見ようとした。その唇の近くに私の唇が近づくと、抱きしめた手に力が入る。スルリとぬめり込んだユリコの舌が、私の口腔で戯れた。その時、ユリコの体が柔かく崩れたのを、私は抱きしめた両手の中で感じた。

「ユリコは許そうとしてい



るのか。しかし若しそうになってしまえば、これから始めようとする、緊縛のプレイはすべて灰色の虚しさに還元し、索莫たる倦怠と虚無感に包まれてしまふに違いないV

私は辛うじて自制すると、意馬心猿と逸る男の本能を抑制し、そっと抱きしめていた両

手を離した。目をつむり、やや下唇を突き出して、何かを待ちうけるポーズのユリコは、私の離れた手の中で、じっと蹲踞の姿勢を保っていた。

× × ×

湯上りで暑かったせいもあるが、彼女は浴衣をぬぎ捨て、宿のタオルでさらりとさりげなく蔽った尻、横坐りにテーブルの側に坐った。俎の鯉の如く、すっかり度胸をきめた体である。私はなるべく嵩ばらないようにと、縄類はだんだらの細い縄と、黒いナイロン紐数本を準備して来ただけであった。犇々とした緊縛は出来ないが、有るだけのものを有効に用いて、ユリコに強烈な緊縛を試みるつもりであった。机の傍らにユリコの持ってきたコニカの一眼レフが転がっている。フト悪魔めいた考えが走った。ユリコに気付かれぬよう、コニカに彼女自身の緊縛し、しかもあられもない羞恥の露出の姿を、黙って納めておいたらどうするだろう。恐らく彼女は何も知らないで、行きつけのカメラ店で、D・P・Eを依頼するに違いない。出来上ってきたフオトを見た時の、ユリコの驚愕が手にとるように察しられた。いやいや、そんな悪戯は可哀想だ。私は自らの邪念を振り払った。露出

を蔽うため、薄い腰巻きと、赤いパンティは持参したが、元来は使いたくない私である。ユリコも強いてそれを求めない。

風呂上りで、束ねた黒髪は少しびんがほつれ、おくれ毛も乱れているが、解かしたい欲望を押えて、その尽とることにした。

道路に面した窓のカーテンを閉め、窓際のじゅうたんの敷いてあるところへユリコの手をとって連れて行く。オッパイは未だ固かったが、ヒップの線は豊かで、くびれた腰から下は圧倒的にボリュームがあった。ユリコは終始無言で、私の振舞う通りに動いた。黒い水玉模様の締紐を手にとった時、私はふとマスキの言葉を思い出した。彼女と正対して、肩を押えて膝立ての姿勢をとらし乍ら、「いつか箕田氏の緊縛が強すぎて、縄のあと形がとれず、車内でジロジロ見られて、布施で途中下車したそうじゃないの?」ときく。

「まあ、どうしてそんなこと知ってるの?」

「マスキが言ってたよ」

「あのこ、しゃべりなのネ。でもあの時は本当に困ってしもたわ。布施で降りてからも、男の人があとをつけて来て、夢中で走り出したんよ。ノースリーブの服だから、手首や腕



の縄のあとが隠しようもないの。だから今日もちょっと手加減してネ。あとで困るから」

「手加減しなくていいように、柔らい紐を使うよ。それに大阪へ戻る迄にはとれてしまうよ。さあ、始めるよ」

ユリコは心得てうなずくと、自分から腕を後手に廻した。両手首を一重で結んで、背から首を通して胸に廻し、更に一本の紐に結び合せて、腕を強く三重、四重に締めつけた。弾力性のあるユリコの肌は、しめれば幾らでもしめられる柔かみがあった。蹲踞のポーズを前後左右から数枚とり、じゅうたんの上に押し転がす。重心を失なって横倒しになり、下肢が大きく開いた。ユリコの眉間に瞬間縦じわがよる。腕がねじれて痛かったのかも知れない。パチパチとそれを納めたものの、どうも発表出来そうにない、あからさまなポーズである。私は己むなく腰巻でおしりの辺りを蔽う。私にしてはこのポーズなどまだまだ序の口のつもりである。ついでその縛った尽の姿で仰向かせ、両足をとって、首の辺りまで弯曲させて、だんだらの縄で両足をしっかりと首のうしろを廻して繋ぐ。足の指がユリコの耳朶にふれている。持って来た二本のローソクに火をともし、ローソクをユリコの体の

部分の上で横に倒した。蠟涙が二本の炎からポトポトと肌にこぼれ散ってゆく。しかしこれではフォトはとれない。熱さが直接に伝わるのか、微かな悲鳴がユリコの唇から洩れたが、彼女は凝っとそれに耐えていた。机の端に軽便雲台を挟み、カメラを装置して、長尺レリーズをとりつける。私はレリーズの先端のふくらみを足で押し乍ら、ローソクを近づける。一本を深々と立て、残る一本で周辺にくまなく熱蠟をたらして行く。身をよじるユリコに、危うくローソクは倒れそうになる。はずみでじゅうたんに数滴、蠟涙がこぼれ落ちる。私は身悶えし、呻きをあげるユリコの胸に馬乗りに跨がってしっかりと押えつけ、この作業を根気よく続けた。ユリコに対するMの限界の可能性を確かめて見たい、ハイド氏のあくなき黒い欲情に私は包まれていた。

「ウーン、かんにん。もう止めて……、苦しいわ……」

遂にユリコは悲鳴をあげた。私はローソクを除去して吹き消すと、ユリコの胸から立上った。この間にも十数枚のシャッターがユリコの悶えと、このプレイの有様をストロボの閃光と俱に捉えていた。彼女の腿の内らは、厚い蠟の層に蔽われ、薄赤く肌の色を染めて

いた。身を起した私の足許で、ユリコはぐったりと伸びていた。

伸びた重い体を起し、半ば抱きかかえるようにして、その場をずらさせると、片隅へ押し寄せておいた椅子をその場に据える。相変らず縛った尽で、もう一度プレイの異ったものを私は続行するつもりであった。いつしか私の心は荒々しく嗜虐にゆさぶられて、態度や動作も粗暴になっていた。ドライブのあと、何をしてもいいと言う口約束が、私を容赦ない気持ちにかり立てたのであろうか。ユリコの両足をズルズル引曳って椅子の側まで引ずり寄せると、彼女の頭を逆さに下にして、椅子へ引き上げた。両足を掴んだ尽、二、三度ゆすぶるように持上げて、やっと体を椅子の中へ納める。彼女の両足が椅子の背にかかっている。その両足を椅子の肘掛けに、左右別々に縛りつける。じゅうたんの上や、椅子のあちこちに、蠟涙の残骸がこぼれ落ち、しかも尚、蠟滴の大半は、ユリコの肌にまつわりついて白い斑点をつくっていた。

「おじさん、乱暴やわ。もっとやんわりと扱って頂戴。何やら急に人が変わった見たい」

ユリコの非難めいた声が、私の股の下で聞えた。

「これが本当のSMのプレイだよ。ユリコ、約束したじゃないか。どんなプレイでも構わないって」

「でもう……」

ユリコは少々不満そうな口吻りだったが、それ以上言わなかった。

私は先程のローソクをバッグに納め、代りにエネマシリンジをとり出してきた。洗面器に風呂の湯を汲んでくると、エネマシリンジの一方を浸す。浣腸するに最もふさわしいポーズをとらせてある。丸まっちいおしりが二つ、ぽっかりと私のかがんだ眼前にあった。

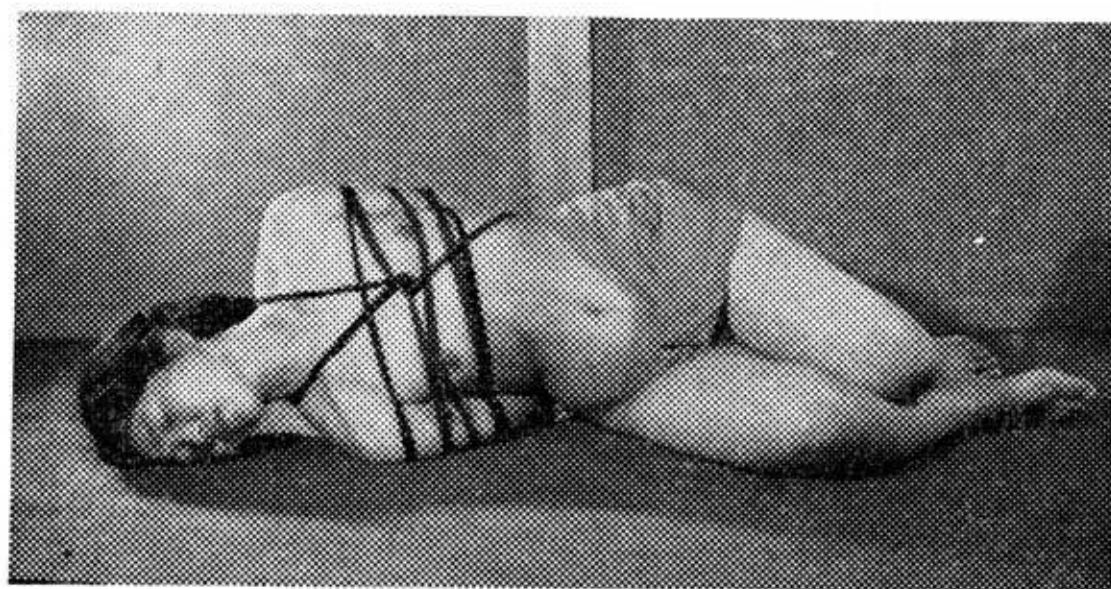
箕田氏もユリコに対しては、浣腸は試みていない筈であった。恐らくこれから行なう、エネマの洗礼が、ユリコにとっては、生れて初めての経験であるかも知れない。湯に石鹼を入れて掻き混ぜると泡が立ち始め、湯が薄白く濁って来る。私はヌルヌル泡で滑る手を拭いもせず、エネマの球を握った。温湯が始めて腸内に下降した時、ユリコはギャツという、動物に近い悲鳴をあげた。私の足はその瞬間を逃さず、絶間なく長尺レリーズを踏みつけている。椅子にしっかりと縛りつけた体と足は、少々の身悶えや、動きにもビクともしない。ユリコはそこだけが自由の頭で、猛

烈にイヤイヤの首振りをし、

「やめて、いやいや。もういや」

と辺り構わず、大声で叫んだ。叫ばれて尚更私の心は猛り狂う。エネマと洗面器を椅子の後ろにおくと、私はユリコの頭を両手でしっかりと抱きしめ、彼女のパンティを口中に挿じ込み、上からしっかりと余った縄を、頬に深々と喰い込む程に締めつけて猿轡にした。ユリコはその時、私の指に噛みつこうとした。その突発的な動作は、本能から出た、恐らく夢中のものだったに違いない。

しかし私の心は更に猛りたった。腰巻を顔にぐるぐる巻きにして赤い塊に化し去ってしまった。改めてエネマの動作にかかるべく立上った。その時又してもユリコのコニカ一眼レフが私の眼に止った。幸い眼隠ししてある。



私は急拠行動を起して、躊躇せず、私のカメラのストロボをそれにとりつけた。数枚、ユリコのその赤裸々な姿を彼女自身のカメラに納めていた。私の現在ユリコに与えつつあるプレイの行為が、何故ともなくユリコとの離別を想起したからでもあろうか。

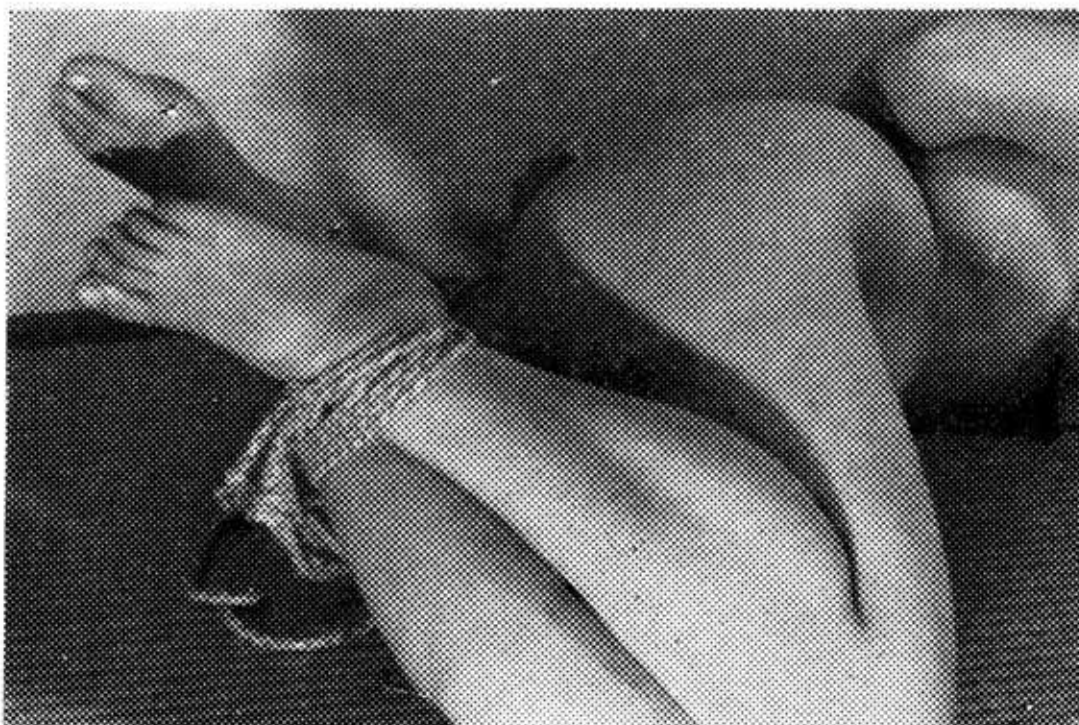
再び私のカメラにストロボをつけ換え、私はエネマを次々と握りしめていた。ズズズと湯の吸い込まれる音、ついで手応えのある体内への放出。数度の繰りかえしに、ユリコの腹部は幾分ではあるが膨らみつつあるのを、私はこの眼ではっきりと確かめていた。

× × ×

「早くほめて……辛抱かけへんわ。ねえったら——」

「だから、こうして連れて行ってやるよ」「いやっ、恥かしいわ」





「それなら放っとくよ」

「意地悪！ ねえ、ほどこいてったら……」

「さあ、連れて行ってやるよ」

こんな押問答が慌ただしく繰り返されている。言う迄もない。エネマ使用後の、ユリコの生理現象の切迫に、私とユリコの意見が分

れていたのであった。

結局、私が折れた。これ以上虐めるのはよくないかも知れないと考えたからである。

大急ぎで解き放すと、転がる様にしてユリコは浴衣を纏い、腹を押えるようにして、腰をかがめ乍ら部屋を飛出した。バス、トイレのベックホテルの便利さなら、恐らくユリコも同意し、私も我意を通したであろうが、何分にもトイレも共同であって、部屋になければ折れざるを得ない。ユリコにしても、縛られた俣、その上より浴衣をきて、私につれられてのトイレ行きは、流石にいくら何でも承知出来なかったに違いない。

ユリコのトイレは長かった。フトした不安めいたものが走ったが、まさか今の俣の姿ではどうなるものでもない。私は心を落付けて煙草をふかし乍ら、ユリコの帰ってくるのを待っていた。マスを連行した時の想い出が蘇がえた。

廊下に足音、そして入口の戸が開く。

「おそかったネ」

一寸咎めるようにいうと、

「ああ、すっとした。うち気持わるいから、もう一ぺんお風呂に入ってきましたん」

「トイレで倒れているのかと思った」

「まさか。でもおなか何だが変な気持やわ。」

プレイって言って、いつも外の人にも、あんなことするの？」

「する時もあるし、しない時もある。ユリコには何だかしたくなった」

「えらい災難やわうち、でも二、三日おトイレへ行ってもつまってましてん。一ぺんに出てすっとしたわ」

「ほれみる、よかっただろ」

「あんなうまいこと言って……」

「この夏、マスマと志摩半島へ行って泊った夜、マスマを縛ってトイレへ連れていったんだよ。私の見ている前で……」

「やめて、あんまりうちの前でマスマのこと言わんという。その代り、うちにはうちで、マスマにはないええところある筈やと思うわ」

「ええとこというと」

「おじさんをうんと喜ばせたげる。うち男の人の喜ばせるコツ知ってますねん」

と屈托のない顔で、ケロリといった。

「えらいのど渴きましたわ。何か飲むもの注文してくれはらへん？」

私も先刻の激しいあがきで、のどがカラカラだった。普通なら当然ビールでもものむ処だが、これから未だ運転して帰るとなるとそう

もゆかない。あきらめて、ジュースとコココーラを電話で注文し、大急ぎで、散らばったものをバッグに納める。じゅうたんの上にこぼれた蠟骸をつまんで片付けていると、女中が飲物を運んで来た。何かなし乱れた部屋の空気に、何かを察したかの様に、わざと澄まし顔でそれを置いていった。女中の想像とは内容が違って、やはりプレイの跡は部屋の中にかくしようもなかったであろう。

喉をうるおすと、ユリコはポツリといった。「うち、もうくたびれてしもたわ。未だ撮りはるの?」

「出来れば、もう少しネ」

「そう。せやけど、もうさつき見たいなことをんといてネ。うち縛られるの構へんけど、あんなことされるの好きやないわ」

何も知らぬ未経験の娘なら、誰だって好きでないかも知れない。浣腸を試みて、その時の反応によって、相手の好き嫌いが分る。潜在していた浣腸の魅力を知る娘もあれば、ひたすらに嫌悪する娘もある。ユリコの場合、極端な嫌悪の情を示さなかったが、矢張り好まなかったことは確かだった。

「じゃあ、やわらかーく、もう一度縛って終るとしようか」

私も激しい欲情が去って、プレイに対する情熱の峠は既に越えていたが、コニカに写した後ろめたさが、この俚やめれば恐らく二度と撮る機会もないかも知れないという心残りから、今一度の緊縛をユリコに求めていた。

「さっきのおじさんとえらい違いやね。さっきは眼吊り上げはって、怖わい顔して、ほんまにカンカンやったわ。うち、もうどうなるかと思たわ」

「そんなに怖わかったかな」

「ええ、こわいこわい。あんなおじさんは嫌いやうち。誰にでも、あんな顔して撮ってはるの?」

「いや……」

私は返事に困った。懸命になり、真剣になっっている私の顔は、恐らく緊張の余り、今ユリコに指摘された様にそうなっているのかも知れない。私自身、自分の顔の相は分らないけれど――。

「おじさん、うちをしっかり抱いて」

「こうかい」

「もっと強く――。ううん、もっともっと」

「縄を解こうか――」

「ううん、この俚でええの」

ユリコは豹変して、ぐいぐい私に身をすり寄せて来た。肌のぬくみがじかに伝わり、甘酸っぱい吐息が、私の頬を熱く撫でた。ユリコはそれを求めているのかも知れない。ひたいにうっすらにじんだ汗が、妙に生々しかった。私の腕の中でいきづく胸のふくらみは、

よく似たもの許り、随分パチパチと撮りまくったらしい。フィルムを入換えるのも憶劫でカメラはそれ迄にした。縛ったユリコの体を抱き起してやると、彼女は何を思ったか、ニーツと妖しい微笑を浮べた。

「フィルムが終りだよ。もうよそうか」

「構へんよ。うち……フィルム持ってはったら、もっと撮りはって――」

「いやよそう、もう疲れたよ」



激しく波打っていた。

どこかのヌーベル女優が、いみじくも言った「セックスのときが最高よ」と言う言葉はユリコにもピッタリと当て嵌るのではなからうか。ほんの数刻前、激しく私を非難し、嫌悪した彼女が、今、掌を返すように、私の胸の中で、息づき、喘いでいる。ユリコにとって、S M のプレイは、彼女自身の体内の血を沸き立たせる、前戯なのではあるまいか。

そう感じた時、私の体内にも変化は起りつつあった。極く自然に、私は縛ったユリコを抱きしめた。

× × ×

気懶るい疲れが私の全身を掩っていた。うつすらと縄のあとを皮膚にたじませて、ユリコは鏡に向っていた。ノロノロと立上ると、私はプレイの道具をしまい始める。鏡の向うから、ユリコの声が澁ね返ってきた。

「ねえ、おじさん。又来週ドライブつれて行ってくれへん？ 何処でも構へんわ。うち車にのるのが大好き。その代り、あとでおじさんの言うこともきいたげる」

齡に似合わぬ言葉をズバリと言って、ユリコは鏡に向って笑った。

「ウン、考えとくよ。しかし、何しろ私も忙

しいのでネ」

「忙しいでも構へん。うちもおじさんの無理きいたげる代り、おじさんもうちの無理きいてネ。きつとよ」

「ウン、ウン」

成程、これは箕田氏ではないが、私にとっても重荷だ。この娘は別段金銭や物質の要求をしないが、それに代る、ドライブの要求だけは熾烈を極める。これで箕田氏も参ったに違いない。或いはユリコにとって、ドライブ出来る相手なら、箕田氏や私以外の誰でもいいのではなからうか。そんな白痴めいた危惧すら感じる異常な執心振りであった。

尚も、くどくどと念を押すユリコに辟易し乍ら、生返事するより仕方なかった。

ユリコの愛情のテクニックは、ハッと眼を瞠る程の大胆さだった。迂かつにも私は、風呂場に於て、既にあの時ユリコが覗かせた媚態をコロリと忘れていたのだ。

或いは彼女はドライブにかこつけて、彼女の自身の体に潜む、魔性を充そうとしているのかも知れなかった。私の腕の中で悶えるユリコの肌に、悶えにつれて縄は徐々に強くしまりつつあった。不自由氣に身をくねらせ乍らユリコは高揚して来た氣持を押えかねて、

「解いて、早く解いて……」

とうわごとの様に叫んでいた。

私がかしげに縄をとくと、待ち兼ねた様にユリコの両手が私の首に巻きついた。

それから爛れたひととき。

「好きよ。おじさん、大好きよ——」

と泣く様に叫んだ声が、私の耳朵に灼きついて離れない。そのユリコが、身支度を済ませて立上ると、ケロリとして囁やいた。

「おじさん、うちほんまに愉しかったわ」

× × ×

旅館を出ると、既に秋の陽は落ちて、黄昏が興福寺の五重塔を灰色に包んでいた。ポツリと頬を打った雨の一滴が、しとしとやがて私達二人にそそぎかかってきた。小走りに急いで、駐車場に引返し、私とユリコは慌てて車内にもぐり込んだ。雨はやわらかく車のフロントガラスに注ぎかかる。

雨に煙って眼下にのぞむ奈良の街が、とりどりの色彩の灯に染まりつつあった。

阪奈道路へ出ようとしたが、三条通りは、「スベリ坂」から一方通行になっていた。宵闇迫る古都の灯を後に、循環道路に出てバイパスから一路阪奈道路へ入る。

余りにも激しかった、プレイのあとの疲労

が、一時にどつと出てきたのか、ユリコは物  
 懶げな放心した表情で雨足を見ていた。

ユリコには内緒で、彼女のカメラに、彼女  
 自身のあの羞恥のポーズを入れた事に私は淡  
 い悔いを覚えていた。何も知らずD・P・E  
 を依頼し、返って来たフोटの中に数枚、彼  
 女自身のあの強烈なフोटを発見した時の、  
 彼女の驚愕は想像に難くはなかった。協力的  
 なユリコに対する仕打にしては一寸非道すぎ  
 た悪戯だったかも知れない。

彼女は羞恥にまみれ、驚愕と絶望に打ちひ  
 しがれ、辻村隆という人間の恐ろしさを痛感  
 するかも知れない。そして二度とドライブを  
 いってこなくなると共に、私とユリコのきづ  
 なは、ものの見事に断ち切られるかも知れな  
 い。彼女の献身的な協力に対する仕打が、余  
 りにも非道いものであると反省し乍らも、こ  
 れで、もうドライブに誘われることもあるま  
 いという、いわれなき安堵感が私の身内に走  
 った。

あの時の絶叫、そして愛欲の呻き、私に対  
 する激しい赤裸々な恋情。それが中年男の私  
 には反って重苦しい重圧になる事を、この娘  
 は気付かないのだ。感情のおもむく尽に、あ  
 るが尽に若い娘のエネルギーをぶつけてこら

れては困るのだ。

ずるい男の、いわばプレイをプレイとして  
 割り切った私の気持など、憶測出来る年頃で  
 もなし、又判ろう筈もなかった。



私はKK十数年来の愛読者で、毎月欠か  
 さず愛読させて頂いておりますが、私の希  
 求は皆さんと大分違っており、今までの誌  
 上で私と同じ傾向の告白が載っていたのを  
 知りません。

私は只今小さな縫製工場を経営しており  
 奇巧を始めて読みだした頃は、自家の一階  
 を全部板敷きにして、主として百貨店なん  
 かに納める数物の加工下請けをしておりま  
 したが、今ではどうやら専属工場の三つも  
 持てるようになり、郊外に住居を新築でき  
 るようになりました。

しかし、私の心の中をいつも占領してお  
 りますのは、自分よりずっと生活程度の低

## M の 幻 想

林 茂 樹

い男性に恥しめられ、虐じめられたとい  
 うことです。

創業時代で私が自分自身オートバイのう  
 しろに製品を積んで配達していました頃、  
 よく住吉街道から南霞町、恵美須町を通っ  
 て堺筋へ出たことがありましたが、途中、  
 南霞町あたりで日雇人夫や浮浪者の薄ぎた  
 ない男たちの姿を見ると、あんな男たちに  
 寄ってたかって、踏んだり蹴ったりにされ  
 てみたい、と思ったものでした。

その頃、夕暮の裏町を歩いていたら私が、  
 やくざ風の男にインネンをつけられて殴ら  
 れ、金を余り持っていないところから、彼  
 等の隠れ家へ連れ込まれ、数人のやくざ連

尻込みする女には追及し、さて女が急変し  
 て迫ってくると身を避けようとする。私とい  
 う男の忌わしいプレイボーイの本心を、ユリ  
 コは知り得る筈もありはしない。煎じつめれ



ば、燃えて盲進しようとする私を、理性で押えるのは、楽しい家庭であり、糟糠の妻への、男の操であったかも知れなかった。

知る由もないユリコは、私の体に徐々に身をすりよせ、何かを求めようとするかのようになり、しなやかな指先が私の腰の辺りからんできた。処女の純情と、娼婦の技巧を兼ね備えたユリコという女は、弱い男の心なら焼き尽さずにはおかぬであろう。

生駒の頂上には、星屑のようにチラチラと灯が点滅し、柔かい雨に煙って一入情趣を誘うようにまたたいていた。

或いは今宵限りで、永久に左様奈良になるかも知れぬユリコよ。ドライブマニアのよき相手を掴み給え。

そして君の妖しいテクニックを充分に活用し得る、歓喜の生活を送り給え――。

山並をぬけた眼下に大阪の灯が見えた。

さあ気をつけて下って行こう。

私はエンジンブレーキをかけながな、ヘヤピンカーブの急坂を、幾曲りも幾曲りも慎重に下っていった。ゲイトを潜った頃からは、白い雨足が激しくフロントグラスを叩きつけるようにとり囲んでいた。

ユリコは私の傍で軽く寝息を立てている。

中から、さんざん罵られ挙句の果ては小便までかけられるという告白を投稿したことがあります、文章が下手だったのか、誌上には掲載されませんでした。

私は揮一本の男性の裸体にも興味を持っておりますが、それは浅黒く陽灼けた精悍な表情の男性に限られ、色の生っ白い男性なんかは興味なく、従って自分自身の体は駄目なのです。使っている田舎出の青年の中に私の理想的な男があり、六尺揮を着けさせ写真を撮ったことがあります。真黒に灼けた肌を、焼き込んで一層黒く仕上げこれは私の最高の作品となりました。しかし、その青年も都会の生活に馴染んでくるに従って、田舎育ちの野性味を失い、又彼もそんなモデルになるのを嫌いだし、三回ばかりで止めてしまいました。

タイプとしては青白きインテリ型というのは私の好みでなく、又、教育のある知性の持主というのも好きではないのです。肉体労働をして陽に灼けた筋骨逞ましい男。例えば、下級船員、鉄道工夫といった力仕事をしている職業、そして社会的な身分としては、日雇人夫、浮浪者、やくざといっ

た最下級の者によって無法に暴力を揮われるといったことを望んでいます。

私の学歴は私立大学中退で、職業柄座食することが多く、戦争の最中から終戦直後にかけて学生時代を送ったため、スポーツをやる暇もなく、闇市をかけ回って身すぎをすることに忙しく、どちらかといえば筋骨隆々型ではないので、尚一層そういう野蛮型の男性を対象に選ぶのでしょうか。

一度は、浮浪者に変装して釜ヶ崎あたりの木賃ホテルへ潜入して、と思わぬこともないので、仕事に追われ追われです。しかし、ああいった雰囲気は好きなので、通りすがりに時たま寄ってみることもありますが、只それだけのことで、陽灼けた筋骨逞ましい教育のない浮浪者のような男たちに、暴力をふるわれないという私の願いは、未だに只の一度も果されないでいます。

そして私は、今日も郊外の自宅と三軒の工場と問屋を自ら車を運転して回っているのです。一度でもいいから、この変った希求の満たされるのを期待しながら。

# 花の女斗美たち

(10)

## 奮 斗 士 好 太

メイン・イベント―高校体育大会が終りますと、部内の様子も大分変わりました。

就職やら進学やらでいそがしくなった三年生の人たちは、そちらの方へ力を注ぐようになり、毎日の練習は二年生の人たちが主力になって進められるようになりました。

大げさに云うと、それは政権の交替が行なわれたということなのでした。

今年の大会は、残念ながら個人戦も団体戦も、優勝を争うというところまで行きませんでしたし、今井さんのように、勝負の運に恵まれなかった人もあって、実力以下とも云える成績でした。

しかし小林さんの大活躍は私たちを大いに

勇気づけてくれましたし、その後の選考会でも、今井さんが全国大会に出場する県チームの一人(補欠でしたけれど)に推選されたことは一層大きな喜びでした。

私たちの相撲部も、ようやく陽のあたる場所へ一歩踏み出したのです。

それだけに、この今井さんたちの努力をうけついで行かなければならない私たち後輩の責任も一層重くなったと云えるのでした。

練習の実権が二年生の人たちに移ったあとその「しごき」の対象は、当然のことながら私たち一年生に向けられました。

四股ふみ、ぶつかりげいこ、うさぎとびと、どれひとつとして気のぬけるものはあり

ません。

毎日々々、それこそ目のくらむほどにしがれて、自分のからだなのか、ひとのからだなのかかわからないような状態で、ようやく放免です。

口をきくのもおっくうなくらい疲れても、私たちの若い肉体は、翌朝になるとケロリとして、また猛練習に飛び込んで行けるのでした。

そして、一日一日と、みんなが目に見えるくらいにたくましくなっていくのでした。

私も、相撲部へ入る前にくらべると四キロ近くも目方がふえ自分でも、びっくりするほどなのでした。



そんな猛練習にあけくれしているうちに、やがて学期末、待ちに待った夏休みです。

私たちのクラブには、この夏休みのうち十日間ばかりを合宿に出かけるという楽しみがありました。

鉄道で一時間、そこからさらにバスに乗りかえてまた一時間、そしてバスの終点からまた三十分ばかり歩くという山の中の辺地ですが、それだけに都会にはない清らかな大自然が待っているのです。

部落からやや離れた岡の上にあるお寺が私たちの宿舎で、その境内にある型ばかりの土俵が練習場なものでした。

昔は、村の若い人たちが熱戦を展開したらしいこの土俵も、その若い人たちがほとんど都会に職場を求めるようになってからは使用されることも稀で、荒れほうだいになっているのですが、それでも私たちの練習用にはまだ十分間に合うのでした。

今年の一行は二年生、一年生の全員のほか三年生のうち池田さんと野川さんの二人が、引率、責任者として参加しました。

総勢十一人。お米や野菜は先方で間に合うとしても、お菓子やカン詰め類、それに紅茶やコーヒを持って行く人もあり、炊事道具

一そろい、着がえの衣類をつめるとかなりの量になります。

あれこれと鞆に詰めこんで、ヤレヤレと一息ついて、フト傍を見ると、いちばん大事なマワシを入れ忘れていたなどというあわて者もいて、出かけるまでは大さわぎなのでした。

こうしてにぎやかに出発したわが花岡高校女子相撲部員一行は、道々笑い声をふりまきながら無事に目的地へ到着しました。

深い森にかこまれたそのお寺は、全く俗世間から離れた感じで、文字どおりの素裸になってスポーツに打ち込むには申し分のない環境でした。

朝もやの晴れ上がるにつれて、姿を現わす近くの山々の大きさは、ほんとうに壮麗なものでしたし、夜ふけの空は、降るようなという言葉がぴったりする、すばらしい星座の群が眺められるのでした。

毎日の日程は、まず朝の練習から始められます。

朝食前にまず練習。

つめたいくらいに澄んだ朝の空気の中で、マワシを肌当てますと、身も心も引き締まる思いで、眠気も一ぺんに吹き飛びます。

炊事当番の人ふたりを除いてあと全員が、

四股ふみから始まって、押し合いげいこまでにひと汗流すのです。

朝食は十時近くになりますから大分おそいのですけれど、そのかわり、新鮮な野菜もふんだんで、いくらでもおなかに入ってくるようです。

運動したあとの食事って、こんなにおいしいものかしらと、今更のように感ずるのでした。

おそい朝食のあとは、おひる頃までひと休み。この時がいちばん楽しい時間で、てんでに近くの谷間へ出かけたり、山へ登ったり、お洗たくをしたり、ダベツたりで過ごすのです。

ひと休みしてまた午後の練習、こんどは朝とちがってハードトレーニングのきつい練習です。

投げられ、ころがされて、全身砂まみれになり、思い切りきつく締め込んだマワシもちまちにゆるんで、締め直すのも二度や三度で足りないことさえあるのです。

猛練習を終えての夕方、だんだんに暮れて行く空を眺めながらお風呂に入ります。

やかましいほどに鳴きかわしていたセミの声が次第におさまって、それに代って草むら

の虫が鳴き出すのを聞いています。ちょっと家が恋しくなるのでしたが、そんな感傷も、肉体の疲れに勝てず、床を敷くと間もなく、そこから健康な寝息が、聞えてくるのです。

こうして合宿の日程が消化されて行くのですが、毎日がこんな判で押したような繰り返しをしたわけではありません。若い女の子同志ですから、いろいろな思い出がありました。そのひとつ、それは、私が炊事当番にあたった日のことでした。

ごはんの仕たくをしている耳に、何やらワアワアとにぎやかな声が伝ってきました。

「朝から何をふざけてるんだろ。しょうがないわネエ」

いっしょに当番に当たっていた榎本さんが、ちょっと手を止めて眉を寄せました。

練習の時のかけ声などではなくて、さわいでいる声なのです。

ちょうど仕たくのできたところでしたので私が呼びにかけました。

「何してるのオ、ごはんができたわよオ」

と、呼びながら庫裏の角を曲がってヒョットと見ますと、誰かが取り組んでいる最中で、それを囲んで皆がにぎやかな声をかけている

ところです。

こんな時にいちばん大きな声を出しているのはきまって津野さんで、今朝もひときわカシ高い彼女が声がひびいているのでしたが、ヒロちゃんや二年生の小林さんまでが大きな声でゲラゲラ笑っているのです。

押し合いげいこではもちろんないし、ぶつかりげいこでもないようなので、この人たちはいったい何をやってるんだろうと近づいて行きますとビックリしました。

取り組んでいる一人は西田さんでしたが、相手の方は驚いたことには、毎朝野菜を運んで来てくれる例の女の子で、それがマワシ一つの素裸になって西田さんともみ合っているのです。

中学生といっても大柄なので、西田さんと取り組んでいても、ちっとも見おとりなんかしないのです。

健康そうな浅ぐろく日やけた肌で、肉づきこそまだうすく、熟し切らない果物のように、いくぶん固さの残っているかわいいお尻に真白いマワシをキリリと締め込んでいるところなどは、ちょっと野性的な感じさえするのです。

しかし、いくら大柄だとは云っても、年令

もちがいますし、それにだいいち、こちらは相撲部で毎日練習をつんでいるのですから、勝負は始めからわかっているのですけれど、それでも何の気おくれもなく、思い切ってぶつかって行くのは見ていて気持のよいものでした。

まだ幼なさのぬけないスナリした手足や丸い、そしてほんとにかわいいおシリがピチピチとはねまわって、ぶつかっては押し戻され、はね返されてはまた向かって行くのです。そして、まわりで見物している人たちの口からは、そのたびにひやかし半分の勝手な注文やら激励が飛んで、ますますにぎやかさを加えて行くのです。

私も、毎日のあわただしさにまぎれて、いつの間にか忘れかけていたものを、思いがけなく見つけた時のような、気持のよい驚きでこのすがすがしい眺めにひきこまれてしまったのです。

二三番西田さんと取って、おしまいに西田さんが力を抜いて女の子に勝たせて退いたあと、代って小林が出ました。

「ヨオッ、横綱のおでましヨッ」

誰かが大きな声でひやかしします。

身長は女の子のほうに、いくぶん高いくら



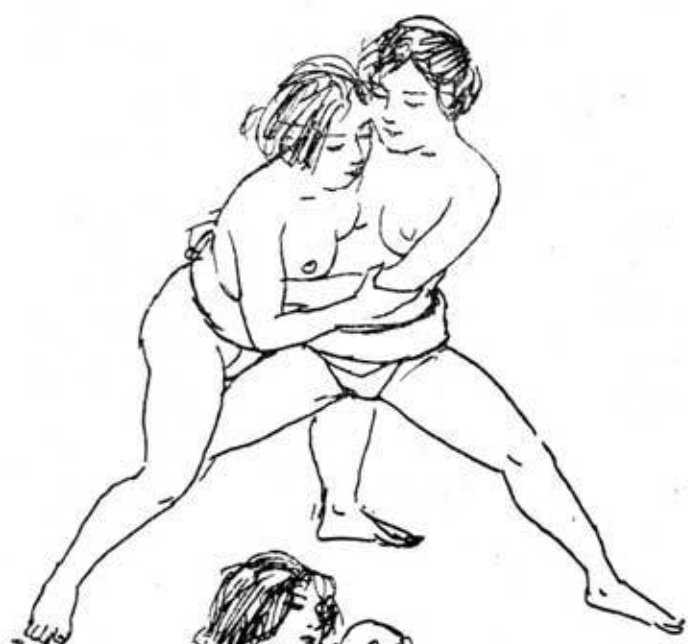
いなのでしたが、ふたりが向かい合うと、小林さんの偉大な体格は、まず相手の女の子の二倍くらいはあるように見えるのでした。

一足踏み出すごとに、たくましく筋肉の張った太モモやフクラハギがプリン、プリンと震えるのでした。

のどもとから盛り上がった胸の厚さ、おもちのようにポテポテとせり出しているおなかのあたりの肉づきは、そのまま放っておいたらどこまでもふくれ上がってしまいそうなくらいのボリュームなのですけれど、そんな重

まりかえし

1



2



量感をキッチリと締め込んだマワシが支えているのがおなか全体に緊張感を与えながら、安定した美しさを作り出しているものでした。

何もからだにつけない、ほんとうの素っ裸になったら、おそらく不格好に見えるにちがいないほど肥った小林さんが、マワシ一つを身につけただけで、見ちがえるほどに生き生きとして、力強さにあふれた感じに変わってしまったのはふしぎなくらいなのでした。

相手の女の子の方は、まだ肉がうすくて、肩口のあたりや、腰のへんの感じは、少女と

いうよりも、少年

みたいに見えるくらいですし、ようやくふくらみかけた胸のつぼみも、まだほんの形ばかりのポツチリとしたつつましやかなものでした。

小林さんは土俵の中央へ進むと、「サア、こんどはわたしが相手よ、あんたかわいいか

ら、うんとかわいがってあげるわ」

と、云いながら、軽く「トン、トン」と、力足を踏みながら、相手の構えるのを待つのでした。

豊かなおシリの肉づきが、力足を踏むごとに、ブルルッ、ブルルッと武者ぶるいのように揺れ、マワシの結び目がメリ込んでいるように見える肉の厚い、そして正方形みたいな広い背中が軽く波を打って、そこだけが別の生きものみたいな感じがするのです。

「大きくても、チツともコワイことなんかないのヨッ」

「思い切ってぶつかれば、そんなのヘコンじやうワッ」

まわりで池田さんや野川さんたちがひやかしします。

その声に、小林さんはチラリと池田さんたちの方を振り返りましたが、ニヤッと笑ったきりで何も云い返さず、また相手の女の子へ向き直りました。

すると、また、その広い背中へ

「七〇パーセントはれヨッ」

と、止めをさすような声が浴びせられて、ドッと笑い声が湧きました。さすがに小林さんもつられてふき出すと、その声の方をにら

んで

「ふざけないでよッ」

と、口をとがらせましたが、ゲラゲラ笑い  
ころげて反応がありません。

氣勢をそがれた小林さんは、仕方なくいっ  
しよになって苦が笑い。

ようやく、みんなの笑いがおさまったとこ  
ろで、もう一度力足からやり直した小林さん  
は、グッと深呼吸をして気持ちを落ち着かせて  
から

「サアッ」

と、女の子に声をかけると、グイと腰を落  
として構えをとりました。

やわからかそうに見えていた、ふたつの半球  
が、たちまちピンと張り切って、そのまんま  
かをキリリと締め上げたタテミツの白さが、  
この緊張を一層たかめます。

ヘンな話なのですけれど、私は、この身構  
えた時の小林さんの張り切ったおシリや、そ  
のおシリを二つに割って、キッチリと締め込  
まれたタテミツのあたりの感じを、とてもす  
ばらしいと思うのです。

けれども、そんな感じは、小林さんくらい  
のポリウムがなければとてもものぞめない話  
で、私のような貧弱なおシリでは、そんなわ

けにはいかなのがほんとに残念なのです。

ヒロちゃんや津野さんや、そして松田さん  
などでも、みんな丸々と張り切ったポリュー  
ムのあるおシリを持っていて、小林さんほど  
ではないにしても、みんなマワシ姿がピツタ  
リして、いかにも相撲部員と云った感じに見  
えるのに私だけがヒロヒロしたからだに  
マワシなんかをつけているのは、何だか間ち  
がいをしているような気持ちになります。

私がそんなことを考えているうちにも、女  
の子は、小林さんの構えるのに合わせて、ま  
たファイト満々で向かって行くのでした。

もう大分疲れているらしく、額のあたりに  
汗が光り、肩や胸元なども大きく上がり下が  
りしているのでしたけれど、ちっとも気おく  
れする様子もなく、子猫のようなしなやかな  
からだつきに目をキラキラさせて、グッと構  
えをつくるのです。

そんな女の子の姿に、貧弱なからだに気の  
沈む私の気持ちもはげまされる思いになるので  
したが、フトみんなを呼びにきたことを思い  
出して、夢中になって大声を張り上げている  
ヒロちゃんの肩をたたきました。

「いったい、どうしたっていうの、これ？」  
ヒロちゃんは、やっと私の来たことに気が

ついた様子で

「ああ、あんたも来たの？」

「来たのじゃないわ、ごはんの仕たくができ  
たから呼びに来たんじゃないの」

「アラそう、あんまりおもしろいから、あん  
たもつられて来たのかと思った」

「あの子に相撲させたりして……誰が云い出  
したの？」

「小林さんヨ。さっきわたしたちが練習して  
るところへあの子がやってきて、あすこの縁  
がわに腰かけて眺めてたの。何だかやりたそ  
うに見えたから、わたしが、あんたもやらな  
い？って呼んだらモジモジしてたけど、小林  
さんがやりなさいよって声をかけたら、こっ  
ちへきたわ」

「やっぱり、あんたが呼んだのね。あんたは  
人をさそう名人だから」

「そうじゃないわ、さいしょ呼んだのはわた  
しだけど、マワシなんかさせたのは小林さん  
なのよ。あの子がこっちへきて、わたしたち  
といっしょに四股をふみはじめたら小林さん  
が、そんなかたちじゃダメよって云って、  
それから誰かのマワシを持ってきて、あの子  
をハダカにしちゃったの。あの子マワシを締  
めてもらいながら、くすぐったがってケタケ



「笑うもんだから、わたしおなか痛くなっちゃった」

「そのマワシって誰の？」

「知らないわ。たぶん小林さんが、誰かのあいてたのを持ってきたんでしょ。ホラ、ひとのふんどしで何とかって云うじゃない」

「あらいやだ、あいてるって云えば、わたしか榎本さんのじゃない」

「そういうことになるわね」

「じょうだんじゃないわ、ひとにことわりな

ぎりかへし

(きまり)



しで」

私は腹が立ちましたが、ヒロちゃんはケロリとした顔で

「いいじゃないの、ちょっとの間だからさ、貸してやんなさいよ、あの子なかなかマワシが似合うじゃないの」

などと云っています。

小林さんが持ってきたなどと云っています。が、ほんとはヒロちゃんが私のマワシを持ち出してきたらしい様子なのです。

「勝手なこと云ってるわ」

「そんなに借りられるのがイヤなら、からだから離さなきゃいいじゃないの、一日中マワシ締めてなさいよ」

ヒロちゃんは、しゃあしゃあと、そんなことを云うのです。

そんな云い争いをしているうちにも、土俵では小林さんと、その女の子が熱戦をくりひろげていました。

もちろん、小林さんの方は遊び半分で、女の子がいっしょうけんめいに向かって行くのを、

「ホイ、ホイ」

と、奇妙なかけ声をかけながら受けているのです。

ぶつかっては押し戻され、またぶつかってはまたはねかえされて……女の子の細いからだ、小林さんの厚い胸の深い谷間に包み込まれてしまうように見えて、しかし直ぐにまた小林さんの太い腕がグッと力強く伸びて女の子のからだ、その谷間からはじき出されるのでした。

何度かはねかえされてもくじけることなく、そのたびに力を振り起こしてぶつかって行く女の子のファイトはほんとうにすばらしいものでしたが、しかし、どうしても小林さんを土俵ぎわまで下がらせることはできません。

「休まないで休まないでッ」

「ソラ、もうひといきよッ」

声援はしきりに飛びますが、女の子は大分疲れたらしく動きもにぶり汗ビッシヨリで「あアもうダメだワ、ぜんぜん動けない」

と、顔を上げて、あきらめた様子をしました。小林さんも、それにつられて、というっ

かりまわりに目をやって見ている皆に笑いかけました。

すると、女の子は、そのゆだんを見すまして、いきなり、小林さんの大きなおなかのあたりにしがつくようにして両マワシを握ると、足をとばして思い切った外がけに攻めたのでした。

「アッ」

と、小林さんは、あわてて体勢をととのえようとしたが、ゆだんしていたところへいきなり足を掛けられたのですからたまりません。もう一方の足で一步二歩よろめいたかと思うと、たちまちドッと仰向けにひっくり返されてしまったのでした。

ふとった小林さんの、大きな色白のからだ、スナナリした女の子の浅ぐろいからだ、ピッタリと密着したまま倒れて、小林さんの肉の厚いおなかの中に女の子のからだがりこむように見えました。

「やった、やった」

「金星だワ」

「アハハ、いいかたち」

どっと湧く笑い声のなかで、小林さんひとりだけが痛そうに顔をしかめていました。

あまりみごとにきまったので、女の子はす

っかりあわてて

「スミマセン」

と、小林さんの手を引っぱって起こしかけましたが、小林さんが

「ヨクモやったわね」

と、にらんだので、びっくりして逃げかけました。

それを見てまた、まわりの笑い声が湧きま

す。  
小林さんは手を引かれてようよう起き上がりましたが、広い背中はいちめんに土がついていて、ふたつのおシリにも丸く塗りつけたように汚れているのが、ちょうどおサルのおシリを見るようなのでした。

それがおかしくて、また笑いこぼるみんなのなかで、小林ひとりだけがムクレた顔をしているのが、また新らしい笑いを誘うのです。

「この子なかなか頭が良いわネ」

「技能派ネ」

などという声に、小林さんは

「技能派じゃなくて、ヒキョー派だワ」

と云うと、たちまち

「じゃ、あんたはグノー（愚能）派」

と口の悪い野川さんにやり返されて、せつ

かくおさまりかけた笑いが、またドッと湧くのでした。

次の日の当番は、池田さんと西田さんでした。

朝食前の練習も、野川さんの号令で四股ふみが終り、次の押合い合いに移るところで、一息入れたみんなが汗をぬぐっていますと、きのうの例の女の子が、またヒョッコリ顔を出しました。

「おはようございますッ」

元気の良い声に、野川さんが振り返って

「アラ、来たわネ。またやるの？」

「ハイ、おねがいします」

女の子はニッコリしました。

「イイワ、大かんげいよ」

野川さんはそう云って、私の方へ

「テルちゃん、マワシ持ってきてあげてよ」

と、声をかけました。

私が庫裏の方へ行こうとしますと、女の子はあわてて止めました。

「ア、いいんです」

「いいって……？」

野川さんがびっくりして女の子を見ますと

「わたし、用意してきたんです」

「ええ？ 用意してきたって？ あんたマワ



シでも持ってきたの？」

「はい、もうちゃんと締めてきたんです」

女の子はそう云って、ワンピースのお尻をちょっとまわって見せました。

かわいいお尻がチラリとのぞいて、その真中を赤い布が二つに割っています。

「アラ、なあに？ その赤いの？」

野川さんの声につれて、それまでふたりのやりとりを見守っていた小川さんや中川さんや、それにヒロちゃんや津野さんまでが、いちどにドッと女の子の方へかけ寄りました。

「ドレドレ、見せてエ」

「ワアッ、かわいい六尺じゃないのオ」

「イカすじゃないの、あんたにピッタリだよオ」

「見えないわよオ、ちょっとドイテエ」

などと、口々に勝手なことを云いながら、寄ってたかって女の着ているワンピースを、まるでぎ取るように脱がしてしまい、たちまち女の子を、赤い六尺ふんどしひとつの素っ裸にしてしまったのでした。

女の子は、思いがけなくそんなことになって、さすがに恥かしそうに頬を染めました。それでも自分で締めてきたのがチョッピリ我慢らしく、ニコニコしながら、まわりに集ま

っている『先輩』たちの顔を見まわしているのです。

けれども、せっかく女の子が用意してきたも、そんな細い六尺ふんどしなどでは、もちろん相撲などできるわけはありません。

締め方にしても、よくわからないらしく、うしろの結び目などは、ただグルグルと巻きつけてあるだけなのでした。

「あんた、せっかくだけど、そんな六尺なんかじゃ相撲はできないのよ」

野川さんが云いました。

「……？」

女の子が意外そうな顔をするのへ

「相撲のマワシはね、みんなが締めてるような、もっとシッカリした巾の広いでなくちゃダメなのヨ。そんな細い六尺なんかじゃ力が入らないし、だいいちもっとしっかり結ばなくちゃじきに解けてしまうわよ」

野川さんはそう云うと、女の子の赤い六尺に手をかけてグッと引っぱりました。

たちまち巻きつけただけのうしろがほどけてダラリとはずれかかります。

「キャア、イヤだア」

女の子は大あわてで、落ちかかった赤い六尺をおさえ、その形のおかしさにドッと笑

が湧いてしばらくは止めどもないのでした。

「テルちゃん、誰かのマワシ借りてきてやってヨ」

野川さんに云われて私は、庫裏へ行きまし

た。

今朝の当番は、池田さんと西田さんですから、西田さんの方のを借りようかしらと考えながら、庫裏の入り口を入ろうとすると、ちょうど、その西田さんが出ようとしたところで、バツタリとハチ合わせ、

「あらア、ビックリしたワア」

と云う西田さんをつかまえて、さっそく

「ネエ、あんたのマワシ貸してヨ」

「エエ？」

と驚くのを

「またあの子が来たのヨ、野川さんが誰かのマワシ借りて来てって云ったから……」

「でも……」

と、西田さんはしぶって

「肌につけるものなんか、わたし、ひとに貸したくないわ」

「どうしたの？」

私と西田さんがふたりとも困った顔をつき合っているのへ、池田さんが声をかけてきました。

そして、私の説明をきくと、

「じゃあ、わたしんのを貸してあげるわ、でも、そうやたらに貸したり借りたりするもんじゃないわよ、自分の肌につけるものはもっと大切に考えなくっちゃ」

「すみません」

と、私があやまることになってしまつて、ちよつと腹を立てながら、池田さんのマワシをワザと肩にかついで戻りました。

野川さんは、私をもどって行くのを見ると「サンキュー」

と、私のふくれっツラに気のつかない様子で、

「ついでに、締めてやってくれない」

と、気軽に云いつけます。

「叱られたり、手伝ったり……、ワリに合わないわ」

私は、女の子がにくらしくなる気持でしたが、無邪気なその子の顔を見ると、そっちに当たるわけにもいかず、

「こっちへおいで」

と、呼びました。

さっきみんなに脱がされたまま、六尺ひとつの素裸で、練習を見ていた女の子は、私の持ってきたマワシを目にすると、ちよつと嬉

しそうな、そしてはずかしそうにニコツと笑つて近寄ってきました。

「さあ、それをとって」

私は、わざと乱暴に声をかけました。

「……？」

「その六尺よ、そんなのしてちゃマワシが締められないわ」

「この上からじゃダメですか？」

「あたりまえよ、マワシの下は何もつけちゃいけないのよ」

「ワア、恥かしいワ」

女の子は赤くなってモジモジしました。

「ハイ、ここを持って」

ためらいながら六尺をはずした女の子の肌に、こんどはズッシリしたマワシが当てられます。

「足を開いて、ヒザを曲げて……」

と、お人形のように突っ立っているだけのその女の子に何から何までを命令しながらもとにかく締め終つて、おしまいの結び目をキユツと引き上げ、その上をポンと軽くたたいて、

「ハイ、いいわヨ」

「ありがとう」

女の子はコックリと頭を下げましたが、ち

よつとマユを寄せながら、おシリのタテミツのあたりを直しています。そして

「おねえさんたちは、いつもこんな厚いふんどしを締めてるのですか？」

「ふんどしじゃないわ、マワシっていうのよ」

「アラ、ちがうんですか？」

女の子はふしぎそうな顔をしました。

私はちよつと困りましたが

「そりゃふんどしなんだけど……、相撲の時はふんどしって云わないでマワシっていうのよ」

「同じじゃない？」

「ウウン、ちがうの。ふんどしって云えば、下着のことでしょ。だけど相撲のときのふんどしは、下着じゃなくてユニホームだから、特別にマワシって云うのよ。だから、ただマワシって云うだけで相撲のことだなんて、わかるわけよ」

「ユニホームって？」

「つまり運動する時の、きめられた服装のこと」

「ああそうか」

女の子はやつと私の説明がのみこめたようでした。

「ね、わかったでしょ、相撲をとる時は、み



んな、このマワシを締めてなくちゃならないのよ」

「マイニチ？」

「毎日ってわけじゃないけど……、練習するときは毎日よ」

「でも、痛いわね、わたしなんかきのうはじめて締めてもらったわけでしょ、それだけでもう腰だとかおシリのあたりがピリピリするんです。皮がムケちゃったみたい。おねえさんはどうでした？」

「そりゃ、わたしだって痛かったわ」

私は、始めてマワシを締めた時のことを思い出して、ちょっと顔が赤くなりました。

なれないマワシを身につけたため、腰や股の肌が真赤にスレて、ほんとに辛かったのです。

「でも、そのくらいのこと、がまんしなくっちゃね」

と、女の子は、まるで自分の方が先輩みたいな云い方をします。

先を越されてしまった感じで、思わずにが笑いをしていますと、女の子は妙なことを云い出すのです。

「もっとキレイなふんどし……じゃなかったマワシってないかなア」

私は少しムツとしました。

いくら汗のにじんだあとが残り、泥のよごれがついているとは云っても、ひとが肌につける大切なものを貸してもらって、何と失礼なことを云う子なんだろうと思ったからなのです。

こんな生いきなことを云うのなら、せっかく締めてあげたマワシだけど、はぎ取ってしまおうかしらと、

「そのマワシが、きたないって云うの？」

思わず声がとがって、びっくりした女の子があわてて首を振りました。

「そうじゃないの」

「じゃ、何なの？」

「そうじゃなくて、もっときれいな色をしたのがないかなあって云ったの」

「きれいな色？」

「ええ。だって、おねえさんたちの締めてるのは、みんな白いのばかりでしょ。だからつまらないじゃない。だから、みどりだとか、

むらさきだとか……もっといろいろな色をしたのを締めてたらキレイでしょ、みんなが自分の好きな色のマワシを締めてたら楽しくなるんじゃないかなあって……、そんなことを思……」

「ああ、そうか」

私は、早がてんで腹を立てたのが、おかしくなりました。

そう云えば、私やヒロちゃんや津野さんもマワシの色のことで赤だとか黒だとかとふざけあったことがあるのです。

殺し屋ムードで黒が良いとか、おとめの情熱で赤が似合うとか、勝手なことを云い合って笑いころげたのですが、いままたこの女の子が同じようなことを云い出すのを見てすっかり嬉しくなりました。

「練習用のは白いのよ」

私はこの女の子が何だか好きになったようでした。

「でも、競技会の際は別のをを使うのよ。学校によってちがうけど青だとか緑だとか……いろんな色のマワシを締めてるわ、赤だとか黄色なんかの派手なのは禁止されてるけど」

「おねえさんの学校は何色？」

「うちは青よ、空の色みたいなキレイな色だわ」

「ワア、いいわア」

と、女の子は自分が締めてもらえるみたいに嬉しがって

「おねえさんのようなスラッとした体格の人

が青いふんどしなんか締めたら、きつと似合うでしょうね」

と、喜ばせるようなことを云うのです。

「ふんどしじゃないの、マワシよ」

と、訂正しながら、ほんとにそう思ってるのかしらなどと、ちよっとくすぐったくなってくるのでした。

「何をゴソゴソやってるのオ、まだ終わらないのオ？」

野川さんに呼ばれて

「ハイ、終わりました」

と、あわてて女の子のおシリを突つきながら、みんなの方へ行きました。

次の練習は押し合いなのですが、女の子が入ると一人余分になります。

「じゃわたしが抜けるから、テルちゃんとその子やんなさいよ」

と、野川さんは指導係りにまわって、五組ができあがりました。

練習が始まると、私はこの女の子の力に驚かされました。

ヒロちゃんが云ったように、こんな細かいからだのどこから力が出るんだろうと思うような強い力なのでした。

それも、ただ力があるというのではなくて

竹のようにしなやかで弾力があるのでした。

「パチン」

と、ぶつかられて、思わずトントンとよろめきかけ、あわてて構えを立て直します。

まだ押し型の型になっていないので、いつかの私のように腕だけで押そうとしていますから、コツを呑みこめば安全です。

グッと腰を落とし、押してくる相手の両腕を押し上げるように押っつけますと、簡単に出足は止まります。

胸板に感ずる女の子の頭の圧力も、チットモ苦しくなく、激しい息づかいをお乳のあたりに知るゆとりさえ出てくるのです。

押っつけの力を軽く抜いて相手に押させ、こんどは私の番です。

「パン」

と、少し力を抜きながらぶつかって、頭を相手の胸に、両手をハズに当てがって腰を落とし、グッと押します。

両方のてのひらに、女の子の、しなやかな肉づきや、その下の意外に頑丈づくりな感じのするあばらのあたりを感じながら押し進みます。

たちまち、女の子のからだが浮いて、ヨタヨタと後退、そり身になってこらえようとす

るおなががすっかりへこんで、キッチリ締めこんでやったはずの前ミツのあたりがすっかり遊んでしまいます。

こらえようと頑張る片足が宙に浮いて、なお一層体勢をくずすのでした。

私が、いつか小林さんにつかかって行った時もちょうどこんなだったのですが、これは力の差ではなくて、やはりコツを知った者の強さなのでした。

ふだんしごかれるばかりなのが急に立場が変わって、私はすっかりいい気分になりました。

押して来る女の子の前マワシを引くと、体を横にひらいての下手ひねり。

ガクッと、相手のヒザが折れて、あっけないうようにきまります。

すると、突然いい気分になっている私のおシリを思い切り「パチン」とぶった人がいます。

「イタイッ」

と、びっくりして振り返ると、いつ来たのか池田さんが竹棒を持って立っているのです。そして

「いつそんなことをして良いって云ったの」「すみません、あんまりうまくきまるので」「あたりまえよ、相手は何にも知らないんだ





# 切 腹 概 論

中 康 弘 通

## 一、女性の切腹

### — その特質 —

自殺は、生きるに忍びず、生きる苦痛を軽減するために死を招くことであるから、成可く瞬間的に、苦痛少なく死ねる方法を執るのが人情である。ところが切腹というのは最も苦痛の多い方法である。それを武士道精神の裏付けによって支えて来たのが、古来からの切腹の精神である。

しかし戦後二十年の間、男子のみならず、うら若い婦女子までが切腹自殺を計るというのは、どういう心理機構によるものであろうか。

戦前と戦後の女子の切腹を比較すると、戦前は、形式的にも白装束で切腹した老女があるくらいで、白装束とまで行かずとも、着衣を整えてから肌を寛ろげ、日本刀や短刀で切腹する例が多かった。終戦時は特に、形式的にも整然と古法を守った例が、内地でも外地でも多かった。

但し、戦闘地域では、純潔を守るためなどの理由で、準備を整える余裕もなく、暴徒の前に立ち腹を切った例もあった。

戦後は、年令により、つまり戦中派の年令層では、端座して割腹するというケースが多いが、若い層では、必ずしも形式にはこだわらないようである。日本刀などの取締り関係

もあってか、用器も庖丁が大多数である。是も戦前は、農婦では鎌が多く、芸娼妓では剃刃が多かったが、今日これらの女性の切腹そのものが少なくなっている。

戦前の特異性として確かに水商売(芸娼妓、酌婦など)の女が切腹した例が多かった。彼女らは言わば慢性の欲求不満があり、同時に慢性の婦人科疾患の持主が多いので、往年結核患者がガス自殺により患部に対する報復感覚を覚えたように、患部を切ることにより死を選ぶ例が、心理的にも肯ずける。

戦後は一般家庭の主婦や娘が多く切腹しているが、結婚難に基因するものでは、戦前は丙午の女が適齡に達した昭和初年、剃刃や短



刀で切腹した例が多かった。今日でも、丙午ではないが結婚難や離婚など、愛情関係の理由で切腹する女は少くない。是らは一種の欲求不満内攻型と見られる。

母子心中も少くない。育児ノイローゼとして片付けられる場合が多い。但し、是ら多少の判断は、他の方法による自殺者を参酌することなしには、何ンとも断定出来ない。

注目すべきは、女子大生が僅々数年の間に二名まで切腹している事実で、今日のうら若い女性の中でも、高等教育を受け教養ある層に属する女子大生が、なぜ切腹という、ある意味では野蛮な、原始的とも見られる方法を選んだかは、一つの問題点であろう。原因として伝えられるところは、一人は失恋、一人は専攻学科の選択に当り、自分の意志が通らず、ノイローゼ気味だったと言う。

しかし一般に、こうした原因なるものは、自殺の原因であって、自殺方法の中で特に切腹を選んだ理由としては、別に更に因子が加わらねばなるまい。戦前なら、女でも武士道的手段として、切腹することに誇りを感じたかも知れないが、戦後はその因子は消えた。ある研究家は、女の切腹はヒステリーと言って居られるが、勿論必ずしもヒステリーの

みには極限出来ないにしても、心情の激動から、自暴自棄的な自虐意識を呼び起し、切腹してしまうという心理的過程も考えられる。

日常の性格として伝えられるところでは、勝気な女性と内気な女性を比較すれば、何方かと言えば内気な少女、おとなしい人妻が多い。是は内向型であったかと思われ、その内気さ、おとなしさは、自我を殺しての日常生活を自己に強い、そうした日常が、火薬のよくな死へと飛躍したかと思われる。

最年少では戦前に小学六年生の女兒（真似をして本当に切ってしまった——未遂）があり、戦後では女子中学二年生（心臓病を苦しめて厭世自殺——既遂）がある。

なお、戦前戦時、また戦後でも戦中派で比較的教育のある女性が切腹する場合は、一文字、十文字など正統な方法に従い切腹するケースが多いが、戦後の若い主婦や娘などでは滅多突きに腹部を突き刺したり、あるいは腹部を一と突きしてのち他の部分を傷つけ、以て自殺企図を果そうとする例が多い。

一と突きしているのは、突き刺して引廻そうと思うが旨く力が入らなかったと思われるものもあるが、心臓を突くつもりで逸れて上腹部を刺してしまったとか、自暴自棄の状態

で刃ものの向けどころを他には向け得ず、自分に突き刺してしまったという、自虐的感情の見られるものもあるのではなからうか。

中には、TVドラマや映画で、切腹と言えは腹を刺すだけで簡単に絶命する場面が見られるので、切腹がどんなに苦痛の多い、勇気と体力を要する行為かを知らない場合が多いのかも知れない。

新聞に出ないので氏名など不明だが、そんな例に変わったのがあり、二十三年ごろ、三十才位の戦争未亡人が一度切腹未遂、日をおいて二度目には、ほとんど着衣を脱したに近い状態で切腹死を遂げていたという。

また三十六、七年ごろ、二十二才の若妻が家庭の事情でか、一度切腹して入院加療中、隙を見てもう一度腹を割き、とうとう死んだ例もある。是らの女性は苦痛の絶大さを知りながら更に遂行への努力を払った点、女心の不可思議さを感じさせる。

（註）この文章は、先年ある研究家の方からの求めに応じ、「女性の切腹——その特質」についての小感を記したものである。

## 二、切腹についての考察

(註) 以下は、前章とは別の、ある研究家の方からの御質問に応じた回答の要点をまとめたものである。内容として、一部に前章と重複するところがあるのは、そういうわけだからである。

1、どうして日本にのみ切腹が行なわれて来たか？

古くからこの問題は採りあげられているが「日本にのみ」という限定に対して定説がなく、また何故に腹を切るかということにも定説がない。

外国でも、腹部を自から傷つけて死を選ぶのは皆無ではないが、切らずにただ刺すだけであるから、厳密に切腹とは言えない。切腹という名詞を作り、それが儀式をも伴ったのは、やはり日本および、日本人だけなのである。

筆者は学問もないのでその因由を説明することが出来ないが、ただ一つ考えているのは次のようなことである。

「むらぎもの」という枕詞が、「心」にかかると、日本では、心はきもの群がるところ、つまり腹部にある、とされていたようである。外国では心臓を意味する英語のハートが「心」を意味してもいるように、胸に心があるという考え方であるし、中華でも胸に宿

るものとしていうようである。

そこで、心を切る、心を殺す、それが自己を殺す途になるという意味で腹を切る、つまり切腹となったのではなからうか。日本人の精神的風土を考えさせる現象である。(この拙見は至文堂刊「日本のエスプリ」「自殺」に引用されている)

2、切腹と他の自殺の質的な差、武士の切腹と現代の切腹の差、切腹の心理

是らは関連性を持って考察されねばなるまい。切腹は、自殺方法としては甚だ矛盾撞着を内包している。何故なら、自殺は本来生きることが苦痛であるから、その苦痛を回避するために取られる逃避手段と見てよい。

従って、成可く楽な方法、それも瞬間的な方法、傷付かない方法、というような撰択が働いて来るように思われる。

ところが、切腹というのは、遂行するのに非常な気力と体力を要し、絶大な苦痛を伴うもので、しかも即死的な効果は、介錯なしでは望みがたい。更には多大の流血と惨烈な創傷を遺すものであるから、大きな矛盾があると思われる。

そこで考えられるのは、こういう特質を逆用したヒロイズム、また、他への攻撃エネルギー

ギーの逆転による自己損壊などがその要素となるのではないか。

そして一旦切腹が勇烈の行為として称讃されると、是を更にヒロイズムと結びつけて、一種の精神的な自己強制による名誉感を呼んで来るのではないか。

ところが現代では、必ずしも切腹によらずとも、より楽な方法があるし、また刑罰からも除かれ、一般に帯刀することがない、などから、切腹は遺風として消滅せねばならないであろう。

しかるに、反面ごく当り前の婦女子などが切腹するというのはどういふものか。一種のヒステリー症状から、という某研究家の説も女子の場合は当然考慮に入れてよい。

ヒロイズムの要素は既に終戦時を以て消滅しているから、昔の切腹よりも今の切腹にこそ、より原発的な要素が働いていると思われる。第一に介錯人がないので、本人が終始断行せねばならぬというだけでも、江戸時代のように介錯偏重、形式主義的時期よりも、今日のそれの方が苦痛が多いわけである。

但し現代では、ただ腹部に刺傷を加えているのみという例が多く、となると、古風に腹かき切るつもりで突き立てたが引廻す力がな





かったものか、ただ突き刺すだけの意図だったのかは不明になる。

とにかく切腹という自殺手段は、失血死とか腹膜炎誘発とかで、比較的死の可能性の高い方法ではあるが、時間を要するので、発見されて助かったり、長時間苦しんだりという欠点があるわけで、それを現代人が遂行するというということに疑問がある。決定的なフアクター(因子)を研究していた学徒もあるが、是ばかりは既遂の本人に事前には聞けないし、幸わい未遂に終ったご当人にはまた聞きにく

いことだから、解明が困難である。

切腹の心理と関連して、異常心理から見ると切腹願望という心理があり、是は本当に死ぬために切腹したいというのではなく、スリルを味わうために少し切ってみたり、浅く切ってみたり、あるいは殊に女性の場合、肌に傷の付くのを恐れて玩具の刀で切腹の真似をしたりしているケースがある。

是は心理学的には、ナルシシズムを主体とする軽度のマゾヒズム、フェチシズム傾向と思われる。ゆまにて誌41年6月号に小論を寄せたので参照して

頂けばよいが、いろいろ面白い心理学上の問題が含まれていると思う。

従来この傾向はマゾヒズム、サディズムだけで論じられて来たようであるが、筆者はむしろナルシシズムが主体と考えている。男の切腹願望には、中には鏡に

映る自分の体を女と見たてる錯覚的なもの、美少年と共に割腹する幻想を持つホモ的なものなど、多様である。

### 3、切腹の文献について

文献はいろいろ古いものから現代に至るまで多様にあるが、本誌29年5月号に一度解説している。その後も眼に触れたものを含め、主なものを解説してみよう。

- イ、和田克徳氏「切腹哲学」昭2、修文館
- ロ、同 氏「切腹」昭18 青葉書房
- ハ、谷田佐一氏「敵討と切腹」昭9

秋文堂書房

- ニ、坂ノ上言夫氏「切腹——切腹刑」

昭8 朝日書房「古典感覚」所収

- ホ、松尾如風氏「切腹考」昭8年9月、人情地理

- ヘ、土師清二氏「切腹と介錯」

昭10年3月 大衆クラブ

以上は新しいもので、(イ)(ロ)は有名。(ニ)(ハ)は広文庫や古事類苑。(ホ)は川角太閤記に材を取るものが多い。(ヘ)は後年随筆集「米のなる木」に収められた。

旧いものでは山岡俊明の腹切考、武士道叢書に収められている自刃録、切腹口決などがある。(拙稿「切腹の文献」本誌29年5月号

所収を参照されればよいかと思う。

#### 4、最近の切腹例とその年令、分布、性別について

戦後二十年ほどの間でも、正確なデータをとるだけの資料は蒐集困難で、新聞報道、それも筆者の眼に触れる範囲にすぎない。また実相を詳しく調べることはプライバシーの問題もあってむづかしい。

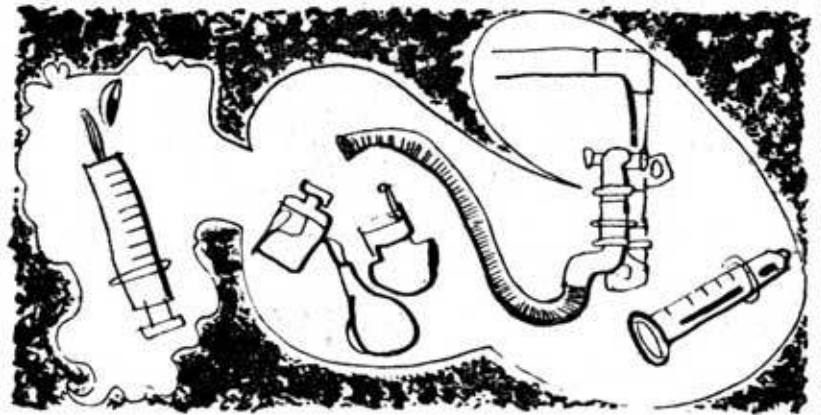
一般に戦前は男子が多く、女子は少い。職業的に女子の場合は水商売が多かったのが、戦後は女子学生、主婦が多く、BGには少いようである。主な原因としては、

若い娘では失恋、結婚難等の理由でノイロゼになったという者が多く、若い主婦では家庭不和、育児ノイロゼにより夫または子供と心中の形をとるものが多い。中年以後では病苦による主婦の切腹がある。

戦後はまた、男女の数も余り変わらず、女子で新聞報道で知る範囲で二十年間に約五十例に近い切腹があり、是も昭和二十四年ごろまでは新聞の紙面が狭かったから、大体十五年間の出来ごとと見てよいであろう。

#### 5、外人の見た切腹

実際の切腹と、映画演劇での切腹とにより異なるが、外人の切腹実見談ではミットフォ



## 心 恥 と 腸 浣

義 正 井 藤

私は子供の頃よりよく医者にかかり、身体を診てもらったのを覚えている。やさしい看護婦さんの手で、少し手荒に治療のために世話してもらったことなどを、なんとはなしに望んでいました。今も忘れられないのは、中学一年の時、お腹を診るので、看護婦さんが毛糸のパンツのゴムの部分をぐっと下げてくれた時、恥しい気持ちと、してもらって良かったという気持ちの入りまじった妙な心境でした。

最近奇クなどで浣腸の記事を読んでいる

うち、浣腸されてみたいという気持ちをいつの間にか持っていました。ところが、今年の夏、食当りでY市の市民病院へ通いました。私の番がきて、治療室へ通され、まごまごしていると、「お浣腸しますから、そこへそのまま休んで下さい」と若い看護婦さんの声です。恥しい気持ちと内心は嬉しいやら恐いやら複雑な気持ちでした。

ズボンのバンドをゆるめ、台の上に休むと看護婦さんの手が私のパンツを、お尻の方からずり下げます。やがて浣腸器の先が入り、浣腸液が入ってくるのが、よくわかります。やがて便意を催し、もももずすると、「もう少し我慢して下さい」と看護婦さんの声が非情に聞えます。

やっとトイレに駆け込み、疲れて出てくると「レントゲン検診室へ」と違う看護婦さんの声です。私が検診室へ入った時、丁度、若い婦人がスリッパを着けている所でした。レントゲン室は薄暗く、医師二名と看護婦一名が居ます。「ズボンをとって上は裸で台の上で寝て下さい」という医師の声で冷たい台の上へ寝ました。お腹の上にレントゲンの器械があります。



ード「旧日本の面影」や、アーネストサトウ「日本滞在記」などには見えている。

今日の外人は実見はしていないから、映画演劇や伝説だけで理解しているにとどまる。

ロチの「日本の秋」には彼の切腹観が書かれている。

外人の切腹は、昔日露役に従軍したドイツ将校が乃木さんに心酔し、後年第一次大戦で独仏国境の第一線から召還されたのを恥じ、サーベルで切腹したという。第二次大戦中、蒙古で日本に協力していた青年が、内部事情から痛憤の切腹を遂げたと聞いている。

映画では松竹の「切腹」、また歌劇「お蝶夫人」など切腹シーンは外人に感動と好奇心を以って迎えられているのではあるまいか。

6、ジャーナリズムのとりあげる切腹について

文芸としては、純文芸、大衆文芸、特殊文芸と分けてみると、純文芸では、森鷗外の「阿部一族」、田宮虎彦氏の「鷲」など、切腹よりも切腹に至る事情の武士道的思考を、肯定否定何れにせよ問題として採りあげているようである。

大衆文芸としては、小著「切腹」の中で、「文芸切腹史」に説く如く、語りもの、浄瑠

診療が始まり、始めに薬を飲むのですが飲めないで肛門から薬を入れることになり再び私のパンツは看護婦さんの手で下げられ肛門から薬が入ります。非常に気持が悪く、何度も動き、叱られ、その果てに差込器をはずしてしまい、薬でパンツをすっかり汚してしまいました。その時、電燈が明るくつき、医師が看護婦にパンツも脱すように命じ、全くの素裸にされてしまいました

した。素裸で施術者の前に横たわる自分が恥しく、又楽しく思えてならないのです。個室で全裸になり、恥しめを受ける。この楽しさが最高の私です。ほかの人から浣腸されたいのですが、その機会が無いこと身体が弱いことなどで、浣腸マニアになれないことが残念です。せめて奇巧の告白記事を読ませて頂き、マニアになったような快い気分になっていたと思います。

璃草紙等から出て、浪曲、講談を含め、広く大衆文芸の範囲では、切腹は、男らしい、勇烈な行為として解釈され、主人公のヒロイズムを象徴する行動として描かれて来た。

しかし最近では否定的に、切腹を強いられる苦悩とか、切腹が愚劣な行為だとする作品も見られる。実際、文芸の美学的立場から考へれば、切腹が自発的、発揚的に行為されるとき、悲愴美が精神的な支えとなるが、他動的なものには、美学的立場が否定されても当然であろう。一概に言えないが、やはり切腹が必然的行為として描かれることが、文芸作品としては欠くべからざる要素である。

しかし、風俗誌というジャンルでは、人間の性のアブノーマルな一面にアピールする目的

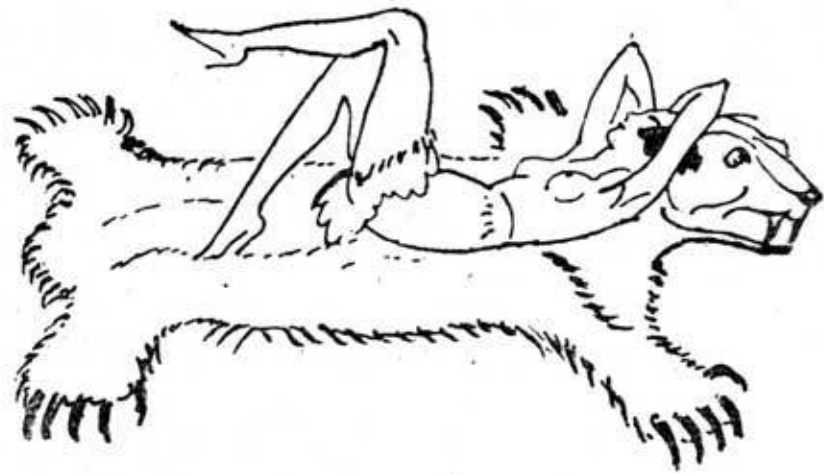
とも見え、切腹という行為そのもののみを描くことに、意義を認めようとする文章が見える。是らも、執筆者の遊びであるか否かによって、特殊文芸と言えるか否かが定まって来るのではないかと思われる。

法谷四郎氏の「切腹曼陀羅図絵」などは文芸作品と言える。(拙稿法谷四郎論参照)

演劇では、旧来の歌舞伎発展史上に、切腹場面の果した役割は度々説いて来たところであるし、映画では、戦前と戦後とで考え方が変って来たのは文芸におけると同様である。

以上のほか、戦前と戦後の切腹の価値観の変化など、質問があったが、前章とほぼ同じ内容なので、省略した。

(完)



# 水 中 花

(二)

芳 野 眉 美

## 銀 杏

牧二郎が籍を置いた予備校は、M神宮の参道に添ってあった。参道のイチヨウ並木の中ほどに、三階のモダンな校舎がある。浪人の激増で、古い木造の校舎を取り毀し、最近新築したばかりである。

二郎は午前中に、寿美麗夫人にいつけられた用事をすまし予備校の午後部に通った。大学なみに二時間単位の授業で、一日二科目一時から五時までである。予備校は、午前、午後、夜間の三部にわかれている。英語と国語が必修科目で、あとは自由選択にまかされた。授業の終りに、かならず試験があり、そ

の結果は入口の廊下に発表された。

ここでは試験の結果だけがすべてである。遊びも、性質も問題外であった。廊下に発表される試験の結果の、上位をしめる一団はほぼ一定していた。これ等輝やかなしい姓名は、顔を知らなくても、誰でもが知っていた。

中途入学だとはいえ、牧二郎は目立つ生徒ではなかった。

予備校に行こうとして、勝手口の郵便箱に一通の封書が入っているのに、二郎は気がついた。寿美麗夫人あてであった。

二郎は手紙を持って寿美麗夫人の居間に引き返した。

その足が廊下で止まった。

居間の唐紙が少しあいていて、そのわずかな隙間から、寿美麗夫人の白い素足が覗いている。

その足の指が丸められ、何かにたえているような仕草が繰り返されていた。異様な空気が二郎を包んだ。

二郎は、そこに鬼頭老人がいることを敏感に感じとった。

老人が、白昼、畳の上で、寿美麗夫人に何をしているのか、そこまでは、わからなかった。わからなかったけれど、二郎は、自分が



見てはならないことが、そこで行なわれていることに気がついた。

寿美麗夫人の秘やかな呻めき声を二郎は聞いた。

二郎は廊下に手紙を置くと、そのまま、そっと立ち去った。立ち去って、手紙を置くべきでなかったと後悔した。無造作に玄関に投げておけばよかったと思った。が、二度と寿美麗夫人の居間に近づく勇氣はなかった。

バンドでくるんだ教科書を肩にかけて、二郎は勝手口を出た。背後から、誰かが追ってくるような気配に気がついた。

教室はすでに満卓であった。うしろの、窓辺の席にすわり、二郎はぼんやりとイチヨウ並木を眺めていた。英語の講師の声も耳に入らない。

詰め込むだけ詰め込んだ教室では、マイクを通して講師の声は割れてしまう。肩を触れるばかりにして、教科書をにらんでいる真実の熱気だけが教室を支配していた。

二郎の頭の中は混乱していた。昼も夜もない鬼頭老人の夫婦生活に、二郎は驚いたのである。

全く、朝や昼の食事のあと、茶を飲みながら老人は何気なく誘うこともあれば、二郎と

一緒に庭掃除をしているときに、不意に離れの渡り廊下から寿美麗夫人を手招きすることもある。

老人に呼ばれたときの、困ったような恥しそうな寿美麗夫人を見ると、二郎は奇妙な昂奮にかられ、胸がどきどきするのを、おさえることが出来なかった。

二郎は決して主人夫婦の寝室を覗いたり、聞き耳を立てるような男ではないが、偶然を回避することは不可能なことである。

偶然は重なるものなのだろうか。

二郎は昨夜の光景を思い出した。

鬼頭老人への速達を持って、二郎が老人の寝室の前に立ったとき、障子にうつる寿美麗夫人のシルエットに、二郎はそのまま老人に声をかけるのも忘れて、廊下にたたずんだ。

寿美麗夫人のシルエットは、鴨居から吊るされていたのである。

それも、全裸で……

寿美麗夫人を裸にし、鴨居に吊るし、老人はいったい何をしているのだろうか。

障子の老人の影は、吊るされた寿美麗夫人の周囲を動き、やがて、夫人の下半身に沈んで、そのまま動かなくなった。

動くのは、ただ、寿美麗夫人の美しいシル

エットだけであった。

そして、二郎は、寿美麗夫人のものの悲しいすすり泣きを聞いたように思った。

試験の答案用紙がくばられ、二郎を現実引き戻した。講師が黒板に試験問題を書いている。

二郎の答案用紙に、

——増女

——小面

と書かれ、その下に、寿美麗夫人の名が無数に書きこまれた。

増女と小面と寿美麗夫人の顔が、二郎の体内で激しく交錯していた。

銀杏の葉が風に舞った。

## 少女

予備校から、イチヨウの大木の群の下を、駅に向かって学生の列が続いている。

予備校と駅の中ほどに菱形の格子を組んだ背の低いトレリスで囲まれた喫茶店が有る。

晴れた日などは、石畳のテラスに、白いきしゃなテーブルと椅子を置いて、イチヨウ並木から緑の風を呼んでいる。

そのトレリスの前で、二郎は二人の少女に呼びとめられた。

その一人に見覚えがあった。今日、二郎の隣の席に坐っていた少女である。教室が混んでいたせいもあるが、二郎の肩と、少女の肩が触れ合って、何度か顔を見合わせている。彼女も試験用紙は白紙であった。二郎と同様提出はしていない。丸めて捨ててしまった。

「君が」

立ち止まって、二郎はそう云ったが、その少女の名前を知っているわけではない。予備校の同級生といってもお互に無縁であった。

「コーラ、飲まないか」

と、その同級生は二郎を誘った。テーブルの上に、二本、コーラが置いてある。

鉄パイプのアーチをくぐって、二郎は喫茶店に入った。テーブルに坐ると、

「オレ、リリ」

と少女は自己紹介した。

「これ、エマ。オレの親友」

「これ、だって、失礼しちゃうわ」

エマと呼ばれた少女は笑って、二郎に軽く会釈した。今日は。

「牧二郎くん」

リリはエマにいった。

「答案用紙にそう書いてあった」

リリは、無地のブラウスにスカートという

予備校生らしい素朴な服装のはずだったが、いつの間にか遊び着に着がえていた。

リリもエマも、花やかなハワイアン・プリントの大胆なセパレーツであった。原色がよく似合う。短かい上着から、健康な若い肌が覗いていた。

そして、驚いたことに、二人とも素足であった。大きな花が飾ってあるサンダルが、テーブルの下に転がっていた。

化粧はしていない。

リリがボーイを呼んでコーラを追加した。

「驚いた、これ」

リリが、セパレーツをつまんで、二郎にいった。

「あそこで着がえたの」

喫茶店のトイレを指さした。

「エマとおそろいでつくったんだ」

「何よ、真似たくせに」

と、エマがいった。

「バラスなよ」

リリは男のような口をきく。カバンの中味は、教科書でなく、きつと遊び着を入れて登校してくるのだろう。

「ところで、牧くん」

と、リリが真顔できいた。

「君は女を知っているか」

「――」

「そんなこと、きくものじゃないわ」と、エマがリリをたしなめた。

「ねえ」

「かまいません」

二郎はコーラを飲みながら答えた。

「知りませんから」

「知らない」

「ええ」

「童貞か」

二郎は苦笑した。童貞であることが、侮辱されたように響いた。

「失望しましたか」

と、リリにいった。

「びっくりすることないでしょう。予備校に來ている奴は、大半、いや、ほとんど童貞ですよ」

「そうかなあ」

「そうですよ。大学生の八割までが童貞だっていうでしょう、高校を卒業したばかりじゃ、女を知らないのが当然です」

「いはっている」

「リリみたいに、男の友達をさがしに予備校に通っている女の子なんていないわよ」



と、エマがからかうようにいった。

リリは髪を短くカットして、ボーイッシュなスタイルにしているが、エマは前髪をたらし、長い髪を頭部でまとめて背中に流している。二郎はエマに好感を持った。

「おや」と二郎は思った。

トレリスの前を横切った和服の婦人のうしろ姿、寿美麗夫人に似ていたのである。気がついたのが遅く、顔はわからない。

その婦人は、背広の青年に寄り添い、駅に向かって歩いていった。

「よく似ている」

が、すぐ錯覚だろうと思い直した。寿美麗夫人が今頃このあたりを歩いているわけがない。それも若い男と連れ立って。

「アベック喫茶で、ペッティングしようか」

不意にリリがぶっそうなことをいった。

「ペッティング」

「したことあるだろう」

二郎は首を横に振った。

「したことない」

「ええ」

リリはペロッと舌を出した。

「キスぐらいしたことあるだろう」

「ありません」

「唇も童貞か」

エマが笑いだした。

「牧クンと、ペッティングが出来なくて残念ね、リリ」

「だってさ」

リリは不思議そうな顔をして、二郎にきいた。

「寿美麗夫人って、牧クンのスポンサーじゃないのかい」

「スポンサー」

「学費かせぎに、おばさま族のペットになる男の子がいるのよ」

と、エマが説明した。

「違います」

二郎は断言した。

「リリのカンもあてにならないわね」

と、エマがいった。

「リリの話じゃ、牧クンは、有閑マダムに可愛いがられているから、種々とSEXを知っている。だから、遊んだら面白いだろう、ということになっていたはずだったわね」

「そんな話をしていたのですか」

二郎はあきれて、二人の顔を見較べた。

「おかしいか」

と、リリがいった。

「別に」

二人の視線がまぶしかった。二郎は腕時計をちらっと見た。

「いけない」

と、立ち上った。

「どうかしたの」

エマが二郎を仰ぎ見た。

「夕食に遅れてしまう」

「純情だなあ、牧クン」

リリがうれしそうに二郎の手を握った。

「ごちそうさま」

二郎は、二人にいった。

「またね」

二郎はうなずいた。

「なんだ、つまらない」

リリがコーラの残りを勢よく吸った。

「ホテルに行こうか」

と、エマにいった。

帰りかけに二郎は驚いてうしろを振り返った。少女二人でホテルに行つて何をしようというのだろうか。わからない。

「いいわ」

二郎の顔を見つめ、エマは、ゆっくりいった。その眼が燃えていた。リリがテーブルの下サンダルをつかんだ。

## 鏡

勝手口の呼鈴が鳴った。

午後九時頃である。

呼鈴は台所につながり、押すのは御用聞きか集金人に限られている。

台所の隣りの部屋に居る二郎は、不審顔で机の前を立った。今頃来客が有ると思えない。二郎が鬼頭家に落着いてから一週間になるが、訪問客は一組も無かった。

二郎は台所から裏庭に出た。勝手口までの距離は長い。無造作に横たわる土塁を縫ってくねくねと道は続く。途中、庭園灯が二基有るが、道は暗い。細い道に張った無数の根に二郎は足を取られてよろめいた。

勝手口を開ける。古典模様の着物の裾が眼に入つて、あわてて二郎は眼を上げた。御高祖頭巾の妙齡な婦人が立っていた。

無言で二郎はその婦人を見た。咄嗟に声が出なかったのかもしれない。

婦人は腰をかがめて勝手口を通った。

「戸を閉めて」

と、二郎にいった。静かな声である。

二郎はふっと嘆息をついた。勝手口の戸を閉め、

「どなた様でしょう」

と、婦人にきいた。

「勘解由小路です」

「かげゆ……」

「かげゆこうじ」

御高祖頭巾から涼しい眼がやさしく二郎を見つめている。

「隣の」

「おとなり……」

勘解由小路夫人は森の小道を歩き始めた。少し遅れて二郎も歩く。

「暗いから木の根に注意して下さい」

「有難う」

白い足袋が慣れたようにくねった小道を翻った。ともすると、注意したはずの二郎の足のほうがあぶない。二度三度よろけて、その度に勘解由小路夫人の足を止めさせた。

「あぶないわ」

「大丈夫です」

庭園灯の下で、二郎はまだ用件をきいていなかったのに気がついた。

「あのう」

とうしろから声をかけた。

「まだ御用件を伺っていません」

「あら」

夫人は立ち止まった。

「うっかりしていたわ」

その声が笑っている。

「じゃ、奥様に、これからおじゃましてもいいか、聞いて来て下さらない」

「わかりました」

二郎は駆け出した。

寿美麗夫人は居間にいなかった。

二郎は離れの鬼頭老人の寝室に行った。居間にいなければここに決まっている。

「お隣りの、勘解由小路様の奥様がおいでです」

寝室の障子の前で、声を掛けた。不意に部屋の障子や唐紙を開けることは、禁じられていた。

が、老人の寝室は静まりかえっている。

「お隣りの……」

と、二郎がまたいいかけたとき、

「うむ」

と、うなるような老人の返事があった。

「これからおじゃましていいか、奥様におたずねです」

「香葉さんが遊びに来たのか」

廊下の障子が少し開けられ、老人が顔を出した。



その瞬間、二郎は燃えるような絹の夜具に横たわっている寿美麗夫人をちらっと見た。

じかに見たわけではなかった。壁の大きな鏡に寿美麗夫人の背中が写っていたのである。

二郎の声に、老人があわてて夫人に夜具を掛けたのだろうが、前だけをかくして、うしろの鏡に気がつかなかったのかもしれない。

鏡の中の寿美麗夫人は、一糸もまとっていなかった。

寿美麗夫人は、裸のまま、ロープのようなもので、足から胸までぎりぎりに縛られていたのである。背中に廻された両手が痛々しい。

爛熟したまっ白な肌に食い込むロープが、二郎をそこに釘づけにした。

## 連続組写真Mフォト

### 二人の女性の餌食

略号「ほや」

大手札三十六枚一組 六〇〇〇円

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名  
M男性……Mモデル志願者M・H氏〕

男性をいたぶることについては定評のある山原清子が他に一名のアシスタントの女性を使って一人のM男性を、こてんこてんに虐め差しめる有様を順を追って、刻明に写真化、マゾファンの思わずぞくぞくする場面ばかりを集めました。

しかし、これはほんの一瞬のことである。

「寿美麗の部屋にお通ししろ」

障子はすぐ閉められた。

二郎はそこにしばらく坐っていた。立つことさえ忘れてしまった激しいショックを二郎は受けた。

息をはずませて、二郎が勘解由小路香葉夫人のところに戻ったとき、香葉夫人は雪見燈籠の側にそそと立っていた。

御高祖頭巾が風夜にふるえている。

「どうぞ」

と、二郎はいった。

「奥様のお部屋でお待ち下さるように、とのことです」

「御苦労様」

香葉夫人は頭巾を取った。一枚の布であった。二郎が御高祖頭巾などという古めかしい言葉を思い出したのは、映画の影響なのかもしれない。

香葉夫人は長い髪を束ねて夜会巻にしていた。一本の珊瑚の簪が闇に消えた。

「おじゃまじゃなかったのかしら、こんなに晩く」

振り返って香葉夫人は二郎にいった。

「いえ」

二郎も顔が赤くなった。返事はそれが一杯であった。

香葉夫人は、寿美麗夫人と同じ年頃と思われた。美しい人であった。

裏庭と表の境にある竹の袖垣を廻って、二郎は香葉夫人を玄關に案内した。

香葉夫人の草履を直す二郎の手がかすかにふるえていたのを香葉夫人は知らない。

寿美麗夫人の居間は、まだ夜具が敷かれていなかった。今夜は敷かれぬのかもしれない。

床の間の日本人形は、藤十郎に恋して自殺したお梶であった。

二郎は、ふと香葉夫人が、この人形の顔に似ていると思った。なんとなくそう思った。

やがて、廊下を荒々しく歩く足音がして、着流しの鬼頭老人が居間に姿を現した。

立ったまま

「やあ」

と、どなるようにいい、

「寿美麗はわしの部屋に居る。あちらでお話をしよう」

挨拶もそこそこに、香葉夫人を離れの寝室に導いていった。

(続く)

## 西洋

## 犯罪

黒田 寿

## 奇譚

## 西洋犯罪奇譚

最近シカゴで八人の若い看護婦が次々と、それも絞殺、刺殺、撲殺、或は喉をかき切るなど、それぞれ異った手口で殺される事件がおきました。しかも犯行の理由らしいものはなく、ただ殺したくなつたからと言うのですから、まさに狂える季節です。

殺人研究家のコリン・ウイルソンに言わせれば、世界中のどこかで一分間に一人の割で殺人が行なわれているそうです。ニューヨークでは一日に一人、パリでは数年前まで二人、世界で最も法律が守られていると称するロンドンでも一カ月に二件、殺人事件が発生しています。

毎度申すことですが、私は女性に対する殺人や処刑に興味をもっており、今回もまた味

も香りもない駄文をつづります。自分勝手な空想も入っていることは、私の文を喜んでくださる方には、今さらことわるまでもないでしょう。

## 魔女の話

一九四九年、ニューヨークの名士であり、すでに功なり名をとげて引退していたマイルス・デスパート老が急死した。年に不足はないので当時は誰も怪しむものもなく埋葬されたが、その後誰言うともなく彼は毒殺されたのだといううわさがたった。そのうわさがだんだん広がっていったので、遂に警察がのりだし死体を掘りだして調査した結果、砒素が証明されてうわさ通り、他殺ということになっ

た。(砒素は火葬の場合でも検出できるので、殺人学者はこれを愚者の毒と呼ぶ)

結局この犯人は老の看護婦をしていたマリイ・マーフィ嬢とわかり、裁判の結果彼女も犯行を認めたので、翌年三月二十六才を一期として電気イスで焼き殺され、事件はひとまずケリがついたかに見えた。

ところがニューヨーク警察にクロスという資料課長がいて、ある仕事のために古文書を調べていたところ、たまたま現われた一枚の写真を見て驚いた。

それは一八六一年フランスで毒殺犯人として、無惨ギロチンの鎗となったマリイ・ドブレイ夫人の写真であったが、彼はこの写真にそっくりの美女を見たばかりであったのだ。



言うまでもなく女死刑囚のファイルに加えたマリイ・マーフィ嬢に。

写真だけなら同じ人間と言っても良い位似ているし、しかも名前まで同じマリイだ。だが彼は偶然の一致だろうと考えて誰にも語らなかった。

翌一九五一年、彼はふるえ声で自分の発見を仲間に語った。その年の五月、ハンガリーのマリイ・ヘーゼル・ブラック・ハレンソンという三十才の小柄な女性が、十八人の男を毒殺した事件で捕えられ、絞首台の露と消えたが、彼女の写真が前の二人のマリイにそっくりであったのだ。

十月号の『往生際の美女』にも書いたように、火あぶりになった女性には、マリヤ、メリー、アンなどMやAのついているものが多い、同様絞首刑にはSの頭文字がしばしば見られるが、顔まで似ているとなると偶然ではすまなくなる。

魔女として裁かれ、火あぶりになった第一号は一六一五年のアン・ターナーであるが、彼女の呪が三百年もたった今日まで続いている、と言うのが魔女生存説である。

即ち、若く美しい魔女が捕えられれば、法の手によって絞首台に吊されたり、電気イス

で焼かれて、いったんはその生命を失ったかに見える。しかし魔女にとっては、こんな死刑など痛くもかゆくもない。ニューヨークで毒殺犯人として処刑されても、翌日は平気な顔でフランスに渡り、そこで首をチョン斬られれば英国へ。或はイタリアやドイツと永久にまわり歩いているという。そのうち日本にもくるかもしれない。

中世の頃、魔女として処刑された女性のうち、大部分は、実は精神病者であったことが明らかにしている。ちよつとした人並はずれた言動が文字通り生命とりになったわけだが、このほかにも自分たちに都合の悪いことを魔女のせいにしたものもある。

十七世紀の有名な毒殺魔にラ・パンサン(彼女も無論火あぶりになった)が居るが、その血を引くというマリヤ・テレサ(またまたMだ)という十九才の美少女の話である。

○

一八四五年、マリヤは九人の男女を毒殺した疑をかけられた。いささか頭がおかしいところを利用して、彼女をもてあそんでいた連中が九人のなかに含まれていたのだ。

刑吏が逮捕にむかうと、その姿をみたマリヤは突然素裸になって森の中をかけこんだ。

どうやら彼女は露出狂もあるらしい。

彼女は脚が早く、木の影をたくみにつかって逃げまわり、なかなかつかまらぬ。刑吏たちは遂にわなを仕掛けることにした。

細い針金をあんで、ちようどカシミ網のようには森の出口にはっておく。昼間でも見えにくいもので、さすがの彼女もこれにはひっかかってしまった。もがけばもがくほど、細い針金が手足に食いこんで、どうすることもできない。

「フッフッフ、まるでわなにかかった子スズメね。煮るなり焼くなり勝手にして」

翌朝、姿をあらわした刑吏に、彼女はこう自嘲するように叫んだ。

刑吏たちは彼女の四肢をひとつにたばねて縛り、その間に太い棒を通してかつぎあげ、まるで牝鹿でも生けどったような恰好で町へはこびおろした。

この様な野性美にあふれた少女であったのに、いったん法廷に出たら、さながら貴婦人の様な言動をとったので人々は驚いてしまった(これも精神病学で説明つくそう)。

更に彼女のアリバイを調べると、十分間で二十キロもの距離を往復しなくては、この犯行は成立たぬことがわかった。

現代なら、これだけで彼女は釈放せねばならぬ。しかし百年も前だし、政治力が働いたこともあるのか、なんとしても彼女の犯行にせねばならぬと、拷問が加えられた。

魔女に対する拷問は水責めと決っている。

平たい台の上に四肢をひろげてくりつけ、口の中にジョウゴをつっこんで、手桶に汲んだ水をどんどん流しこむのだ。まっ白い腹部がみるみるうちにせりだし、これ以上入らないまで注ぎこむと、今度は逆さに吊して吐かせてしまう。これを何度くり返すのだからその若しみは言語に絶するものがある。

だが、彼女は白状せず、更に高度の拷問が加えられる。

それは肛門に管をつっこみ、強力なポンプで水を送りこむのだ。直腸から大腸を満たした水は、更に小腸から胃に侵入、遂には食道を逆流し、胃や腸の内容物と共に口からあふれでる。最後には肛門に注がれた水が無色透明のまま、口から噴水のようにふきだしてくる。

それでも彼女は自白しない。その結果は十分で二十キロを往復したとと共に、魔女なる故に出来ることとされ、死刑が宣告されてしまった。

哀れなる美少女マリヤは黒山の見物人を前にして、ギロチンで処刑されたのだが、その生首と胴体は別々にわけて晒されたのち、薪を積んだ上にのせて焼きすてられ、灰はセーヌ河に投ぜられた。

彼女が前記のマリイたちに似ていたことは言うまでもないだろう。

### 美少女の殺人

一八六〇年六月三十日、英国ロード州のイングリッシュ村で、世にも恐ろしい殺人事件が起った。

殺されたのはフランスという五才の男児で、喉を切られたまま植こみの傍に倒れていた。

父親はサミエル・ケントと言って、ビクトリア女王の父セント公の血をひいている。先妻との間に十六才のコンスタンスと、その弟のウィリアム。後妻のプラットとの間にフランスはか二人の子供が居た。

最初は子守りのガウ嬢が疑がわれたが、調査の結果はシロであり、ほかに容疑者らしいものがみられぬまま迷宮入りを思わせたが、ホイッチャーという刑事が登場し、いかなる理由かコンスタンスを犯人と断定した。

このため英国中が、わきかえるさわぎとなり、その全部が刑事の非常識を非難した。形式的な裁判がひらかれたものの、コンスタンスは勿論無罪となり、刑事は気の毒にも辞職せねばならなかった。

一八六五年四月二十七日。英国の新聞に読む人すべてを驚かす二つの記事がのった。ひとつはリンカンの暗殺であり、もうひとつはフランス殺し真犯人の自首であった。

犯人はやはりコンスタンスで、彼女は継母を尊敬はしていたが、時々はつらく当てられることがあり、それが異母弟に対する嫉妬となったものである。自首とは言え、心から後悔したとは見えぬ彼女に対し、裁判長はさすように判決文を読みあげた。

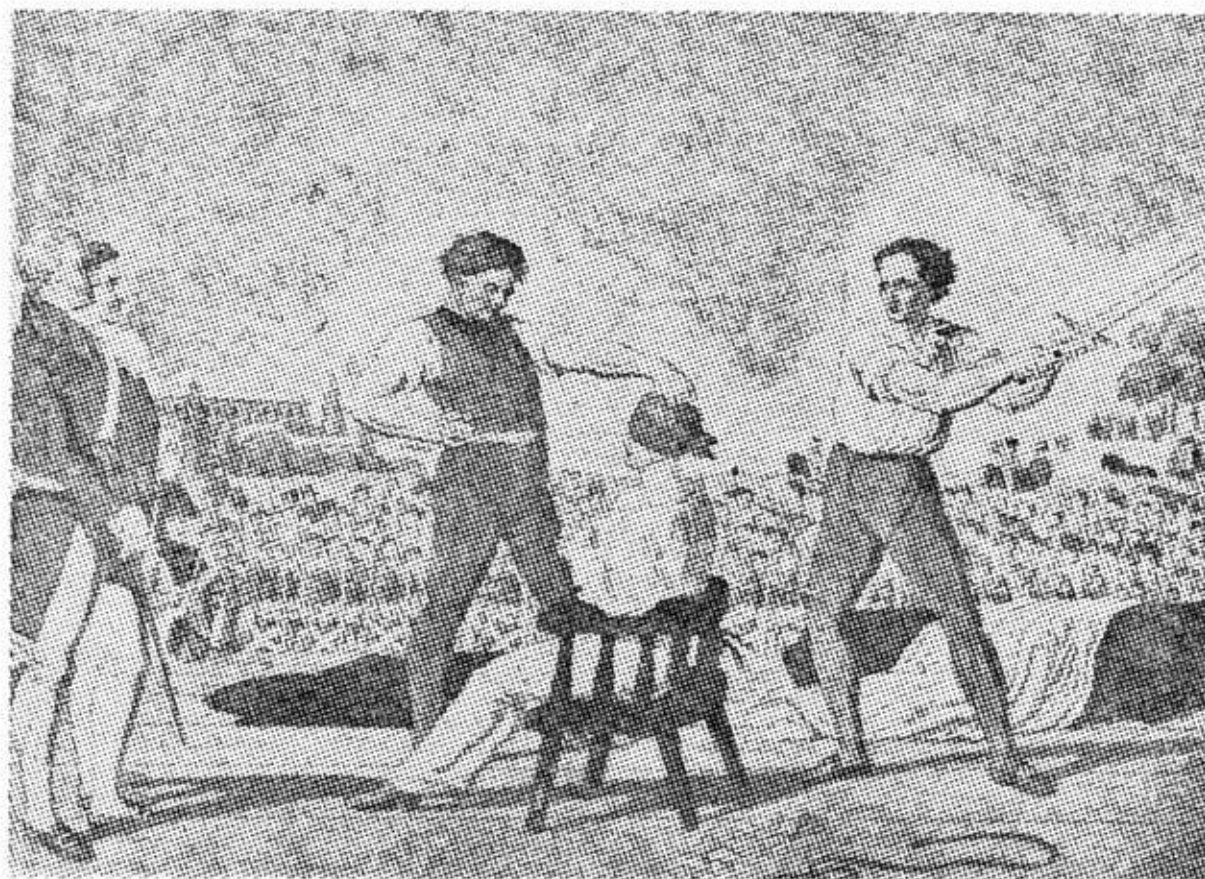
「被告は胸中の嫉妬のため、遂に悪魔の餌食となり、幼い弟を……」

その途中、裁判長の声が乱れた。彼はあまりのことに、その後を読み続けることができなかったのだ。

この姿にうたれた彼女は、今迄の冷静さを失い、悲痛な声で泣きだすという、感動的な場面となった。

しかし、裁判長はまもなく自分をとりもどし、被告を絞首による死刑に処する宣告をお





獨逸の学生死刑に処せられ首を斬らるるの図

こなつた。  
コンスタンス・ケント。時に二十一才の若  
さである。

彼女の最期はあまりいさぎよいものではな  
く、執行のため独房からつれだす時は椅子に  
しがみついてはなさず、止むを得ず椅子ごと

絞首台にかつぎあげた。首に  
ロープをまこうとする時にな  
って反射的に椅子をはなし、  
自分の喉を守ろうとする、そ  
の瞬間を狙って手を後にねじ  
あげて縛り、恐ろしい悲鳴を  
あげるのもかまわず台下につ  
きおとす。

しかも絶命まで四十分も要  
し、その死顔は恐怖と苦悶の  
表情がこびりつき、生前が美  
しかっただけに悲惨なものが  
あったという。

○

一九五四年六月二十三日、  
ニュージールランドのある町の  
警察に、ポーリン・パーカー  
という十六才の美少女が、ひ  
とつ年上のこれまた美しいジ  
ュリエット・ヒュームと共に  
かけこんできた。

訴えによればポーリンの母

親が殺されたと言う。すぐさま警官が二人に  
案内されて公園に行ってみると、三十六才の  
中年婦人と呼ぶには、あまりにもみずみずし  
いパーカー夫人が、全身に四十五カ所もの傷  
をうけ、更に喉をふかふかと、殆ど首がはな  
れんばかりに切り裂かれて息絶えていた。

当時の状況をきかれた二人がいろいろ話を  
したが、それが嘘であることはすぐにわかつ  
た。訊問の結果、素直に二人はパーカー夫人  
を殺したことを認めた。

この二人は同性愛の傾向があり、引きはな  
そうとしていた母親を殺したものであった。  
その後の言動も全く無邪気で、ママを殺した  
のが、どうしていけないの？ とあどけない  
顔で語り、獄中でも二人で手紙のやりとりを  
していた。

彼女たちの精神が正常かどうか問題とな  
ったが、裁判の結果は有罪であった。英連邦  
では成人を十七才としているが、それを僅か  
に過ぎていたジュリエットは、哀れにもその  
短い生涯を絞首台にかけられることによって  
終らねばならなかった。

彼女は死刑そのものは当然と覚悟はしてい  
たようだったが、自分一人だけ死ぬのはいや  
だ、ポーリンも一緒に吊してくれと、最後の

瞬間まで泣き叫びつつ処刑された。

ところが主犯であり、最後に母親の喉をかき切った当のポーリンは、未成年ということで不定期刑ですみ、外国の裁判が時々見せる不合理な例のひとつとして、僅か四年後の一九五八年に釈放された。

一九六一年四月一日、若く美しい女性の死体が公園内で、それも七年前、パーカー夫人が横たわっていたところからほど遠からぬ地点で発見された。全身に二十六カ所の傷をうけ、喉はふかふかと殆んど首がおちんばかりに切り裂かれて。

犯人はすぐに捕まった。単なるサディストの犯行であったが、彼が不思議そうに語ったことによれば、この女性は乳房や下腹や手足に至るまで、全身いたるところを刺されながら、殆んど抵抗もせず悲鳴もあげず最後にはむしろ自ら首をさしのべるようにして喉をかきさられた。まるでこの様な死に方をするのが自分の運命と知っているかのように。

彼女が苦しい息の下から、この世に残した最後の言葉は

「ジュリエット……」であった。

### 新聞広告の話

一九〇〇年四月、アメリカ各地の新聞に次の広告があらわれた。

△大農場を経営する、二十六才の美貌の未亡人。教養ある富裕な紳士と交際を望む。結婚を目的とする▽

広告主はベラ・ガネスという女性で、広告に偽りあるとすれば、最後の一節目的だけであつた。

多くの応募者のなかから、彼女はなるべく身よりのなさそうなものを選んで返事をだした。金銭が目的でないことを強調しながらも結局は現金持参を条件として。「誠意」の意味は古今東西変らないらしい。

最初の男があらわれ、彼女の門をくぐったが、立去るのを見たものはいなかった。二人目も、三人目も……。

一九〇八年四月二十八日、彼女の家が火事になり、焼跡から彼女の死体と共に多数の白骨が発見され、始めてその恐るべき犯行がわかった。

しかり、彼女の真の目的は結婚でなく「殺人」であつたのだ。その犠牲者は二十八人以上といわれている。

女性と思われる白骨も四体あり、これらはことごとく頸骨を切断されていた。

当局の調査では彼女たちは女中で、犯行の手伝を命ぜられ、適当な時にはかの犠牲者同様斧で首をチョン斬られたものと推定され、危く難をまぬがれた五人目の女中が逆に女主人を殺し（ベラ君も首を斬られていた）放火して逃げたものらしい。この女中の行方は別に追求されずにすんだ。

彼女がこんなにも金を欲しかったのは、浪費のためではなく、殺人によって手に入れたその大部分は、シカゴの孤児院に寄附していたことがあとでわかった。

○

パリのフランス・ソール紙にも、一九四九年にこんな三行広告がでたことがある。

△危険な使命を遂行する男性を求む。当方、活動的な三十才の美人▽

この女性はアンドレ・ファレという。広告につられたチンピラが命ぜられた危険な使命とは、例によって殺人であつた。

哀れな犠牲者は金持の老人とその娘ベルデナット。チンピラに撲り殺されたのち、娘の方はアンドレ嬢のライバルだったためか、喉に止めを刺され、乳房をえぐられてからトラUNKにつめ海にすてられた。これに味を占めたか、その後も三人の女を殺害している。



元来フランスは女性に甘く、大戦中のスパイを除いては、今世紀になって死刑になった女性はいない。そこをみこんだのだろうか、さすがのフランス裁判所もこの殺人マニヤに対しては死刑を宣告した。一九五〇年十二月七日である。

フランス全土は、果して彼女の死刑が執行されるかどうかでもめた。絞首刑にするというもの、事実上の無期にするというものが多く、本来のギロチンを使用するという説は、ごく少数であった。

しかし、その後のあまり信じ難い「実話」の「誌」によれば、一九五七年の秋、彼女の首は遂に胴をはなれ、フランスの女性犯罪者たちの頸すじを寒くさせたという。

○

これと別に広告が原因で犯行がバレた話。

ロンドンの犯罪で「切り裂くジャック」と共に有名な「浴槽の花嫁」の主人公、ジョージ・ジョセフ・スミスは、次々と結婚してはその花嫁を次々と浴槽内で溺死させ、持参金や保険金をせしめていた。

入浴中に心臓マヒを起し急死するということは、若い女性であってもあり得ないことではない。一度だけなら「珍らしい事故だ」位

ですんだろうが、三度四度とつづいては興味がもたれるのも当然だろう。

特に被害者の家族としては、同じ死に方でもあるし、夫たる人物が同一人というわけで注意するようになる。結局はこの度重なる死亡広告が、彼の犯罪をあばきだしたわけ。

裁判の結果、彼は犯行を認めたが、その被害方法を水着をつけた婦人警官を相手に実演してみせた。

それによれば、ウットリとバスにつかっている花嫁に近づき、愛撫するかにみせかけていきなり両脚をつかみもちあげる。当然頭はザンブリと湯のなかに沈んでしまう。

あわてて起きあがろうとするのを、両脚を頭の方に押しつけ、丁度身体がSの字になるようにおさえつける。必死になってもがいても空しく水をかくだけ。十分か十五分もたつと彼女の肺に残された最後の空気がポツカリと浮び、最後の死のけいれんがきて、あの世へと旅立ってゆく。

手を放すと身体は一回転してうつぶせに、脚の方のせまい部分に頭が入りこんだ姿勢で湯のなかに浮いている。ころあいをみて近くのヤブ医を呼べばすべてが片附く。

この演技、あまりにも真に入りすぎて、見

物席の裁判長、検事以下弁護士に至るまで夢中になっていて、婦警嬢は危く殉職する寸前までいったと伝えられる。

尚、この頃イギリスでは法医学上の論争が行なわれていた。それは女性が絞首刑になるとき、或は首吊り自殺をするときに目鼻口から出血があるが、その際耳からも出血するか否かというのであった。

スミスの犠牲者も、窒息死であるというので、死体を掘りだされ、貴重なデータとなつた。我国の火葬と違ってあちらでは土葬が多いので、犯罪者には都合の悪いことがしばしばみられる。

### おしどり夫婦の犯罪

一八二六年ウィリアム・バークとウィリアム・ヘアは妻のヘレンとマギーと共に面白い商売を思いついた。それは死体売る仕事である。

彼等の本当の商売は下宿業であったが、その宿に泊っていたドナルドという男が、下宿料をかなりためたままで死亡した。当時は医学校でも解剖用の死体が不足しており、身よりのないのを幸い、この死体をノックスという教授に売った。値段は七ポンド半で、死者の

何カ月間かの宿料よりはるかに多かった。

この後間もなくジョーン・レスリーという若い女性が、失恋のためか首吊り自殺した。彼等は相談の上、棺にはガラクタをつめてごまかし、死体を教授のところに運んだところ、女性の方が高価で十ポンドに売れた。

一八二八年、本業が不振となった四人はこのボロい商業にくらがえを決心し、二月十一日、その第一号としてアピゲイルという女性をつれこんだ。最初の日はずがに気おくれしたか無事だったが、翌晩は二人の男に手足をつかまれ、二人の女が枕で顔をふさいで殺し、翌朝学校へ持っていった。教授は何もきかずに十ポンド支払った。

次は四月九日、メリーという売春婦である。翌日学校で彼女の解剖にあたった学生君は、つい先日彼女の客になったことがあるので驚いた。

三日ばかりのち、メリーの妹が姉の行方を訪ねてやってきた。男たちは不在だったが、ヘレンとマギーは姉に会わせてやるというって部屋に招き入れ、二人がかりで姉のあとを追わせた。

その後八カ月間に何人殺されたかはわからぬが、学校の方は解剖死体が多ければ、それ

だけ学生も集まるし、評判も高くなるので教授以下手法を疑っても、別にくわしくきこうとはしなかった。ところが十月十五日に売りにだされたのは、ヘレン・バークであった。

マギーはヘレンが好きでなかった。つまりヘレンの方が若く美しかったわけだ。そこで信用できぬからとか言ってヘアをたきつけ、バークの留守中に片付けてしまったのだ。勿論、この分け前はやらなかった。

かくして仲間別れとなり、ヘアはバークに殺され、残ったマギーとバークも十月三十一日に捕った。

裁判は十二月二十四日エジンバラで行なわれ、死刑が宣告されたが、翌年一月二十八日処刑されたのはバークだけであった。

マギーは執行前に病死したのだ。このため絞首刑はまぬかれたものの、引取人がなかったその死体は医学校に売られた。ヘレンと同じ十ポンドで……。

○

一八四九年八月九日、マリー・マンニングは夫と共に、ごくありふれた殺人を行なった。被害者は夫の情婦で、マリーが背後から射殺し、死体を床下に埋めたのだが、たちまち露見して夫婦とも逮捕された。

裁判の結果は、二人とも死刑を宣告され、処刑は十一月二十三日、ホースマンガ・レイン監獄の屋上に設けられた絞首台で行なわれた。

当時女性の公開死刑は、それほど珍らしいものではなかったが、夫婦いっしょに首をくられるのはかなりの興味をひき、監獄の前はおびただしい群衆が集った。その整理に五百人の警官が出動したという。

この夫婦は裁判の際は、お互に罪をなすりつけようとして、顔もみない位だったが、処刑の日、控室で裁判以来、初めて顔を合わせた時、夫は妻に言った。

「お願いだ。最後にキスをしてくれ」

「仇同志になるつもりはないわ」

二十四才の美しいマリーは、こう言って彼にキスをした。

彼女は黒い絹のハンカチで目かくしをし、長い廊下と狭い急な階段をのぼって屋上にあられ、首にロープをくくりつけられて、宙に吊りさがり、二十二分で絶命した。

目の前に、美女が処刑されるのを見た群衆は、奇声をあげておどろき狂い、彼女がもがき苦しむのにヤジをとばすなど、翌日の新聞に英国人らしからぬはしたなさ(案外これが本



来の姿かもしれぬが)を非難された。

投書したのは群衆の一人であったチャールス・ディッケンスで、彼の作品ブリーク・ハウスに登場するホルテンスは、このマリーをモデルにしたものである。

処刑の時マリーは黒じゅすの着物をつけていたが、そのため折角流行を極めたこの衣裳

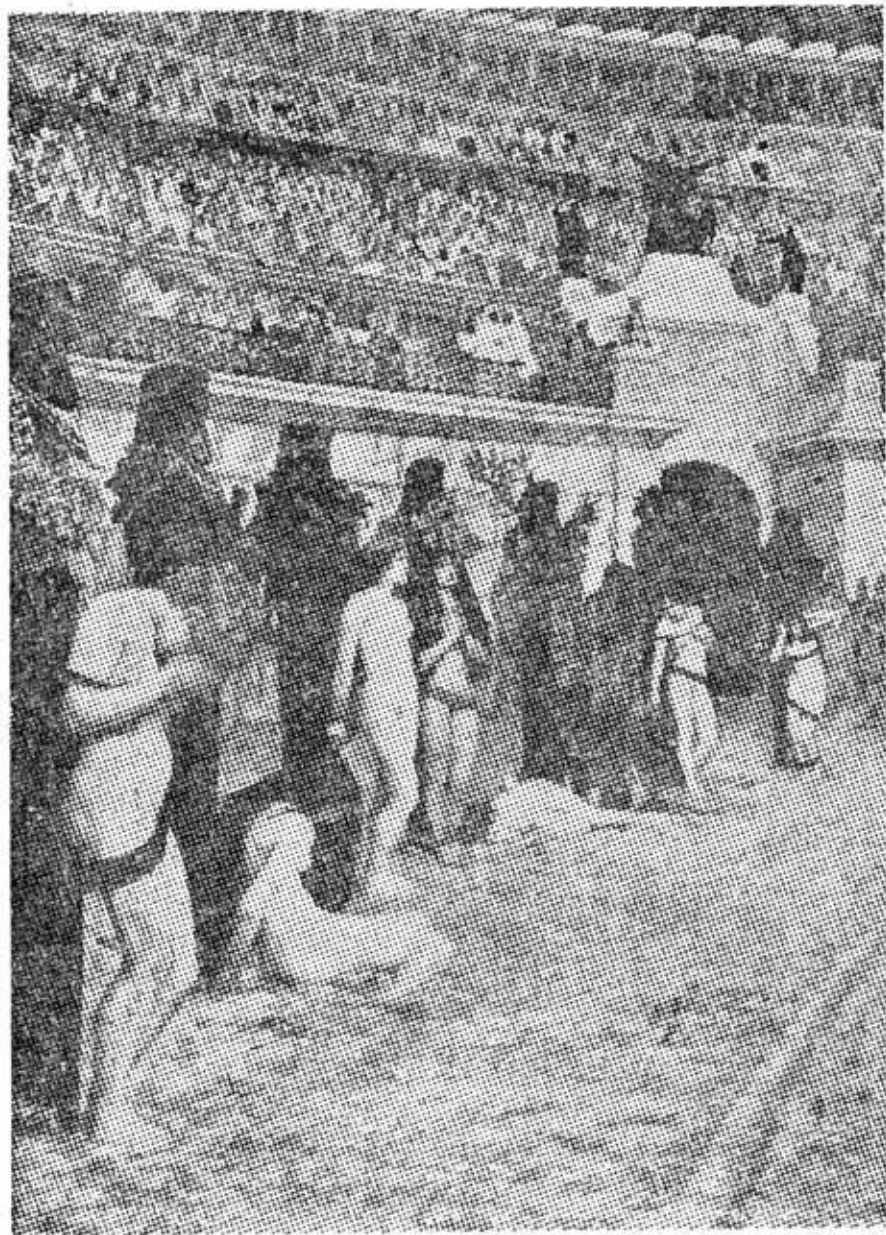
は、たちまち不人気なものになったという。

○

二十六才のマーサ・ヘルナンデスは、夫のレイモンドと共に殺人業を始めた。これは同性へのサディズムと、自分より若く美しい女性への嫉妬が原因であった。

夫婦は三年間に二十人以上の女を殺したものと推定さ

暴君ネロ時代の虐刑、獅子に食わせられる女たちの図



れるが、起訴されたのは三例にすぎぬ。即ち射殺したデルフィン、水に突っこんで溺死させたマートル、ハンマード、頭をたたき割ったジャネット。これ以外は証拠がなかった。逮捕され

たのはミシガン州であったが、この州には死刑がないので、わざわざニューヨーク州で裁判を行うことになった。つまり死刑にするためだ。二人は激しく反対したが無視された。

裁判の結果、完全な変質者であることが認められたが、死刑をまぬかれることはできなかった。二人の犯罪は米国で「最もにくまれたもの」とされているが、夫婦間の愛情は極めてこまやかで、互いに変わらぬ愛を誓いながら、一九五一年三月七日に電気イスにかけられた。

夫の方は高圧ショック三回、二分五十秒で絶命したが、マーサに対しては五回、四分三十秒を要したという。

### 美女を食う話

誘かいや殺人は、主として金銭や愛情が原因となつて起るものであるが、なかには「食う」ことが目的という物騒な話が意外に多くみられる。

十六世紀のはじめ、スコットランドのソーニー・ビーンという山賊がその筆頭で、妻のほか息子と娘、更に孫まで加えると合計四十八人の大家族であったが、彼等の主食はなんと人肉であった。

しかも、肉はありあまるほど手に入ったとみえて、腕や脚などは、しばしば海中にすてられ、これが流れついた地方では大さわぎとなった。

当局もすてておけず、いろいろ調査したのだが犯人はわからず、行方不明になった客の泊った宿屋一家や、淋しい峠を一人で越えてきた女性を一味とにらんで、弁解もきかず絞首刑にするなどヒステリー気味になり、遂にはこの地方の人口が目立って減少してきた。

ある日、若い夫婦が彼等に襲われ、妻の方は一刀のもとに首を落され、死体は逆吊りにされて流れる血汐は桶にうけ、次いで四肢をたちきり腹を裂いて内臓をえぐり、たちまちのうちにむさぼり食われてしまった。

この間、夫の方はすきをみて逃げだし、その報告によって四千人の軍隊が出動、彼等を全員逮捕することができた。

彼等のひそんでいた洞穴の奥には、天井から無数の肉塊がぶらさがり、隅は白骨の山、斬りたての美女の生首は槍先に刺されて地上から突立っていた。

彼等は裁判なしに処刑されたが、その方法は、二十七人の男は四肢を切断して出血で死ぬまで放置、この最期を見物させてから十三

人の成人女性を生きながらの火あぶりにし、処女と認めた四人は特に罪一等を減じて斬罪梟首、残り四人は十四才未満だったので更に減刑してドレイとした。

彼等の犠牲となったものは二千人を下らぬといわれ、特に若い女性の心臓が最も美味であったと語り、処刑に際し死の瞬間まで反省の色は見えなかった。

それでも世の中は、さすがにひろく、犠牲者は食われたといっても首を斬られたただけから、そんなに苦しまなかった。それに対しこの処刑はあまりにも惨酷である、という説が相当あらわれた。

## ○

第一次大戦前後、ベルリンでカール・グロスマンが女性ばかり五十人以上を殺しているが、これは生首や心臓を売るのが目的であった。若く美しい女性のそれは、かなりの商品価値があるのだ。彼女らの肉も売物とされ、残りの部分は河にすてられてしまった。

同じ頃、ドイツのハノーバーでは、フリッツ・ハールマンが二十六人以上を殺して、これは肉だけ売っている。敗戦後の食料難だからどちらにもよく売れた。もっとも後者の方は自分が食べるのが第一の目的で、助手希望

までが登場している。

このほかにもある精神病者が美女の心臓ほしさに殺人を働き、逮捕された時はえぐり取った心臓が二十四個も、アルコール漬になって並んでいた話。或は死体の処分に困って、三日がかりで食べてしまった話があるが、これらの話から、黒田寿式にひとつまとめてみましょう。

## ○

わたしは自転車旅行をつづけている十七才の女子高校生。夜に入ったので手近かな家に泊めてもらえるか頼んだところ、幸いころよく承知してくれた。

住んでいるのは女性が二人だけ。とても感じのよい二十五、六のひとと、わたしよりちょっと上かと思われるひとであった。

すすめられた夜食は何の肉だろう。柔かくねつりのした味。もうひとつは歯ごたえが十分でかめばかむほど味がでくる。とてもおいしくて思わずおかわりしてしまった。

入浴をすすめられバスにつかる。その時わたしは誰かにのぞかれているような気がしたが、男の人はいない筈だし、それほど気にとめなかった。

だが、その夜、わたしはおそろしい夢をみ



たのだ。

ここはどこだろう。地下室らしく嚴重にしまわれた部屋のなかに、十数人の若く美しい女性が全裸のままとじこめられている。

しかも四隅には四人の女が絞首刑となつてぶらさがり、中央には小手高く天井から吊られてゐる女性、その両の乳房はえぐられ、下腹には大きなナイフが突き刺つたまま……

生き残りの女たちの顔に、さつと恐怖の色が走つた。戸があいて二人の女が、刀を手に入つてきたのだ。わたしは、その顔をみて驚いた、この家の二人ではないか。

年上の方がまず近くの一の前の前に立つと、その細頸をぐいとかけ斬つた。殺人とは何と簡単なことか、彼女は悲鳴をあげる余裕もなく、あつてなく死体となつてしまつた。口をポカンとあけたまま、本当に自分が殺されたのかどうか、信じられぬような表情で。

若い方もまけずに、別な一人の背後にまわつて刀を無造作にふりおろす。「かつ」と頸骨がなつて白い頸すじが鮮かに切断され、真赤な血汐がどおつと噴きだす。彼女も自分の生命が終つたのが、すぐには信じられぬようであつた。

ほかの女たちが悲鳴をあげて逃げまどうの

を、二人は追いかけては容赦なく無情の刃をふるう。

また一人が首をふつとばされた。突然思考力を失つた胴体は、左右どちらに仆れたらよいのかもわからぬように立ちどまり、数秒後にドタリと仆れ、首のあつたところから噴きだす鮮血が床を染める。

更に一人、肩口からふかふかと斬りさげられ、おびただしい血汐が噴きだす。彼女は自分の生命の源がふりまかれるのを惜しみ、これをうけとめるかの如く両手をのぼし、殺人者の顔をこの世のみおさめとして、苦鳴と共にのけぞつてゆく。

逃げるのを追いつめられ、脇腹にズブリと刃を突つこまれる。相手は極めて惨酷であつた。刃を右にねじり下にひねり、苦悶のため両眼をみひらきつくづくずれおちるや、止どもささず次の犠牲を求めてゆく。

「く、くるしい。早く首打つて！」

彼女は必死で叫んだが、その願いがかなつたのはかなりののちであつた。

もう一人しか残っていない。彼女は両側から斬りつけられ、あつと言う間に両腕を失つた。前のめりになるところ両脚を水平に薙ぎ払われ、四肢を切り落とされた胴体がゴロン

ところがる。静かに近づいた一人が彼女の頸すじの真上に刃先きを垂直につきつけ、グサと突きおろす。断末魔の悲鳴と共に血しぶきが赤い花卉を散らすようにとび、こうして一人残らず、あの世に送られた。

地下室はもう血の海であり、そこここにも美女の生首が、胴体が横たわつてゐる。しかも二人の仕事はまだ終つていないのだ。生首を集め終ると、ひとつひとつの死体を切り刻み乳房を心臓をえぐりつつゐる。

こんな恐ろしい夢があるだろうか、全身ビッショリの汗。だが夢でよかった、それにしても、あんなに親切にしてくれた二人が、こんな恐ろしいことをする夢をみるなんて。窓をあけて涼しい空気を入れ、汗をぬぐつたわたしは、再びベッドにもぐりこんだが、悪夢はまだ終つていなかった。いったい何としたことだろう。

わたしのベッドの傍に二人がやってきて、何か話をしてゐる。

「今日のうちに片付けちゃうの？」

「そうよ、ストックも、のこりすくないし、それにあたし、この子の自転車欲しくなつたの」

「とてもみずみずしい身体をしてたわね、正

に若さのミリキよ。ところで今度はどうやって殺す」

「あたしたち、いずれは絞首刑になる身でしょう。どの位苦しむものか、この子でためししてみない」

「グッド・アイデアよ」

何の話だろう、どうやら誰かを殺す相談らしい。さっきの夢がつづいていて、殺されるのは、わたしのようだが、まだ頭がぼんやりしてよくわからない。

「さあ、目をさまして。ベッドからおりるのよ」

わたしは言われるまま起きあがり、両脇をとられて歩かされる。階段をおりると地下室だ。さっき夢にみたものと同じだが、さすがに死体はころがつていない。

言われるまま椅子の上に立つと、先が輪になったロープを首にかけられた。絞首刑にするつもりだ。

こんな夢があるだろうか、だが、何の恩もうらみもないわたしが、彼女らに殺される理由はない。

「なぜなの？ なぜ殺すの？」

わたしは、ぼんやりとつぶやいた。

「なぜって？ あたしたちは、あんたの新鮮

な肉が食べたいのよ。それに生首の買手も多数いるし、あんたほど、運のわるい子ってないわね」

呆然としたわたしは、突然椅子がガタンと仆れ、身体が宙に浮くとみるや、頸すじを強い力でぐいと締められた。

顔が蒼白になり、眼球がみるみるうちにとびだし、首の骨がミリミリと音をたてて碎けてゆくのがわかる。もちろん声もでなければ呼吸もできない。血と汗と涙、それに全身から、あぶらがにじみでてくる。

恐ろしい悪夢であった。だが、わたしは、これは夢なんだ、夢なんだと自分に言いきかせた……。

翌日、二人の女は美少女の死体をタイルに横たえ「処分」していた。

「ほんとに、なめらかな皮膚ね、斬り刻むのが惜しい位よ。頸についた絞めあと、ちょっと気の毒な感じがするわ」

「こんな美しい生首をもっていったら、鑑賞家たち、どんなに喜ぶかしら。間違いないの処女だし、最高の値段で売りつけなくちゃ、この子にも失礼だわ」

頸のまわりの筋肉をすっかり切ってゆき、あらわれた頸骨の継ぎ目に刃を入れてぐい

とこじると、美少女の生首はタイルの上をころがった。

水道の水できれいに洗い、髪をなでつけ口紅をつけ、白い大皿の上にそっとのせる。

一方胸部の皮膚を乳房をそっくりつけたままはぎとり、肋骨を切り開いて、その奥にひそんでいる心臓をぬきとる。処女の心臓もまた、生首におとらぬ値で売れるのだ。

肉もまた料理されている。

新鮮な肉は柔かく、ねっとりとした味がある。

胃や腸はごった煮にするのだが、かめばかむほど味がでてくる。残ったくず肉はソーセージにするが、これがまたおいしく食べられる……。

○

最初の一行を書いてから一カ月、この間にテキサスでは塔の上からライフルを乱射して三十余人を殺傷する男があらわれ、次いで夫と子供を殺して自殺した婦人、三人の子供を冷凍にした若妻、ライフル魔第二号の老人など、恐ろしい事件は、あとを絶ちません。

私の紙上殺人も、いい加減こころで切りあげましょう。

(完)



△告白▽

△写真・間和志へ男提供▽

# 禪履歴書

喜 多 六 好

私が禪に関心を持ち始めたのは小学二、三年の頃からである。あれから、もう五十年、よくも倦きもせず、禪の不思議な魅力に取つかれたものである。

その間に禪の色も三度変った。黒から始まり、中学卒業の年、白となり、十年程前に赤になった。

私は明治四十一年生れ、二人の息子は東京の大学に在学中、妻と二人暮らしの平凡なサラリーマンである。赤禪は家族の者以外、誰も知らない。勿論、他人に見せる勇氣はない。他人に見せられないと言え、黒禪もそうであつた。

その頃、東京の赤坂に住んで居たが、当時

穿かされて居た申又と言う奴に不満を感じ、時時こっそりと黒禪を締め、わずかに満足して居た。禪と言っても、それは黒いメリンスの帯である。中学生になると、私の体の一部に変化が起き始めた。

男になった証拠を禪の中で経験して以来、持てあましたエネルギーを禪の中でなければ処理できない習慣になつてしまつた。その為、帯に白い斑点が出来るのが気掛りになつた。いつも大人の様に、白い禪をして居れば、こんな事もやめられる様に思えた。他人の禪が羨しくも見え始めた。又、一度白い禪を締めても見たかつた。だが、私の家には、その様な材料が見当らない。父はどう言う訳か、腰

巻だけで禪も申又も、して居なかつた。兄弟は妹だけだつた。だから家には禪に縁がない。大人になったら公然と白い禪をする。これが私の願ひになつた。

公然と禪をする機会がないでもなかつた。お祭や海水浴で、その氣になれば締められたのだが、私にはその勇氣がなかつた。人前で禪一つの姿になつたら、私の禪は妙な形になつて人には見せられないと思つた。それにしても、赤禪の三助が平気で女湯にはいつて行ける事は、私には驚異であつた。

常に白い禪を締め、それを意識しない様に慣れてしまえば、私も平気で人前で裸になれると考へた。だが、申又を禪にかえて呉れと

は母に言えなかった。何故なら、黒禪の秘密が発覚する様に思えてならなかったからだ。

中学五年の時、ある偶然の出来事から母と妙な問答を始めた。事によると禪が締められるかも知れない。そんな気がしたので私は必死に母に喰い下った。遂に母を説得し、その目的を達する事が出来た。私は禪が嫌いだと思ひ込んでいた母は、初め驚いた様子だったが、私の一時の気まぐれとも思ったらしい。

それ以来、私の股には真白い公認の禪が、しっかりと締められる事になった。その夜、母からこの事を聞いた父に「お前も、今日から一人前だ」と言われた時、私の心は天にも登る悦びで一杯だった。だが、母や妹には雲助だとか、船頭だとかひやかされたのには弱った。

常時、禪を締め、それに慣れる事により私の凡てが解決するものと思つて居た考えは間違つて居た。私の若いエネルギーは禪の緊縛感の為、益々燃え上つて行くのを、どうする事も出来なかった。

大人になつて禪の仲間入りをする筈であつたのに禪が公認になった今、かえつてこの禪に劣等感を抱く様になった。禪を締めて居る事は他人に知られたくなかつた。しかし、今

さら禪をとる気にはならなかつた。裸を見られる心配がある時は止むを得ず申又を穿く事にした。上級学校も卒業し、社会人となり、自分の周囲を見廻した時、禪が意外に少なくなつて居る事にがっかりした。それだけに、私の劣等感も又、強くなつた様だ。だが、禪への関心は少しも変らなかつた。

或る時、禪を締めた女の写真を見て驚くと共に、異常な興味を感じた。それ以来、新聞や雑誌等で女歌舞伎や女の刺青大会の写真を注意する様になった。

私の一番恐れて居た兵隊検査の日がやつて来た。この検査には、昔から越中禪をする様、指示されて居た。私は叱られる事を覚悟で申又を穿いて行つた。私には、例え、越中禪でも禪には変りない以上、自信がなかつた。しかし、其後支那事変に応召してからは、いつの間にか越中禪なら平気になつて居た。私は越中禪が嫌いで、もっと禪を前後反対にして使用した。それは少しでも六尺禪に近いと思つたからである。どの慰問袋にも必ず入れてあり、中には赤白、組になつたものも有つたが六尺禪はあまり見なかつた。

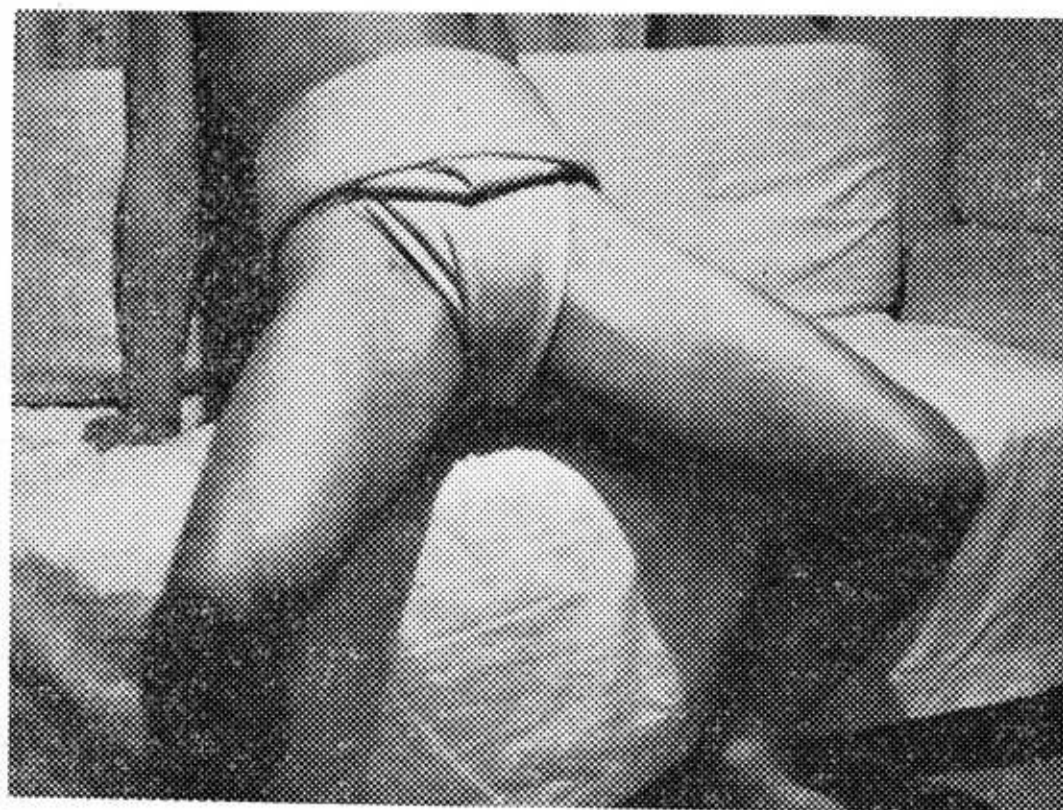
北支転戦三年余、無事内地に帰還し、私も遂に結婚する事になった。大東亜戦争が始ま

り物資不足で、自由に衣料が買えなかつたので、結婚式当日は、はき古しの申又を穿いて行つた。その後はずっとものを常用し、六尺禪は妻に遠慮して、使用しないつもりで居た。だが、夏が来て、薄着になると腰の廻りが落ちつかなくなり、再び六尺禪を締める事になった。

空襲が激しくなり、サイレンが鳴ると急いで六尺をもつこに替えた。万一の場合、六尺を見られるのが矢張りいやだった。戦争も終り、衣料が豊富になれば今度こそ、六尺禪が巾をきかず、と期待したのに世の中が変るといつか、パンツやブリーフが氾濫し始めた。私は勇気を出して銭湯に行つた事もある。禪を誇示したつもりだが、どうしても心穏かとは言えなかつた。

十数年前、この北関東の小都市に転勤になった。此所は冬になると冷い西風が強く、保健上からも、禪は絶対に離せないものになった。これをとると下痢や腹痛で調子が悪い。東京では六尺禪も時には見る事が出来たが、田舎では全く見掛けられない。時代に変つたものである。禪は私一人だけの様に思える。大人になつて禪の仲間入りをする私の願いは遂にあきらめざるを得なくなつた。だが、





私自身は絶対に禪をやめない。そのかわり、この事は私一人の秘密にしておく。そう考えた時が白い禪が赤くなった時とも言える。赤禪の理由は他にもあるが、ここでは割愛する。赤禪と言っても、私の場合、四季により生地を変えて居る。

春秋はメリンス、これはいつ迄も弾力を失わず具合が良い様だ。夏は薄い木綿だが、冬は赤ネルを使用する。これは保温にもなるが、いくら強く締めても窮屈さを感じない。私はスキーもやれば野球もやる。体育祭には年令別の競走にも出るが禪さえしておればサポーターはいらない。夏でもオートバイのドライブには赤ネルを締めて行く。これなら内臓保護のバンドよりは有効である。オートバイの事で妻が心配してこう言った事があった。

「急救車で運ばれた時、看護婦に赤禪を見られたら、どうするの？」

しかし、赤禪なら絶対に事故は起きないと信じて居る。もし、それが気になるなら気持だけでもスピードを加減するだろう。赤禪さえしておれば野球でも麻雀でも必ず勝つと思って居る。妻は又、私が行方不明になってもいい目印が有るとも言った。

『氏名不詳、特徴は赤禪』の新聞記事があったら、私だ、ときめて良いだろうか。

妻は私を評して「禪気狂い」と言った。

確かに、私と禪の関係は異常である。私は異常なまでに禪を好む反面、それを人に知られる事を異常なまでに恐れる。何故か

私自身にも分らない。私はその理由を、原因と過程から説明して見るつもりで一文を書いた事がある。

禪に関する過去の経験、人から聞いた事、見た事。読んだ事、記憶の限りを尽して書いて見た。題して

「ふんどし日記」だ。

最近、本誌を発見、同じ様な人が世の中には居るものだ、と言う事を知り、意を強くすると共に、その考え方も少し変えざるを得なくなった。いつか、これを整理して本誌に公表したいとも思っている。だが、その勇気があるか、どうか。

今はもう誰にも遠慮する必要はない。家に居る時は出来るだけ裸で過す事にして居る。禪とは何の細工もしない唯、一条の布切にすぎない。その細布一条に無上の生きがいを感じる。私は禪の中を二二禪以上にはしない。広すぎると前袋が深くなり締りが悪い。長さは二・三米（鯨の約六尺）。

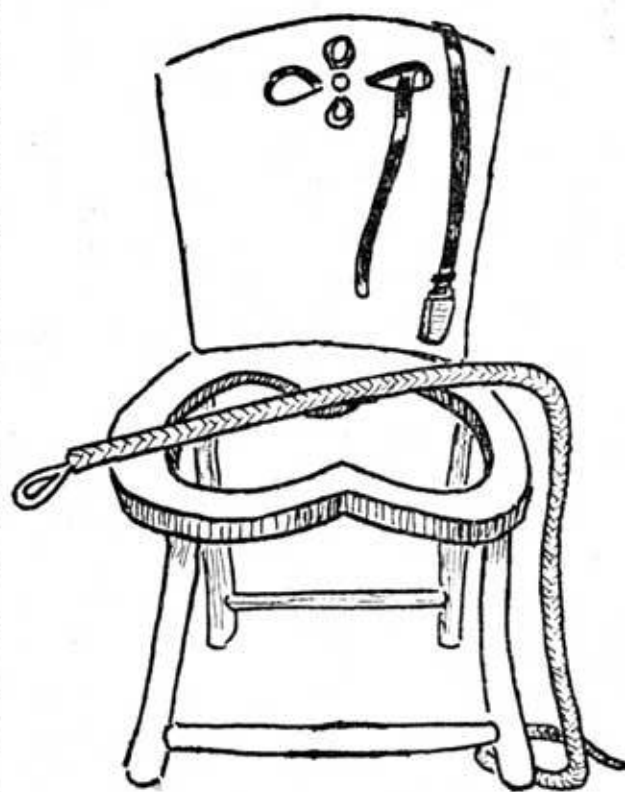
以上が私の禪の略歴である。

私は以前からクラシック音楽が好きだ。ステレオの前に頑張った赤禪を見てバッハ・ベートウベン達はどんな顔をして居るだろう。

# 心傷<sup>い</sup>たむ遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

△第二十四章 女囚ミシユリーヌ（四）▽

## 西条操



心 傷 た む 遍 歴

保安課の地下取調室は真暗だった。壁に並んだマツチ箱のような独房の中で、ミシユリーヌは喘ぎ、耐えかねて膝を落とした。

朝からずっと丸めたままの背が苦しい。彼女は踵に尻を落とし、呻いて頭を振り、腿の間で双腕をもだえ、バランスを失なって膝をにじり、そして、よろめいた。忽ち肩が壁に当る。なんとか楽になろうと彼女はもがき、尻が床についた途端、後ろにひっくり返ってしまった。勿論、背は壁に支えられる。股手錠が股間でこじ、苦痛の声を洩らしたミシユリーヌは、お尻の支点を更に後ろへずらせ、

両腿をあげて一息入れた。後頭部を壁に支えて力をこめれば、なんとか背骨を伸ばせる。

彼女はホッと吐息をつき、お尻がさらに前方へずれて行き、ついに、素裸の背中が床についた。お尻は鉄格子にすれすれだ。彼女は両足を鉄格子の間から突き出そうとし、それは出来ない相談だと知った。鉄格子の間隙は腿でも出せるくらいなのだが、背骨を水平にしている限り、引きつけた両腿を伸ばすことは出来ない。

漆黒の闇の中で、忽ち彼女は戦慄した。背中に泌みる冷たさもさることながら、許しな

しに寝そべっている恐ろしさを想ったのだ。

股手錠をきしませて女囚はもがき、両尻で床をにじり、必死の思いで両肩を壁に支え、ほんとにままならぬ両手の指先で床を押えて泣き声を洩らした。両足の指先は床上数センチに浮き、床を踏まえようとすれば縦ベルトが突きあがる。深く喰い込む革の固さに、腰骨が疼いて悲鳴が出るほどだ。

ミシユリーヌは、おのが姿の浅間しさを思った。両膝は閉じるに術なくひろげたまま、それも両腿を高々とあげて、これ以上はひろげられないというほどの恰好だ。いま灯が点



いて誰か入って来たら、この恥かしい姿が、世にも浅ましいこの恰好が、鉄格子越しに隠す術もなく、真正面から見えてしまうのだ。

彼女は再びもがき初めた。立っておれと命じられた女囚の身は、なんとしてでも立っておらねばならない。それに、こんな恰好を誰かに見られるなんて……。どんな愛しい男にも、ひめやかな闇の中でさえも、見せたことのない姿だ。

股手錠の女囚ミシュリーヌは、いったんおろした尻を床からあげることの困難さを、両手首の苦痛とともに、骨にこたえて思い知らされた。彼女は呻きつつ必死にもがき、こんどは鉄格子に背を押し当て、泣きながら一息入れた。これで、誰か入って来ても、みじめなザマを真正面に晒さずに済む。

「どうしたの？ ミシュリーヌ」

漆黒の中から、ミルドレーヌが呻くように声をかけた。

「あなた、お尻をおろしたら駄目よ、ミルドレーヌ。私、坐り込んでしまったの。そしたら——もう、起きあがれないのよ」

「あら」ミルドレーヌも悲しげな声だ。

「私、もう、とうにヘタリ込んでるのよ。もう、ヤケだわ。見付かるまで、こうしてるつ

もり。あなたも度胸きめなさいよ」

「そうね。でも、ほんとにひどいわ。こんな縛り方なんて、人間にするもんじやないわ」

「人間扱いしてくれると思ってるの？」

二人はそれぞれの独房の闇の中で、怒りと悲哀を胸に噛みしめた。

「ね、手首、痒くない？」

と、ミルドレーヌが手錠の音を立てた。

「痒いわ。それに、もう千切れそう」

ミシュリーヌは答えて胸を熱くした。泣きたい思いで便器を跨いだ先刻のことを、屈辱に頬染めて思い返したのだ。泣いて哀願した二人だったが、ババアどもは制服姿で取囲んで嘲笑い、そこから手錠を解いてくれなかったのだった。

痛めつけられた両手首がそのときに濡れ、いまは乾いて来て泌みる。「ベルト」の舟型環にビッシリ植えてある針状突起、それを通して滴たり散る液体は、股手錠のあたりを、どうする術もなく濡らしてしまったのだ。

「監獄になんか、絶対に入るもんじやないわね。逃げて逃げて、捕まったら自殺すべきだわ。そう思わないこと？ 地獄ね、ああ」

「ええ。だけど、もう駄目なのよ。頑張りましょうよ。ね、ミルドレーヌ」

二人は泣きながら慰さめ合い、突然、電灯が点もった。足音も荒らく入って来たのは、保安課では若手のテレレーヌだった。ショ引いて来た女囚一人を小突いて突き飛ばす。

鉄格子の中の二人は色を失ない、ころげ回ってもがいた。テレレーヌは眺めてニヤリと笑い、もう一度女囚を突き飛ばした。手荒く扱われる女囚はスラリとした素裸か、他愛なくよろけて膝を突くのも道理で、後手錠を入れられている。

「そこで待ってるんだよ」

女囚は室の中央で正座して縮こもった。

「こら、メス犬ども」

テレレーヌは鉄格子に寄り、中の二人は恐怖におののいて死物狂いだ。しかし、何分にも体が弱っているし、初めての股手錠ではあるし、お尻が床からなかなか浮かない。僅かに離れたかと思うと、忽ちにしてひっくり返ってしまう。

「こら、三八五号。お前は何とまあ、臆面もなく大威張りなのね。お前はきっと、娑婆にいるときにゃ、戸を開け攻めて玄関で着替えしてたんだね。恥かしいと思わないのかい」ミルドレーヌは、鉄格子に向いて尻をおろしていたのだ。

「そんな風に縛って頂くと、起きあがるのが難儀なのさ。いいかい？ これからもあることだし、よく覚えておくんだね」

テレーヌは嘲笑い、鉄格子の間から、革ロープの鞭を器用に鳴らせた。

「おきあがり小法師を続けるんだよッ。ナメた真似すると……」

二人は油汗浮かべてもがき回り、革をきしませて呻き、前後して膝立ちになった。

「性根入れてやりや、何とか出来るだろ？ コツを覚えさせてあげる。もう一度——」

テレーヌの腕が伸びて、二人は他愛なく尻餅をつき、手錠の痛さに悲鳴をあげた。

ミシュリーヌは漸くにして起きあがり、硬張る腿を踏張って立ち上がり、正座の女囚をかすむ眼に見て声をあげた。テレーヌの制服の背後の床で、ミシュリーヌに片眼つぶって見せたのはクラリスだった。

「二匹とも立てたのね。ふらふらおしでないッ。ほんと、ぶさいくなったら。いいかい？ お前たちにはね、女として守るべきところを堅く守ってるポーズをさせてやってるのよ。尻癖の悪いフシダラ女には、ともかく形から入って行かせなきゃ。ホホホ。しっかり押えてんのよッ」

「——お、おねがい——ちょっとでいいから解いて下さいましッ——おねがい」

「何だって!! へたり込んでたお詫びもせず、よくもそんなことヌケヌケと……。心配しなくていいの。あとまだ三、四日は、ずっとそこを押えさせてやるからね」

ミシュリーヌたち二人は、声をあげて泣いた。テレーヌは向き直り、クラリスの眼前に腕組みで立ち、くびれた足首が自慢の太い脚で、床に折った膝を蹴る。

「さあ、お取調べだよ。どういう了見なんだい？ え？ こら、女ボリの成れの果て」

「もうしわけもございません」

クラリスは、世にも神妙に詫び、深々とひれ伏した。

「悪うございました。怠けた女囚を懲らしめて下さいまし」

「ふん。まあなんとか、云うべきセリフと云わでもがなの言い訳とは区別してるのね。よろしい。では、ほんとの労役、囚人にふさわしい苦役ってものがどんな風なものか、チョッピリ教えたげる。立ちな」

クラリスも「ベルト」をギシギシと締め込まれ、ガッチリと股手錠にされた。さしものクラリスも情けなげな顔、髪掴まれてその顔

がねじ上げられ、火のようなビンタが数発鳴り、ひろげた両膝が切なく悶えた。

「こら、よく聞くんた。ここに線が描いてあるだろ？」

「——はい」

「向うの壁際に煉瓦が積んであるね？」

「はい」

クラリスは、床に描かれた白線に沿って、煉瓦を二段積み、隙間なく正方形に並べることを命じられた。白線の正方形は四米四方くらい、だから煉瓦は百数十個を要する。

クラリスは股手錠労役を初めた。壁際の煉瓦の最上段を手取るには、後ろざまに尻を壁に押しつけ、爪先立ちの両脚の間から眺めて探ぐるのだ。かろうじて両手に煉瓦を持ち支え、大きく腿をひろげたまま、背を丸めて歩く姿は滑稽だった。

「床に落とすと承知しないよッ。静かにおくんだ。マホガニイの床に傷がつくからね」

両膝を床についてから、煉瓦を床に置くのが一苦労だ。クラリスは思い切り腿をひろげて、漸くにして一個を置き、吐息をついて一喝され、齒を喰いしばって位置を正した。

「キリキリ続けるんだ。三十分したら来るからね。それまでにキッチリ並べとくのよ。そ



んなに難かしい仕事じゃないわね。幼稚園の女の子でも砂場遊びぐらい出来るもの」

テレーヌは嘲けて命じ、革ロープ一発の気合いを入れてやって、室を立ち去った。

クラリスは閉じた扉へ片足を空に蹴り、因果てきめんによろけた。

「牢番女の家じゃ、これをマホガニーと云うんだわ。きつと、毛布は絨毯で、ネグリジェはイブニングドレスね」

毒ずきながら上段の煉瓦を積み、二枚重ねの上に股間の両手を支え、鉄格子に向いて顔をあげ、片膝を折って片膝を横に延ばした。

「どう？ ミシュリーヌ。体操の床運動よ。」

この華麗な演技を見てみて」

と笑いかける。釣られてミシュリーヌも

「いったい、どうしたの？ クラリス」

「ミシュリーヌこそどうしたのよ？ ま、あらましは洩れ承わってるけど。いえね、私、

ミシュリーヌが心配になったもんだから来たの。保安課の眼の前で油売って見せて、とっ

ちめられてフテくされてやったら、どうぞって案内して来てくれたわ。でも、案外に元氣

そうで安心したわよ。ワルイ子ちゃんね」

クラリスは心と反対のことをいい、何枚目かの煉瓦をよちよちと運んで来て床におく。

「ベルトも股手錠も初めてでしょ？ 私も初めてよ。はたで眺めてたよりもこたえるわ。ごめん遊ばせ」と、大股ひろげて並べ直し、

「女の体ってデザインがよくないのね。だって、蓋する所が奥過ぎるわ」

こぼして壁際へ去るクラリスの双丘が突き出して振られ、喰い入る鋼鉄環がふもとにめり込んで、双丘の境い目を押しひろげて痛々しい。

「あーあ、やっこさ一米ってとこね。いつになったらマジノ線が完成することやら。いったい何だろねえ、こんなことさせて。犬小屋にしちゃ大きいし。私の営倉かしら」

「ね、クラリス。早くしないと駄目よ。手伝ってあげたいけど——」

「あなたがそう云ってくれるだけで元氣が出るわ。でも、そうね。三十分で云ってたわねえ。時計ないの？」

「両手に持ってるけど見えないのよ」

「フフフ。そんな口が利けるなんて嬉しくな

っちゃう。でも、ミシュリーヌはそうやって

ると、とっても優雅ね。良人の体を迎えて、

やさしく拒む初夜の新妻ってポーズ。いつか

らそうやって恥じらってるの？ 今朝からずっとだって!! ちよつと長過ぎるわよ。さあ

て、オリピック目指して床運動のトレーニング。腰が痛くなったわ。でも、気張らなくちゃ。ミシュちゃんに心配させちゃ悪いものねえ」

「でも、ほんとにひどいこと。わざとこへ連れて来られるなんて、バカねえ、クラリスったら」

「あなたに逢いたかったのよ。ウフン。だけど、こんなシゴキ方があるとは知らなかったわ。勉強不足。あの保安課若手のチャキチャキはテレーヌっていうのよ。婦人警官の採用試験に落ちたもんで牢番におなり遊ばしたの。だもんで、コンプレックスがあるのよね。なにしろ、この私は、婦人署長のポストを蹴り飛ばした俊敏婦警だもの、彼女が劣等感に駆られるのも無理ないわ。だから、腹癪せにヤツ当りしてんのよ。労役怠惰は減食が規定だわ」

正方形の一边が並べ終えられ、クラリスの全身に汗が滲む。

「そ、そうなんですよ、クラリス」

ミシュリーヌは叫んで、思わず足摺った。

「こんな苛め方なんて、まっとうじゃないことよ。こんなこと、規則に書いてあるもんですか!! 人間が人間に対してのこととは思え

ないわ」

ミシュリーヌは憤慨し、その様子を微笑ま  
しげにクラリスが眺めやった。ミルドレーヌ  
も初めて口を挟む。

「そうですとも。いくらなんでも、あんまり  
ですわ。出たら告発してやるつもり」

「あら、証拠があつて？」

「私たち三人が証人ですわ。駄目ですよ？」

「駄目ね。三人や五人の口をそろえただけじ  
や勝ち目ないわ。法の権威の前には碎け散る  
こと請け合い。だからさ、連中だって監舎じ  
や、わりかしマトモなことしかししないのよ。  
密室へ連れ込まれたら負けだわ、くやしいけ  
ど。ま、人世の掟っていうところね」

ミルドレーヌは啜りあげ、鉄格子に頭を打  
ちつけた。

「あら、早まっちゃいけないわ。ね、ミシュ  
リーヌ。そのひとが、自分の御亭主と浮気し  
ちまった烈婦なのね。あら、コンピエーヌ刑  
務所を震駭せしめたジャンヌ・ブリネル事件  
を知らないと思つたの？ 捜査課の婦警を  
馬鹿にしないで。あーあ、煉瓦って、段々と  
重たくなるものなのね」

ミルドレーヌがミシュリーヌに

「あのひとを御存知らしいのね。婦人警官だ

つたって、本当ですよ？」

「ええ、本当ですわ。私、警視庁の留置場で  
一緒だったのよ。口は悪いけどいいひと。明  
るくて——」

「あら、ひとがよくって陽気だった？ つま  
り、馬鹿ってことね。奥深く秘めた哀愁が分  
らないの？ ミシュリーヌ」

クラリスは壁にお尻を押しつけて股手錠を  
音立てながら、ミシュリーヌを睨んだ。

「聞えたの？ ごめんね、クラリス。このひ  
と、ミルドレーヌ。三八五号さんよ。私と同  
じ房。そうだわ、女医さんなの」

ミルドレーヌの顔に屈辱と誇りが交錯し、  
クラリスの眸に嫉妬が浮んだ。

「そうお。それは聞いてなかったわ。いいじ  
やないの、ミシュリーヌ。病氣しても安心よ  
ね。ああ、この煉瓦、叩きこわしてやりたい  
わ。こんちきしょう。あら、私としたことが、  
なんとまあハシタないことを——」

苦痛をこらえてクラリスはおどける。

「でも、こうして見ると、あなたたち二人は  
掃き溜めに降りた白鳥ね。あなたたちなんか  
が来る所じゃないわ、ここは——」

クラリスは嘆息し、痒いのか、頬骨のあた  
りを苦心して煉瓦にこすりつけた。

「ところでねえ、ミシュリーヌ。ホラ、あの

アドリエンヌって女、あなた知つたの？」

「アドリエンヌ？ あ、シュザンヌさんね」

「ああ、やっぱり知つたのねえ。あんな後  
輩が飛び込んだもんで、折角のあなたとの水  
入らずが、ぶちこわしだわ」

「私だってあなたと一緒に居たかったのよ。  
でも、仕方ないじゃない？ 出して頂けるま  
で我慢しましょうよ」

「ほんとにいいじゃない？ たら。あなたを苛め  
るようなのはいいわね？ 保安課の男まさ  
りは別としてさ。ところで、あのシュザンヌ  
にパクられたの？ それとも幼馴染み？」

「いえ。あのね——」

そこへ、テレエヌが飛び込んで来た。女囚  
たちは口を閉じておののく。

「ふん。無駄口叩いてたんだね。こら、ま  
だ半分も積んでないじゃないか。よっぽど働  
くのがイヤなんだね」

革ロープの二発に、クラリスは足指をそら  
せた。

「ヒーッ。も、もう三十分経ちまして？」

「何だって？ 口答えする気かい。私が婦人  
警官になり下つてたら、お前のヤマなんか、  
もっともっとバラしてやったわ。とてもじゃ



ないけど、四年や五年で済んだことか」

クラリスはビクツとして顔色を窺った。

「こら。そっちの白鳥ども。よっかかるんじやないッ」

三人の股手錠たちはふるえ上った。

「フッフ。驚ろくこたないさ。いくら刑務所だって、マイクぐらいは要るところに備えてあるよ。エスプリに満ちた華麗な会話だったわね。こら、床上運動を続けなッ。口惜しけりや、弁護士に電話したら？ フッフ。吠え面かくのはまだまだ早いよ」

テレヌは回転椅子にふんぞり返り、デスクに脚あげて雑誌をひろげた。

クラリスの苦役が切々と続き、テレヌは電話を取って飲物を注文した。

運んで来た女の子が暫し見物する。

「マルタ課長、まだ戻らない？ そう。仕様がないわね」

「これ、なんのお仕置ですか？」

「お仕置じゃないのよ。これは、その準備をさせてんの。こいつ、労役を怠けるのが何故悪いってツラしたのよ。ツーロンあたりだったら半死半生ね」

「へーえ。でも、そんなの、あなただけで処理したら？」

「そのつもり。ね、ね、どう思う？ 縫い目

なしの靴下って」

「流行りかけてるようね」

娘はデスクに腰をおろし、雑誌を覗く。

「でも、なんだかシマらない感じ。あら、ドイツの合唱団が来てるのね。ちょっと見せてよ。聴きに行こうかしら？」

「ふん。ビールとジャガイモをタラフク喰ってる連中だもの、馬力だけはあるだろさ。それよか、ホラ、こっちの方がいいよ。ジャポネのカブキ。異国調タップリで神秘的よね」と、テレヌは音を立てて茶碗を啜った。

「あら、大股ひろげて一服してるわよ」

「そうかい。蹴飛ばしておやり。アッケなくひっくりかえって脚をバタバタさせるわ」

「そうね、面白いわね。やろうかしら」

保安課の女事務員はクラリスに近寄った。

おとなしそうな娘だが、朱に交われば赤くなるといふところか。

「やっぱりやめとくわ。憫れっばい眸をされちゃうと駄目ね」

「そうかい。こら、三一六号。キリキリやるんだよッ。ヤキは、まとめて入れてやるからね。ね、あんた。今年の鴨は、なんだか脂が乗ってないと思わないかい？ おひるに食べ

ただけ」

「そうね。でも、そりゃ無理だわ。職員食堂のは値が値だもの。今年はカキがおいしいわよ。去年より少し安いし——」

「ほんとだね。きょうび、値下りするものがあるたあ嬉しいじゃない？ 殻つきで蒸したのにバターをタップリ落として、レモンを絞りこんで、一口に頬張るのよ。いくらでも食べれるわ」

「そう。蒸し加減が難かしいのよ。それと、カキの鮮度ね。ああ、唾が出ちゃう」

三人の股手錠女囚たちはホロリと泣いた。

「あんた、今年のクリスマス休暇はどこで過ごすつもり？ 私は家で骨休めだけ——」

「私、ダボス。スケートしに行くの」

「ダボス？ スイスかい？」

「そうよ。トーマス・マンの『魔の山』知ってるでしょ？」

「知らないねえ、そんなアプレ作家の三文小説なんか。さてと——。こら、出来たかい」

「——はい。なんとか——」

テレヌは靴音高く近寄るや、いきなり一喝した。

「なんだい、この並べ方は!!」

クラリス苦心の煉瓦の列が、ところどころ

蹴り崩される。

「全然、性根が入ってないッ。並べ直しッ」

クラリスは身もだえて情けながり、髪ふり乱して啜りあげた。

「不服かい？ このボケナス女」

靴が腰に飛び、クラリスはひっくり返る。

「起きな」

革ロープが腿の内側に鳴り、眺めて娘が肩をすくめた。

「あんなにもがき回らなきゃ起きあがれないものかしら？ でも、少し可哀想みたい」

「なあに、仏心は無用だよ。まじめに勤めな女囚は、人間の皮を着た獣さ。畜生と人間とは峻別しなきゃ」

「正義の権化ね。秋霜の如き峻厳さ。ま、命だけは助けてやってよね」

娘は笑って去り、クラリスは呻いた。

「——腰が、腰が砕けそう。ちよつと休ませて下さいましな。おねがい——」

「甘ったれンじゃないッ。ここをどこだと思ってるの？ もう一ぺんひっくり返してやろうか。ふん、少しゆるんだわ。こら、こっちへ来てお尻を向けな」

ベルトの縦横が更に締め上げられ、クラリスは悲鳴をあげた。

やっと並べ直したクラリスは、坐り込んで背を波打させた。

「なんとかまあ、お仕置の支度が出来たね」

冷たい言葉を頭上に聞いて、クラリスの泣き声が糸を引いた。これでまだ、やっと支度が済んだところと言われては、さしものクラリスも胸がつぶれる。

「立ちな」

「お、おゆるし下さいまし。もう、決して怠けは致しません。誓います」

「ふん。舌は誓えど心は誓わずって諺があるよ。ことに、お前は女ポリ崩れだものね。憫れっぽい声出したって駄目さ。あすこの女に見られてんのよ。いとしい女に恥かしくないのかい？ 立つんだッ」

クラリスは涙流してよろめき立ち、ひろげた両脚の間の床に、細長い黒板をおかれた。

「囚人にふさわしい労役を教えてほしくないかい？ ほしくなきゃそうお云い。労役忌避の記録が残るだけよ。仮釈審査委員会は嘆願書を破ることだろねえ」

「教えて下さいまし。お願い申し……」

「ふん。なら、その黒板に書くんだ。丁寧にハッキリ書かないと読んでやらないよッ」

クラリスは股手錠の手にチョークを持ち、

黒板を跨いで腰を落とし、呻きながら書き初めた。

「三一六号囚は労役を怠けた上、叱られてふてくされました。書いたかい？ 今後は決して怠けません。格別のお慈悲をもちまして、そんな囚人にふさわしい労役をさせて下さいまし。早く書きな。こら、曲ってるよ。ちゃんとコンマを打って。いいかえ？ 三十回書くんだよ。キッチリ書かないと書き切れなからね。嘆願書が整ってなきゃ駄目さ。明日もう一度やり直しね」

七十センチに三米ほどの黒板は踏むことを禁じられ、その上すれすれの空間で、クラリスはお尻を振り初めた。テレーヌは煙草をくわえて正面から見下ろし、女囚はみじめさに頬を濡らした。覗き込んで腰をよじり、ままならぬ指に切なく泣き、鋼鉄の苦痛に油汗を浮べる。

「チョークを下下さいまし。新しいのを」

「バカお云い。まだまだ書けるさ。餌代にも足りない仕事振りで、よくもそんなことを云えたもんだこと」

クラリスは苦吟の末に書き終え、床に打ち伏して喘いだ。テレーヌは点検し「よろしい。じゃ、面倒だけど教えてやる」



と楽しげだ。天井の垂れ鎖が煉瓦囲いの中央に持って来られ、クラリスの後ろ腰が捕縄で吊られた。囲いの隅へ行くとピンと張る程度の長さだ。テレエヌは、囲いの中央に一枚の煉瓦を立てておき、その上に、半球形の容器物を載せた。

「これは料理用のボウルだけど、ピーマンのみじん切りなんか入ってるわけじゃないんだよ。入ってるものは見りゃ分かるだろう？」

ところどころが剥げたホーロー引きのボウルには、沢山の鋼球が入っていた。直経一センチほどのベアリングのボールだ。

「キッチリ三百個あるわね。これを——」

テレエヌは、いきなり床にぶちまける。

「やさしい仕事さ。拾って元へ戻しやいいのよ。さ、やりな。おっと、ちょい待ち」

クラリスの口は、嵌口テープでピッタリ掩われた。手が届かないようにしてある場合には、嵌口具をギシギシ装着するよりも、テープの方が手取り早くて簡便だ。

クラリスの小鼻が切なくふくらみ、笛のような呻きが洩れ、垂れ鎖が重々しく鳴って、クラリスは一個を摘まみあげた。気付いて更に掻き集め、床すれすれの尻が持ちあがり、脚の間から二、三個がこぼれ落ち、ボウルを

跨いだ真下あたりから鋼球が数個、カラカと音を立てた。

「一時間したら、来るからね」

嘲笑を残してテレエヌは去り、次の瞬間、電灯が消えた。悲鳴の唸りがクラリスの鼻を絞り出る。さしもの彼女も漆黒の中で立ちすくんだ。ミシュリーヌとミルドレーヌも鉄格子の中で息を呑んだ。あまりと云えばあまりな意地悪さ、これじゃ、一時間は短い。

「ひどい。でも、クラリス、頑張って——」

ミシュリーヌは自分のことのように身もだえて、おろおろと励ました。クラリスも一声呻き、真暗闇の中で足探りを初めた。

「いくら罰だからって、あんまりよ」

「黙って。ミシュリーヌ。マイクが……」

突如、ボウルがひっくり返り、切角戻した鋼球が漆黒の床に散乱した。疲れ果てたクラリスがよろめいて、つまずいたのだ。

押しつぶされた悲鳴が哀しげに唸った。ミシュリーヌが声もなく膝を落とし、ミルドレーヌまでが嘆声を洩らした。

クラリスは笑ったつもりだろうが、それは泣き声に聞え、再び鋼球がボウルに音を立て初めた。

「あと、いくつぐらい？クラリス」

返事は唸り声だ。おそろく、まだ半分とは拾っていないだろう。

電灯が点き、三人の制服が現われた。

「おんや？ まだ残ってる方が多いじゃないか。呆れちまって物も云えやしない」

「マスク除っておやり、テレエヌ。吠え面の具合を見ようよ」

嵌口テープをむしり取られたクラリスは、マルタ課長にひれ伏した。

「——お、お慈悲を——おねがいでございます。このとおりでございます」

「ふん。案外と意気地がないのね」

「そうですとも。ポリなんて、みんなこんなものですわ、要領だけは一人前だけど。ねえ、マーゴット」

「そうとも。だから、おミヤ入りの多いことどうお？ アゲて来るのはザコばかり。それもさ、請求洩れがしょっ中なんだから」

「でも、この尻振りダンスは利き目あるね。

いっぺん、一一〇号あたりにやらせたら」

と、マルタ女史が笑う。一一〇号とは、例の傾城の美姫キャプシーヌ・エイメだ。

クラリスは容赦なく追い回され、意地も見栄も失なってヒューヒュー泣き、絶えずよろめいては膝を落とした。

「こら、もういい加減におし。ノロマの仕事  
を待ってる身にもなって見な。ざっと、百個  
は残ってるね」

クラリスは、革ロープの鞭十回に悲鳴を絞  
った。ミシュリーヌたち二人も引張り出され  
て、球拾いをやらされた。煉瓦囲いの中で、  
三人は腿ひろげてもつれ合い、隅に転がり込  
んだ小球を拾うときには泣き出さんばかり、  
お互いの顔見合わせて涙をこぼすのだった。

「優雅さの極みって恰好ね。自分がどんな風  
だか、お互いを見ればよく分るわね」

そんな三人の苦役ぶりを制服たちは笑う。

「ホント、亭主だか好いた男だかに見て欲し  
いだろねえ。しっかりと操を守る姿だもの」

ミシュリーヌは唇を噛み、ミルドレーヌが  
腿をひきつらせた。腿ひきつらせて双腕に力  
をこめ、丸めた背腰をのた打たせ、髪ふり立  
てて低く呻く。

「こんな、こんなことさせて、さぞ面白いで  
しょうね？ でも、こんなことって……」

あまりのみじめさに逆上したか、ミルドレ  
ーヌは睨を決し、背と腰に渾身の力をこめ、  
股下で鉄をきしませた。

「まあ、まなじり裂けんばかりの見幕。ホホ  
ホ。妙なところでガチガチさせちゃって」

「もっとしっぴかり引張ってごらん。怒りをこ  
めて引きちぎれ——だわ。駄目なの？ お気  
の毒にねえ」

「あのヤブ医者崩れは胴長なのよ。だもんで  
セムシがきついよね。お腹もふくらんでるし  
ねえ」

「ホント。おとといの今日でマサカもう——  
は思っけど——」

「要するに出来損ないの女なの。あのチビは  
チビで、内股の肉付きが良過ぎるじゃない？  
おや、まだ覗んでる。あ？ ああ、面白いと  
もさ。こんなラインダンスはコメディ座でも  
演ってくれないものねえ」

「こら、いつまでガチガチやってるんだ？」

革ロープを腿に受けてミルドレーヌは息を  
詰め、声をあげて泣きながら腰を落とした。

「よく辛抱できるわね、クラリス」

ミシュリーヌは両膝を横一文字に開いたま  
ま、手首の苦痛に呻き、眼前に腰落とすクラ  
リスへ囁やく。

「私、もう駄目だわ。腰が砕けそうなの」

革ロープが白い腿に鳴り、ミシュリーヌの  
悲鳴に釣られたか、ミルドレーヌがバランス  
を失なって後ろへよろめいた。

「おっとっと。しっぴかり、しっぴかり——。あ

あ、やっぱりひっくり返っちゃったよ」

仰向けにされた油虫は必死にもがく。狭い  
独房の中とはちがって支えかかるものがない  
ので、ミルドレーヌは床を背中中で這いずり回  
った。散らばる鋼球が背にめり込み、囲いの  
煉瓦が動いて崩れる。

「フフフ。何度見ても滑稽な眺めなこと」

「こらッ。くたばった真似なんかしたって駄  
目だよ。起つんだ」

「油虫、ちよつとぶちのめしておやり、テレ  
ーヌ。さっきの見幕をもういっぺん見よう」

こうして、股手錠の女囚三人は、世にもみ  
じめな苦役を漸くにして終え、息も絶え絶え  
に突伏して喘いだ。並んで額をすりつけ、ク  
ラリスが代表して声をふり絞る。

「——全部——拾わせて頂きました——」

「ふん。ボケナス女でも三人そろや、何とか  
ゴミぐらいは拾えるのね。こら、手伝っても  
らって平気なのかい？」

「そうそう。いくら獣並みの分際だからとい  
ったって、人間の皮かぶってる以上は、とき  
どきは礼儀正しくしなくちゃね」

「こら、三匹そろって、いつまでアラーの礼  
拝の真似ごとやらかしてるんだい。立ちな」  
踏張る腿や腰がミリミリと鳴り、三匹は悲



鳴をあげた。マルタ女史が太い声で命じる。  
「煉瓦の上に乗るのよ。精神集中の修行ね。  
よろしい。そのまま聞きなさい。少しお説  
教してあげます」

三匹は二段積み煉瓦の上に乗る、懸命にバ  
ランスを取った。落ちまいとする努力は、両  
膝を自然と真横左右に張りひろげさせる。真  
正面から眺めて、マルタ女史は歯を見せた。

「三人とも、わり合に感心ね。命令に従おう」

## ◎本誌増頁に際し◎ 懸賞 原稿募集

### ▽内 容△

- 一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌の内容にふさわしい作品を期待します。
- 一、S並にMは勿論のこと、フュテッシュ各種、女性切腹、男性切腹、女斗美、女相撲、男女性輝美、生首狂崇、妊婦嗜好、変装、見世物奇態珍聞、文献紹介、同性愛、等はじめ、その他特異風俗に関する件全般に亘り、広範囲に大いに新分野の開拓による力作の御寄稿をお待ちしております。
- 一、本誌に從來余り取り上げていない分野のものの特に大歓迎いたします。
- 一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験による告白や手記も結構です。更に、論説、意見、エッセイ感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、最もお得意とするものを選び下さい。

### ▽規 定△

- 一、作品はすべて未発表の自作作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
- 一、枚数は特別に制限いたしません。一回の掲載量は五十枚前後として下さい。
- 一、締切日は毎月十五日。入選の分は次号誌上に掲載発表いたします。
- 一、入選作品に対しては一篇につき二千元以上十万円迄の賞金を進呈いたします。
- 一、御投稿の原稿に特別の事情なき限り返戻のお求めには応じかねます。
- 一、御送稿は第一種郵便（密封）にてお願い致します。一〇〇〇瓦まで35円、一五〇〇瓦まで45円、二〇〇〇瓦まで55円、二五〇〇瓦まで65円、三〇〇〇瓦まで75円です。
- 一、宛先は阿倍野局私書箱第14号天星社。懸賞と第一頁に添記願います。

とする気持は芽生えているわけだわ。その気持を忘れずに持ち続けなさい。分った？」

「はい」三人は声をそろえ、哀しく答える。

期せずしてその頬に涙が流れた。自分の恰好を思えば、情けないのも無理はない。

「褒めて頂けたので嬉し涙なのよね」

とマーゴットが笑う。

「でも、平均台から落ちると一減点だよ。床上運動がいくら華麗でも駄目さ」

テレエヌもからかって紫煙を吹きあげ、マルタ女史の訓戒が初まった。

「お前たち、正直な話がみじめな気持だろ？

情けないだろね。え？ さぞかし、私たちが恨めしいだろよ」

平均台上で浅間しいポーズの三人は、そう云われて鼻を吸った。マルタ女史の口調は、胸を抉って悲しい。

「私たちだって、何も好きこのんでこんなことをさせてるわけじゃないんだよ。いいかえ？ みんな、お前たちのためを思ってたことなのさ。恨むのは勝手だけど、バチが当たるわよ。考えてもごらん。口答え一つ出来ない人間を苛めて、何が面白いもんかね。でも、誰かがやらなくちゃいけない仕事なの。だから、忙しい中を割いて、こうしていろいろと教えてやってるのよ。分ってくれなきゃね」

「——はい。すみません」

「ありがとうございます」

女囚たちは答えて胸を熱くし、そっと唇を噛む。みじめな姿で生恥を晒らすのも刑のうちだし、言いたい放題を甘受して恐れ入るのも懲役のうちだ。ミルドレーヌがよろめいて煉瓦から落ち、泣き声をあげてふるえた。

「減点一点。演技を続けるッ。ハスラフスカ

選手の靴下の洗い汁でも飲みな」

「ちよつと、マーゴット」

「はい課長」

「ベルトを少しゆるめておやり。ほんのチョッピリだけでよ」

腰骨に喰い込む革具が一時ばかり弛められた。三人は、ふうと吐息をつく。腰ベルトが弛めば股ベルトも楽になり、背腰も僅かに伸ばせるのだ。感謝の言葉を受けて、マルタ女史は応揚にうなずいた。

「どう？ 思わずお礼が口を洩れるだろ？」

「ベルト」をきつく締められてたからさ。手錠がきつりゃ、せめてもう一穴だけ弛めて貰えたら、と思うだろ？ 捕縄かけられりゃ手錠にして欲しいと泣くだろし、手足が自由なら鉄格子から出たいと喚くし、水が飲めれば葡萄酒を一口でもと齒ぎりするのさ。ドレスの次にはコート、帽子の次にはミンクと来るね。きりが無いんだよねえ。そこんことを分らせてあげたいの。どうだえ？ 監舎に戻して欲しいだろ？ え？ 世間さまじゃ赤い着物とおっしゃってるおべべを着せて欲しいかい？ つまり、普通の懲役人にして欲しいだろ。何とかお云いッ」

「はい。お言葉のとおりでございます」

「ふん。懲役人てものは、人間社会から締め出されちまった境涯なんだよ。お前たちは、その境涯から、さらに蹴り落されてるわけ。どうしてそうなったか、それはよく分ってるわね？」

「は、はい」

ミシュリーヌも答えたが、口惜しさに胸が煮えてよろめき、片足を床に落とした。

「ふらふらおしでないッ。性根入れて立つてるのよ。こらッ、なにを首振ってるんだい？ 張り子の犬じゃあるまいし。なに？ 頬ぺたが痒いって？」

ミシュリーヌは身もだえ、顔を激しく打ち振る。もがく双腕に乳房が揉まれ、堪え難い痒みに泣き声さえ洩れた。

「痒くなるのは、お前の体が出来損ないのせいさ。遠慮は要らないから、うんとお搔き」  
「——こ、こんなに縛られてますのに——どうして——。お、お願い。煉瓦にこすらせて下さいまし——ああ」

マーゴットがニヤニヤと寄って来て、いきなりビンタ数発を見舞った。思わずよろめく金髪が掴まれ、鼻を摘まんでねじあげられ、腋下あたりを撫でられる。

ミシュリーヌは呻いて足指を反らせた。眼

から火が出て、頬が火照り、痒みは益々激しい。鼻の奥がツーンと痛んで涙が滴たった。「あら、痒いのはここじゃなかったの？ そう。じゃ、ここかしら？」

マーゴットは意地悪く嘲けて、なおも脇腹を撫でてなぶった。

「痒いとは、他人にやなかなか分らないものよ。自分で搔かせるのよ、マーゴット」  
ミシュリーヌは両肘を振り回し、股の手錠を激しく鳴らせ、死物狂いに背を丸める。腰のベルトを僅かにゆるめられているので、もしや指先が、と思ってしまうのだ。弛んだとは云え、分厚い革は腰骨にせかれ、切ない望みも儚く消えた。

「アクロバットを習ったんだねえ。我れと我が女性自身を舐められるくらいに修行を積まなきゃ。フッフ。涙ポロポロはいいけどさ、余計に痒くなるわよ」

ミシュリーヌは精一杯に顔をねじ伏せ、腕の付け根と肩のあたりで辛うじて触れた。首の骨も折れんばかり、気が狂いそうな痒みも少し収まる。

「いつまでクネクネしてるんだい？ 勿体なくも、保安課長さまの御訓戒中なんだよッ」  
マルタ女史はデスクにふんぞり返った。



「どうだい？ 刑務所におち込まれるような悪い事は、もう絶対にするまいと思うかい？ おっと、こりゃ刑務課あたりのセリフだったっけ。こら、この部屋の御厄介には、金輪際なるまいって気がしないこと？ 監舎で暮らせる身がどんなに有難いことか、それが骨身に沁みて来るだろ？ そこを分ってさえくれりゃ、私たちも手数かけた甲斐あったってわけよね。どうお？ 分っておくれでないこと？ 私たちはね、個人としちゃ、そんなお前たちの姿を見ると、ホントに哀れに思ってるのよ。でも、真人間に立ち直らせてやるためには、まず、並みの懲役人にしてやらなきゃね。それが保安課のお仕事なの。よく反省して、一人前の懲役囚になって頂戴。そうやってくれるわね？」

「はい。誓います」

三人は喘いで、口々に声をふるわせた。ついに、クラリスまでもがよろめいて、踏み崩した煉瓦から足裏を滑らせた。

「誓った尻から、もうそのザマだね。こら、ちゃんと積み直して」

「ふむ——。では、と——」

三人の女囚は期待に胸ふるわせ、背腰の苦痛も忘れて、マルタ課長の言葉を待った。

「では、明日、もう一度取調べます。そのときに、どのように反省したか、覚悟のほどを聞いてあげる。いいねッ」

三つの裸身に落胆が浮び、悲哀の音が囁りあげられ、マーゴットとテレヌが背後に回った。再び、腰の革バンドを締めつけられるのだ。女囚たちは、ひろげた腿をわななかせて呻いた。束の間だけ弛められると、再び喰い入る緊縛は、前にも増して苦しい。

「無駄飯を喰えないようにしてやってるの」

「ヒューヒュー泣くんじゃないッ。子宮後屈が治るわよ」

ミルドレーヌが呻くように泣いた。

「こら、このポリ公崩れ。胃下垂の最新式治療バンドよ。こうやって三、四日も絶食すりゃ、胃癌だって癒っちゃうね」

「ホントだわ。有難く思ってくれなきゃね。」

こら、チビ。しっかり踏張って——」

ミシュリーヌの腰をくびりあげた革具がギシギシ鳴り、後ろ腰に錠がギリギリと音を立て、白い双丘の下から後ろに突き出て見える両手が、固く捕り締められて絶望に震えた。

「ウエスト、しっかり締めてもらったかい？ 降りな」

二人の制服に尻を突かれて、三匹は床で数

歩のめった。よろめいて踏み止まり、両膝張ってシコを踏む。心身ともに疲れ果ててはいるものの、この縛しめのまま前に倒れるのは恐ろしく、硬張った脚をひきつらせて必死の姿だ。もっとも、突き飛ばす方だって、その辺は心得ていて、突発的な大怪我はさせぬ。

「ちゃんと並んで。こんなことまで、いちいち云わなきゃ出来ないなんて、人間のカス、いや、囚人のカスだよ、ホントに」

三匹の胴の真下で手錠が鳴って軋み、床に三つの影が並んだ。ミシュリーヌは鼻を嚙りあげ、やっと回わせる手首を鋼鉄環の中で回わし、突込んだ双腕を絞って足摺りした。

「あの、お、お仕置は……」

「なんだって？ 古式床しい言葉を使うものだこと。懲罰と云いな、懲罰と」

「——は、はい。あの、懲罰は、いつ済みますの？ お赦し頂けるのは、いつでしょうかしら？ も、もう——」

「お前、バカじゃない？ いま、懲罰受けてるつもりだったの？ いいかい。いまはね、どんな懲罰を加えたらいいか、それを取調べてる段階よ。ひっ括ってあるのは、取調べのための必要処置。分った？」

ああ云えばこう、こう云えばああ、といい

気なものだ。

「私たちはね、なにも、懲罰を加えるだけでいいとは考えてないのよ。どうしたらお前たちが改悔してくれるだろうか、社会に戻るには罪を償わなきゃいけないと悟ってくれるだろうか、と日夜そればかり思案してるの。」

「どうだえ？ 監舎の鉄格子や労役場が恋しいだろ。云々とくけど、取調期間に制限なんてないんだよ。性根を見きわめるまで無制限。」

そして、ここに居たって一日は一日さ。監舎に戻りたきゃ、神妙にお調べを受けるんだ」

「はい。御存分にお取調べ下さいまし」

頭の回転が早いクラリスが神妙に答える。

「そして、御懲罰を受けさせて下さいまし。」

お手数かけて申しわけございません」

「ふん。さすがはポリ崩れだけあって、ツボは心得てるね。ほかの二人はどうなんだい」

ミシュリーヌもミルドレーヌも、哀しく做って胸詰まらせた。ともかくもう、一時間でも早く、この股手錠の呻吟から解放して欲しいのだ。

「そうかい。じゃ、ま、できるだけ早く取調べを済ませてやろうかね。明日から調書を取ってあげる」

マルタ女史は女だてらに、太い脚をデスク

に乗せ、ふんぞり返って紫煙を吹いた。

「おっと、三一六号の怠け者は明後日だね、いくら早くても。明日、もう二、三回ゴミ拾いをやってからさ。嬉しいだろ？」

「は、はい——お願い申しあげます」

「まあ、嬉し泣きしてる。ホホホ。でもさ、お前たちも何とかこれで、素直に取調べを受ける気になってくれて、私ホントに安心したわ。これで今夜はグッスリ眠れるだろよ。どんな懲罰に決まるか知らないけど、今后は反則しそうになったらねえ、ここを思い出して頂戴な」

「はい」

「よく分かりました」

「ふむ。ま、いつかは私たちのことを有難かったと感謝してくれる日も来るだろ。ねえ、マーゴット、テレエヌ、そうして欲しいわねえ」

「そうですとも」

「私たちの手は固いけど、心は柔らかいんですわ」

「いいこと云うわねえ、テレエヌは。これ、聞いたかい？ お前たちを真人間にしてやりたい、なんとか手を引っ張って這い昇らせてやりたいと、私たちがどんなに苦労してるこ

とか。でもね、テレエヌも云ったように、お前たちを甘やかせはしないよ。お前たち、その手錠を解いて欲しいだろ？ はずしてやりたいのは山々なんだよ。だけど、それは結局のところ、お前たちのためにならないの。いいこと？ よおくお聞き。こらッ、動くんじやないッ」

後ろへ突き出ている双丘に、平手打ちが続けさまに鳴り渡る。

「ちよつと柔らかい心を見せてやると、すぐにつけ上ってこれなんだから」

「マーゴット。構わないから、革鞭二発ほど喰らわせておやり」

マーゴットとテレエヌは、待ってましたとばかりに、壁から革鞭をそれぞれ捕った。

「初物ね、三人とも」

支配者たちは眸を細め、革鞭が空にヒュウと鳴り、裸身三つは恐怖にわななく。床を空打ちする音の凄まじさ、重量感を響かせる打撃音は、革ロープの比ではない苦痛を想わせるのだ。クラリスから初まってミルドレーヌに終る第一撃に、三人は脆くも膝を落とす。三人とも生まれて初めての革鞭だ。此の世のものとは思えない悲鳴がつんざいたのは、いうまでもなかった。



△日本版▽

略号〔美5〕

印刷紙焼付による分譲品として美木乃々子嬢出演の『日本拷問刑罰集』並に山原清子嬢出演の『入墨女賊拷問刑罰集』の二集をキャビネ判にて企画分譲しましたところ熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、ち早く多数のお申込みを頂き迫力ある「刑罰写真集」として好評を賜りました。その頃よりアート紙に対するグラビヤ印刷の「女性拷問刑罰写真集」の刊行を強く要望されました。ここにアルバム「美しき縛り」紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミリカメラにて撮影した写真（従って内容も全然違います）を「日本版」「西洋版」と二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子嬢による「日本版」を「美しき縛り」め（第五集）として刊行いたしました。純白の特アート紙に迫力のある写真集を是非お残め下さい。七十四葉の女性拷問写真がぎっしりと全紙面を埋めてフアンの方々の御一見を得ておられます。売切れななりますと絶対に入手できません。どうか未見の方は今すぐお申込み願います。

**△アルバム（写真集）の内容▽**

（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬責にあって苦悶する女囚八葉▽（美木乃々子）  
 木乃々子連続四葉（美木乃々子）  
 折檻を受ける女囚四葉（美木乃々子）  
 連続四葉（美木乃々子）  
 子らるる哀れな女囚八葉（美木乃々子）  
 女囚八葉（美木乃々子）  
 女を掛けられたい荒蕪のぶらに女囚八葉（美木乃々子）  
 乃々子（美木乃々子）  
 える女囚八葉（美木乃々子）  
 責める女囚八葉（美木乃々子）  
 女囚八葉（美木乃々子）  
 くびれるまで縛られた女囚八葉（美木乃々子）  
 々々（美木乃々子）  
 四葉（美木乃々子）  
 拷問のささるで打たれる女囚八葉（美木乃々子）  
 乃々子（美木乃々子）  
 三葉（美木乃々子）  
 喘ぐ女囚八葉（美木乃々子）  
 悶する女囚八葉（美木乃々子）  
 裸に折檻される女囚八葉（美木乃々子）  
 葉（美木乃々子）  
 吊りにされた女囚八葉（美木乃々子）

以上合計七十四葉

代つてテレーヌが第二撃を振りあげる。恐怖に駆られる三人の眸は虚ろに救いを求め、逃れるべくもない革鞭に背を晒らした。

「いつまでヒューヒュー哭いてんの？ いい加減に静かにおし。云々とくけど、いまの革鞭は取調中の臨機懲罰よ。わたしや規則には忠実だからね。さっき、ホラ、立ってろと命令したのに煉瓦から落ちたろ？ あれやこれやと取調べを受ける態度が悪い罰。えーと、何のお話してたっけ？ 要するに、お前たちを人間扱いしてやるわけには行かないってこと。きびしくしてやるのが慈悲なのよ。公民権のある人間となない者とは、同じに見るわけには行かないわ。差別待遇がいけないっていうのは人間社会でのお話よ。その娑婆でだって區別てものはあるわね。社会の人間と受刑者とは峻別されて当然なの。お前たち、恨めしげだね？ でも、誰に訊ねたって、当り前のことだというだろねえ。不当に虐待されてると思ったら大間違いだよッ。いうことときかない牛や馬が鞭当てられても仕方ないだろ？」

三匹の女囚は激痛の名残りに呻きつつ、マルタ女史の言葉に哭いた。

(未完)

『マゾヒスチック・ストーリー』

## メイク・アップ

三原 寛

挿絵……春川ナミオ

★

午後四時五十分、東京発下り急行列車は、時間通りに、日本海沿岸の浜崎駅の三番ホームに滑り込んだ。

ぞろぞろと乗降客で混み合う改札口を出てスーツケースを片手にさげたまま、駅の出札口の辺りに立ち群がる人混みを見廻した三原君は、直ぐに、待合室の前の、円柱の隅に人待ち顔の、目指す川島氏を見付ける事が出来た。川島氏とはこれが初対面になるのだが、これ迄に幾度となく交換した手紙に同封されていた写真で一目でそれと識別出来た。

蒸し暑い六月の駅の構内で、川島氏は、で

っぷりとした巨軀に、きっちりと背広を着込み、「三原です」と前に立った若い三原君が恐縮する程、深々と頭を下げ、それから、顔をあげて、今度はまじまじと呆氣にとられた表情で、三原君の風体を眺め廻すのだった。

三原君は、色の褪せた古い詰襟の学生服姿で、その袖口と膝には大きく継ぎが当てられていたのだ。

「お手紙の件を実行するには、こんな恰好の方が適当だと思ったものですから……」

「いや、その……」

川島氏は急にどぎまぎした表情を示して、「では、参りましょう、どうぞ……」

と先に立って階段を下り、駅前の広場を横

切り、そして、食堂や喫茶店や、本屋、金物屋等の並ぶ商店街の通りを歩き出した。

川島氏のメルセデス・ベンツが街角に駐車していた。運転手を憚った二人は車の中で無言だった。

★★

事務所用品店を経営している川島氏は、この裏日本の浜崎市では名士である。

浜崎市に駐留する自衛隊、県下の役所、学校への納入を一手におさえて、業界の連合会の理事長にまつり上おられていたし、三原君が受取った名刺には数え切れない程の名誉職



の肩書が並んで居た。

市の目抜通りに面した川島文具店は、驚く程大きな構えで、一寸したデパートを思わせるように広い店内を店員達が忙しく立働らいて居た。二階は半分は在庫品の倉庫になり、階段に近い方は事務室で、十人程の事務員達が机に向って、帳簿を繰ったり算盤をはじいたり、電話を聞いたりして居る。

その奥の社長室で、川島氏は、広いデスクを前に革張りの椅子にふんぞり返り、不気嫌そうな声を出していた。その前にみすばらしい姿で立たされてうつむいているのは、前の日の夕方東京から着いた三原君である。

社長室の入口のわきに、川島氏の机と直角の方向に向いて、秘書の高橋のり子嬢の席があった。のり子嬢は、今、東京に出て女子大に通っている川島氏の一人娘、麗子嬢のフィアンセ、つまり川島家の養子になるのだと聞かされている三原君を観察していた。

のり子嬢は二十七才であった。三カ月前から、求人広告で、この川島文具店に勤め始めたばかりである。どちらかといえば小柄なのり子嬢は小柄ながらも身体の線は素晴らしかった。

発達したバスト、細くくびれた腰の線、い

かにもセックスの強さを感じさせる張ち切れそうなヒップ、そして、悪戯っぽい茶色の瞳に、厚い唇もセクシイだったが、ぐっとひきつけた二重の頤が、何となく尊大な印象を与えていた。

川島氏はのり子嬢を徹底的に甘やかしていた。兎に角何も仕事をしないで坐っていればよいのだが、余り退屈なので、近くの喫茶店に抜け出しても、行動は全く自由であった。そして思いがけない程、高い給料を貰っていた。

三原君の事は大分前から川島氏に聞かされていた。家柄も素性もはっきりしない男で、川島氏は大反対なのだが、一人娘の麗子嬢がすっかりのぼせ上ってしまい、家出するとか自殺するとかの騒ぎに迄なった為、娘可愛さの余り、渋々同意せざるを得なかったのだが、その代り、家業を継がせる以上、手許において、みっちり仕込むのだとのことだった。そして、のり子嬢も川島氏の助手として、その教育係を仰せつかったのである。思いきり手厳しくやるようにいわれた。

★ ★ ★

川島氏は仁王立ちになって、威ただかに叫んだ。

「この殻つぶし奴が！ 娘を蕩しこみやがつて！ そんなにわしの財産が欲しいのかね！ そんなに金が欲しいんだな！ それなら、そこに土下坐してお願いしてみろ！」

ひどいことを、と見ている、のり子嬢の前で、驚いたことに、三原君は意気地なく、両手をつき、頭を床にすりつけて土下坐したのだ。

「全く見下げ果てた奴めが！ のり子さん、この恥知らずに靴の裏でも舐めさせてやりなさい」

余りの事に最初、寧ろ同情さえ感じていたのり子嬢も、床の上をにじり寄った三原君が本当に、椅子に腰を下しているのり子嬢の足許に這いつくばってパンプスの裏をぺろぺろなめ始めた時には、驚いて足を引込めたが、その厭らしさに、思わず三原君の顔を思い切り蹴とばしてやりたい衝動に駆られた。

「お前のような能無しは、たとえわしの娘の婿になったとしても、実際には奴隷の価値すらないのだ。麗子を生きた女神として崇め、女王様として仕えて貰わねばならん。それでも構わんというのだな！ わしがこれから、みっちり仕込んでやる。のり子さんを娘だと思っ

のり子さんの事を女王様とよぶのだ、判ったな！」

三原君は更に床に額を摺りつけた。

のり子嬢は腹が立った。これだけ、侮辱され恥かしめられて、少しでも骨のある男だったら、そして、本当に麗子嬢を愛して居るのなら、たとえ駆け落ちしてでも、立派に独り立ちしてみせるだけの気構えを示して当然だった。

三原君の卑屈な態度に虫酸が走った。

★★★★★

三原君は店の二階の倉庫の隅に、キャンバス・ベッドを置いて寝泊りさせられて居た。

翌朝、のり子嬢が出勤して来た時、三原君は、薄汚ない、継ぎの当ったランニング・シャツとステテコ姿で、四つん這いになってよたよたと床を拭き掃除していた。のり子嬢はその不恰好なお尻を思い切りひっぱたいやりたいような気持がした。卑屈に這い寄って来て

「のり子女王様、御靴を磨かして下さいまし」

と手を延して、彼女のハイヒールに触れようとする。

ぞっとする嫌悪感に、彼女はぺっと床に唾を吐き捨てた。すると、三原君は犬のように、

その唾を、べろべろと舐め始めたのだ。

川島氏が出勤して来た。三原君が卑屈な態度で前に立った。

「昨日から何も口にして居りません。お腹が空いて死にそうです。何か食物をお恵み下さいまし……」

「お前のような役立たずにやる

金はない。お前のような犬畜生にも劣る恥知らずは、将来、麗子の排泄物でも食べさせられて生きてれば、丁度良いんだ。お前なら、のり子さんのおしっこでも飲めといわれれば飲むだろう！」

三原君は、のり子嬢の方に向き直って、うじうじと卑屈に小腹をかがめた。

「のり子女王様お願いです。おしっこを飲ませて下さい」



と哀願し始めるのだ。この厚顔無恥な態度に、のり子嬢は三原君の頬っぺたを力一杯はりとばした。

「そうだ！ お前はそうして、今後ずっと麗子にお仕置きを受けることになるのだ。のり子さん。此奴にお仕置きの味を、みっちりと思ひ知らせてやりましょう」

三原君の汚いランニングシャツを引きむしった川島氏は、それを三原君の口の中に押し



込み、机の抽出しからロープをとり出して、三原君の両腕を胸の前で縛り上げた。ズボンからベルトを引き抜いた川島氏は、それのり子嬢に手渡した。

「お前が奴隷としての勤めを怠ったら、麗子のお仕置きを受けることになるのだ。果してお前にそれが耐えられるかな？ さあ、のり子さん、此奴を思いつ切り、折檻してやりなさい」

川島氏は興奮した口調になった。のり子嬢は人を鞭打つなど初めての経験である。一瞬、逡巡したのだが、何故か、何に對してだか、自分でも判らぬまま、何か無性に癪にさわったのり子嬢は、いきなりベルトをふり上げて、三原君の裸の背中に力一杯たたきつけた。ピューと空を切ったベルトが、はじけるような音を立てて背中を切り裂く。

夢中でベルトをふりまわすのり子嬢の傍で川島氏も上気した面持で立って居た。

「役立たず奴が、そんなに金が欲しけりゃ、ちんちんでもしてみせたらどうだ！」

川島氏に犬そっくりのちんちんを何度もやらされた三原君は、漸く、百円札を二、三枚床に投げ与えられて、血の滲んだ背中に古ぼけた詰襟を着込んで、食事をする為に街に出

て行った。

★★★★★

それから一週間経った。

最初のうち、余りにも卑屈で厭らしい三原君に對する嫌悪から、お仕置きしていたのり子嬢だったが、今はもう、三原君を責め苛み、苦しめる事自体の妖しい興奮にすっかり取り憑かれてしまっていた。足許に土下坐した三原君の手の甲をパンプスの底でぐいと踏みにじり、そして泣きそうな顔をして苦痛に耐える三原君の表情を、じいっと覗き込んでいると、ぞくぞくする様な陶酔感が湧いて来るし、じいんと手にこたえる鞭打ちの感触は背筋がしびれるほどの快感をよんだ。

社長室は防音壁でびったりと仕切られて居たし、許可なしに誰も入って来る者はなかった。そして、昼間、川島氏と一緒に散々三原君を責め苛んだのり子嬢は、帰りがけにそつと命令するのだった。

「今夜また、たっぷりとしごいて上げるからね。裏口の錠を外してお置き」

そして、深夜の文具店の倉庫で、昼にもまして苛酷なお仕置きの場面が展開するのだった。鞭打ち以外にも、のり子嬢はいろいろな拷問の方法を案出した。三原君の臀穴に太い

鉛筆の柄をぎりぎりつつ込んで、彼の苦悶の表情をじつくりと楽しんだ。又、自転車の空気入れで、彼の肛門から空気を一杯に送り込んでおいて、仰向けになった腹の上をぐいぐいと踏んだ。腸の中の空気が肛門から奇妙な音を立てて噴出し、三原君は悶絶せんばかりののたうち廻ったが、のり子嬢は大声を上げて笑い続けた。小柄ながら肉付きの豊かな、ずっしりと重い、のり子嬢を背中に乗せて、尻を鞭打たれながら、息を切らして広い倉庫の床を這い廻らせる事もある。

思う存分三原君を苛め抜き、倦きると、疲れた、といって、激しいお仕置きで息も絶え絶えの三原君に命じてマッサージをさせ、揚句の果ては足の裏から始まる全身舌奉仕を命じられる。そして、「いつか、おしっこも飲むといいたわね！ お望み通り飲ませて上げるわよ」という事があって以来、のり子嬢の方がむしろ、この事にすっかり興味を覚えてしまったようだ。

昼間のお仕置でも此頃はすっかり、のり子嬢の方がリーダーで、川島氏の方が助手のよくな恰好になってしまった。最近では、川島氏も一緒になってのり子女王様と呼ぶようになっていた。

★★★★★

結局、川島文具店に四週間滞在した三原君は東京に帰って来た。

それから更に一週間後、三原君は、自宅の冷房の効いた書斎で、湯上りのさっぱりした身体をタオル地のガウンに包み、坐り心地の良さそうな肘掛椅子にゆったりと背をもたせてビールを飲んでいた。

机の上には、川島氏からの部厚い手紙が届いていた。手紙には三原君の協力に対する鄭重なお礼が申し述べられてあった。

川島氏はマゾヒストである。若い頃、軍隊で当番兵時代、嗜虐的な上官夫人にマゾヒストとして徹底的に仕込まれたのである。

所が、終戦後、再び嗜虐の女王様に廻り遭う機会なく悶々の日々を送った川島氏は、その捌け口を仕事に求め、その強烈なエネルギーを集中したから、業績はぐんぐん伸びて今や近県一帯の業界を牛耳る現在の地位にのし上ったのである。そして、美しく貞淑な現在の妻を得、そして、一粒種の娘は女子大に入る迄に成長したのだ。所が、春、上官夫人に骨の随迄思い知らされた被虐の味は忘れる所が益々燃え上り、このままで無為な日々を費すのが貴重な人生を全く無駄にしているよ



## 「奇ク番外地」

木戸川 健

一、マニア・ナンセンス  
久方ぶりに奇ク十月号を一気に読んで、やむにやまれず筆をとって、好奇と期待を一身に集めて、ハジをかく。

「アレ、君、マニアだね」

と橋行司子さんがおっしゃる。

「マニアですよ」

「ぼくは又、スペシャリストかと思った」

と、箕田編集長が無然とする。

「スペシャリストは、ひどいですね」

で、私は「フリー」と、溜息をつく。

### 二、感想

黒淵嬰一氏の「アリアドネ」が完結したらしい。私は全部読んでいないし、この事に関して、福田久文氏が懇切丁寧な解説を試みておられるので、今更、私などの出る幕ではないのだが、一応言わせていただければ、この作品を読みこなすという事は、

一応当時の歴史も知っておかなければならないし、眼光紙背に徹して理解せねばならぬ部分も多いので、大変に苦労するが故に総じて読者には極めて不親切な作品であったという事が出来るだろう。これだけ不親切に徹しきった作品、見た事ないね。かてて加えて難解な文字を羅列されて、故意に世の向っている方向に反逆を試みんとする心意気——天晴れという他なし。

貴人のバリバリズムとでもいおうか。まあ色々と解釈もあるであろうが、私は、これは見事な反骨精神の昇舞であったと思うのである。わからなければいいよ、難解なら読まなければいい、たしかに、文学にはそういう世界もあるのである。そして、奇クの背骨とは、実はこの精神ではなからうか、と思った時——「燕省何ぞ鴻鵠の志を知らず」総てが氷解した次第である。



うな焦りに似た気持ちに駆り立てられたのである。

被虐以外に人生の目的はないとさえ思えるのだった。焦った川島氏は女秘書に思いの程を告白した。

所が、このような心理を理解する心のゆとりのなかった彼女は直ちに辞職を願い出て逃げて行ってしまったのだ。此の頃から三原君との文通が始った。

偶々、休暇を裏日本で過すプランを立てていた三原君から極めて興味深い提案を受けたのだ。

川島氏は求人広告の応募者の中から、高橋のり子嬢を新しい秘書に採用した。

そして三原君が、やって来たのだ。

三原君が帰京した日、川島氏はのり子嬢の足許に土下坐して隷属を哀願していた。

今や、すっかりサディスティンになったのり子嬢は物憂げに云ったものだ。

「どっちだって同じだわね。ただ、お前が、わたしの責めに耐えられるかどうかは、みものだわね」

そして、今、川島氏は、のり子嬢の為に黒板塀の一軒を構える事にした由である。

わからなければいいよ——というのは、前衛精神にも通じている。最近モッズ族などといって、心がまえはどうか知らないけれども、ナリだけは前衛的な若者たちが存在している。私には、このナリはわからないのである。わからないといえば、彼等はアアソウというにきまっている。

本人は結構満足しているのである。大人どもが、勝手な解釈や批判を試みる事はない。ホットキアアいいのである。そのうちなおる。中々なおらないのが、精神の問題で、心もナリのようにモズだったら、こりゃ、もう、天晴れなものである。

しかし、心もモズなものは、ナリカッコウで、粹がたりはしないだろう。

### 三、セプテンバー・ソング

モン・シェリーとは、フランス語で「私のいとしい人」。でも、いかれたネオンライトのモン(MON)はつかずに、シェリー(CHERIE)とだけ点滅する。

私(MON)がなくなっちゃったのさ。

時折、天井が微かに揺れる。——鶴見線が通る。またの名を、臨港線とも呼ぶ。

鶴見線を起点に、臨海工場地帯を扇町まで伸びている。その部分、次の駅まで高架の鶴見駅の近くにあった。ガード下の、それがハバー・モン・シェリーであった。

その夜も、私はそのバーで飲んでいた。客は、私の他に若いアベックが一組いるだけ。うす暗いすみっこコンパートで、いるのかいないのか、ひっそりしていた。

昭和初年の遺物みたいな電気蓄音機から音楽が流れていた。「セプテンバー・ソング」私は口ずさんだ。「九月の歌」を。

私は孤独をかみしめる。上を、又、鶴見線が通る、もう沢山だ。私はむしろ腹立たしく、佻びしく、しかし、わざと陽気に、「オカンチヨウ」と云って立上った。

「あら、いやね」ホステスが笑う。

「毎度、エッチですみません」

ホステスは、しかし、次には笑わなかった。何かを覗うように、私を見る。

「顔に——」私は、顔を逆させた。

「何かついてる？」

「ついてるわよ。今夜は——」

「今夜がついている。紺屋の白袴」

「又、そんな事をいう」

「ウーン」と、ひっぱって、ホステスがひっぱたく真似をした。

台風二十一号の余波で、外はしのつく雨であった。今夜は荒れるか。——と

「あなた——」ホステスが、極く静かに言った。「お金、持ってる？」

告白手記

バラの荊罰

木原浩二

私は十六のときの春、高校を無断で中退して、大阪へ来ました。

本当は東京で働くつもりだったのが、大阪の列車に乗ってしまったからでした。

私の田舎は磯つりでは全国に有名な、神奈川のS岬にある、漁村です。

大阪は生れて、はじめての土地でした。大勢の人の後ろについて切符を買うと、地下鉄の天王寺でおろされました。

私はべつに当てもなく、通天閣のはなやかなネオンが、緑の木の間から輝いてる公園へ、足を向けました。

美術館の裏で、ぼんやりベンチに腰をおろ

しました。

私は自分の運命が、そのベンチから大きく変わってしまうなどは、夢にも思いませんでした。本当に運命って判りません。

“お金でも落したんじゃない?”

優しい夫婦が、私の前に立っていました。

それが、毒島夫婦だったのです。

アベノ橋を渡って少し左へ曲がり、露地を二丁ばかり入ったところに、毒島の家がありました。

“私たち夫婦はね、あなたのような、迷える羊を拾って来ては、一人前に働ける人間に育てて社会へ送り出す使命をもっているのよ。”

お金のことや、衣類の心配なんか少しもいらないから、当分ゆっくりしていいさい”

私は毒島夫婦をそのとき、神さまだと思いました。

でも、その家の部屋は外から見ると大違いで、一室ずつが個室になっていて、ベニヤ板のドアには、南京錠がかけられるようになっていました。

そして小さな二尺四方の窓が一つあるきりで、そこから時々誰かの眼が覗くのでした。毒島夫婦の目ではなかったようでした。

“少し散歩させて下さい。息がつまりそうです”





三日目に、とうとう哀願すると、毒島の奥さんは、けわしい眼付で、

「警察にあなたを引渡すのは訳ないのよ。家出人と浮浪者を、私たちはこうして守ってやっているのじやないか、修養だと思って、お部屋で辛抱なさい」

その晩のことです。

隣の部屋に誰が入った様子でした。最初泣いているみたいな声がかきこえ、奥さんのお説教が低い声で、永いことづづいていました。

やがて、鍵のおりる音がして、部屋の中は静まりかえりました。

「キミも家出人かい？」

私は押し殺した声で、壁板にむかって、話しかけてみました。泣き声で、

「誰です、あなたは？」

「僕の名は木原浩二というんだけど、キミも連れてこられたんだろう？」

暫らく返事は戻ってきませんでした。が、やがて、

「新世界で映画を観ていたら、隣に腰かけてきた、お婆さんが、いいところへ連れてったげる、とここへ……」

「じゃア、家出じやないんだね？」

「でも、家出みたいなんなんだ。おじさん

とこのクリーニング屋で働いてたけど、嫌で仕様がなから、ぬけ出して映画を観て遊んでいたんだもの」

まるで女の子みたい、優しい声音です。私は友人が出来たので、いっぺんに楽しくなっていました。

一週間、覗き窓から食事とのみものを与えられるだけの生活がつづき、隣の少年と話し合うことさえも禁じられてしまいました。

まるで牢獄です。刑務所でも散歩ぐらいさせてくれると聞きました。この家はどんなことをする家なのか、私は不安で胸がふるえました。すると、

「さア、今日から外へ出してあげるよ。もうこれで警察だって、あんたを家出人搜索の依頼からはずしているだろうからね」

「奥さん、僕、なにか働いてみたくて仕様がななんです。体を動かしたくて、むずむずしているんです」

「旦那さまが、もう少しで、お帰りになるからね、お戻りになったら、お勉強がはじまりますよ」

奥さんの言ったお勉強のことを、いまから事実のまますべて書いてみます。

まず、服を着替えさせられたのです。十七

八の娘が着る、ワンピースです。パンツも勿論、女ものです。恥かしくて恥かしくて仕方ありません。次は絶対に男の言葉をつかつてはいけません。

歩き方も、手のつかい方も、眠るときも。そして、私の部屋に等身大の鏡が運びこまれて来ました。

私は生れ変わったのです。

名前も木原浩二から「のぞみ」と呼ばれることになりました。

毒島宏は、この家の主<sup>あるじ</sup>でした。優しい物腰で、とうてい四十とは思えない紳士風の男でした。どこかのクラブのマスターということでした。

「のぞみ、どうだい、生れ変わった気持は？」

「……」

「ははは、赤くなったね。最初は誰だってそうなんだよ。だけど二カ月も経ってごらん。自分が本当は女だったんだということに気がつくから。のぞみの幸せは、そのときからはじまるんだよ」

毒島宏はそう言って、私を優しく抱いてくれました。私の胸に手をさし入れて、

「いまにおっぱいだって、はり出してくるかからね、ほんとだよ、ほんとに奇蹟が起るよ」

と私の胸から、腰へかけて、たんねんにマッサージのようなことをしました。

私は喉を閉じて、毒島宏の愛撫に身をゆだねていました。

毒島宏は毎晩、私の部屋にやって来ては、色々な女のすることを教え、私に

“ああ、いまに素晴らしい女になるぞ”

と眠を輝かせて呟くのでした。

私の隣の部屋の少年は、奥さんに訓練をほどこされている様子でした。

一度、廊下ですれちがったとき、少年は、

恥かしそうに、私を盗み見しました。

でも、その少年は、私のように女装ではなく、毛糸の黒いセーターに、細身の紺のズボンをはいていました。

“さあ、今夜から店へ連れてってやろう”

“店？”

“お勤めが、はじまるのよ”

“こわい、いやです！”

“誰だって、はじめはそうよ。でも店には、のぞみの、お姉さんや、お兄さんが大勢いるから、ここより何十倍も楽しい、天国みたいなところよ”

奥さんは、私にハンドバッグを渡すと、  
“ヒールの歩き方も上手になったわね。あな

たぐらい女らしい娘は、街にはいないわ”

私は街へ連れて出られました。

恥かしくて、眼を伏せていると、

“ほら、ほら、のぞみが美しい娘だから、男たちがふりかえって見ているでしょ”

なるほど、奥さんの云う通り、すれちがう

男たちは、みんな私を見て、“ほう！”といった表情で立去るのです。

“今日から、のぞみがお手伝いしてくれますからね。みんな可愛がってやってね”

店は、坂町の裏通りでした。その時はまだそこがただ賑やかな、バー街だとししか知りませんでした。

胸がドキドキ鳴っていました。みんな私より朗かで、美しく、楽しそうでした。

“ここへ来るお客さんわね、みんなあたしたちの理解者よ。だから安心して、お客さんのおしやるとおり、遊べばいいのよ”

私より二ツ年かさの、しのぶお姉さんが、ボックスと一緒に腰かけてくれました。

“まあ、美しい指ね。そのうち、きつとダイヤの指輪が、この指を飾ってくれるようになるわ”

しのぶさんは、私の指を唇で痛いくらい吸うのでした。

“ニューフェスの、のぞみちゃんよ。可愛がってあげてね”

直木新也、会社専務、(四十五才)が私の初めてのお客でした。二本柳なにがしの面影があり、直木はあまりお酒をのまずに、マスターに断わってあるからと、三十分ばかりすると、待たせてあった車に、私を乗せました。それが、私の水揚げだったのです。

“毒島には十万払ったんだよ。しかし十万は安かった。よくこれだけの娘に仕込んだものだ”

私は直木の裸の胸毛に顔をうずめて、泣きました。私はなにがなんだか分かりません。

“直木専務さん、本当に私、女になったのかしら？”

“ああ、立派な女だよ、僕がこれだけ満足してるのが、なによりの証拠じゃないか”

直木は鏡に私の裸を映して、腰から胸から背中に至るまで、接吻の嵐をふらすのでした。

そして、感情が激しくなると、ベルトで私の腰を縛りつけ、私が悲鳴をあげるまで、しめつけるのでした。

肌にベルトが喰いこんで、蛇がのたうったみたいな血のあとが一筋のこりました。  
“ひどいわ！ひどいわ！”



直木は、きらきら光る眼で、私の白い腰をいつまでも眺めているのでした。

× × ×

「どうだった、直木さんに可愛がって頂いたかい？」

朝方、死んだみたいな体を、クラブまで送りどけられた私は、毒島夫婦にいたわられて豪華な部屋のベッドに寝かせられました。

「次のニューフェスがやって来るまで、のぞみがここをひとりで使っているのよ。ただし、お店の仲間を入れることは厳禁だからね。お店の仲間と一緒に寝たことが私たちに分ったら、おしおきで死ぬ程苦しめてあげるから。判ったわね」

私は死んだように、眠りにおちていきました。

二面鏡にいつの間にか、陽がいつぱいにあたって、どこからか、ムード音楽が流れてきました。

テーブルには、牛乳とトーストが、運ばれてあり、純白のドレスが、窓からの風に、ゆらゆらゆれていました。

私は入念にお化粧をして、バスにつかり、肌にコールド・クリームをいっぱいぬりつけて、香水をまきました。

トントン、とノックがきこえ、毒島宏が笑いながら部屋へ入ってきました。

「惚れ惚れするなあ、全く」

私は毒島宏に傍へよられると、体が無意識のうちに、彼の腕の中へ崩れてしまうのでした。

「直木の奴がね、奥さんと正式に離婚するまで言ってたよ」

「マスター、私、でも…、やっぱり自分が分らないの、どうして男の私が、こんな女に変わってしまったのかしら」

「ははは、のぞみは、もともと女の子だったんだよ。間違って男の子として育てられただけなんだ」

「でも、身体は立派な男のものをもっているわ」

「男のもの？、でも、のぞみのものは役に立たない筈だよ」

「そうかしら？」

「のぞみは、直木専務や、僕にこうして抱かれていて、ものが大きくなったことが一度でもあるかい？」

「……」

「そら、不思議な顔をしてるじゃないか。俺の六感なんだよ。天王寺公園のベンチで、の

ぞみをはじめて見たとき、俺はなんて素晴らしい少女なんだろうと、感動したんだ。女房の真寿美だって、妬けるくらい美しい娘だと云った……」

「嘘！ 嘘です。のぞみは、確かに男の子でした！」

毒島はいきなり叫んでいる私の唇を、自分の唇で吸いあげてしまいました。

私はすると、身体中がだるくなって、腰のあたりがしびれ、思わず、毒島の腕に歯を立てて、呻きました。

毒島はベッドに私を横たえ、

「考えることなんか、なんにもないんだよ。のぞみは幸せな美しい娘なんだ。迷わないで、ほら、このドレスを着て、店へおりて行くんだ。お客さまがおまちなねだよ」

私は暗示にかけられたように、うなずくと身づくろいをはじめたのでした。

× × ×

直木専務は、毎晩、クラブへやって来ました。私はいつの間にか、専務のくるのを待っている女でした。

そして直木専務がちよっとでも、しのぶ姉さんや、他の仲間と手を握ったり、腰を抱くふりなどしていると、

「こわい、こわい！のぞみの目が吊り上って  
る」

と、みんなからひやかされるくらい、妬け  
てたまらなくなるのです。

「ねエ、のぞみだけを愛して、ゆりや、チコ  
や、昌子にさわったら、あなたを殺すかも知  
れないから」

いつものホテルのベッドで、しどけなく抱  
かれてみると、私はくどくどと直木専務に甘  
えてくり言をいうのでした。

「のぞみ、今夜は、のぞみの顔に花を飾って  
やろうと思ってね」

直木はいつて、バスルームに満々と水をた  
たえて、その中に私を裸にして入れと命じま  
した。

そして、枝のついたバラの花を私の鼻の穴  
や、耳の穴にさしこんで、

「いい匂いがするだろう。これは昔ギリシヤ  
のアルダンという画家が、美しい娘を殺すと  
きに用いた、バラの刑というのだよ」

私の鼻の穴に、こんどは、花びらをつめこ  
み、唇を開けさせて、口のなかにも、いっば  
いバラをさしこむのでした。

むんむんしたバラの花の匂いに、私は酔っ  
てしまい、まるで幻を見るみたいに。

「直木専務さん、もう許して、許して……」  
と、バスにつかたまま、泣きだしてしま  
いました。

「いいや、許すもんか、今夜は、このまま、  
ここで眠るんだ」

「死ぬわ、体がだんだん冷たくなってくるも  
の」

「ははは、あたり前じゃないか、これはバラ  
の刑、つまり死刑なんだ、死刑執行だよ」

直木はジョニ黒を、チビリチビリやりなが  
ら、今度は、お湯をいれはじめました。

水がだんだん、お湯は変って、やっと身体  
が暖かくなると、

鼻の穴にさしまれたバラのつぼみが、少  
しずつ、少しずつ、ゆっくりと、ふくれあが  
ってきて、息が出来なくなってくるのです。

「直木さん、バラが、バラが鼻の穴をくすぐ  
るって、く、くるしい！」

「ほら、ほら、のぞみの鼻から、バラが咲く  
んだ、よく見物するんだ」

つぼみは、だんだん開いてきます。

そして、湯はどんどんタイルに流れ、私は  
もうお湯の熱気と、バラの花の香りで、頭も

目も、すっかりかすんでしまいました。  
「なんて美しいシーンだろう。これだったら

カメラを持ってくるんだった。カラーだった  
ら、完全な芸術品だ」

直木は、私がずるずると、バスの中へずり  
こんでゆくのを、酔った目で眺めているので  
した。

気がつくと、ソファアに、バスタオルに包  
まれて、私は横たわっていました。

直木も安らかな寝息をたてています。私の  
身体の内たるところに、バラの花びらが、押  
絵のようにつついていきます。

私はなぜか、このまま、もう死んでもいい  
ような幸せな気持になったのでした。

直木は、化粧している私の気配に起上って  
くると、

「二人だけの秘密だよ、バラの荆は、本当は  
貴族だけの間で秘かに行なわれた荆罰なのだ  
からね」

私は、直木に抱かれて、

「誰にも言わないわ、だから、だから、愛し  
て、いつまでも、いつまでも」

とまた熱い涙が頬をつたうのでした。

× × ×  
三カ月経ったある日、  
「お姉さん、よろしく、今日からお店を手伝  
うことになりましたから」



と、あの隣室にいた可愛い少年が、私に挨拶しました。

バーテンさんのアシスタントだそうで、白いボーイの服がよく似合って、映画の太田博之みたいです。

私はそのとき、田舎の弟のことをふと脳裡に思いうかべました。

丁度、十四になっている筈です。

その少年は正也という名でした。

「お姉さん、ボクお姉さんに逢いたくて、ずいぶんつらい修業に耐えてきました。だから他の人より三週間も早く、お店へ出られるようになったんです」

正也は誰もいないすきに、私に紙きれを渡しました。

トイレの中で読んでみると、

「お姉さん、救けて下さい、ボクは殺されるかも知れません。奥さんがボクを可愛がるので、毒島さんが、やきもちを妬くのです」

鉛筆の走りがきでした。

私はトイレで、その紙を流してしまい、出てくると、目でうなずいてやりました。

でも、私はわざと、正也には冷たくしました。無関心を装って、少しでも甘えた素振りを正也が示すと、

「なによ、いやらしい子ね！」

などと、わざと大きな声で、みんなに聴えよがしに言ってるのでした。

その晩のことはよく分りませんが、私が気がついたときは、もう部屋の中は煙で充満していました。

誰かが、「火事だ！ 逃げろ！」

と叫んでいました。

私は大変なことになったと思い、ドアを開けて階下へ逃げようとする、もう炎は、めらめらと躍り場まで匍いあがってきていました。

「これで私の一生は終る……嬉しい！、私はこのまま死んだ方が幸せなんだ」

私はソファに坐って、煙草に火を点けました。

ドアがバリバリと、すごい音で燃えはじめています。

でも、まだ消防車はやって来ません。

電気時計は二時四十三分で止っています。

「お姉さん！ お姉さん！」

煙の中から叫び声が飛び出してきたかと思うと、正也が水をかぶって、私を救い出しに来てくれたのでした。

「いいの、私はこのまま死にたいのよ。静か

にしておいて」

「バカ！ バカ！ バカ！、お姉さんは、ボクの生甲斐なんだ。お姉さんが死ぬのならボクも死ぬ！」

正也は、私にすがりつく唇を重ねてきました。

熱い炎のなかで、私と正也はいつまでも抱きあって唇を吸い合っていました。

「正也さん、見えるでしょ？」

「なにが！」

「ほら、あそこにも、ここにも、見えるじゃないの」

「お姉さん、なんのことを言ってるんです」

「バラよ！、バラの花が、バラの花びらが、お部屋の中にいっぱい！」

正也は、きっと私が狂ったものと思ったに違いありません。

私の身体を突き離すと、炎のなかへもういち度飛びこんで行ってしまいました。

炎が、炎の花びらが、いちめんに咲きはじめて、私の身体をつつみはじめました。

「直木専務さん、さようなら、あなたにやってもらったバラの荆罰が、いま、熱い炎のバラの荆罰になって、私を焼きはじめているのです。直木さん、ありがとう、のぞみは幸わ

せです”

でも私は死ねなかったのです。

毒島の手で、失神しているところを救け出され、病院へかつぎこまれたのです。

私はいま丘の見える病室で、毎日、火傷をいやしています。

直木専務が特別に、この病院へ入れてくれ

たのです。

“正也って子が行方不明なんだ。毒島君、必

死になって探しているよ”

私はよっぽど、逃げたんだわ、と云おうとしましたが、

正也の幸わせを願って黙っていました。

“ねエ、身体がなおったら、またバラの荆罰

を執行して下さい”

直木はうなずくと、枕元の花瓶から、バラの一枝をとりだして、私の鼻の穴に、そっとさしこむのでした。

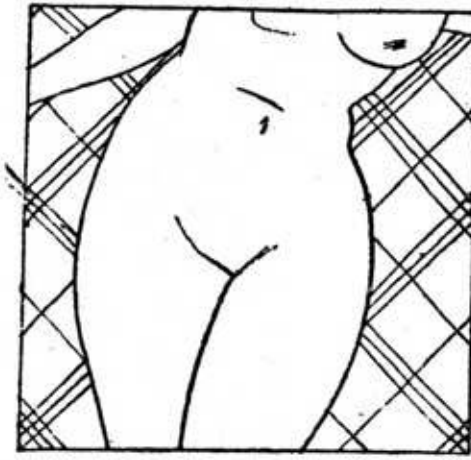
“のぞみ、お前は、もう私のものだよ”

直木専務の目にも熱い涙が光っているのでした。

## 告白

### 手錠への恐怖と憧憬

河村 正己



私は元来内気な性質で、小さい頃に父を亡くし、その愛情を知りません。ですから同性の友を得て、兄とも弟ともなって、お互いに楽しく生きたいと思います。私がこういう気持を強く抱くに至ったのは、一つの思い出があるのです。

私が十七の春、こんな事がありました。戦時中の事です、身体虚弱者を鍛える

国民修練所という施設がありました。それも結局、軍隊の予備的存在である青少年の訓練強化機関でした。午前五時に起床、全員パンツ一つになって近くの神社まで駆歩をさせられます。そこで拝礼を済ませてから建国体操をやり再び駆歩で宿舍へ帰ります。

入所者の殆どが学生で各校から集ってい

るものですから、自然に学校別に派閥が出来、ちょっとした事でも口論の原因となり殴りあい絶えません。弱い者がいじめが横行し、中にHという意地の悪い学生がいて私の行動が気にいらないうって、事毎にいじめられました。或る日、このHに呼び出されて裏山の森の中へ行きました。Hの背後には数人のグループが集っています。

腕力に自信のない私は、素直にあやまりましたが、もともと理由もなしに弱い者をいためつけようと考えている彼等のことですから許してくれません。何か相談した彼等は「気合を入れてやる」と言いながら、入れかわり、私を殴りました。

地面にころがされてシャツは泥まみれになりました。その中の一人がズボンのベルトを引き抜き、私を後手に縛り「可愛がっ



てやる」と全員の見ている前で、学生仲間  
で言うところの「解剖」をされました。

それから度々呼び出されては、全く無  
抵抗の私は後手に括られて自由を奪われて  
いじめられたのです。

その中、戦争も終り、私は再び学生生活  
に帰りました。ある日曜日、ぶらりと盛り  
場へ出て雑踏の中を人にもまれながら歩い  
ていました。

突然、私の近くで「スリだ」という声が  
しました。何事が起ったのだろうと私は立  
ち止って見ていました。

被害者という老人が巡査を連れてきまし  
た。すると、今迄私の隣りにいた三十位の  
男が、スリはこの男だ、と私を指さすので  
す。私は別に身に覚えのないことなので、  
何にデタラメを言うのだと思って立って  
いました。

巡査が来て私のポケットを探ったところ  
何んとしたことでしょう。老人の盗まれた  
という財布が出てきたのです。勿論、もう  
金は抜きとられて入っていません。私はそ  
の場で本署へ連行されました。潔白な私で  
すから、行って話せばわかって呉れるだろ

うと、たかをくくって連いていったのです  
が、警察署の門をくぐるなり、両手錠をか  
けられ急に横柄になった巡査にこずかれて  
調室へ入れられました。

取調の刑事は、最初から私を犯人扱いで  
弁解をきくどころか、抜きとった金を渡し  
た仲間の居所を白状せよと責めるばかりで  
す。

「私は何にもしていません。早く帰して下  
さい。財布のことは何にも知りません」

必死の思いで懇願しましたが、しぶとい  
奴だと、手錠をかけたまま頬を殴られ額  
をこずかれました。手錠が手首に喰い込ん  
で赤く皮膚がむけていましたが、不思議に  
痛さは感じませんでした。

私は家や学校へ迷惑をかけてはと思い、  
でたための住所や名前を言っていたので、  
一層心証を害し、検事拘留で五日間も留置  
されました。二日目に両手錠をはめられて  
検察庁送りになった時は、途中で知ってい  
る人に会わないかと、そればかり心配でし  
た。

日曜日の午後から行方不明になった私を  
探して母は半狂乱になったのですが、五日

目に学校の担任の先生と相談した結果、警  
察へ捜査願いを出したことから、よく似た  
男が留意されている、というので私が無実  
の罪で捕っていることがわかったのです。

担任の先生の保証でその日の夕方、釈放  
されたのですが、無実が晴れたわけではな  
く、二度とこういうことをすると、今度は  
刑務所送りだと脅かされて、警察署の門を  
出たのです。只、平常の私の行状をよく知  
っている母と先生だけは、私の潔白を信じ  
て呉れたのは、せめてもの慰めでした。

それ以来、私はあの時の手錠の恐怖に身  
をさいなまれ、刑事の責めの言葉が恐ろし  
く迫ってくるのです。こうしたことが原因  
になったのでしょうか、以後のナイトプレ  
ーに最大の快楽を覚えるようになったので  
す。自室で一人にいる時、或は床に入っ  
ている時、責められる幻想に幸福を感じるよ  
うになってきたのです。あの鬼のように冷  
酷で乱暴な刑事がなつかしくさえなっ  
てくるのです。しかし、二度とそういうことは  
望み得べくもなく、自縛と空想に歓びを感  
じ、手首に喰い込む手錠に、果されない夢  
を描いております。



《毒婦物語》

凄艶お百噺

富士春秋

しかけ罫

江戸の不夜城って、よく言ったもんだ。  
宵に入ると遊冶郎達がジャカスカ、財布を  
はたいて引手茶屋から登楼する。夜っぴて三  
味線の音と乱痴気騒ぎの人声が、吉原を賑わ  
している。

「男達の気が知れないねえ。女が欲しけりや  
あたしが居るよ、ホッホホ。今日は助七が来  
ることになっているんだが、奴さん、懐が淋  
しいし、きつと仲の町の女のところへ、せびり  
に行ったよ。しょうのない男さ、明日になり

や、たんまり分け前が入るっていうのにさ」  
女ってのは、お玉っていう、あたしの乾分  
みたいな小娘。まだ番茶も出花の十八だがれ  
つきとした掬摸。近頃御用風が一寸うるさく  
て、引手茶屋へしおらしくしけこんで暫く、  
女中勤めしているのだ。

別に情夫でもないが、助七一人きめで、お  
玉の相手になっている。トントンと上って来  
て、この二階へ助六が長い顔を出した。

「姐御、今晚は」

「あたしは、今この賭場で大ガラを食って、  
大事な白博多の帯まで抵当にとられたところ

さ、クサクサするよ、全く」

「ほ、ほう、そりやいけませんね」  
と、助七が笑って覗く。

「もう止めようよ、疲れたよ」

「あつしもお手許不如意ときてやがるんで、  
お貸ししたくても無い袖は振れねえ」

人間並みのことを言う。

「お玉から肘鉄だろう」

助七、頭を搔いて笑う、凶星だ。

「それより、姐御」

「シッ、こっちへおいで」

と声を憚ってあたしは助七を、裏手の小部



屋へ呼んでかねてからの、打ち合せをする。

「利三郎は明日の晩、来ることになっているんだよ、間違いないよ。これで約束の百両が手に入るんだよ」

と、あたしは北叟<sup>ほくそ</sup>笑んだ。

「それでね姐御、利三のヤツを十万坪の殺しをお菊と言っただろうと責めこんでギユウの音をあげさせてからって手もいいでげしょ」と、助七。

いい案だと、あたしは賛成した。

十万坪、利三郎、百両——と、このあたしとの関係を一寸しゃべろうかね。

あたしの名は、芸者のお菊。もっとも表向きの名だけどね、日本橋の紙問屋上州屋<sup>せがれ</sup>の伴利三郎って三十五になる美<sup>よ</sup>い男が、あたしに夢中で今までに入れ揚げた金が二百両、最後の百両を持って来たら夫婦になってやろうって約束なのさ。奴さん喜んで金の才覚もできたらしく、明日の晩ってわけさ。一皮剥けば、あたしがどんな女かご存知ないのさ、ホッホ。今から十日前かね、砂村の十万坪という野っ原で、桑名屋徳兵衛っていう年寄りが、斬り殺されて大評判になった。下手人は分らないが、利三郎があたしと一緒に寝ていると、うなされるあたしの声に気がつくと言うんだ

よ。「ゆ、許して」とか言うってんさ。もしや何か関係でも……と不安になったか、このことをお玉へも言ったのさ、利三郎とお玉は顔見知りだよ。お玉は万事知ってるだけに、ギクッとしたが「なアに若旦那、お菊さんに限って、そんなことがあるのですか」と弁解した。

お玉から聞いて、あたしも油断できないと思ったよ。取れるものを取ったら畜生ッと思心した。

### 利三郎無残

十万坪徳兵衛殺しの下手人は、このあたし

さ。  
大阪の回船問屋桑名屋の女中から、はじまって徳兵衛の妾<sup>めかけ</sup>になって、邪魔なおかみのお房を寒中素ッ裸にして吊し殺して、手に手をとって江戸へ出たが、不連続きで別れ別れになって五年。もう屑拾いの徳兵衛なんかにはない、しつこくつけまといわれるので、邪魔者は殺せといったわけ。

小雨の中、短刀でプスリ、徳兵衛の脇腹をひと刺し、血みどろになって、  
「騙<sup>だま</sup>したな」

って徳兵衛は、とうとうお陀仏。そこをひ

よっこり通り合わせたのが、掬摸のお玉。

度胸のいい女で、直ぐあたしの乾分になったというわけ。

<sup>かみがた</sup>上方からお尋ね者になっているあたしや、又罪をつくってしまったよ、あたしの名かえ……ホッホ後で分るってことさ。それまでお楽しみ。

向島土手のはずれ、あたしの隠れ家へ利三郎が来たのが宵のうち。もう秋も末で肌寒い風がいやにしめっぽかった。

「利三さん、お金はお持ちかえ」

「ああ、ちゃんとこの箱の中にある。さ、天下晴れての夫婦だよ」

二人は奥の寝床で、祝いの盃を交した。まったく、いい気なもんさ、知らぬが仏ってのは、こんなことをいうんだらうね。

むっちりしたあたしの腕が、利三郎の肩へ回って重なりあって、床に横になった時、ガラリと襖が開いて助七が尻端折りで踏み込んできた。

「ヤイ野郎、俺の女房を」

と、お定まりの亭主役の強請啖<sup>ゆすり</sup>呵さ。

あたしや知らん顔、煙草を吸いつけて笑っていた。

「お菊、これは一体どうしたんだ。お菊と夫

婦約束したのはこの俺だ、お前には亭主はなかつた筈じゃないか」

利三郎は驚き、あわてる。無理もないさ。

ホッホホ。

「ところが、その亭主がここにあつたんだ。

ヤイ、覚悟はいいな」

と助七が利三郎を、引き倒した。

罌に落ちたことを知った利三郎が、

「お菊、騙したな」

と、逃げようとするのを助七が蹴とばし、

さつきから隠れて待っていたお玉と、綿摘み

(私娼の媒介女)のお辰が出て来て、三人で

利三郎を押えつけ、クルクルと帶、素袷を剥

ぎ取って裸にしてしまった。

「お、お菊——」

もがくのを助七が細引きで、高手小手に縛

って椽先きへ引き摺り出した。

六尺禪一本で男は、口惜しそうにもがいて

いる。

「ホッ姐御、いい体してるわね、切り立ての

六尺禪がピッチリ締まってさア」

と、お玉がじっと見詰めて笑う。

## 毒婦の正体

「どうだえ、口惜しいかえ。禪一本の裸で縛

られて、何さッ」

お辰が笑う。四十近い大年増だが凄いい色気

がある女だ。

「どれ、あたしの素性を明かしてやろうか。

芸者お菊たア真ッ赤な偽り、京から大阪へ渡

り歩いたお尋ね者、盗人、美人局、強請、人

殺しの悪事の数々、姐妃と異名をとった、あ

たしや姐妃のお百だよッ」

双肌ぬいで姐妃の刺青、ヒ首咬えて、裾を

捲くり燃えるような湯文字を出したあたしの

姿に、利三郎は真ッ青になった。

「知らなかった、ええ口惜しい」

姐妃のお百と分つての驚きさ、態ア見やが

れッ。

むざむざと罌に落ちた男、このままじゃ済

まされやしない。

「吊っておしまい、禪吊りだよ」

利三郎の禪の結び目に縄を通して、助七と

お玉、お辰が天井の梁へ渡して、力を合わせ

て利三郎の体を引き上げる。

逆さになった男……顔が椽の板面から一尺

ほどのところにある。

「ムムツ、ムムツ、ムムツ、ムムツ」

苦しむ利三郎。そうだろうよ、体の重みで

禪が腰へ細く食い込み、千切れそうだ。

「このお百様の罌に掛ったからにや、男らし

くするんだよ。姐妃はね、男の裸を責め抜く

のが楽しみでね。ホッホ、お玉、お辰もいる

ことだし、存分責めて責めて責め抜かれるん

だよ。苦しいのかえ、苦しいのかえ」

と、あたしや足の爪先で男の鼻を挟み、に

じってやった。

「どうおしだえ、苦しいのかえ」

「おお百、ど毒婦ッ毒婦ッどどどッ毒婦ッ」

裂巾の聲が、男を顫えさせる。その口惜し

い、苦しい、形相ってないよ、凄いいほど。

「ホッホッ毒婦とお言いかえ、あたしや毒婦

姐妃のお百だよ」

ドーン。

力いっぱい男の背を蹴上げた。

ウーンと苦しみやがる。

「これから、ありったけの苦しみをお見せ。

お玉、おやり」

お玉が長箒の柄の先きを、ヒ首で裂いて右

手に握り、ずっと寄って、

「利三さん、姐妃のお百と知った時は、もう

遅いわ、この態よ。あたしやねえ、お前さん

に言うことがあるのよ。それはね、十万坪の

徳兵衛殺しの下手人のことさ」

つまり利三郎が思ったように、下手人はあ



たしだったと……ね。

「ホッ姐御と分っても、今じゃどうしようもないわ、恐ろしい毒婦姐妃のお百に見事にひっかかったのね。悪あがきはみっともないわ、男らしく男の音をあげるのよ、お前さん、この禪吊りは責めの初手よ、もっと凄いやつが待ってるのよ、どう口惜しい」

と、お玉は簪の柄で、

ピシリ！ピシリ！

お玉打ち

男の腰から尻を、打ちのめした。

「くくくくく」

男ア歯ぎしりして地団駄の苦しみ。

ギ、ギ！

男の重みで天井が、軋<sup>き</sup>む不気味な音。

「苦しいの、苦しいわねえ、助七さんやお辰さんも、お待ちかねだしね」

お玉が裾をからげ、真っ赤な湯文字を出して、片肌をぬぐ。オヤ霰まじりの雨が落ちてきたよ。

「お前さん」

春川ナミ才画  
分譲用秘蔵版

女体の下敷力作M画決定版

大判判印画紙極鮮明焼付

七枚一組 三〇〇〇円 略号(ぬけ)

Mマニヤである春川ナミ才が、常に豊満な女性の臀の下にありたいという見果てぬ夢を画筆に托して、ものにした傑作M画M派マニヤなら、二度と手に入らぬこの一組を！！

- 一、若き女の股間で圧死する
- 二、行水する美女の尻に敷かれる
- 三、見事な美女の臀部の下敷き
- 四、人間ハンモックになる男

- 五、尻の下に喘ぐ人間椅子
- 六、逆エビで蠟燭責にあう
- 七、臀の下に埋れて法悦に泣く

(以上七葉のM画決定版)

一概にM趣味といっても、いろいろ多種多様な傾向があります。本画集はその中でも、若くてはち切れんばかりに豊満な女性の臀部の下敷になって屈伏することに喜びを感じる男性にピントを合せてあります。この種嗜好の方にとっては、唯一無二の文献となるでしょう。分譲中止にならぬうちに、どうぞ。

お玉がビュウッ、唸りをたてて簪柄が。

ピミリッ！

ピシリッ！ピシリッ！

続けざま、腰から尻、尻から腰、背にとんでいく。

「ウウッ」

利三郎が苦しみ揺れ回る。柄の尖った先きが利いたらしく、薄血がにじむ。お玉も仲々やるよ、まだ十八やそこらで、ホッホホ。

「くくく、苦しい」

男の絶句。じっと見ていたお玉が、

「禪が切れそうね、骨の髄まで応える苦しみて、こんなもんじゃないわ。序の口よ」

又、連続打ち。男はもう、息をするだけ、

禪がシッシツと音をたて切れそうだよ。

オヤこの男の禪の中が、こんもり高いようだよ、こいつアおもしろいよ、女たちに見せてやる。

「お玉、禪の切れるまでおやり、素ッ裸にするのさ」

「あいよ、姐御」

と、お玉は男の体が大きく揺れ回るようにピシリッピシリッと打ち回した。

「ヒヒヒッ」

男はもう、態アない苦しみの地獄だ。

「褌切れて素ッ裸か、こいつァ見ものだよ」と、お辰が笑って眺めている。

あたしや利三郎の褌の中が早く見度い。

女の前で、はっきり見せられないものがあるんだよ、きつと。

プツ！

とうとう褌が切れた。ドドツと男の体が板の間に落ちやがった。

素ッ裸だ。

ウウツと、裸を丸めようとするやつを、お

玉が、

「ヨイショツと」

脚で男の体を真向きにする。

見やがれ、こいつを。男の物にずいきを巻きつけているよ。フンあたしとの時に……かホホッ。

「何て態さまだい」

と、助七、お辰が笑った。

「お、お百……」

利三郎の素ッ裸が、苦しみ恥かしがる。

## 姐 妃 責 め

お玉はじつと、それを見詰めていたが、

「う、ふふふ。これが男一匹の素ッ裸なのね。

褌一本ありやしない熟し切った男の素ッ裸だ

わ。チチチチだ」

顔を突き出して笑った。そして、

「お前さん、男の生地獄って知ってる。これから姐妃の地獄責めをかけてやるのよ。丁度いいわ、雨の庭へ引き摺り出して、その素ッ裸のまま、褌一本許しやしない、姐御のゾツとするような責めが始まるのよ。助七さんいいの支度は」

と、待ち構えている助七とお辰が利三郎を庭へ引き落した。

太い長丸太棒を、土へうめ立てて、男の手足を上吊し掛け腰のあたりで、丸太からねじって脚を下へくくりつけた。顔と腰のまん前が丁度正面を向いているってわけだ。

「ホホッ、こりゃいい図だね、姐御もやり甲斐があるというもんだねえ」

と、お辰が気味よく笑う。助七とお玉は並んで、男を食い入るように眺めている。

「よし」

あたしや下駄をつっかけて、裾を高々とくらげ男の前へ寄った。

「ヤイ利三」

男は顫え、口惜しい顔。

町人乍ら、がっちりした広い胸、女を惹きつけるような逞ましい腰、素ッ裸の男一匹が

あたしの前でもがいている、姐妃のお百様に蕩し込まれて、責めにかけられる男、しかもぶ態なずいきまで巻いてやがる。あたしや、この責めで利三郎、いやさ男の地獄の音をあげさせてやる、手ぐすね引いて待ってた姐妃の責めだ。素ッ裸の男がどこまで、男の声を出すか、金を出しても見られない図だよ。

キーン！

空気の中、冴えた音をたてる、音を聞くだけでも凄い。

「お、お百、助けてくれ」

利三郎は必死にもがいた。

「フン、男らしくもない」

あたしや、鞭を遠くから振った。男の体めがけて。

キーン！

ダッダッ……鞭の先きが、男の腰のあたりに、稲妻のように光りかすめる。

も一つ、も一つ。

「くくく、くくくッ」

男ア凄く苦しみにもたえる。この蛇皮というものは皮膚を摩擦するようになって、自然に体中の精気が燃えたつのだ。まして男は



面に分る。それに斬られるような苦しみが重なるってわけだ。

## 男 地 獄

ダッダッ、もがき揺れる男の素ッ裸、今度は近くからビューンと一振り。

長くとぐるを巻くように、男の腹から腰へ

男の裸。もっとも！

肉へ食い込む鞭と、真ッ青になって波打つ

キリキリッと巻きつく。

「ヒヒッ」

そり返る男。そのまま、あたしゃ手を緩めず、ジリジリと引き絞ってやった。

「ヒヒヒッ」

## 四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

### 女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

### 豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

本誌のグラビア口絵は諸種の制約のために残念ながら思いきった編集が出来ず、折角撮影した華麗なる緊縛フォトが徒らに葬り去られて、マニアの皆さまの目に触れないという実情であります。嘗て「美しき縛しめ」のアルバムとして限定版写真集刊行の輝やかしい歴史を持つ本誌が、ここにフアンの方々の要望と御期待にこたえて、力作フォトを集成して、グラビア印刷によるアルバムを作成いたしました。

この八緊縛女体アルバムは、若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさ最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずか

ずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも写真面を一きわ大きくしました。

前記二嬢の豊満美と対照的に、更に清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

この一冊にて四人の美女の裸身のすみずみまでが、八縛りVというアクションによって、フアンの皆様方の目の前に極めて鮮明な印刷によって展開されています。どうか一冊を机上にお飾り下さい。

「ホッどうおしだえ、苦しいのかえ、苦しい

かえ、助七お玉も見てるんだよ、納得するまで存分、男の地獄を見せるんだ」

「お、お玉、許してくれ」

と、利三郎はお玉に助けを求めた。

「お前さん、泣きごとと言っても駄目よ、こうなりや男らしく観念して地獄の態を見せるんだね。お辰さんも、お待ち兼ねよ」

お玉は笑っている。千切れるように、男の裸が鞭を食い込ませて凄惨な苦しみ。

「ヒヒヒッ」

地獄だよ。男のずいきの個所が、ぶ態に音でもたてるように、もち上った。

蛇皮のせいだよ、凄く効きやがる。

「いい態だねえ」

と、お玉やお辰は大笑いさ。全く男は罵りものだ——こうして、あたしゃ翌日も利三郎を責めに責めた。三日目に死んだ。又一つ罪づくりをしてしまったよ。どうせ獄門台に上る身だ、ヤケのヤンパチさ。

江戸を売って、秋田へ行こうか、その殿様が妾を探しているって噂だし、うまく化けてやるかホッ。あたしゃ、まだまだ、そこいらの女にや、ひけをとらない色気は、たっぷりあるのさ。

（終）

## 創作

## 「帰路のない旅」

〈前篇〉

山口 広

## 目次

〈前篇〉

一、 乗り逃げの果て

二、 継母と継娘

三、 白百合で

〈後篇〉

四、 だるま責め

五、 付込まれる智子

六、 マリのたどった道

七、 梅子の誕生

108	97	75	60	44	25	1
124	107	96	74	59	43	24

## 一、 乗り逃げの果て

毎日毎日よくこれだけ降るもの、とあきれ

るほど降り続いた梅雨もようやく明けた。と同時にかんかん照りの夏に入ったこの頃、もう六月も終りである。やっと日も暮れて涼しさをおぼえ、たそがれのほの暗さに街は夜の息吹きをはじめた。

神戸では大手のタクシー会社であるSタクシーきっての名ドライバーと自負する前川武は、バックミラーにうつる人影も見逃さないで夕闇の次第に濃くなる海岸通りを流していた。客を拾ったタクシーは制限時速四〇キロのところを五〇キロ以上でつつ走って、武の車をすいすい抜いて行く。

白っぽい服の女が手をあげている。武はコ罗纳を舗道に寄せて自動ドアを開いた。大柄

ではないがよく成熟した体をぴったりとしめつける白いレースのノースリーブのワンピースで締めつけたその女は、細くくびれたウエストにつながる見事なヒップからさきに入れた座席に坐った。濃いグリーンのサングラスが女を神秘的に見せた。白いもみ皮のハンドバッグと大きな紙のショッピングバッグを脇に置くと張りのある声で命じた。

「加納町まで行って」

純白のノースリーブのレースのワンピースの下にうすいブルーのスリッパが透け、胸ははち切れそうに遥れている。

前川武は、運転歴十三年のベテランで、会社でも稼ぎ頭である。



「俺は運転の名人だ」

と豪語するのも当然で、技術でも水揚げでも彼の右にでるものはない。先日表六甲ドライブウェーを、ブレーキを一度も踏まずに降り切った。クラッチを巧みに操作して、エンジンブレーキを有効に使ったのだ。

セカンドを引っぱって加速しながらメーターを倒して、バックミラーにちらと眼をうつしてサングラスを外した女を見て、思わず声を立てそうになった。

こいつだ。いまましい乗り逃げは――



整った顔立ち、すらっと伸びた鼻すじ、形のよい口もと、そして今でもおぼえているあの切れ長の眼もとを引立てる左の眼尻のほくろ。ふっくらした二重顎も印象的だ。年の頃は二十二、三才か。

もう三カ月に近い。四月始めの陽気の暖い春の午後、この女を乗せたのが加納町の交叉点だった。ポートタワーの下で待たせて三十分も入ったきりだった。多分上まで昇ったのだろう。それから山手通りまで飛ばして銀行へ。武は気になった。黒っぽい服に似合った

ピカピカしたエナメルのハンドバッグと今のように大きな買物袋まで持って行ったんだからな。正面と通用門を見張りながら気が気でなかった。それで二十分ばかりで出て来たときは何だか疑ったのが悪いみたいな気になった。でもこれが女の手だった。元の加納町まで帰ったとき、ちよっと待ってと買物袋だ

けを車に残して美容院に入って、それっ切りだった。一時間も経って呼びに行ったら、とつきの昔に裏口から出た後だった。始めてのお客さんだから知らないわ。弟子の女の子も笑いやがった。メーターは『待ち』に入れてあったからどんどん上るし、女の置いて行った買物袋は古い週刊紙の束だけだ。武は千五百円も歩合から引かれた。

「武さんともあろう者が、ふふふ。運が悪かったんだな。まあ、そのうち良いことがあるさ。へへへ」

会計の山下まで、皮肉に笑いやがった。太い女だ。どうしてやろう。

突然前を行くクラウンのテールライトが赤くぱつと輝いて武の眼の前が真赤になった。無意識にブレーキを一杯踏み込んだ。武のコロナは大きく前につんのめりながら、キキキ、タイヤをききませて、先行するクラウンに数秒で止った。彼は冷汗のにじんだ手でハンドルをしっかりと握って足をふんばった。女は前席のもたれに手をついて腰を浮かせて叫んだ。爪のマニキュアが真赤であった。

「危いじゃないの。気をつけてよ」

武はわざと顔をそむけて答えた。

「へい、すんまへん」

——ふん、何云いやがる。今に見とれ、どうしてやるかこのアマ。警察に横着けするか。いや待てよ。腹の虫がおさまらねえ。ふふふ泣き面を見てやるぜ。——

トアロードを北へ上り、山手通りで西に折れる。

「ちがうわよ。右に曲るのよ」

「何をわめいてるんだ。俺の顔、おぼえてるだろ。只乗り女め。え」

声をすこませて顔を後にねじ曲げる。

「あっ。降してえ。止めてよ」

「どうだい姐さん。出る所へ出ようじゃねえか」

「許して。警察だけはいや。降して。悪かったわ。あやまるから、ねえ。運転手さん、止めて」

そう云いながら女はドアの把手を探した。

だが自動ドアの把手はなかった。

「ふふ、飛び降りて見な。首の骨を折るぜ」

武は言葉で脅しながら、ダンプカーの右側に並んで走った。自分のすぐそばに大きなダンプカーの泥に汚れたタイヤが唸りをあげて転がるのを見て女の眼にあきらめの色が湧いた。しかしまだ哀願を続けた。

「ねえ、運転手さん。これ返すわ。だから、

警察だけは、警察だけは許して。ねえ」

女は体を乗り出して武の顔の横に折りたたんだ何枚かの千円札を差出した。それに眼もくれない武の態度にますます不安を感じ何度も哀願を続けた。

「ねえ。お願いよ。何でもするから警察だけは行かないで、ねえ」

車はわき道にそれた。武は車を道の左端一ぱいに寄せると、すばやくドアをあけて外に出た。後席のドアをあけると女の右腕を掴んで引きずり降した。

「声を出すな。黙ってねえと、おめえが乗逃げ女だって大声で云いふらすぜ。いいかい」

腰の底から低い声を出してすごんだ。

背にまわした手で左肘をつかまれ、体を引きつけられると、がっしりした武から逃れるどころか足が半ば宙に浮いてしまう。

女は不安にかられながらも、引きずられる

ようにして入ったこのホテルの玄関で自分からハイヒールを脱いだ。磨かれた廊下を歩くうち、どうにでもなれと云うあきらめの中にも警察へは突き出されずにすみそうだとの一縷の安心と、どうされるかわからない不安が交錯した。

興奮に目をぎらつかせる武にも、おびえた

目つきで、哀願のまなざしを投げかける女にも、そしてあまりにそぐわない二人の服装にも特別な興味を示さずに、無表情な女中が伏目がちに案内してドアをあける。室の鍵をテーブルの上に置いて立去るドアの閉る音と同時に、武は何事かを訴えようとする女をベッドに突き飛ばした。小さい悲鳴をあげて、女は半身をあわてて起して、弱々しい声で謝った。

「ねえ。運転手さん。悪かったわ。許して、ひどいことしないで。ねえ。お金はらうわ」  
声も終らないうちに悲鳴に変わった。

「ア、イ、イ、痛い。や、やめて」

飛びかかった武が女の柔い白い手を背にねじ上げて浴衣の紐をまきつけた。手拭がわめきをあげる口に噛まされる。汗と埃と油の臭いが口一ぱいに拡がる。

「むむむ、ううう」

「待ってるんだ。乗り逃げ女がどうなるか、体で返してもらうからな。ふふふ」

ばたばたとものがく足首も今一本の紐でかたく縛った武は部屋を出た。外からかけられた鍵の音に、早く、あの人が帰ってくるまでに逃げ出そうと、女は縛られた体でもがいた。

しかし、もがけばもがくほど後手も足首も緊



くしまってくる感じであった。きれいにセツトされた髪もつぶれるほどにもだえても猿ぐつわの手拭はゆるまない。

一束のロープと工具箱を持って武が入ってきて、ベッドの下で悶える女体を見てにやりと笑を洩らした。太腿までまくれあがったレースのワンピースと淡いブルーのシュミーズはもう自分では直せなかった。もがくほどに滑らかな肌が露出してくる。

かたく膝を合わせる女の体をだき起して、背中のフアスナーを腰まで降す。シュミーズのストラップも丸い肉づきのよい肩から外される。レースをあしらったブラジャーのポックにごつい指がかかる。女には汚れた手拭の猿ぐつわの中で呻くことと、両足を揃えて身を悶えるだけしか自由はなかった。

ぴんと上を向いたピンク色の乳首を先端にした大きなおわんを伏せた様な乳房をわさわさと揺りながら、首を振って呻きを高くあげる女の髪をつかんで顔を上に向かせて、武は唇をなめながら云った。

「え、おい、おめえ、女のくせに図々しい野郎だ。只乗りのうめ合せをたっぷりしてもらおうじゃねえか。え。体でな」

女は武の眼の異様な輝きを見て、恐怖に体

を慄かせながら一際高い呻きをあげた。髪で吊り上げられた眼尻から涙がフーと頬を伝わった。

武は女をうつ伏せに倒して背に乗った。大きな乳房が床の絨氈につぶされて、脇まではみ出しそうである。太いロープの束をほどこいて、女の手を背に押しつけたまま、浴衣の紐を解いて片方ずつワンピースとシュミーズのストラップから抜き、再び背でまとめて、今度はロープの端をくぐらせた。頬を床に押しつけられ、服を脱がされることを知りながらもがっちり男の腕で圧えられていては、逆らうことすらできなかった。油に汚れた麻の太いロープが手首にまきつくつと、すり切れて立ったけばに、肌がちくちく刺される。

「手間をかけやがる」

云いながらも武の眼は、しみ一つない女の柔い白い肌をなめまわして笑みをもらした。手首を締め上げたロープが胸にまわった。

黒い油と埃のしみを肌に浅く、けばでちくちくとうぶ毛のそよぐ肌を刺激しながら大きな乳房の上をしっかりと締めつけていった。肘ももう動かせない。手首を高く背に吊り上げられ、ロープの喰い込む痛さに、女は猿ぐつわに殺された悲鳴をあげ続けた。

まだロープは長く残って、うつ伏した女の眼の前の床にとぐろをまいている。

「おい、こっちへ来るんだ。立てねえのか」

前川は女を横抱きにした。豊満な体がずっしりと腕にこたえるのも、前川にはこの次に始まる楽しみとして、苦にならない。

「ふふふ、おめえ、良い体をしてるな。全部ぬぐんだ。目の正月になるぜ」

手首につながる縄尻をけばけばしい壁紙をはった壁の上の方の照明の金具にかけられると女は爪先立った姿勢で高い呻きにかわった。悲鳴をあげながら首を振るだけの自由しかなかった。前川の節くれだった指が、くびれたウエストにつながるむっちり肉のついた形のよい大きなヒップで止まっているワンピースとシュミーズにかかった。

縦に長い深い凹みに影を作った臍が光の中に黒く現れた。真白いすべすべした肌が一きわ輝いている。足もとに丸く輪になっているレースのワンピースにも劣らぬ白さである。ピンクの乳首が大きくあえぎ、汚れたロープと黒さ、汗で汚れた手拭いの猿ぐつわさえ美しく感じられた。うすいピンクのナイロンパステイをすかして、漆黒の茂みが濃い影を作っている。

最後に肌をおおう小さな布切れを剥ぎとられまいと全身の力を集中してすり合わせる腿の内側を、ナイロンが膝の下まですり降ろされた。

「むむむむ、うううう」

鳴咽が呻きになって洩れる。涙が二すじ頬を伝わる。

「おい、まだ泣くのは早いぜ。え、おめえ、着やせするたちだな。いい体をしてやがる」

太いねちねちした脂っぽい指が、掌が鼻をつまみ、耳を引っ張り、すべすべした肌をまさぐるのを拒みようはなかった。太い指がちゃんと上を向いた、ピンクの乳首をつまんだとき、女は体をびくんと震わせた。

もう膝の下までずり降されたパンティが、自分のものでありながら足の動きをさまたげる。前川は再び女を抱き上げてベッドに運んだ。スプリングのきいたベッドの上で二度三度跳ね上って呻きが響いた。

身動きもせずに、目を閉じてもうあきらめた女を横に、前川はハンドバッグをとり上げて中身をテーブルの上にあけた。鈴をつけた赤い財布にまず手が延びる。

「お、すげえじゃねえか。こんなに持ってやがって乗逃げたあ、ひでえやつだ。これは前

のうめ合わせにもらったぜ」

数枚の札をポケットにねじ込みながら、顔をほころばせて定期入れを手にとる。

それみんなあげるから、許して。早くほどこいて、お願い。ひどいことしないで――

叫び続けても言葉は猿ぐつわに殺され、呻きにしかならない。

「ふーん、おめえまだ学生じゃねえか。野沢智子、十九才か、仲々ませた学生だな。なに菊水女子大学二年生か。ええとこの娘だな。

金持ちの娘が乗り逃げたあ驚いたぜ。篠原本町四丁目六一？、ああ、あの角の大きい家だな。ふふふふ」

遂に名前を知られてしまった。前川の口調から家も判った様子で智子はあきらめを感じた。小学生の頃に母を亡くし、間もなく迎えた継母との折合いが悪く、善意の行いすらお互いに信用できなくなって数年は経つ。智子はまだ年若い継母の千津を困らせ、千津は冷たくねちねちと虐めた。父は会社の重役として忙しい日をおくっているの顔で顔を合わせることも少い。父が智子と千津の間に立って辛い気持を持つことも、智子にはわかりながらも、継母に対する反抗はますますひどくなったこの頃である。原因になったタクシーの只

乗りも、智子は自分では気がつかないが、その一つであろう。

「ふふふ。智子さんだったな。少し楽しませてもらうぜ」

工具箱を開いた前川は、プライヤーを取出した。腿をしっかりと合わせて、せめても縛られた身を守ろうとする智子の髪を左手でつかんだ前川はすらりと伸びた鼻筋を、右手のプライヤーで軽く挟んだ。意表をつく前川の責めに、目を大きく見開き、鼻をふり放そうともがいたが、がっしりした手で頭を押えられ、しっかりと噛まれた猿ぐつわに呼吸をせかれては、腰を振り、腹を波うたせ、縛られた両足を揃えてばたつかせるだけである。呻きも低い。忽ち顔が、首筋が、胸までも紅潮してくる。

助けてえ、放してえー、許して――

長い長い時間に感じられたが、三分か五分であつたろう。腰の、足の動きが鈍る。背に括られた両手で布団を汗ばむほどにつかみながら意識が遠のきそうになったとき、にやりと笑った前川がプライヤーを放した。小鼻を一杯に開き、肩で息をつく智子の顔を見下して云った。

「どうだい。いい気持だろう。ふん、腰の動



きがいいぜ。もう一度おどってもらおうか。どうだ。ほれ」

鳥肌も消え、冷房のきいた部屋の中で汗ばみながら悶え、呻き続けた。何度くり返されるであろうか、息も絶え絶えに、肩を震わす智子のきれいにセットした髪はばらばらにつぶれ汗と涙で化粧も消えてしまった。

「これ位で参るなんて、だらしねえぞ。まだ序の口だと云うのに。今度はおめえのクラクションが聞きてえよ」

猿ぐつわの手拭がやっと外された。口の中に噛まされていた汚れた軍手の片方が唾でべとべとになっている。形よくつけられた口紅ははげてしまい口もとを大きく見せる。

## 女性写真モデル募集

### 分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。  
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。  
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

「お、お願い、許して。ねえ、ほどいて。アッ。イ、イ、痛ッ。アア」

弱々しい哀願が、かん高い悲鳴に変わった。智子はピンクの乳首が、もぎ取れそうな痛みをにわめき続けた。

「何でい。一寸つまんだだけで、派手にクラクション鳴らしやがって。今度はじわじわ行くぜ」

軽くつままれただけでも、はれ上ったかと思うほど、ずきずきと痛む乳首を押さえるように、ビニールテープが胸を横切ってはりつけられた。赤いつやつとしたテープが何本もはりつけられる。どす黒く汚れ、しかもけは立った麻のロープと並んで一きわきれいに輝

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。  
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

いている。

「どうでえ、きれいだぜ、見なよ」

片手で髪をつかんで頭を上げさせながら、前川の汗ばんだ手が胸のふくらみにビニールテープをしっかりと押えつける。

細くくびれたウエストにも、深い凹みをみせる臍の上にも、白磁の円柱のような大腿にもべたべたとテープははりつけられた。

「いやっ、もう、許して」

前川は智子の言葉尻をとらえた。

「こんなにきれいにしてやったのに、いやかい。それじゃ、はがしてやるよ。そーとな。ふふふ」

智子の体が動かないように、細いウエストの上に馬乗りになって、前川はテープの端をゆっくりと引っぱった。粘着剤に引っぱられて、柔い金色にそよぐうぶ毛が一本ずつ引き抜かれて体が飛び上りそうに波うつ。

「いやっ。イイイ、痛イッ、アッ、イイ……」

尻の下に、智子の悶えを体で感じながら前川は一本一本のテープをゆっくりと、わざとゆっくりはがしていった。尻の下に感ずる智子の悶えによって、再び彼は張り切った。

「まだ音をあげるのは早えで。こんなええ体で声もいやすし、さぞ道具も立派だろうな」

丸めて投げ捨てられたテープに何十本ものうぶ毛がはりついていた。

智子は前川の声に、はっと体を固くして腿をしっかりと合わせた。

「ふっふ……。こうすりや女の体は拒めねえんだ。頑張ってみな」

浴衣の紐で揃えて縛られた足首をぐっと持ち上げられ、体を二つ折りにされすっぽりと足首と首筋にゴムのベルトがかけられた。

「うっ、むうう」

これはフアンベルトである。直径三十糎ぐらいの細い強いVベルトである。自動車を持っている人は、スペヤタイヤを持たずには走らない。だがフアンベルトのスペヤを持っている人はかなりのベテランである。街の中ならともかく、遠出をしてフアンベルトが切れると、五分もしないうちに冷却不良でエンジンが焼きつき立往生する。ヒューズやライトの電球と共にドライバー必携の品である。

直径三十糎ぐらいの強いVベルトを足首と首筋にかけられると、両足首が揃えて縛られているだけに、首をどう動かしても、足をどうもがいても、もう抜き取れない。腿の筋肉がつっぱり、膝が自然に割れる。

腹が圧迫されて呼吸も苦しい。智子は声も

出せずに呻き続けた。むっちりと肉のついた白いすべすべした太腿で、弾力のあるみずみずしい大きな乳房を押しつぶし、脚をなめるような姿勢で、大きく尻を突き出して、汗をにじませながら呻きだけをあげた。

「どうしたい。あのいい声は。クラクションが故障か、ふふ……」

前川の手が延びた。だが、もう声は出なかった。何でどうされているかもわからなかった。智子にとって長い長い辱しめであり、苦しみであった。苦しみが先に立って恥しきなどは感じなくなってしまふ。

「おめえ、いい体をしてるぜ。働らきもいいぜ」

前川の声も耳に入らない。

「ふー。うーん」

軽い呻きと共に意識が戻った。手と足の束縛を解かれても手足は自由に動かなかった。前川の遅ましい体を見ても大の字に横たわったままであった。

いつか、くっきりと縄目のついた手が前川の背にまわっていた。唇を割って入り込む男の舌を受ける智子であった。

「一風呂あびて来な。ふふふ、おめえはい女だったぜ」

嵐が去って放心したように目を閉じている智子の唇を吸って、前川は体を離して浴室へ去った。

バスタオルで胸まで覆って浴室を出た智子は、又してもベッドに突き転がされた。

うつ伏せに倒れた細くくびれた腰に前川の重みを受けたが、

「もう、もう、許してよ。ねえ」

口調も少し甘えている。もがいたが、がっしりした前川の重みをうけて身を起せない。

前川の手には運転日報を書き込むボールペンがあった。背中に堅いがなめらかな感触をうけ、痛みよりも、くすぐったさが強く、智子の口からは、きやっきやっという笑い声めいい呻きが続いた。

「おい、服を着なよ。送ってやるぜ」

智子の背から降りた前川は、さきほど智子の体から鮮かにはぎ取った服を丸めてばいと投げてよこした。

智子は前川の最後の責めがどんなものか、全く気がつかなかった。

「おい、野沢智子だったな。おめえはもう俺の女になったんだぜ。全くええ女だよ」

丸い可愛い二重顎を指で押し上げて、もう一度唇を寄せた前川は眼を細めた。



× × ×

温泉マークを出る二人は一見恋人のように腕を組んでいた。前川の手のロープと工具がそぐわないだけだった。

キーでドアをあけて、前川は智子を運転席から押し込んだ。もうあたりは真暗になっていた。よるめいた智子はハンドルに手をついて、クラクションが鳴り、びっくりした。

後から乗り込んだ前川はロープの束や工具など、智子を虐めた道具を後席に抛り込んで今このホテルからくすねてきた浴衣の紐をとり出して、智子の腕をねじ上げた。

「もうよしてよ。いやっ。アッ、イイイ」

「わめくなよ。見られて恥しいのは、おめえの方だけだぜ。ふふふ」

後手に縛り、胸を一巻きして紐は終わった。

まるで恋人同志のように、前川は後手に縛り上げた智子を抱いて、胸のふくらみの感触を楽しみながら、できるだけ信号の少ない裏道を東へ進んだ。

高級住宅地、篠原通りの山側にぼんやりと輝く『野沢』の門灯の中にコ罗纳が入った。

「おい、おめえの家だな。まあ、ゆっくり家の人にもほどこいてもらいな。忘れ物はねえな。ふふふ。又俺を乗せるよな」

智子を引きずり出して、ハンドバッグと古週刊誌の入った例の買物袋を後手に持たせると、高くクラクションを鳴らし続けながらバックさせた。

智子は立ちすくんでいた。後手からバッグと袋が鉄平石のたたきの上に落ちた。涙にうるむ眼に勝手口の灯がまたいた。

## 二、継母と継娘

「ピン」

勝手口の鍵が外され、サンダルをつっかけた好子が玄関をうかがいながら出て来た。

縄目を少しでも弛めようと身をもむ智子を見て、はっと立止る。

「お好、ほどこいて。早く」

かん高い声を背に、勝手口にかけ込んで叫んだ。

「奥様、おくさまあー。お嬢さんが、大変です。お嬢さんが——」

好子は智子より二つ年上で、やっと二十一

になったばかり、継母の千津の再従妹またいとこにあたる娘である。田舎の高校を出て家族の少いこ

の野沢の家に、半ばお手伝いに、半ば花嫁修行の洋裁や茶華道に出てきている。三年前のおどおどした田舎娘といった風情はどこにも

なく、よく発育した体をあかぬけた服に包んだ朗らかな近代女性に脱皮した。

智子は父を独占しようとし、どうしても打ちつけられない継母千津への憤満を、好子に当り散らすことで発散していた。田舎から出てきた頃の好子には優越を感じることができた。しかし今では都会の水に洗われ、洗練され伸び伸びと育った、立派な体と整った顔立ち、それに天性の頭の良さが相まって、今では智子も劣等感すらおぼえるようになり、こ

とさらに辛くあたってきた。

「お好、靴がちがうわよ。あの赤いのを出して」

言葉より早く足がぱっと動いて靴を蹴とばしたのも、今日のことであった。

「はい。でもお嬢さん、そんな白い服には、白いお靴の方がお似合いですわ」

赤い靴を揃えながら、また始まったと心の中ですぶやく好子の返事に、ぐっとつまった智子は、

「いいわよ。自分でするから。私はこっちの方が好きよ」

始めに智子の揃えたのと全くよく似た白い靴をつっかけたのだった。

勝手口から小柄な継母の千津が、均勢のと

れた好子を従えて姿を現わした。

「お母様、早く、早く、これをほどこいて」

智子の体を上から下までじっと見つめてから、ことさらに落ち着いた様子で命じた。

「智子さん、これは一体どうしたんですか。」

さあ、中に入ってゆっくりお話を聞きましょう。好ちゃん、連れて入ってちょうだい。そのままでよ。紐をほどこかないで」

背を向けて歩きながら、智子が好子に

「お好、早くほどこいて」

身をもんで云うのを聞いて、ふり返りもしないで、

「好ちゃん。ほどこいては駄目よ。そのまままで連れてくるのよ」

冷やかに吐き捨てるように命じた千津の足取りは全くしとやかであった。

好子は落ちているハンドバッグと袋を拾いあげて、

「いやっ、早くほどこいてよ、お好」

拒む智子の肘をつかんで勝手口へと押して行った。

居間のソファに腰をおろした千津は、智子の乱れた髪から、引っかけて破れているストッキングの爪先まで、特に豊かに息づいている胸を一層引き立てている紐を、冷たく観

察しながら、訊問と云ってよいほどの口調で尋ねかけた。

「智子さん、一体どうしたんです、これは。」

縛られたりして。はっきり云ってごらんない

「あの、……お友達のいたずらなの。ねえ。早くほどこいて」

「そうなの、それで安心しましたわ。で、お友達って、どなたなの」

さすがに智子は真実は打明けられない。

「うーん、あの……、そう。純子さん、純子さんよ」

「純子さん？ ああ今井さんのお嬢様ね。おかしいわ、あんなおとなしいお嬢様が、こんなことをされるかしら、そうなのね」

「ええ、そうよ」

千津が立上ったので、やっとほどこしてもらえるのかと安心して、恥しさをおさえて高く括り上げられた後手を千津に向けた智子を見もしないで千津は部屋の隅の電話に歩みよった。智子は、はっと体を堅くした。顔に血が昇り、耳がほてった。ダイヤルのまわる時間が、死刑を待つ間のように感じられた。

「もしもし、今井さんの、お宅でございますか。私、野沢でございますが、奥様は御在宅

でしょうか。どうも恐れ入ります。——智子さん、何故そんなことをされたか、お聞きしますからね。——どうもいつも御無沙汰致しまして、いえいえ、こちらこそ、あの、お嬢様は御存宅でしょうか。は、御旅行、およろしいですわね。北海道ですって、およろしいですわね。お従姉さんの御結婚式ですって、いつも宅の智子が親しくして頂きまして本当に喜んで居りますの。それでは御免下さいませ。夜分にお電話差上げたりして。ではお寝みなさいませ」

智子にとっては、地獄の声であった。うっかりしていた。純子さんが旅行中であつたとは。つい自分の愚かさが悔まれた。

「智子さん、北海道にいらっしゃる純子さんに縛られたなんておかしいと思いませんか。嘘をついてるんですね。本当にどうしたんですか。誰にこんなことをされたの。云ってごらんない」

思わずしゃがみ込んで、わあっと泣きだした智子の丸い小さきみに震える肩になお冷たい視線が注がれる。

何を聞かれても泣き続ける智子の様子に、思わず腰を浮かせる好子を制して、千津のい



たぶりが方向を変えた。

「おや、智子さん、脇がほころびてますよ。

レースの服は直しにくいのに。この肘の上の跡は何でしょうか。縄の跡みたいですね。

みんな服を脱いで見せてごらんさい」

泣きじゃくっていた智子は、つい先ほども

で前川に痛めつけられた肌を見られるのは一層辛いことであつた。体をゆすりながら必死

の勢いで哀願した。

「いやっ。早くほどうて、ねえお母様。う、

うう、何でもなかったのよ。早く、お願い」

「好ちゃん、手伝って。智子さんに服を脱い

でもらうの。さあ、腕を押えて、そう。しっ

かり動かせないようにね」

自分より大きい体の好子に縛られたままの

腕をしっかりと握られると、もう体も動かせな

## △華々しき女体緊縛の組写真集▽

限定版写真集  
グラフィック印刷

## 美しき縛しめ

### 第四集

一〇〇〇円(送共)  
略号 △美4▽

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

## ◎縛られた美女ばかりのフオート八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)

鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)

ブロック石抱き責め (木村洋子)

箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)

両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)

古墳後手吊り組写真 (木村洋子)

両手吊りに悶える組写真 (山原清子)

逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)

猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)

革拘束具による組写真 (大塚啓子)

柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)

セーラ服緊縛組写真 (大塚啓子)

野外に於ける晒責写真 (玉田・木村)

刺青女体の柱縛り責め (山原清子)

捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)

入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)

両足吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真 八十葉▽

かった。たった一本の紐で後手に縛られただ

けで、こんなに自由が奪われてしまうことを

又しても味あわされる智子であつた。

「何でもなかったなんて、もう信用しません

よ、智子さん。嘘をつくなんて、許せないこ

とですよ。この機会に心を入れかえてあげま

すわ。ほほほほ」

始めて千津の口から笑い声が洩れた。

意識しないながらも千津の心の中に、平常

から遠慮勝ちに接している自分に、ともすれ

ば反抗的な態度をとるこの先妻の娘に対する

憎しみが沸き返って来た。幸いに良人は出張

中である。この機会を逃しては平常から心の

奥深くに沈み、押えて来た憎しみをはらすこ

とが出来ない、と理性を押しやった強い感情

に支配されはじめた。

智子は千津の感情の変化をやっと冷い笑い

声に気がついて身を捻りながら叫んだ。

「あっ、止めて。お、お母様、云います。云

いますから。許して」

叫びは無視された。背のファスナーが引き

降され、丸い肩がむき出しになる。

長い間、背に高く括り上げられ自由もきか

なくなつた両手を縛る紐が解かれたが、千津

と好子の手で服を抜き取られると再びもとの

ように背で組合されて紐がまきついた。

「あらっ。何か書いてあるわ」

床にうつ伏せに押し倒された智子の体を圧えて、四つの目がまだ赤い縄の跡を残す背中に注がれた。

このアマは只乗り常習犯だ

試運転の結果は上々だ

クサイ飯を喰うよりはましだぜ

Sの武

智子はそれを知らなかった。前川に最後に押えつけられた時、ボールペンで書かれたとは思わなかったのだ。操り責めだと感じた。

「智子さん、Sの武って誰のことですか。只乗り常習犯って何ですか。え、答えられないの。泣いたって駄目ですよ。どうしても云わせてあげるわ。ふふふ。好ちゃん。押えていてちょうだい」

首を振りながら泣きじゃくる智子を好子に押えさせて千津は居間を出た。

裁縫の道具をかかえて唇をきりりと結んで千津は帰って来た。

「智子さん、あなたは私が嫌いな。私のどこが悪いの。私はもう五年も貴女につくして来たわ。何も云わずに我慢してきたのよ。それは、お母様が亡くなられたのはお気の毒だ

けど、私はお母様の代りに貴女のお世話を一生懸命にして来たわ。それなのに、貴女は何一つ私の気持ちにこたえてくれなかったわね。

お食事が不味いって食べずに出て行ったり、私の財布から黙ってお金を持ち出したり、おまけに学校もさぼって夜遅くまで遊び歩いたり。お父様だってお忙しいのに、貴女の事ではとても心配されているのよ。近頃めっきりおやせになったのを御存知かしら。それに好ちゃんにだって、よくあれだけ意地悪く、辛くあたれることか感心しますわ。もうそんなことのない様に、この機会に貴女の心を入れかえてあげますわ」

千津は次第に自分の言葉で刺激され、酔ってきた。

好子も千津の見事に、最初は恐ろしささえ感じたが、身もだえする智子を押えつけているうちに次第に平常いじめられている智子を逆に思い切りいたぶれる立場に立ったことを喜ぶ気持ちが生れ、身体の芯に熱いものがつき通ったような快感をおぼえた。

「好ちゃん、もっと沢山紐を持ってきてちょうだい。二階の押入れに行李を縛る細引きがあったわね」

居間の真中で、うつ伏せに横たわった智子

は思いがけなかった異様な進展にもう哀願の声も出せなくなってしまう、只すすり泣くだけであった。

「さあ智子さん。話してごらんさい。只乗り常習犯って何ですか。Sの武って誰なの」もとから好きになれなかった継母だけに、唇を噛みながら頬を床につけてふてくされた様に見える姿に千津の憎しみは強まった。口調も変ってきた。

「云わなきゃいいのよ。云わせて見せるわ。好ちゃん、肩を押えて」

怒った千津は眼をつり上げて命じた。そして腰まで引き降されたワンピースを、びりびりとほころびる音も無視して足から抜き去った。智子が脱ぐまいとはかない抵抗を続けるうちにシュミーズも半ば裂き取られてしまった。千津の指がびったりと喰い込んだパンティにかかったとき、当然ながら智子の頑張り highest になった。

「好ちゃん、もっとしっかり押えて。そう、いっそ乗っちゃって」

首筋を大きなヒップではさまれ、後手をがっちり押えられ、智子は苦しい呻きを好子のスカートの中に出した。足の動きが鈍ったとき、最後のものを剥ぎ去られ、ゴムの跡を



赤くつけた大きな双丘がむき出しになった。

「むう、う。く、苦しい。の、の、のいて」

切れ切れの呻きがスカートの中にこもる。

「云えなきゃこうよ。えっ」

もくもくと悶える双丘に、物指が叩きつけられる。赤い跡が見る見る盛り上る。三本、五本、すぐに一面が真赤にはれ上った。

「アッ。イッ。痛ッ……」

悲鳴がその度に起る。眼の前の大きなむっちりと肉のついた尻に注がれる火花の散るような笞打ちを見て、好子は心の中に、身体の中に炎が貫く感じをおぼえて叫んだ。

「奥様、私にもおたせて」

立ち上り、千津の手の物指を引たくって、真赤になった尻の真中にふりおろした。笞打ちを逃れようと、後手に縛り上げられた体がころげまわる。背に尻に、胸に腹に、大腿に、物指は風を切って飛んだ。

「アッ、イ、イ、ヤメ、ヤメテッ。ユ、ユ、ユウ、ユウワ……」

智子の屈伏の悲鳴は聞きとれなかった。たとえ聞えたとしても、好子は打ち続けたであらう。

「好ちゃん、もういいわ。止めて。どう？」

智子さん、ありのままを話せるわね。それと

も、もっと打ってほしいの、ほほほほ」

息も絶え絶えになり、体中に赤い笞あとをつけたまま、智子は泣きながら前川との出来事を話しはじめた。勿論前川と云う名は知らなかったが、前川との出会いからホテルでの責めをともしれば涙につまりながら、口ごもるごとに叩かれたり抓られたりしながら、詳しく話させられた。千津はねちねちと笑いを浮かべながら智子の辱しめを再現させた。

「もっと太い縄で、ふふふ、縛られたのね。」

胸にまわしたの。こうなの。好ちゃん、そっちも引っぱって」

「アッ、アー。そしてお口をふさがれて」

勿論プライヤーも、ファンベルトも家にはない。しかし千津は代用になる物をどこからか持ち出して、智子の苦しみを、辱しめを再現した。充分に話させた後は、猿ぐつわまではめられて、哀願の途も閉ざされて、涙を流しながら呻いた。

体を二つ折りにされた時、遂に智子の限界が来た。しぶきを手に受けた千津はあわててタオルで拭いた。

「まあ、お行儀の悪い人。罰よ」

猿ぐつわを外され、両足の間で呻きを洩ら

す唇にそのタオルがねじ込まれた。

自分の匂いを口一杯に味あわされながら、智子の体は、千津の弄ぶままになった。

好子は、千津の指が、手にする物が智子の体を弄ぶのを見て、まるで自分に施されている様な気持で真赤になりながら目をそこからそらせられなかった。智子の足を押える掌にじっとり汗をにじませ、腰を落した。

後手のまま風呂へ追いやられ、千津と好子に洗われた体のまま再び居間に連れ帰られた智子には、もう肉体的苦痛は与えられなかった。横ずわりにうなだれる智子に、千津は宣告を与えるように冷い口調で云った。

「智子さん、もうみんな事情はわかりましたわ。貴女ももうおとなしくなれますわね。私の云いつけは何でも守れますわね」

「は、はい。でも、うっうっ……、でも」

「でも何ですか」

「でも、これだけはお父様に、お父様にだけは云わないで」

「どうして？ こんな大事なこと。云わないでおれますか。お父様にも叱って頂きますわよ」

「お願い。ねえ、云わないで。お母様、お母様の云われることはどんなことでも守ります

から、ねえ、お父様にだけは云わないで」

きつと半身を起して智子は必死に頼んだ。にやりと笑いそんな顔をわざと固くして、

「それじゃ、それほど貴女が云うのなら今度だけは、内緒にしてあげましょうか。でも私の云うことは何でも聞くんですよ」

一番やさしくまた却って最もこわい父に話さないと言うことが安心感を強めた。

「はい、何でも聞きますから。お願い」

「そうそう、私だけでなくて好ちゃんの云うこともよ。いやなの」

「いえ、聞きますわ。お好の云うことも」

小さくなった声にかぶせる様に千津に命じた。

「お好って何ですか。もうそんな云い方は許しません。好子さんって云いなさい」

「は、はい」

「それから、もう貴女のこととは『智子』<sup>とも</sup>って云うから、いつどこに居ても、ちゃんとお返事なさい」

急にみじめさを感じてあげた顔に、

「智子、もうお前はね、慣れるまでそのままで居るのよ。お父様が帰ってらっしゃるまでには心も入れかわるでしょうからね。それから、離れには住まわせないわ。中二階の三畳

に行きなさい。前の女中部屋にね」

「いや、いやっ。そんなの。それだけは許して」

千津の手は口より早く動いて、湯上りの智子の太腿をはっしと物指がしばいた。

「まあ、智子ったら、今お約束したばかりなのに。もう手も解いてあげないわ」

許しを乞う智子を答うちながら、憎しみを抱いているこの『先妻の娘』を如何にして追

い出そうかと考えはじめた。

「ふしだらな娘は、こうして匡正しなきゃ、直りませんよ。好ちゃん、智子を三畳に入れ

といてちょうだい」

外から鍵をかけられた小さい窓一つしかない部屋で、うすっぺらの布団の中で、帰らぬ

こととは知りながら、早く母を亡くした不幸を呪った。泣き続けた。決して自分の行いを

反省しようとしないう所は、金持のわがまま娘であった。

智子が泣き入っている頃、千津はどうすれば

智子が自分から家を飛出すだろうかと考えていた。やはり最も強い羞恥心をかきたてる

ことだ、若し智子が飛出したとすれば行く先は東京の伯母の許しかない。しかし伯母には、

つまり千津には義理の姉になる房子には、始

めから千津の信用はない。後妻に迎えられた時の反対も房子が一番強かったとか。智子も自分の辱しめをはっきり云うほど馬鹿ではない。多分智子は房子にも会いに行かないだろう、など、これからの計画が千津の心の中で育っているとは智子は夢にも思わずに泣き入っていた。

### 三、白百合で

午後のラッシュの始まろうとする四時頃、智子は三宮駅のみどりの窓口に立った。

「満員です。一枚ありません」

「そのあとのひかりでもいいわ。無かったらこだまでも」

「最終ならありますが、宜しいですか」

「ええ、それにするわ。一枚、東京まで」

せめて大阪まででも行こうと改札口へ近づく。大きなスーツケースをぶら下げて歩く後から、

「よう。どこへ行くんだい」

ふり返ると、二三度顔を合わせたことのある、仲間で一番ぐれていている啓子でも、眉をひそめたチンピラ風のにきび面があった。

「お、東京じゃねえか。ひかりに乗って。すげえぞ。一人でかい」



ひよいと切符を横取りして、濃いサングラスを外して、肩をつついた。政夫とか云ったチンピラである。

「どこでもいいの。私、家出しちゃったんだもの」

「ふーん、思いきったすげえことやったな。」

いかすぜ。たんまり持って出たんだろ」

「もう私、神戸には帰らないわ。啓子さんにそう云っていいね」

「うん、云っとくぜ。何かやばいことでもあったんかい。まだ三時間はたっぷりあるな。そこらで一杯つき合えよ。お別れの御馳走し

## 限定版グラビア写真集 △美しき縛しめ▽ 第八集

山原清子 大塚啓子  
鈴木晃子

### 女斗緊縛競艶写真特集

一部一〇〇〇円  
略号(美8)

「女性対女性」の激しい女斗場面と女斗美の躍動！  
女性が女性を縛る緊縛プレイの見事なフォト化  
動きのある女性と女性の相互縛り場面の美しい展開

長い間の皆様マニアの御要望にこたえて、女性対女性の女斗美、女斗場面、並に女同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって、ここに集大成いたしました。六尺禪或はパンティを着用した美女の裸身が組んずはぐれつ縦横に画面狭ましと展開し筋肉を躍動させておられます。いずれも動きのある連続動作によって三女の裸身の美しさが、いきいきと目の前に飛び込んできます。数十枚の女斗美、女斗写真女性相互の緊縛写真が、この一冊にて、皆様のもとなるのです。この新しい企画はまことに画期的なもので、この機会を逸すると絶対に入手できません。今すぐ、お申込み下さるよう、お待ちいたします。

△内容▽ 啓子の裸身を厳しく括くる清子、あえぐ啓子。緊縛して押さえ込まれる啓子の連続被虐姿態。清子に縛られてゆく過程の連続写真。縛られて身動きできない裸身を清子にいたぶられる啓子。縛られた刺青の裸身を清子に噛ませる清子。清子が清子に対して猿ぐつわを噛ませる連続写真。馬乗りになって清子をしめる晃子。清子を逆エビに責める晃子。清子を縛り上げて逆エビに責める啓子。黒禪と禪の清子と晃子の女斗美、女斗シーン。晃子を寝業で押さえ込む清子、晃子の逆転劇。晃子を縛り責める清子。後手縛りの清子が啓子に翻弄される。その他女性と女性の緊縛プレイシーンの数々。

てやるよ」

切符を持ったまま駅を出て、東のガード下の街を行く政夫——半の政と云われるチンピラ——の後を、智子は重いスーツケースをぶら下げて追った。

「ちょっと、切符を返してよ。わたし、急いでんのよ」

「時間はあるぜ。かしな、それも持ってやんからな」

智子はたった今、家を飛び出して来たのだ。閉じ込められた、二日間のおごり高ぶった心と、成熟した体を弄ばれ、さいなまれた屈辱と苦痛に耐えられなかった。

全裸の姿のままパンティさえ許されずに、継母の千津と、今まで顎でこき使って来た女中の好子にまで腰縄をうたれ縄尻をとられて一切の家事に追い使われた。

「智子、このお皿の洗い方は何ですか。裏が汚れているのは洗ったことにならないの」

「智子、トイレのタイルにしみがついているのは主婦の恥なの」

冷い千津の声に、智子は震え上るようになった。

智子にはもう自由は与えられなかった。千津か好子の見ている前でしか尿瓶を使わせて

もらえなかった。

昨夜まで気分が悪いのもこらえて便器を使わなかったので、今朝は遂にそれまでが責めに使われた。

「智子、お前は便秘しているわね。体に毒だわ。すっきり出させてあげましょうね」

腰縄をうたれたまま、許しを乞う智子の体は二人がかりで次々に自由を奪った。

千津は好子と二人で、拒む智子の腕をねじ上げて後手に縛った。その縄尻が肩をまわって膝を吊り上げる。哀願を続ける智子の口にかくくぐつわが囁まされた。

体中の血が逆流する思いの羞恥に、紅潮した身をもみながらも生理には勝てなかった。

千津の辱しめの言葉を聞きながら、父が帰宅すれば許されるだろうとの淡い期待を捨てて家出をしようとの決心を強めたのだった。

智子にとっては、追いつかれていた間の方が良かった。仕事が無くなると反省だとか精神修養だとか云っては居間の外の廊下の板の上で、後手に縛られ、くぐつわを囁まされおまけに目覆しまでされて正座をさせられた。視力を奪われると時間の経過もわからなくなる。足の痛み、手のだるさに身動きすると、「智子、もじもじするのではありません」

物指が答になって体をおそう。呻いたと云っては抓られる。どこに千津の手が伸びるかわからないだけに不安は強かった。

しかもその間、千津はコーヒーをすすり、テレビを見、雑誌を読みながら、智子を監視した。智子をわざと辱かしめようと話す会話が聞えると、耳も栓をしてほしいと願った。

正座などしたことのない智子の足はぐにしばれてくる。十分位なのか二時間も強制されたのかわからなくなる。許されても、ぼったりと倒れたまま手足の痺れの回復するまでの、あのびんびんと体中に伝わる不快をこらえるだけであった。そんな時こそ、千津はさも親切そうに痺れた足をさすって不快を強める。

智子の心をこれでもかと云わんばかりに傷つける千津の責めに、智子は次第に乗せられていった。遂に千津の読みが当たった。やっと今日の午後になって、千津は好子を連れて買物に出かけた。その実、千津が物置の蔭の茂みにかくれているとも知らず、智子はいつもより弛い縄目の後手を解いた。千津が帰らないうちに気がせいたがそれでも、大きなスーツケースに一杯の衣類や下着を詰め込み、更に宝石類も忘れなかった。筆筒の小引出し

から三万円ばかりを持出して、おびえた目つきで門をしのび足で出て行く智子を千津と好子が含み笑いをこらえて見送るのを知らなかった。

智子は、もう家には戻るまいと決心していた。しかしあてのない旅にも伯母のことが意識の底にあって、東京へと足が向いたのだ。

智子は、重いスーツケースを持ってくれたこの男、半の政を知らなかった。政、本名は政夫だが、自分ではサイコロには必ず半に賭けるんだと意気がってつけた名前も、仲間うちでは、半人前の仕事しか出来ないとか、云うことの半分は嘘であるからだとか云われている。特に彼の手にかかった女たちなら人間らしい所は半分もないと唾を吐くであろう。

場末の喫茶店という感じの名前だけは清楚な『白百合』の二階に上った。狭い急な階段を上った四畳半、うす汚れた大きな座布団が二枚、脚のゆるんだテーブルの上に栓を抜いたジュースを二本持つてくると、親切にも一本をコップに注いだ。

「これでも飲んで待っててくれよ。寿司かカツ丼でも取ってくるからな。ほかに何か食いたいもんはねえか。ひとつ走り行ってくるか」



らな」

千津に虐められて疲れはてているだけに、こんな安物のジュースでも智子には有難かった。

公衆電話では、あたりを見まわしながら声をひそめて政がしきりにくどいている。

「……兄貴、本当でっせ。すげえ玉なんだ。

やさぐれでね。……とんでもねえ。いつ俺が嘘をつきました。今度は本当だ。白百合の二階で今頃は眠ってまっせ。……そんな。まあ来て玉を見てから云ってほしいな。それに兄貴、たんまり持ってまっせ」

二十分ばかりしか経たないうちに、白い夏服に濃いサングラスをかけた久田が姿を現わした。

「兄貴、待ちましたぜ。すやすやおねんねだぜ」

顎で二階をさし示した政が、にやりと笑った。表情を崩さない久田に従ってみしみしと階段を鳴らしながら

「おい、婆さん。誰が来ても上げるんじゃないぞ。わかってるな」

云い棄てて昇って行く。

四十を過ぎたばかりであろう、このマダム太った体をもてあますように椅子によりかか

ったまま煙草をくわえた。

「何が婆さんだい。いい若いもののくせに働きもしないで。全くダニみたいな奴だね。それにしてもあの娘も可哀そうなんだ。引つかかるのが悪いんだが。……久田の手にかかったら、おしまいだもんね」

低くつぶやいた。

「どうです。兄貴、いかすスケでっせ」

小さなテーブルにもたれて、ジュースに混ぜた睡眠薬で眠らされている智子を、大きな座布団の上に仰向けに横たえて媚びる様な目つきで政は久田を見上げた。

「ふん、どきな」

サングラスを胸ポケットに差し込んで、片膝をつく、眠りこけている智子のふくらとした二重顎に手をかけて顔を自分の方へ向けた。

兄貴とは呼ばれても、この界限をのし歩いている山多会では下級幹部である久田は女を見る眼が高かった。その為に幹部の端くれに加えられた様なものである。

胸のふくらみや腰の肉付きをさすりながらこれは物になると思った。だが政にさとられないように、わざと不愛想に云った。

「まあまあってとこだな。おめえ、どこで拾

ったんだ」

「こいつあ、ズベ公の啓子のダチでっせ。家出したなんて云って切符を買っているのを連れ込んだんでさあ」

「ふーん。おめえにしちゃ出来だ。よし、これ取っときな。俺がこいつを貰うぜ」

「ちえっ、兄貴、このスケあ、もっと持ってまっせ。もう一、二枚、はずんでくれませんか」

「うるせえ奴だ。これも持って行け」

内ポケットから数枚の札を投げ出して云った。

「帰りにミチに電話して、すぐ来るように云え。おめえは来んでええからな」

「又ですか。まあええです。しゃぶりがすでも楽しみにしますわ」

ぼやきながら、階下のマダムにまで当り散らして出て行く。

「婆あ、電話ぐれえ引けってんだ。使い走りはかなわんからな」

「何云ってんだい半人前のくせに」

ばいと吸いがらを捨てて下駄で踏み消す。

くずれた感じの濃い化粧の、面長な女が小走りに入って来た。二十七八か、体だけは立

派である。

「おばさん。うちの人がいるわね」

「ああ、いるよ」

マダムは顎で二階を指してつぶやいた。

「何がうちの人だい。ヒモのくせに。悪い片棒かつぐんだらう」

がたぴしとベニヤ板のドアが開く。

「おい、遅えな。これどうだい。調べてみな」

「だってあんた。急いで来たんだよ。このタマ可愛い顔をしてるじゃない。手伝ってよ。剥いでしまうの」

深い眠りに落ちていている智子の体をあっちこちへと転がしながら、久田とミチは手際よく脱がせにかかった。

力なく畳の上に延びている指のはげかかったマニキュアのピンクがみじめであった。

拡げた脚の間から体を起したミチは、がっかりした様子で云った。

「あんた。これズベ公だわ。もう男を知ってるわよ。山野さんに、あげるわけに行かないわ」

「ふーん。虫も殺さぬこの顔でな」

「それに、これ叩かれた跡だわ。ここも」

「顔に似合わないな。どうだい。物になるか」

「大丈夫よ。女は顔じゃないわ。ここよ」

眠りこける智子を横に、二人は智子の持物をしらべ始めた。

「おい、このスケ、菊水短大だ。金持ち娘らしいぞ」

「学生だって金持ちだって、女は女よ。どうにでもなるわ。いよいよとなりや二三本打って味を教れば、おしまいだもん」

「どうする、ミチ。おめえにまかすからな」

「確かに金持ちよ。こんないい服持っているわ。この指輪だって本物じゃないかしら」

「どうせ、こいつにや服なんていらん。合ったらおめえが着な。だけど時計や指輪を売るな。足がついたらやばいぞ」

けばけばしいが安物のスカートを脱いでミチはたった今、智子から剥ぎ取ったワンピースをまとった。しなを作りながら、

「あんた見て。丁度だわ。一寸短いかしら」

智子の腕から時計を外す。継母の千津の嫉妬をかり立てながら父にねだった宝石入りのジュベニヤも、大粒のパールネックレスも、さきほど継母の鏡台からくすねて来た翡翠の指輪も持ち主を変えた。

しっとりと落着いた深い緑のあやしい色をはなつ宝石に頬ずりしながら、ミチは喜びの声をあげた。

「葱をしょった鴨だわね。これだけでも本物なら五十万はするんよ」

智子をどう処分するかを、久田とミチは相談した。

「それじゃ、おめえの云う通りにするか。押入れを探してみな。何かあるから」

「うーん」

小さな呻きをあげて智子が寝返りをした。

「これ、入ってるんでしょ。もう一本飲ませて眠らせといてよ」

まだ夢うつつの智子を抱き起し、もう一本の睡眠薬入りのジュースをラッパ呑みさせ、ミチの手許を見ながら久田は云った。

「それだ。その袋だ。竹の野郎の道具だ。マリもその袋の中で眠ったんだ。袋の中に縄もある筈だぞ」

すやすやと眠りこける智子の体は、忽ち後手に縛り上げられた。

「ミチ、袋の口を拡げろ。よいしょっと」

余った綱で足首を折り曲げて縛り、猿ぐつわまではめられた智子の体は、自動車のシートにするごわごわした厚いカンバスで作った袋の中に収まってしまった。

手ぶらで来たミチは、白い智子であったワンピースをまとい、ハンドバッグをぶら下



げている。久田が大きなスーツケースを持って「白百合」を出た。

「おい婆さん。これ取ったときな。上の鍵は預

つとくぜ。荷物はあとで取りに来るからな。

わかってるな。誰にも云うんじゃねえぞ」

千円札をあわててつかむマダムを尻目に、

タクシーを呼び止める。

山多会の事務所、但し表向きはT興業の事

限定版  
写真集  
△美しき縛しめ▽第七集 愈々好評!!

山原清子  
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

一部一〇〇〇円  
略号 △美7▽

全部最近撮影の力作!

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉

ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊

縛フオトの結集版 (思わず息をのむ凄いポーズばかり満載)

このグラビア写真集の写真を撮影するため、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフオトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フオトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしておりませんから直接発行所へお申込み願います。  
△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

務所。金文字で専務室と書いた部屋で、久田はペコペコと腰をかがめている。ミチがこれまた媚びるように要所を補足している。頬の傷跡が凄みを見せる山野がソファにふんぞり返っている。

「よし、わかった。あそこの六号室を貸してやろう。しかしだな。そのスケがおめえの云うように半月しても、何でもする変った玉にならなかつたら追い出すぞ。云々とくがな。

おめえ等が、あそこを使うのは俺の知らん事だぞ。ええな。おい久田、俺はミチの話を信用したんだぞ。うわっはっはっは」

「へい、有難てえこつてす」

「さあ、これだ。こっちがベランダへ出る鍵だ」

たそがれて来た、この須磨のマンションの階段を、久田とミチは袋につけてある吊り手を持って引っぱり上げた。

山野が脅し取ったと云われるこの大きくはないが豪華なマンションにしばらくでも住める楽しみと、自分たちのとても手に届かない様な金持ち娘を「変った玉」に仕立てる喜びに、重い荷物も二人には苦にならなかった。

(次号後篇)

## 酒場「サイケ」

又は魔女は何処にでも居ると言う話

河野 安 春

—  
いえいえ、決して嘘でも、冗談でも無いんですよ。本当に私は魔女に出逢ったのです。それも凄い大物でしてね。魔女中の魔女、いわばトップ魔女とも言いますかね。いや、すんでの事に、其奴に引っ拐われて酷い目に逢う所でした。えっ？矢っ張り鼻が鉤のように、垂れ下って居たかですって？冗談でしょう。そら、テレビに出て来る奇麗な魔女が言

うじゃありませんか。今時、そんな旧式なスタイルの魔女なんか居ないって。何だか信じられないと言う顔付きですね。無理ありません。誰れだって、自分の眼で見た者でなければ、真底信じられない話ですよ。  
とに角、私の出逢ったのは、凄い美人の魔女でした。爾来、女性、殊に美しい女性を見ると、ひどい恐怖感に襲われましてね。何ですって？鰻頭が怖いと言う落語の類だろうっ

て？交ぜっ返しては不可ません。この美しいちっとも魔女らしくない女性が、いざ其の本性を現わした時の凄さと言ったら、恐らく私は一生涯、この恐ろしい記憶に悩まされる事だろうと思う程です。現に、此処でこうしてグラスを傾けていても、ふっと其の時の記憶が甦ってくるのです。すると、この美人のマダムまでが、あの凄まじい魔女の仲間のようになんて思われて来ましてね。今に奇麗な赤い唇が「ジルギルビルチル……」と怪しい呪文を唱えて、私も貴方も、浅ましい豚や犬に変身させてしまふんじゃないだろうか、背筋が寒くなるような気がするのです。

（マダムの声「厭ですよ、変な話をして。妾は、そんな恐ろしい魔女なんかじゃありませんよ。でも本当に貴方達を、私の思うままに豚や犬に変えて、好きなように虐めてやれたら、随分、愉快でしょうね。ホホホ」）

おいおい、止せよ、マダム。何だか声の調子まで変ったようで気味が悪いじゃないか。何だって、マダムもこの話が聞きたいって？いいよ。話すよ。信じようと、信じまいと、其れは貴方達の勝手だ。そうでしょう？あれは夏のボーナスを貰った日でした。お互い、サラリイマンには嬉しい日ですよ。



いつもは、仲間と祝杯を挙げるのがお決まりなんですが、其の日はそれも断って、マリ子に電話しました。ええ、恋人なんです。可愛い娘でしょ。その晩は一緒に食事をする約束で、前からPホテルに席をリザーブして居たのです。所が運の悪い事に、彼女、その晩はどうしても家を出られないと言う返事です。がっかりしましたね。と言って、今更、味気ない一人暮らしのアパートに帰る気にもなれず、一人でPホテルに出掛けました。たまにはゴウジャスな雰囲気にも浸るのも、悪くはあるまいと考えましてね。

外人は夕食の時間が遅いでしょう。ですから、私が行きました時は、未だひっそりとしていました。のんびりと食事を終えたと、これも未だ人ツ気の無い隣室のバーで、食後のブランドイを独りで楽しみました。いえ、アルコールは強く無いんですよ。二、三杯でほんのりと赤くなる、まあその程度なんです。少し微醺を帯びた所で、ぶらぶら散歩でもしながら帰る積りでした。

所が何気無く横を見ると、いつの間に来たのか女が一人、隣りのスツールに座ってるではありませんか。それも凄い美人です。年の頃は二十七、八でしょうか、大柄な身体に黒

っぽい明石の和服姿、下着の赤い花模様が透けて見える色っぽさです。濃く細い眉、睫毛の長い大きな目、高い鼻、心もち削げた頬、黒い豊かな髪を、無難作に束ねているのですが、日本人とも見えるし、外人とも言えそう、エキゾチックな魅力が漂っていました。

その美女が私と目が逢うと、ニッコリと微笑むのですよ。何しろ、こちらも好い気持ちで居た所ですからね。つい惹き込まれて、グラスを一寸挙げると、グイと飲んで見せました。気障な真似ですがねえ。

それから、段々と変になって来ました。大分酔ったようだな。オヤッ、六杯目じゃないか。これ以上は危いぞと自分では判っているのですが、それがその、夢の中のように頼り無いのです。女の黒い瞳がじっと私を見詰めていましたね。自分の意志に関係無く、物事の方がドンドン先きに進んで行く、丁度そんな気持ちでした。

そのうちに、女の手がそっと私の手の下に重ねられました。冷たく、しっとりとした皮膚の触感でした。私の手を包みこむように、柔らかく握りしめたり、細い尖った指先が掌を撫ったり、私の全身の感覚をじーんと麻痺させるような、巧みなテクニックなんです。

(マダムの声「鼻の下を長くした、貴方の顔が、目に見えるようだよ」)

鼻の下だけじゃ無いよ、マダム。恐らく身体中の筋と筋は伸び切っていたと思うんだ。何しろボートとしてしまっただけで、何が何だか判らない有様さ。それから、柔らかな、撓やかな腕が、私の首に巻きついて、肉桂のような重苦しい香料が鼻腔を刺激し、大きな黒い瞳が、目の前一杯に迫って来た時、周囲の現実の世界は突然濃霧の中に包まれて影のように薄れて行き、とうとう私は感覚を失ってしまったようでした。

## 二

気がついた時は、女の部屋の中でした。灯りも無く、薄暗い室内は、物音一つ聞えず、まるで人里離れた、密林の中にもいるように、淀んだ空気が立ちこめて居ました。

女は寝台の上に、放恣な姿態で横たわっています。只一つ、ベッドサイドの小さなランプが、女の白い豊かな肉体の起伏に、悩ましい、神秘的影を投げていました。いつか全裸にされた私が、痴呆のように見入っているのを、女は嘲笑を浮かべて見やり、その肉体を挑発的に動揺させました。私の呼吸は烈しくなりましたが、身体はどうした事か身動きも

出来ません。いや、動こうとする意志も無いと言った方が、適切かも知れません。

ピシッ、女の指が鳴らされました。女が私を呼んでいるのです。弾じかれたように、寝台の側に駆け寄った私は、膝について、女の次の命を待ちました。何一つ、考える事も出来ず、又、考えようとする気も起こらないのです。女の命のままに行動するのが、当然の事のように思われたのです。然し、それからの女の要求が、男性である私を完全に無視して、如何に奇怪で、野卑で、淫猥で、残酷であつたか、今、思い出しても顔が赤らみ、胸が悪くなるような思いがします。それを又、私は女の一弾指の命の下に、只もう唯々諸々として、否、寧ろ嬉々として服従し、凡ゆる屈辱的な奉仕を以て応えたのです。

それは無限と思われる程、永い間、続きました。やがて女は堪え兼ねたように獣の呻きを洩らし、柔軟な肢態を蠢動させましたが、その汗と女の香りの中に、私自身も奇妙な陶醉を感じたのは、今でも恥かしく思っています。その陶酔の中に、どうした事か、マリ子の若々しい肉体の面影が、私の脳裡をよぎりました。丁度、昂ぶった情感の潮のうちに、汗ばんだ女の強靱な四肢が、網にかかった昆

虫を捕らえる女郎蜘蛛の如く、ギリギリと私を搦めつけているさ中でした。私は急に自分の屈辱的な姿態が、何とも厭らしく汚ならしいのに、烈しい嫌悪の念に襲われ、思わず女の身体を突き放したのです。

無言のまま床に散らばった衣服を取り下げ、私を、女は未だ消えやらぬ情欲の余烬に、白い胸を浪打たせながら、黙って睨みつけていました。その冷酷な瞳の奥には、執拗な怒りの炎が燃えているようでした。振り向きもせず、扉に手をかける私の背に、女は鋭い言葉を投げつけました。

「妾から逃げられるとでも思っているの？フフ……今に見るがいい」

私は耳を覆って飛び出しました。

### 三

どこをどう走ったか、もう無我夢中です。我に還った時は、街の雑踏の中に居ました。群衆の流れに身を任せていると、漸く心地を取り戻してくるようでした。すると先刻の女の冷たく湿った皮膚の触感が、まるで粘膜のように張りついている感じで、私は気味悪るさに、何度となくハンカチを取り出して顔を拭きました。一刻も早く帰って、シャワーで何もかも洗い落したいと足を速めました。が、

運の悪い事に厭な男に肩を叩かれました。「よう、どうしたい。浮かぬ顔付きじゃないか。どうだ、一杯つきあおうか」

三流の業界誌の記者ですが、なあに、何が本職だか知れたものではありません。私達は顔色の悪い、変に膨れたこの男を、蔭では青蛭と呼んでいました。悪い奴に捕まったとがっかりしましたが、格好な鴨を発見して、相好を崩している青蛭を見ると、とても逃げられないと私は観念しました。

仕方無く肩を並べて歩くうちに、ふと横を見た私は、そこに見慣れぬ小路があるのに気付きました。バー街らしく、サインボードの黄色い灯りが、ずーっと並んでいます。

それが皆、今時、余り見られない、鋳物造りのゴシック風のデザインなんです。奥行きは随分深いようですが、人影は全然ありません。小路全体が、何か海の底のように青い靄に包まれていました。古風な石畳みの路は、しっとり濡れて、黄色いサインボードの瞬く灯りを反映し、浪のように揺れ動いています。変だな。こんな所にバー街があったかな。ふと疑念は浮かんだのですが、その時はもう青蛭と一緒に、足を小路に踏み入れていたのです。



その青い靄の中に身を入れた途端、私を取り囲む四辺の空気が、急に重くなりました。密度の高い、湿気を含んだ重い空気が、身体中の毛穴という毛穴を一度に圧迫して、身体が宙に押し上げられるような気持ちでした。

足の運びも、何やら思うに任せません。石畳みを踏む二人の足音も、大地に吸い込まれるかの如く、全然聞こえないのです。変に静まり返った小路を、私は淀んだ空気を押し退けるようにして、一心に歩きました。横目で青蛭を見ると、彼も硬わばった顔で、眼を据えて歩いています。何か喋舌っている積りなのか、口をパクパク動かしているのが、釣り上げられた魚のように見えました。

何れ程、歩いたでしょうか。随分、長い間歩いたように思うのですが、周囲の家並みは一向に変わった模様はありません。依然として目の前には、古臭いデザインのサインボードが続いています。何だか最初から、一步も動いていないのではないかとも思えるようでした。側らのサインボードを見上げましたが、濃い靄が渦を巻いていて、一字も読む事が出来ません。冷汗が気味悪く背筋を流れます。すっかり疲れ切って、その場に立ち竦んだ私は、もう一度前方を透して見ました。煙った

ように立ち並ぶ黄色い灯りの一番奥に、一つだけ、はっきりと文字の読める小さなサインボードが見えました。

#### 「酒場 サイケ」

サイケ。サイケだって？そうだ。オデッセイの一行を惑わせて、その乗組員達を醜い豚に変えてしまった魔女の名前ではないか。変った名をつけたものだ。一度覗いて見るかそう思った時、私達は既に、その『酒場サイケ』の、黒っぽいマホガニーの扉の前に立っていました。扉は私が手を触れる前に、スツと内部から開き二人を中に吸いこみました。

#### 四

暗い部屋でした。何も見えません。只、正面に小さなバーのスタンドが、微かに浮かんでいるだけです。踏み出した足は、厚い敷物の中に沈みこむようでした。両側にはボックスがあるらしいのですが、客の姿も、女らしい人影も見えません。そのくせ誰れかが居るらしい気配は感じられるのです。耳を澄ませると、ボソボソと低い人声が聞えるような気がするので。

今から思えば、何もかもが異様でしたが、その時はもう妙に疲れ果てていて、早く冷たい飲物で咽喉を湿おしたいと、それだけを考え

ていました。やっとの事で、人気の無いスタンドのスツールに腰を下して、ホッとした途端に、私の側にスツと人影が立ちました。黒っぽい明石の着物の膨らんだ胸許から、赤い唇、高い鼻、そして睫毛の長い大きな眼を見るや、私は思わずワッと叫んで、腰を浮かせました。ホテルに置き去りにした、あの女ではありませんか。冷く取り澄ました瞳の奥には、未ださっきの怒りがチロチロと、炭火のように燃えているのが判りました。だが、こうしてバーのマダムと正体が知れると、私の気持ちも少し落ちついて、上げかけた腰を再び下したのです。

「スコッチ。水割りで頼むよ」

出来る限り冷静を装って命じたのですが、私の語尾は情け無く震えていました。マダムは、それに答えようとせず、蛇のように光る眼に、ともすれば憶病に目を反らせようとする私を、しっかりと見据えたまま、その顔を近か寄せました。

「どう？やっぱ網に掛ったようね。ウフフフ……」

勝ち誇り、残忍な征服者の喜びを隠そうとしないマダムの声に、私は又背筋の凍る恐怖を覚えました。ホテルでの浅ましい私の姿を

思い浮かべると、もう矢もたても堪らず逃げ出そうとする私の肩を、マダムの白い腕が軽く押し戻しましたが、私の反抗を許さない強力が秘められていました。

「フフフ……。駄目よ。もう逃がさないわ。待ってらっしゃい。あとでゆっくり料理してあげるから」

何も知らない青蛭は、よそ目には親しげな私とマダムの様子を、さっきから羨ましそうに、横目でチラチラと窺って居ましたが、堪り兼ねて声をかけて来ました。

「おい、凄く持てるじゃ無いか。こいつは、水割り一杯では、済まされねえようだな」

下素っぽく搦んでくる青蛭の声に、マダムはキッと振り向いて、あの爬虫類の冷い瞳で睨みつけました。いつの間に用意したのか、オードブルの皿と、チリチリと涼やかな音を立てているウイスキーのカップを、青蛭の前に置く間も、その眼は青蛭を捕らえて離しません。可哀相に青蛭は、針で突かれた風船のように縮みあがりました。

「邪魔だね、お前は」

歯牙にもかけぬマダムの口調に、青蛭はグッと頭を抬げました。流石に頭にきたのでしよう。

「オイッ、お前とは何だッ」

然し青蛭の怒声は、途中で切れました。ズイと近か寄ったマダムのよく撓う手が、小気味のよい一撃を、青蛭の唇に加えたのです。

余りの事に目を剥いて立ち上ろうとする青蛭の頭髪を、マダムの纖手がしっかりと捉えられました。痛さに顔を顰めるのに目もくれず、グイと抑向けると、カップの中にペツと唾を吐き、そのまま、無雑作に彼の口に流し込みましたが、それがもう、アッと言う間の出来事なんです。

青蛭は魅入られたように、ピクリとも動きません。その顔を真上から見下したマダムの赤い唇が微かに動き始めました。

「ジルギルビルチル……」

低い呟くようなその声に、青蛭はピクンと身体を震わせたかと思うと、石像のように硬直しました。おや、ギリシヤ語だな。豚に成れ、豚に成れと言っている……と私は思いましたが、これも変でした。第一、ギリシヤ語なんか、生れてこの方、見た事も聞いた事も無い私ですから。

やがて邪慳に頭髪を突き離れた青蛭は、ノロノロと身体を起こし、フーッと大きく息を吐きましたが、その鼻からは、明らかに豚

の鳴き声が洩れました。急がしく顔を左右に振りながら、オードブルを見付けると、嬉しそうに目を輝やかせ、鼻息を高くして首を延ばしました。

そのさまを、胸許に腕を組み、冷然と眺めていたマダムは、何を思ったか、その鼻先きからサツと皿を取り上げると、自分の足許に置いたのです。目に滲みるような真ッ白な、形のよい足袋に、華麗な蜥蜴革の草履の鼻緒が、クッキリと喰い込んでいます。

「お前の場所は、こっちだよ」

嘲笑しながら、とんと床を踏みますと、青蛭は温和しくスツールから滑り下りて、四つ這いになりました。姿も形も青蛭のままですが、その挙措は、完全に豚のものでした。嬉し気に鼻息を立て、頭を下げてマダムの足許に置かれた皿に這い寄る姿は、滑稽と言うより、何か底知れぬ恐怖を私に与えました。今の青蛭には目の前の食物以外に、何も見えず、又何も考えられないようでした。遮二無二、食物に口をつけようとする青蛭の顔は、マダムの草履で無慈悲に押し退けられました。思ひも寄らぬ障害に青蛭は身を跳き、悲しい鳴き声をあげるのですが、マダムの足は、執拗に青蛭の顔を寄せつけないのです。まるで犬



か猫のように、青蛭の顔を足で巧みにあしらうマダムの表情は、ゾツとする程、残忍に見えました。

さんざんに虐じめ抜いてから、漸くマダムは足を退けました。ブーツと高く鼻息を立てた青蛭は嬉しそうに皿に突進しました。だが冷酷なマダムの苛責は、未だ終わっていません。たのです。御馳走の寸前で、マダムの足は再び青蛭の顔を捉え、今度は力一杯、床に踏みつけたのです。華美な草履の下から、踏み歪められた顔を覗かせ、失望と苦痛に呻くその姿は見るも哀れでした。一筋、二筋、涙が尾を引いて流れるのに、思わず私は目をそらせました。

## 五

想像もしなかったマダムの残虐な仕打ちを私は身を固くして眺めるのみでした。

「どう？この格好は」

足に力を入れて、ぐりぐり踏み蹂りながら振り向いたマダムの目は、異様に光っていました。

「お前も、此奴の仲間にしてやろうか？ホホホホ……。おや、震えてるの？ホテルでは随分、威勢がよかったのにねえ。お前は知らないだろうが、妾達の仲間ではね、あんな侮辱は絶

対に許せない事になってるのだよ。だから可哀想だけれど、お前には、その償いをして貰うよ。そう、死ぬ迄お前は妾しの玩具になって暮らすのさ」

余りにも奇怪な言葉に、私は呆気にとられて、マダムの薄笑いを浮かべた顔を見詰めました。冗談だ、冗談を言ってるのだと、私は考えようと思いました。

「冗談だと思ってるんだね。フフ……。お前、表のサインボードを見なかったの？たしか〆酒場サイケ〆と、はっきり書いてある筈だがねえ。そうさ、思い出したかい？妾がそのサイケさ。オヤオヤ、ひどく震るえだしたじゃないか。でも遅いよ。もう逃げられないと言う事さ。直ぐに連れてってやるよ、妻の島へね。そこで、ゆっくりとお返しをさせてもらう積りさ。楽しみにして待っていで」

恐怖に歪む私の顔を、小気味よげに見ていたマダムは、何か考えついたのか、大声で笑い出しました。

「今、妾が何を考えているか教えてやろうか？ホホホホ。先ず、お前のその胴体を、小っちゃな小馬と取り換えてやろうと考えていたのさ。少しは乗り心地がよくなるだろうからね。それから、その肩の所に大蝙蝠の翼を取

っ付けてやるよ。どうだい、お前は自由に空が飛べるようになるのだよ。素敵だろう？妾にも便利な乗り物という訳さ。ああ、そうだ。お前の舌も取っかえた方がいいね。山犬の舌なんかどうだろう。大きな疣を三つ四つ、くっ付けてさ。ホホホホ」

マダムは可笑しくて堪らないように、身を揉んで笑い出しました。きっとあの一室での痴戯を思い出したのでしよう。腕を私の首に廻すと、グイと引き寄せました。逃げも避けても出来ません。あつと言う間もなく、私の顔は膨らんだ胸に抱えこまれて、大きな黒い瞳が、近かじかと私を見下しました。

ああ、もう駄目だと、私はマダムの腕の中で戦慄しました。こいつは魔女だ。本当の魔女なのだ。何処だか知らないが、こいつの島に連れて行かれては、恐らく日本の土は二度と踏めないだろう。ああ、マリ子！絶望の中に、私は恋人の名を呼びました。マリ子、お前にも、もう逢えなくなるだろう。あんなに結婚の日を楽しみにしていたお前と、別れの言葉も交さずに、恐ろしい魔女に連れ去られるとは、何という悲しい運命だろう。私が突然に姿を消しても、マリ子、お前を棄てて、逃げたなどとは、どうか思わないでくれ。

悲しい思いに私は身を跳きました。すると、どうした事でしよう。マダムの腕から私はスルリと抜けだしていたのです。

マダムの血相が変わりました。眦りをキリキリと吊り上げ、齒を喰いしぼり、見るも恐ろしい形相でした。

「未だお前は、あの小娘が忘れられないのかい？よし、あの小娘を此処へ連れて来て、お前に、その正体を見せてやろう。自分の目で確かめるがいい」

マダムが手を打つと、何も見えなかったボックスから、若い女が現われました。見慣れぬ白い薄物のガウン風の衣裳でした。

「シーラノ今直ぐに、あの生意気な小娘を連れておいで。此奴に雌狐の正体を見せてやるのだから」

風の音が響いて、一礼したシーラと呼ぶ女の姿は消え去りました。強い硫黄の臭いが鼻をつきます。

「待つといで。今に、お前の目の前で、あの小娘の毛を毛ってやる。どんな正体を現わすか、さぞ観物だろうよ」

マダムは腹立たしそうに、踏んまえていた青蛭を、思いつき蹴飛ばしました。二三度ゴロゴロと転った青蛭は、死んだように動き

ませんでした。

## 六

薄暗い部屋の中に、恐ろしい魔女と相對して、私は悪夢を見ている思いでした。しかも私だけでなく、罪も無いマリ子に迄、触手を延ばそうとしているのです。マリ子、逃げるのだ。この魔女達の手の届かぬ所へ、うまく逃げておくれ。純潔なお前を、汚らしい魔女の手に触れさせたくない。マリ子……。切ない私の祈りも空しく、再び聞こえてくる風の音と共に、シーラに腕をとられたマリ子の姿が浮かび出ました。もう寢床に居たのでしよう。マリ子はベビイドルのような白いネグリジエ姿で、若々しく張り切った滑らかな下肢は、露わなままでした。寝入りばなを襲われて、未だ目が判然と醒めないのか、頬を膨らませて、呆然と顰めっ面をしているのが、幼女のように稚けなく見えました。

恐ろしい魔女の前とも知らず、無邪気につっ立っているマリ子が、私には涙が出る程、哀れでした。マリ子、済まない。俺の為に、とうとうお前まで捲き添えにしてしまった。勘弁しておくれ。お前にこれ以上、苦しい思いをさせたくない。辛いけれど、私はお前との結婚を諦め、魔女と一緒に遠い所へ行

くよ。お前を捨てるのだと思わないでくれ。みんなお前を愛しているからだ。マリ子、勘忍しておくれ。私は心の中で、繰り返し繰り返し、マリ子に詫言続けました。

私のこの気持ち、手に取るように判るのか、苛立たしそうに、マダムはマリ子の前に立ちました。

「さあ、見るがいい、お前の好きな小娘の正体を。この生意気な女狐の正体を」

マリ子の髪を手荒く掴んだマダムの手が、グッと可愛い顔を仰向けしました。その顔を睨み据えて、マダムの赤い唇が咬きます。

「ジルギルビルチル……」

無気味な呪文です。マリ子の身体が電気に打たれたように、ギクリと動きました。眦りも裂けんばかりに目を見開き、苦しげに口を震わせ、首を激しく左右に振り始めます。私はもう見るに堪えず、目を閉じました。マダムの呪文は未だ続いています。突如、怪鳥のような絶叫が、私の耳を打ちました。

「キイイ……ッ」

ああ、マリ子。遂にお前も魔女の犠牲になったのかと、気も狂いそうな私の目に写ったマリ子の姿に、私は一瞬、息をのみました。髪を振り乱し、目を吊り上げ、口を耳まで裂



けんばかりに押し開き、狂気のように笑い続けていたマリ子に私は己が目を疑いました。

「マリ子！」

悲痛な私の叫びも、マリ子の耳には入らぬようでした。マリ子は笑いながら、ポンと手を打つと、彼女の身体はふうわりと空中に舞い上りました。薄いネグリジェの裾を軽ろやかに靡びかせながら天井近くまで昇りつめると、今度は身体を水平にして、部屋中を廻り始めました。まるで白い鳥が飛んでいるようでした。飛翔する速度は次第に早くなって来ました。叫び声も高くなって来ます。

啞然として見上げる私の目に、白い鳥が空中に静止するのが見えました。キーンと叫ぶ声が聞えたかと思うと、マリ子は急降下しました。さっきマダムにひどく蹴飛ばされて仰向けに倒れたまま呻いている青蛭の腹の上に、お尻から落下したのです。幾ら、可愛い娘と言っても、五〇疋近いグラマーな肉体が遠慮会釈も無く腹の上に落ちて来たのですから堪りません。青蛭は死にそうな声をあげて、泣き喚きました。マリ子は平然と腰を下したまま、青蛭の鼻を捻じ上げるのです。

「キィ……」

笑声と共に、マリ子は再び空中に飛び上り

ましたが、今度はその指に、青蛭の鼻を摘まんだままです。マリ子の笑い声にに応じて、青蛭が苦しうにグルグル……と鼻を鳴らせます。一体、これはどうした事でしょう。私は馬鹿のように、白い鳥と豚のデュエットを見上げるのみでした。

## 六

「何だい。女狐だと思ったのに、仲間だったのかい」

マダムは忌々しうに呟きましたが、もうマリ子にも私にも、目もくれようとはしませんでした。

「シーラ！今日の獲物は？」

マダムの声に応じて、シーラはボックスから大きな檻を索き出して来ました。マダムの指が鳴りました。

「出ておいで」

低く狭い入口から、一人の男が這い出しました。好色そうな中年の紳士でした。

「マダム、悪い冗談だよ、俺を檻に入れるなんて。だが一寸スリルはあったね。檻の戸が開かれるのは、きっとマダムのベッドの側だと思つて、実は楽しみにしていたんだが」

紳士は立ち上ろうとしましたが、その前にマダムの足が、ゴロリと仰向けに蹴転がしま

した。

「お立ちにならなくてもいいのよ」

マダムは足を上げて、紳士の身体をあちらこちら踏み始めました。丁度医者が診察でもするようでしたが、やがて腹立たしうに、声を荒らげました。

「シーラ、何よ、これ。こんな者を島へ連れて行つても、一週間と持つものかね」

「マダム、酷い事を言うなよ」

抗議しようとする紳士を、まるでフットボールのようにマダムは空中に蹴上げました。キーンとマリ子の叫び声が聞えたのは、大方、紳士と衝突しかけたのでしょう。紳士は天井を透り抜けて消えて行きました。

「次ぎだよ」

出て来たのは、筋骨逞ましい青年でした。ボクサー上りでしょうか。鯉のように鼻が曲っていました。青年は敏捷に飛び起きると、マダムに詰め寄りました。

「オイ、マダム。あんまり人を白痴にするなよ。何でえ。檻なんぞに入れやあがつて。えっ、一体何の積りだよ。俺はな、これでも、ジュニアのバンタム級では、少しは名の知れた男だ。さあ、何とか挨拶をして貰おうじゃねえか」

肩を揺すって顔を突き出す青年の曲った鼻をマダムの細い指がピシリと弾きました。

「イテテテ……」

悲鳴をあげる青年を、足をあげて雑作無く蹴転したマダムは、又その身体を踏み始めました。

「案外、良い身体をしてるじゃないか」

マダムは機嫌のよい声を出しましたが、青年の頭をトントンと蹴って見て、がっかりしたようでした。

「何だい、空っぽじゃないの。まあいいだろう。一角獣並みの力仕事は出来るだろうよ」

「空っぽとは何でえ。人を馬鹿に……」

マダムの草履が、青年の口を踏みつけたので、言葉は途中で消えました。

「シーラ、荷造りしてお置き」

マダムに足で押しやられた青年は、手向いをしても敵わないと思ったのか、温和しく天井を見ていました。子供のようになやまな顔になりました。シーラは呪文を唱えながら、青年の足の方から踏み始めました。青年の口からは、シューシューと空気の洩れる音が聞えます。女の踏んだ後は、カーペットのように平たく成っているのです。腹、胸と踏んで行き、最後に顔の上にシーラの両足が乗せら

れた時、ひときわ高く、シューと空気が洩れましたが、そこに残っているのは人型のカーペットだけでした。シーラは口の辺りに指をかけると、ボックスの帽子掛けに吊り下げました。

「次ぎだよ」

今度は物腰の変にくねくねした、歌舞伎の女形か、ゲイボーイのような男でした。

「マダム、厭ですわ、変な所へ入れてさ。断って置きますけどね、いくらマダムが奇麗だって、妾しや女の人には全然興味が無いのよ。ね、マダム、勘弁して下さいな」

マダムは不思議そうに男を見ていましたが蹴転がすと腹の辺りを一寸踏みました。

「オヤ、矢張り男じゃないか。一体どう言うのだろうね」

当惑したように見下していましたが、決心したように呟きました。

「まあいいだろう。今日は不漁だし、未だ年も若そうだから、使い途はあるだろう。シーラ、荷造り」

男は口を尖らせました。

「しどいわ、マダム。荷造りだなんて。いくら妾がホモだからって、しとを荷造りするなんて……シューッ」

シーラの足がもう男の身体を踏み始めていたのです。結局、帽子掛けに並んだのは、二枚の人型の敷物だけでした。マダムはひどく落胆したようでした。

「たったこれだけかい？ シーラ。オリエント最高の文化国家だなんて威張っててさ。碌な男は居ないじゃないの」

不満を洩らすマダムの足許に、マリ子はキーンと叫ぶと青蛭を投げ落しました。だがマダムは眉を顰めただけです。

「豚には、あきあきしてるのだよ」

ブウブウと呻く青蛭の上に、飛び下りたマリ子は、器用に胡座をかきました。

「仕方がない、シーラ。帰りに香港へ寄って見ようよ。少しはましな男が見付かるかも知れない」

ヒューッとマダムの口笛が響くと、忽ち凄じい風の音と共に、黒雲が竜巻の如く湧り起こり、鼻を刺す猛烈な異臭に、私は気が遠くなりました。暗黒の中から、マダムの声が高らかに聞えました。

「さあ、行こう、シーラ。この風なら香港までは一と飛びだよ。風よ、吹け！ 雲よ、走れ！ 出発だ！」

私はそのまま気を失いました。



## 七

冷めたい夜露にうたれて、私は気がつきました。私は裏通りの狭い空地に寝て居たのです。周囲には、酒場らしいものは何一つ見当りません。そばには青蛭が呑気な顔で眠っていました。さっきの恐ろしい魔女を思い出すと、私は手荒く青蛭を揺り起こしました。未だその辺りに魔女が潜んでいるように思われるのです。漸く起き上った青蛭は、フーッと煙を吐きましたが、もう豚の鳴き声は聞えませんでした。

「あれっ、ここは何処だい？こんな所に寝込んでたのかい？だが変だなあ、どうして、こんなに酔っ払ったのだろう。そんなに飲んだ覚えは無いんだがなあ」

青蛭は首を振ると、拳で頭をトントンと打ちました。魔女のマダムに散々な目に逢わされた事など、全然記憶に無いようでした。そうか、そうすると私も酔っ払って夢を見たのかも知れない。私はホッとしました。

「じゃ帰えろうか。風邪をひきそうだ」  
青蛭の腕をとって引き起こした時、私はその横顔に、マダムに踏まれた草履の跡がクッキリと印されているのを見ました。ギョッと私は立ち上りました。

夢では無かったのだ、本当に魔女の手に落ちる所だったのだ。

私は青蛭を突き離すと、人通りの無い夜更けの街を、夢中で駆け出しました。

如何ですか？この話。何だか信じられないと言う顔ですね。エッ、それよりマリ子はどうしたと言うのですか。

エヘヘ……。結婚する事にしました。来月です。

おや、何故そう吃驚するのです。ああそうか、魔女と結婚するのが怖くはないかと言うのですね。あれからもマリ子とは、ずっとデートしていましたが、有難い事に少しも変わった所は無いのですよ。あの晩の事を何度かマリ子に聞いて見ようとは思いましたがね。怖くって聞けないのです。マリ子も亦、何も言いませんしね。

それに若しマリ子が居なかったら、私はあの時、魔女に連れ去られて、どんな酷い目に逢わされたか判りません。言わばマリ子は私の恩人です。

そんなに気味悪るそうに、見ないで下さいよ。打ち明けた所を言いますとね。それは私も少しは気味が悪いと思いますよ。でも貴方、若し私がこの結婚を断わったりすると、怒っ

たマリ子があのような時に、キーンと叫んで私の鼻を掴み、空高く飛び上るのではないかと想像すると、とても怖くって断われませんよ。そうでしょう。

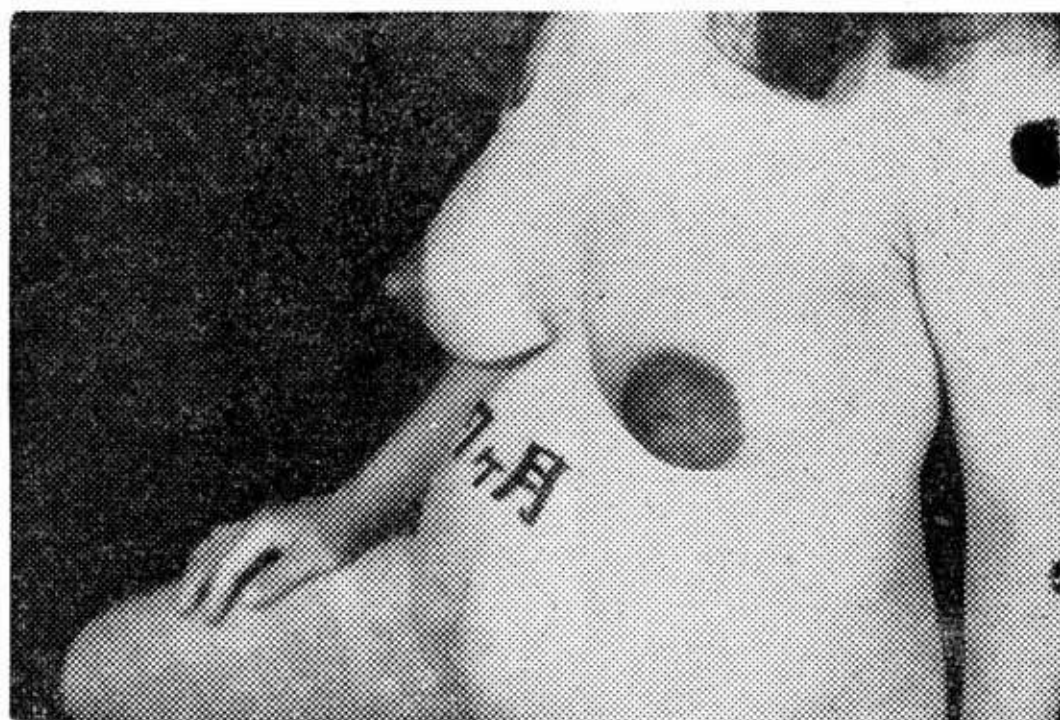
貴方はそうして笑っていますがね。貴方の奥さんだって決して魔女では無いとは言いませんよ。若し何か一寸した切っ掛けでもあれば、いつ何時、恐ろしい正体を現わすか判りませんよ。いや、全く。

おや、もうお帰えりですか。永話を聞いて頂いてどうも有難う。気をつけてお帰えりなさい。綺麗な女性と青い靄のある小路には特に用心して下さいよ。

大分夜が更けたようだな。私も帰えるとするか。

(マダムの声「アラ、貴方も帰えるの？一寸お待ちなさいよ。妾も店をしめて帰えるからさあ。エッ、口説いてもいいかって？何を言ってるのよ、馬鹿ねえ。妾は只、貴方を箒にして、家迄乗って帰えろかなと思ってるだけじゃないの。ホラ、妾の顔を見るのよ。ジルギルビルチル……。どう？ホホホ」)

(完)



## みゆきの妊婦シリーズ

### 「いのちふくらむ」

妊娠七カ月

辻 村 隆

き夫人の妊婦フォトを撮る機会に恵まれたのは九月十一日の日曜日。かねてから箕田編集長よりも連絡があつて、是非その時は同行したいとの要請もあつたので、早速そのことを彼に電話で知らせる。

日曜日は箕田氏にとっては、家庭奉仕の日になっていて、大概は夫人やお子様連れでドライブに出掛けるのであるが、妊婦フォトの決定的なチャンスとなると、そうも言うてはおられず、箕田氏も家庭奉仕をその日許りは放棄して一緒に増田喜代司氏宅を訪問するこ

とにきまつた。

午後二時、箕田氏と落合う約束が、彼の急用で午後四時になった。余り遅くなると、増田氏が焦燥すると思つたが、もう連絡も出来ず、心ならずも増田夫妻に待つて頂くより仕方ない羽目になった。

午後四時ジャスト、箕田氏と天満橋で落合う。彼の車で訪問するつもりだったから、なるべく駐車禁止地区の少ない地点を選んだのであった。完成間近の松坂屋ビルが竣工を急いでか日曜の休日にも仕事が続いている。

「どうしたの一体？」

「いやネ、急に午前中に婚礼が一つと、午後

△前置▽増田喜代司が書く予定の、みゆき夫人の妊婦シリーズ。彼がどうしても今回は私にと仰有るので彼に代りました。

× × ×

そのうちに、そのうちと思ひ乍ら、お互いに都合のいい日が見付からず、やっとみゆ



と間に合せたんだ。祝辞をのべたり、お悔みをいったり、頭がヘンになってしまふよ」

「じゃあ、いずれにしても家庭奉仕はオジャンになる場所だったね」

「まあね、ところで大分遅くなったが、増田夫妻の方はいいだろうか？」

「それが急のあんたの電話で、彼に遅れることは連絡していないんでよ」

「随分首を長くして待ってるぜ」

「出掛けに家内に言ってるから、増田氏が私の家に遅いので電話したら、分ると思うがネ、まあ、すぐ走ろう」

休日の大阪のビジネス街は実に静かだ。往きかう車もまばらで、車の足は早い。

増田夫妻は、豊中市のアパートから、今度彼の勤務する鉄筋五階建の、会社の社宅の方に二カ月許り前、転居したので、私もその社宅の方は今日が始めてである。彼より精しい地図を送ってもらっていたが、持参するつもりで机の上に出しておき乍ら、家を出る時心がせていて、うっかり忘れてきたが、大体の道筋は頭に入っているの、行けそうである。箕田氏は私任せなので少し心細い顔をした。

いつもは停滞し勝ちの阪神国道も今日許り

はガラガラだった。安全運転の箕田氏は、それでも減速に六〇キロ以上飛ばさない。気のせいである時は、少し歯掻ゆいくらいであるが、これでいいのかも知れない。

西宮市の広田神社の手前で右折し、阪神、国鉄、阪急のガードを抜けて山手に向う。目印の××生命の社宅を見付けホッとす。この辺りはかなり開けたが、殆んどは社宅や、住宅地許りの、造成地区が続いている。

目指す増田夫妻の会社社宅はすぐ見付かった。未だ土の色も赤い、造成ホヤホヤの土地に、真新しい五階建の住宅が二つ、ニョキリと建っていた。そのB棟の三階十八号室。社員専用の駐車場に箕田氏が車を入れているのを尻目に、階段をかけ昇る。

十八号室のベルを押すと、扉の細い小窓が開いて、増田氏の双眼がギョロリと並んだ。その眼は忽ちに笑顔に変わった。

「待ちかねましたよ」

扉を開くなり、彼の第一声は、さも待ち兼ねた声だった。

「どうも、御免なさい。箕田さんが急用で二時間許り遅れちゃってネ」

「らしいですネ。余り遅いから、さき程辻村さんのお宅に電話したら、奥さんがそう言っ

ていましたよ」

間もなく、箕田氏がフウフウ言い乍ら階段を昇って来た。

「ウーン、どうもシンドイネ。エレベーターがいるネ」

「そこまで会社は作ってくれないですよ。さあどうぞ」

箕田氏はいつも乍ら、誰にでも挨拶ぬきである。部屋は二人用に出来ていて、六帖と三帖とキッチン、それにバス、トイレ付で、未だ新建材の香も匂う許りに新らしい。

増田みゆき夫人が、はにかみ顔でキッチンから顔を出した。素肌に白地に赤の縫とりのある袖なしの妊婦服用で汗をかいている。

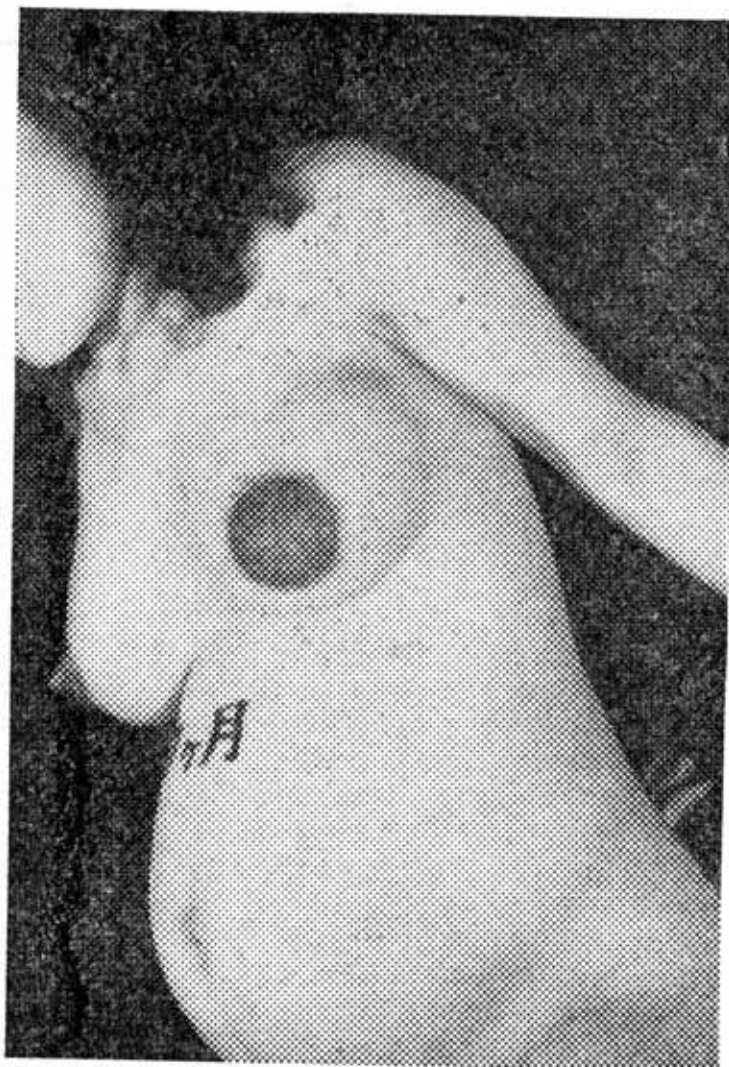
「ウーン、いいね。こんな新しい住居で、二人きりで、チョネチョネやるにはもってこいだよ」

箕田氏は大声で言って、辺りを見廻している。

「でも、子供が出来ると狭いんです。いずれA棟のコブ付の部屋に代らないと。もうあと数カ月で、この部屋ともお別れですよ」

「生れたての当時はいいが、少し大きくなると無理かも知れないネ」

時計は五時を過ぎていた。やはり急いでも



「いいえ、全然、未だ、買って一週間許りなんです。ボク達の唄聞かせましょうか」

彼はサービスこれつとめて、ギョーザを頬ばる私達の傍らでテープをかけ始める。

増田喜代司の低音の、照れたような『枯葉』の唄が、聞こえ、やがてみゆき夫人の意外にいい声が流れ出す。『星のフラ

メンコ』『柳ヶ瀬ブルース』など、なかなか新しい歌を、小節をきかせてよく唄っている。特にバーブ佐竹の『ネオン川』など、ほんの最近、やっと電波にのった許りなのに、チャンと知っている。

「辻村さんも歌いませんか？」

みゆき夫人に言われて、いささかビールの入った私は、ギョーザの脂も廻って舌がなめらかなったのか、調子にのって歌い出す。木村友衛の『河内山宗俊』という、カビの生えなかった浪花節の一ふしをいい気で唸る。ついでに一節太郎の『浪曲子守唄』というバ

カの一つ憶えを、自分では波いい声だなあと自惚れて唸っているのだから世話はない。みゆき夫人が、何か増田氏の耳許で囁きやっていた。それが気になって、唄をやめて、

「どうしたい？」  
と訊ねると、増田氏は一寸困った顔になって口ごもった。

「みゆきがネ、浪花節なんて全然興味がないって言うんです。いや、辻村さんにどうも悪くって……」

私はギャフンとなって頭を掻いた。所詮、生きる年代が違うのだろう。箕田氏がニヤニヤ笑っている。年寄りの冷水、よせと言わん許りの顔付で――。

「歌の吹込み許りの目的じゃないんだろ？」  
私は水向けると、増田氏は一寸照れて、  
「まあネ、辻村さんお察しの通りですよ。いずれはボツボツ声をとりだめて行くつもりですが、私達のプレイ最中の生々しい声も、いつかは聞いて頂くつもりですよ」

「あなた――」

みゆき夫人は真赤になって彼の膝をついた。二人きりの夫婦のお遊びのテーププレコーダーは、いずれ行きつくところまで行くだろう。私の愉しみは又一つ増えたと思った。

一時間少しかかったらしい。

みゆき夫人が私の好物をされていて、焼きたての夫人お手製のギョーザを大皿に盛って机に並べる。増田氏は余りイける方ではないが、私達の為にビールをぬいてくれる。箕田氏は運転があるのでホンのおつき合い程度にコップ一杯。ビールを平らげるのは専ら私人である。

「こんなの買ったのですよ」

増田氏は片隅からソニーの携帯テープコーダーを持ち出してくる。

「何か吹き込んだの」



テープレコーダーを片付け終り、潮時を見て増田氏は、

「じゃあ、そろそろ始められてはどうですか——」

と、私達のどちらへともなく声をかけた。

さあいよいよ本番だ。待ち兼ねていたように箕田氏は大きいボストンバッグを開いて、カメラ、ライト、コードなど、ぞろぞろ引っ張り出した。私の準備は忽ちだ。すなわち、小さいオリンパスペンにストロボを装填するだけである。みゆき夫人にさっと緊張した色が流れ、増田氏は彼女の妊婦服のファースナをうしろに廻って、一気に引き裂いた。

三〇〇W二個のライトをつけると、部屋中に熱気が漲る。扇風機をかけっ放しにしてあるが、窓を遮断してあるので、部屋の中はムーッと熱気がこもっている。

「増田さん、フोटを分譲に使っていい？」

「そうですネ——」

否とも応とも言わず、増田氏は暫らく無言でみゆき夫人の顔を見つめていた。

「困るのなら構わないんだよ。ただ、あなた達の存在が、既に誌上で凄く評判になっていて、中には、みゆき夫人の妊婦フोटを泣くように懇願してくる人もいるんでネ。まあ、

出来得べくば、そうして頂ければいいんですか……」

「瀬沼四郎さんでしょう」

「まあ、あの人はその中でも一番熱心な方だが、読者通信でも、随分沢山いるんですよ。」

田中美佐子さん以来久し振りだしネ。それにあなた達は、辻村隆のカメラ・ハントで、既に誌上で有名になっているのでネ」

箕田氏は一応紳士的に、増田夫妻の承諾を得ようと、かなり言葉に熱をこめて要請していた。私は黙ってなりゆきを見守っている。

「どう、いいだろ？」

増田喜代司はみゆき夫人にきく。

「顔が判っきり出るんでしょネ？」

「出るだろう。しかし分譲品だから、一部の方にしか分らないと思うが……」

「あなたさえ構わなかったら……」

いいというのだ。増田氏の腹はきまったらしい。

「じゃあ、構いませんよ。どうぞ、箕田さんのいいように撮って下さい。私は正直いって妊婦フोटに、さして興味はないんです。しかし辻村さんの御依頼もあって撮るには撮っています」

本来は鼻責めの増田氏である。チャンス到

来と許り、彼に懇願した私達の希望を容れて彼は協力してしてくれるのであった。

分譲フोटだから、全裸はさけて、箕田氏持参のパンティ着用で始まった。

緊縛のない、妊婦ヌードのさまざまな肢態を、箕田氏は根気よくカメラに納めていた。

彼が十枚撮る間に、私はいつもの愛用のオリンパスペンで、傍らから、おつき合い程度に一、二枚撮るぐらいである。私一人なら、当然みゆき夫人の全裸のかなり強烈な緊縛妊婦のプレイフोटに走るところであるが、分譲となると、おのずからそこに限度はある。

しかし、カメラアングルを変え、ライトの位置を巧みに配分して、カゲをつくり、腑かんし、箕田氏は流れる汗を拭いもせず、いつしかズボンをめぎ、カッターをめぎ、果てはラニンングシャツとパンツだけの姿になって、一心に妊婦フोटに取り組んでいた。私も増田喜代司も、傍観者の立場に過ぎなかった。

瀬沼四郎氏がいみじくも言った、*「メロンのヴィナス」*という妊婦への呼称が、みゆき夫人にも、実にふさわしい言葉に思えた。小柄な彼女だけに、妊娠七カ月というのに、早くもふくらみは、月以上のもののように思えた。彼女の可愛い臍窩は既に突起していた。

妊娠線はまだまざと臍窩より直線に走り、あの可愛らしかったオッパイは、ものの見事に膨張して、豊かに乳暈は黒ずんで重げに垂れていた。妊娠七カ月で既にこのふくらみならば、臨月ともなれば如何に見事に充実し、膨満することだろうか。私は箕田氏の傍らで、円くふくらむ腹部に目をやり乍ら、臨月の彼女を逆吊りする、プレイの絶頂の感激の幻想に浸っていたのである。

「どうですか、一度縛りませんか。いいですよ、遠慮なさらずにと」

箕田氏が一向にみゆき夫人を縛らないのを遠慮と見てとったのか、増田氏は縄をとり出して来て、箕田氏に手渡しと言った。

「辻村さん、あんた縛れよ」

「いや、箕田さんに今日は任せますよ。私はオブザーバーだから……」

「困ったな、どうも」

いつになく箕田氏はためらっていた。彼の真意は分っている。この愛すべきみゆき夫人の余りにも予想に反したふくらみに、彼は万一の事をおもんばかって躊躇しているに違いないのだ。私の考えとても同様である。彼女の体に万一のことがあった場合、それが緊縛によらないとしても、それが原因ととられて

彼等から恨まれても叶わないと考えていたからである。私達二人、お互いに緊縛に対しては、千軍万馬のつわもの共との自負がある。もし、興ののる俥に、激しい緊縛に走った場合、七カ月という危ない月の体が、そのショックでどう変化せぬとも限らぬではないか。「増田さん、あんた縛ってよ。あんたなら奥さんの体だから、程度がよく分っているだろう。正直いって何だか怖いよ、きつく縛ってもしものがあつた時、恨まれても叶わないしネ。頼みまよ」

私は自己の責任から逃れるように言った。

真底は、この愛らしい初産婦を心行く許り縛り、責めて見たかったが、プレイに逸り過ぎて、破滅を招いた時のカタストロフが怖かった。

「そうだ、それがいいよ」

箕田氏がすぐ合槌を打った。

「そうですか、いや、それもそうでしょう。妊娠してからでも、随分強烈なプレイしているんですよ。大丈夫なんですよ。でもそういうわれると、他人任せよりも、自分で妻を縛った方がいいかも知れませんネ。でも辻村さん、縛り方で、少し位いはアドバイスして下さいな」

苦笑し乍ら、案外素直に増田氏は縄を握って立上ると、私に声をかけた。

増田氏が主で、私は従の立場で、みゆき夫人に縄をかけ始めた。

「私達二人でとる時は、こんな邪魔なものとしてしまふんですがネ」

増田氏は、みゆき夫人のパンティに指をかけ、腰の辺りで引っ張って呟いた。そうだろう。夫婦プレイの場合に、遮蔽物は必要ないのだ。在りの俥の姿で撮るのが最も不自然でなくていい。私が撮るのなら、とくにとって貰っているのだが、まあいい。ここは箕田氏の顔を立てて、パンツ着用の緊縛とゆこう。腹部を締めるのを避け、大きく充満した乳房を、縄によって更に膨張させて、後手縛りは出来上った。その間にも、箕田氏のカメラは次々シャッターをきっていた。

白い壁をバックに。窓を遮蔽した黒幕を背にと、シロとクロの対照の違う、フォトが、二カ所のカメラ位置で交互に活動していた。私のカメラは余り涉々しく切られない。ポーズ毎に、お義理程度に二、三枚ずつ流れていった。専念する箕田氏の邪魔をしたくないという配慮と共に、少々物足りぬ気持が働いていたのであろうか。箕田氏としては千載一



遇のチャンスに、分譲フォトとしては、限界ぎりぎりのものを撮りまくっていた。彼のカメラは六×六判の二眼レフ。私のは三十五ミリの1/2のハーフ判。出来上りは言わずとも分っている。ポートレイトとスナップの違い、きめの細かさ、鮮明さ、カメラ・アングルとすべてに劣っている。その劣りは、謂わばゼニをとる分譲フォトと、趣味にとる独り楽しむフォトの違いであった。私のシャッターは実に無難作に、手持ちのまま考えもなくパチパチきる。引換えて箕田氏のシャッターはリリース着用、三脚据えつけという安全位置でしかも丹念に細心にとっている。それでいいのかも知れない。妊婦ファン待望のフォトなら、一枚一枚に箕田氏の熱意と誠心がこもっていて当然かもしれない。

縄を一度とき、緊縛を変えて、増田氏はみ

#### ◎増田みゆき夫人妊娠七カ月作品分譲

この「いのちふくらむ」の記事にあります通り、待望の妊婦フォトを撮影いたしました。見事に膨らん増田夫人の妊婦腹を、どうか印画紙焼付のフォトにてご鑑賞下さい。別項にて分譲品として広告しておりますから、どうかお求め下さるようお待ち申しております。

ゆき夫人の腹部のふくらみの中央で菱形をつくって、かなりしめ上げた。ポツカリと生命を宿したふくらみが浮き上って、彼女は大きく息をのんだ。心持ち疲労が彼女の喉に浮んでいた。そして立姿、膝立、屈曲、横座り、仰臥とさまざまなスタイルが、飽くことなく続いていった。時計を見ると、既に一時半許り撮影を始めてから経過している。もうここらあたりがきり上げ時ではなからうか。以心伝心、箕田氏はチラリと私を見返り、「終ろうか、大分お疲れの様子らしいよ」

その声に増田氏はホッと救われたような顔になった。夫として、且つ近々になる若き父親の立場から、彼も亦、みゆき夫人の疲労の状態に気掛りになっていたに違いなかった。

「もう構いませんか——」

「ええ、止めましょう」

「じゃあ、最後に二、三枚これを撮っておいて下さい」

増田氏はやおら机上の黒のマジックインキを握ると、みゆき夫人に近づき、そのふくらみの中央に黒々と「七カ月」と書きこんだ。

増田氏の数々の厚意をあつく謝して、私達は車中にのり込む。午後八時。

三階十八号室の窓は明るい。その窓が開い

て、みゆき夫人がシルエットになって浮かび上った。私達が地上より手を握ると、彼女も小さく手をかざして握っていた。

やがて母になる日も近い、この可愛い雅妻は、黒々と浮き上ったシルエットの中で、あどけなく微笑んでいた。辺りは暗黒に沈潜している。早い秋虫の音が、とぎれとぎれに聞えてくる。社宅前の道路まで送って出た増田氏は非常に恐縮していた。箕田氏が心憎くも、帰り際さりげなく置いていった小さい紙包が、本真珠の指輪であると知って、大急ぎで駆け降りて来て、箕田氏に押し返そうとした。やっとなだめて受取らせるのに一苦労して、私達の車は社宅を離れる。いつまでも見送る路上の増田喜代司と、三階の窓辺に手を振るみゆき夫人の黒い影が、振り返った私の眼に、一際印象的に残った。トップに入れて車が快速に走り出すと、その影は忽ち小さくなり、初秋の闇にとけこんでいった。

(追記) 増田夫妻の御好意で、更に今後二回、八カ月半と臨月に妊婦フォトを撮る予定です。そのレポートは増田氏自身の筆によるか、或いは私か、それとも編集部にて書くかは今の処未定ですが、みゆき夫人の健康に異常ない限り確定しています。乞御期待。

## うぐいす色のビル

—これは全て仮空の物語りであります—

高 見 信 夫

1

池袋駅の東口側に、K座という映画館がある。終戦直後にできて、それ以来ずっと、欧米の名画を二本立てで見せている。そこからさらに百メートル程東へ行ったところに電車通りに面したパチンコ屋がある。

むし暑い、不快指数八十いくつという日にはとりわけ客がこむ。納涼と賭博の欲望が同時に充たされるからである。ひる前の開店時から夜中近くまで飽きもせず、チンジャラ、

チンジャラをくり返している。

このパチンコ屋の裏側に二階建ての小さいビルがある。管理が行きとどいていられるしくそのうぐいす色の肌には、ほとんどシミらしい汚れもなかった。昼間からどの窓にも日よけがおりていたから、倉庫として利用されているものなのであろう。五時過ぎにパチンコ屋のチンジャラの声が、夕食に帰った多くの客を欠いて少し静まったころ、このビルの前に二台の車がとまった。まず黒塗りのグロリア・デラックス。それから運転手にあたる

一人の男と、助手席に坐っていた水色のワンピースの女が降りて、後のドアをあけた。そこから三人の女がゾロゾロ降りてきた。先ず一人はピンクのワンピース、次は黒い光沢を放っている蛇のうろこのようになまめかしい支那服の女、最後には白と紺の花模様のゆかたを着た大柄な女がでてきた。五人がビルの玄関前にせいぞろいしたとき、やはり黒塗りのトヨペット・クラウンが音もなくすべり込んできて、それから四人の男が現われた。なんの気なしに眺めれば、山か海へ避暑に



行った一行が今帰ったように見えた。それにしても蛇のうろこのような支那服を着た女の黒目が大きくツンと鼻すじの通った美貌と、均整のとれた肢体は、通行人の人びとの目を惹きつけた。しかしその九人の一行が、そのビルの中へ消えるとき、その支那服の女を、残りの八人がグルリと取り囲んで、大げさにいえば逃がさぬように警戒しいしいビルの中へ消えたことにまで注意を払う通行人はいなかった。

九人を吞んだビルから、さっきの男の中の二人がひきかえして車のドアに鍵をかけ、トランクから何かひどくかさばった荷物を取り出してかつぎ上げた。一人がいった。

「軍隊服なんて全くしばらくだ」

「おれは徐州駐屯の憲兵隊だったから本職な

んだ」

「それは初耳だ。すると大分中国良民にうらまれた口だな」

「まあ適当にやっていたさ。でもこの『水筆の刑』というのは二度だけ、しかも同僚がやっているのを見たことがあるだけだ」

「そんなにひどい刑なのか？」

「二度とも、どんな拷問にも屈しなかった重慶の女スパイの口をわらせるためだった。ひとり、ごくごくする程の美人だったな。もう一人はそれ程でもなかったが、意志の強い女というのは、それだけできれいに見えるものだ。だから二人とも美人だったわけだ。女がこの水筆にかかると、二時間近く経過するとシクシク泣き始める。四時間近くなると気が狂ったように泣き叫び始める。そしてどん

な女でも口をわる」

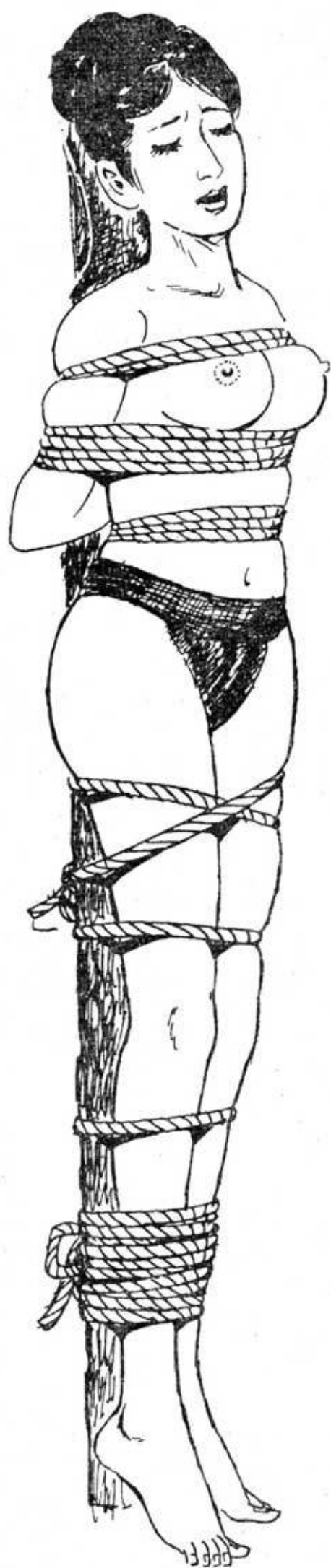
「命に別状はないのか？」

「そこなんだ。重慶のスパイは白状さえすれば、その水筆はストップで、あとはなぶりもの、そして銃殺で天国へ行けたんだ。水筆というのは、命に別状がない中に、どんな強情な女の口でもわらせる特効薬みたいなものなんだ。ところが彼女の場合は、刑をストップさせるために白状するという特権まで奪われているんだからな」

「可哀想に。でも彼女、すすんで受刑を申し出たんだからな」

二人が話題にのぼせた『彼女』というのは先刻ビルの中へはいつて行った黒い支那服の女を指すらしかった。

ビルの地下室は冷房がきいていて、ひどく



涼しかった。そのまん中にひじかけのついた回転イスが一脚と、それに向き合わせに普通のイスが一脚、回転イスの後にひどく背の高いイスと、都合三脚のイスがあり、何かこまごまとした準備が進められていた。水を入れた洗面器が二つと、それを置く台、洗面器のかたわらには数本の習字用の筆。かなりの量の布製の細びきと乗馬用のむち。それは何かこれから行なわれる手術の用意を連想させなくもなかった。

三灯のライトが、回転イスを中心に、あかあかと室内を照らし出した。二台のカメラがそれぞれ三脚にのって、前方と斜め後方から中央の回転イスにその視線を向けている。そしてこの異様な手術台にこれから乗せられる患者——先刻の支那服の女は、回転イスの斜め前方におかれたソファの上にうつ伏せに倒れていた。支那服の両足わきの切れ目からのぞいたフクラハギが、すべすべとなまめかしかった。いつはめられたのか、手錠がキラキラとライトの光りを反射しながら、その両手首にくい入っている。顔はうつ伏せに両腕の中に埋めているので、よくわからないが、十本のムッチリした白い指が、芋虫のようにソファの革の上を、たえずうごめいている

のは、女が並々ならぬ緊張と恐怖とたたかっているのを暗示した。その中の一本には、目をみはるように大きな真紅のルビーの指輪がキラキラと光っていた。

準備万端とどのい、五人の男のうちの四人が階上に姿を消し、カメラマン役の一人だけが残った。そして黙々とカメラのピントを合わせているらしかった。さいぜんから黙ってその支那服の女を、見おろしていた三人の女が、ソファのまわりに歩みよった。その中の一人、ゆかたを着た女がそっとハンカチをとり出して、受刑者が緊張のあまり、一面に油汗をにじませている顔を持ち上げて、そっとぬぐい取ってやった。その顔は恐怖のために蒼白になっている。

「三木さん。あたし恐いわ。ビルにはいるときは期待に胸がふくらむ気がしないでもなかったのだけど、いざこの部屋にはいったとたん、いいようもない程、恐くなったの。女のあわれさが痛い程身にしむわ。あたしがどんなに取り乱しても笑わないでね」

あえぐように訴える。水色とピンクのワンピースの二人が、すばやく受刑者とゆかたの女との感情の交流をさえぎる。

「ダメよ、個人感情は。あたしたち二人とも

今日責め役にまわる積りよ。高杉さんが、どんなに苦しがっても、三木さん、あんたかわりに許しを乞うたりしちゃダメよ」

水色のワンピースを着た女が冷然といい放った。受刑者の顔がガクリとふたたび両手の中に埋まった。ゆかたの女が、ほっとため息をついてそれを見おろす。

## 2

この女たちは、東京では人びとの心をつかんで爆発的な売れ行きを示している風俗雑誌△SM時代▽被虐用のモデルたちである。そして先刻階上に消えた四人の男たちは、この雑誌の関係者たちであった。

丁度一週間前に、この雑誌の編集長のところへ、一愛読者から書簡がとどいたのが事の発端であった。その書面は次のようなものであった。

「拝啓

暑中お見舞申し上げます。

とつぜんのことではありますが、小生貴誌のモデル高杉久江嬢に求婚致したく、内意はすべて高杉久江嬢にお伝えしてあるものの、貴誌関係者の方がたにお入りしてお願いがあ



り、一筆したためる次第であります。

小生と高杉嬢との精神的な結びつきは、ひとえにSとMであり、小生宅に高杉嬢をお迎えする以上、万遺漏なきよう、あらゆる処刑設備の準備に努力して参りましたが、ただ私と高杉嬢との間に行なわれる仕置は、一人対一人の場面に限定されることは申し上げるまでもございません。

それ故、結婚を前に一つの思い出として、結婚後は実現できぬ一人（高杉嬢）対数人の仕置を、貴誌によって実現していただきたく、又そのおりの実写真も高杉嬢に記念として持参させていただきたく、お願い申し上げます次第であります。

むろん、こんな自分勝手なお願いをする以上、どのような仕置にかけられようと、貴誌の御自由におまかせ致します。肌などもいかに傷つけられるとも、不服など一切申し上げぬことはいうまでもないことではありませんが、でき得れば肌を痛めぬ「水筆の刑」（重慶のスパイに対して日本軍憲兵が実施したものととして有名であり、つとに熟知のおん事と拝察致しますが）などを主体にいただければ幸甚と存する次第であります。

その仕置はむろん、個人間の秘事として当

方よりお願いして実施致すものにて、公の性質など全く帯びざるものにて、従って生ぬるいプレイ的な段階にとどまられることなく、寸毫仮借なき仕置として実施していただきたく、又、高杉久江嬢としても一生に一度の思い出故、本望に存じて刑に服するものと信じます。はなはだ自分勝手なお願いにて恐縮のいたりと存じますが、種々雑費もかさむことと拝察致し、貴誌に対する寸志とし、同封の三十万の小切手、御笑納いただければ光栄と存する次第であります。

「SM時代」編集長殿

玉机下

松井良一拝

以上のような文面を、机上のコーヒを半分のんだままで一気に読んだ編集長の、心もち有名な女子バレーボール・チームの監督を連想させるきびしい風貌が、めがね越しにゆるむのが見てとれた。この一愛読者のSMを楽しむという超現代的な感覚と、芸者の身受け金という古風な概念との同居が、ほほえましく微笑されたからであった。

編集長はひとりうなずいた。

「よし、この三十万円で日本陸軍の憲兵隊の

制服を四人分買おう。仕置の写真の迫真力がまるきり違ってきて、松井氏を満足させられるわけだ。それにこの憲兵隊の制服はうち的小道具としていつまでも利用できるわけだ」そうつぶやいて、編集長はただちに高杉久江を呼んだ。白いワンピースにウエストを太い革バンドでキュッとしめた高杉久江が部屋にはいつてくると、編集長はその手紙を彼女に見せた。羞恥に久江のほほがたちまち染まるのに

「どうだね。無理にといっているのではないのだが……」

と追い討ちをかける。女はキッと顔を上げた。そしてうつむく。蚊の鳴くような声で

「存分にお仕置下さいませ」

というのが聞きとれた。さすがにショックから、立っているのがやっとの高杉久江に、その場で手錠がはめられた。むこう一週間監禁するためであった。余りにむごい求婚に、心がわりが懸念されたからであった。監視は久江の同僚にあたる他の三人のモデルが自発的に申し出た。その心理分析はさておいて、手の自由を奪われた女を男が監視するのははばかられたので、編集長は渡りに舟と、その申し出を受け入れた。その間に憲兵隊の衣裳

の購入、処刑場に用いるビルの地下室の借り切りなどの準備が進められた。

一方、久江を監禁した部屋からは、絶えず苦しそうな声が洩れてきた。松井良一氏から久江に五十万円もするルビーの指輪がとどけられていたり、久江のところに送られてきた写真によれば松井氏は十人並の容貌というより、押し出しのよい壮年の紳士であったり、又その上に四人のおもだったモデルの中、特定の一人が、特別の責めを受けるということは、そのままその一人が特に男たちの愛情を浴びるということを意味したし、何から何までが全て、三人の娘たちのしつとをかき立てないではない筈であった。編集長は苦笑した。

「手錠をはめた一人と、自由な三人との、時間無制限のプロレスだからな」

監禁がはじまって三日目に、その部屋から「アアッ、アアッ、あんたたちどうしてこんなことをするの。あたしはもう夫のある身なのよ。少しは遠慮したら。アアッ、アアッ」という声が流れ出たとき、編集長はツカツカとその部屋の中へは行って行った。部屋の中央に全裸の久江が半吊りになり、それを取りかこんだ三人が木綿針で責めているところ

であった。冷房のきいた部屋で涼しそうにしている三人とは対照的に、久江は汗みどろの顔を苦しそうにゆがめていた。

「おい、高杉さんは四日後の本番のときには、主人公のグラマー・スパイとして写真にうつらなければならぬんです。あんまりせめてやせおとろえたり、それにわかるような傷あとはつけないようにして呉れよ」

三人は木綿針をそっとかくしながら黙ってうなずいた。編集長は久江にも言った。

「高杉さん、あんたの人格は三日前に仕置の承諾をしたときから完全に奪われているんだよ。夫があるからなどというセリフはよけいリンチをはげしくするだけだ。もっとも、こんなリンチは本番の処刑にくらべたら、ほんの序の口で、とるに足りないものかも知れないけどね」

編集長がはいってきたときから、救いを求めるように投げられていた久江の視線が、忽ち絶望して天井をあおいだ。編集長がドアをしめて出て行くと、たちまちそれを追いかけようように悲しげな女の悲鳴が洩れてきた。高杉久江に手錠をかけてから、編集長は責任を感じて、ずっと宿直をつづけていたが、三人の監視役の女たちはかわるがわる外へ食事に出

ていくらしかったが、久江のために近所の出前がやってきたのに、一度も気づかなかつた。それに一度も監視役の女たちが彼の部屋の前の水道へ水をくみにくるのにも気づかなかつた。

「どうしているんだろう？」

そのとき彼はハッと気づいた。先刻彼ははいつて行ったとき、かじりかけたパンの切れはしと、からになった尿瓶と、救いを求めるような久江の視線と――

しかし

「可哀想に」

というショックは、たちまちにして

「やりおるわい」

という感情にかわった。彼は、松井氏と高杉久江の愛情を、強固にむすびつけるきずなは、久江をむこう数日間、できる限り重慶のスパイと同じ境遇につきおとしてやることだと確信していた。重慶のスパイが水筆の刑を受けるのは、あらゆる拷問を前提としての奥の手となってこそ意義があるのだった。三人の同僚たちが久江に私刑を加えているのは、その動機が何であれ、又、その動機が三人三様であれ、一致したものであれ、それはどうでもいいことであった。



「体力回復に栄養のある食事を、処刑直前の二日間、さし入れすればいいだろうな」

彼は胸算用しながらタバコに火をつけた。彼の机の正面には、がくぶちに入れられた、四つ切りの久江のはりつけ写真が飾ってあった。疑いもなく、そのことも三人の同僚たちが、今、久江に爆発させている陰惨な加虐の原因になっていることを、彼はよく知っていた。彼は、その十字架にかかった、写真の久江の悲しそうな視線から目をはずして、ふうとタバコの煙を吐いた。

## 3

今、革のソファの上に深ぶかと投げ出され、いよいよ処刑の時刻をむかえて、久江は必死にあらぬ思い出を追っていた。気がまぎれるからである。今年の早春に、久江は箱根の東側の山麓の山宿に数日間宿泊した。先刻、一週間ぶりに手錠をはずされて、編集部のある新宿から、この池袋の、はじめて見るうぐいす色のビルまで運搬されてきたときも、チラとその山宿の思い出が頭をかすめたのであった。

その山宿の門前には、つくしがチラホラとほんの頭の先だけをのぞかせていた。まだ北

西の季節風が衰えていなかったが、春の気配は野に山に、うしおのように押しよせていた。一羽のうぐいすが彼女の部屋の窓辺でしきりに鳴いていた。いや鳴こうとしていた。

「ホーホケキョ」

と流暢にさえざるまでには、大へんなトレーニングが要るらしかった。そのうぐいすは一度もそのようにさえずれなかった。

「ホーピョ」

とも

「ホーキョ」

とも鳴いて見た。ピョあるいはキョに力を入れた鳴き方であった。そしてそれがホーホケキョに程遠いことを知って絶望してか

「ホオーツ」

だけでため息のように中断したりもした。あるいは思い直して

「ホーコロ」

とも

「ホーケロ」

とも鳴いて見た。やはりホーホケキョとは違う。それで今度は

「ホーロコロ」

と鳴いて見た。ホーホケキョとは違うが、これはこれでひどく美しく響いた。それでそ

のうぐいすは自分の鳴き声に満足し得意にな

って

「ホホポー」

と鳴いた。彼女は窓辺ではほ笑んだ。「音痴のうぐいすで片づけるのは、可哀想だわ」

そして読みふけていたシェイクスピアの悲劇から目を上げて、このうぐいすが正常にホーホケキョと鳴けるまでに、試みる鳴き声を色にたとえて全部並べて見れば、どんな絵ができるだろう？ それはきっと山下清の切紙細工のようなものだわ——そのうぐいすは、彼女が山宿に滞在している一週間の間に、ついに「ホーホケキョ」という鳴き声をマスターしなかった。

そのときうぐいすが若し、正常に「ホーホケキョ」と鳴いていたら、そのうぐいすのことを彼女は忘れ去っていたらう。不完全なるが故に、そのうぐいすの鳴き声を記憶にとどめていることと、自分の愛人が、今自分に女の恥を思い知らせてから結婚しようとしていることとは似通ったところはないのかしら？ 事実、処刑のために乗る回転イスのすぐ横には、真新しいテープ・レコーダーが彼女の悲鳴を全て録音しようとして待ちかまえているでは

ないか。波立つ自分の気持を整理しようと懸命になっても、恐怖だけはぬぐい去ることはできなかった。苦悶の実写真と、悲鳴の録音テープというプレゼントを、今自分がこうして命がけでつくろうとしている、この処刑場に、夫の立ち合いさえ得られない——それが女なのだ。でも、もし私が落命しても、この二つのプレゼントとを形身として夫が秘蔵して呉ればあたしは本望だわ。

このとき地下室へ通じる階段をミシミシと鳴らして、先刻上がって行った四人の男たちが降りてきた。いずれも憲兵そのままの服装に着かえていた。二人は下士官で軍刀を腰にたらし、二人は補助憲兵でゲートルを巻きゴボー剣を吊っていた。

その一人、山下明夫は補助憲兵の服装であった。もう一人の補助憲兵三島がツカツカと彼女のソファの方へ歩み寄ってきた。彼女は身をこわばらせた。その髪がぐいとかまれ、彼女の顔はのけぞった。じっと目をつぶる。

「よし、処刑用意」

一人の下士官が命じる。たちまち手錠が外され、支那服は引き裂かれんばかりのいきおいではぎ取られた。一糸まとわぬ裸身が、ブ

ルブルとふるえながら、二灯のライトにそのヌメヌメとした陰影を描き出した。久江の裸身はそのあかりのまん中で、補助憲兵の三島にむんずとはがいじめにされた。そればプロンズの像に縛りつけられた裸身のようなコンラストを見せた。脱ぎ捨てられた支那服がころがしてあるソファに三人の女がそろそろと坐り、地下室でそこだけ華やいて見えた。むちを手にした下士官の一人が、はがいじめにされた久江の前に歩み寄る——

炸裂するむち音、女の悲鳴、カメラのシャッター音だけが、交互に地下室に響き渡る。久江のまっ白い肌はたちまちみずばれの縞模様となった。一きわ高いむち音と、女の絶叫がひびくと、その縞の一本がついに裂けてたらたらと血がしたたりおちた。

「よし」

下士官はむちをふるう手を止め、補助憲兵三島ははがいじめにした両手をはなした。久江のからだはガクリと気を失なったように、うつ伏せに床に倒れる。三十は打たれたであろう。それを背後から抱きおこすように、四人の憲兵が総がかりになる。抱きおこされた久江の両腕は、蝶が羽根をひろげたように左右に持ち上げられ、その上膊部に太い注射が

一本ずつ突きさされ、彼女はうめき声をあげた。むち打ちの苦悶から蘇生させるのが目的であり、これからはじまる水筆に対して抵抗力を増し、苦痛を長びかせるのが目的の、責め道具としての強壮剤の注射であった。ソファの上の女たちにも、その意味はわかったらしい。六つの瞳が大きく見開かれる。

注射がおわると、すぐ高小手に縛り上げられた久江は、つきとばされてよろよろと回転イスの方へ歩み寄る。そのとき、つきとばされながらも、たしかに久江は自分の意志で、その処刑台の方へ二、三步歩いたのを感じて、ソファの女たちはさらに驚いた。

そのイスへ坐ると、今度は女をイスに固定する作業がはじまる。重罪人にだけかけられる首縄が幾重にも首に巻きつき、イスにしっかりと連結される。観念し切った久江の顔をライトが一きわ明るく照らし出す。それをカメラが追う。最後にひじかけを利用して、彼女の両足が、息をのんで見守る三人のモデルたち、ちょっと見せるのをはばかりようなポーズで固定されたが、それに対しても久江は何の抵抗も見せなかった。斜め前のソファに並んでいる同僚たちをチラと薄目で眺めた久江は、三羽の鳥が止まり木に並んでいるよ



うだと思った。そして身じろぎもせず、次の瞬間を待った。

「よし、処刑はじめ」

そう命じた下士官は自分でも二本の筆をとった。補助憲兵三島が一本の筆をとる。下士官は久江を縛りつけた回転イスのうしろに設置された高いイスに腰かける。そのすぐ横に、台にのせられた洗面器がある。下士官はその中の水を二本の筆の先にふくませた。そして背後から、その二本の筆の先を久江の両方の乳首にあてた。三島は久江と向き合ったイスでやはり一本の筆に水をふくませた。

ついに世にも恐ろしい刑がはじまった。下士官はゆっくりと二本の筆で久江の乳首をぬりつぶすような運動をはじめた。ときどきその筆は洗面器の水をタップリと吸いこんで、乳首ばかりを何百回となくぬりつぶす。向い合った三島の筆がどこを責めているかはいうまでもない。

「ククク……」

苦しげなしのび笑いと共に、久江のからだがかげいれんする。苦悶の表情が絶頂に達するとたんに、シャッターをきる音が聞こえる。補助憲の三島のうしろでは、もう一人の山下が凝然と立って、久江の忘我の苦悶を眺めて

いる。この山下と、もう一人の下士官は今、筆を取っている二人の手首が疲れたときに交替することになっていた。交替まで用意されている男の手首と、女のからだのいちばん弱い箇所とのたたかいであった。

一時間が経過した。久江のおし殺したようなうめき声は、次第に高くなり、その汗は顔一面を伝ってダラダラと流れおちる。三分の休憩がはいる。

その三分間の間、水を打ったような静寂の中で、久江の急調子な荒い呼吸だけがつついた。

ふたたび筆先が運動を開始する。さらに三十分経過した。

「苦しいッ。もう許してッ」

悲しげな声と共に、その両眼から、こらえていた涙がパラパラとこぼれおちる。

「もう我慢できないわ。かんにんして」

ついにシクシク泣きはじめた久江の泣き声に、今は針よりも刃よりも恐ろしい武器と化した三本の筆が、いきおいを得て猛攻を開始した。それはバイオリンやギターをかなでる三本の弓を思わせた。しかもそのひと動きが、女体の微妙なけいれんに対応して、いつはてるともない弾奏がつづいた。テープ・レコー

ダーがまわりはじめ、シャッターがしきりに切られる――。

二時間が経過して、さらに三分の休憩がはいる。下士官はもう一人の下士官と交替し、三島は山下に交替した。けいれんも泣き声もさらにひどくなり、からだ中、滝のように流れおちる汗のため、全身を縛り上げた布製の細びきも、今はグッショリと濡れて、さらに女体をきびしくしめ上げている。

ついに三時間が経過した。五分の休憩がはいる。もうからだから血の気がひいて全身蒼白になった久江の両の上膊部にさらに、苦痛を長びいかせるための二本の太い注射が打ち込まれる。山下はハンカチで、その顔の汗をそっとふいてやった。そのとき固くとしてブルブルふるえていた久江の目が静かに開き、その口がやっと、聞きとれるようなささやきを一とこと洩らした。

「御満足？」

ふたたび久江の目も口も固くとざされた。そして刑が続行された。

4

高杉久江を横浜のバーからスカウトしてきたのはこの山下であった。外人相手の、京都

風の和服に高島田のかつらをつけた数十人の女給の中で、この久江一人だけは胸のあらわな、いくらか色のあせた藤色のドレスを着ていた。そのわけを聞いただと、新米なので、和服が一人分だけ足りず、余分に備えてあったドレスを着せられているのだという答えであった。胸のふくらみの間の谷間がこぼれ出てすばらしかった。久江はそれを恥じて、そこに自分のハンカチを押しこんで、その谷間をかくしていた。山下は久江とワルツを踊りながら、そっとささやいた。

「たとえば僕が君を恋したとするね。ところが男には妙な心理があって、自分の恋人が満座の中ではずかしめられているのを見ると、たとえようもない満足を感じるものなのだ。それが新しい恋なのだ。それに君のスタイルは、この店では抜群だよ」

その次の土曜日に山下がそのバーへ行ったとき久江は、その谷間をかくすハンカチを取り除いていた。そして久江のスカウトは、スラストラとまとった。周囲のものは、山下が久江をモデルに責め写真をとるときの情熱から判断して、この二人は結婚するものと信じていた。

二人の恋が破綻したのは、一口にいえば官

憲の、風俗雑誌に対する干渉で、この度重なる介入から山下が生きて行く指導原理を失ったことから発していた。山下は毎晩酒をたしなむようになった。久江は、こんなことくらいで男が生きて行く指導原理を失うなんて、ずい分だらしなことだと感じた。そして歯をくいしばって、モデルとして最も辛い責め場の演技をすることをみずから買って出た。その豊麗な肢体と凄愴なばかりの内面の美しさが加わった。それが愛読者の目をひきつけないわけがなかった。そして少壮実業家の松井良一の求婚となったものであった。

## 5

すでに刑は四時間に達しようとしていた。久江の苦悶はもうはた目で見られぬ位に激しさを増していた。泣き声はすでに気が狂ったような絶叫となり、油汗のにじみでたからは土色を呈していた。

「御満足？」

とかすかにつぶやいた口から、今は獣のような叫びがほとばしり出た。

「クククッ。ギャーッ、もう殺してッ。火あぶりにしてッ。むち打ちしてッ。からだもあげる。お願い殺してッ」

髪をふり乱した幽鬼のような顔をさらにカメラが追った。それはたおしたえじきを、二匹の食肉獣がむさぼっている光景とえらぶところはなかった。ソファアの上に気おされて黙りこくっていた三人の女たちは、男女同権などというのは、しょせん迷信だったのだ、この光景を私たちは一生忘れないだろうと、次第に久江とか自分とかをへだてる境界を取り去って「女」というものについて考えはじめていた。久江が受けている極刑は、そのまゝ、自分が受けているものなのだ。見学を願う出てよかったのか？ よした方がよかったのか？

手の空いている二人の男も、二匹の食肉獣とえじきの織りなしている、一篇の叙事詩に目を奪われていた。

四時間もとくに過ぎた。休憩の必要を感じた背後の下士官の持つ二本の筆が乳首をはなれた。

そのときである。山下の脳裏を

「この女を生かして松井氏に渡すわけにはいかない。この女はおれの掌中の、何にもかえがたい玉なのだ」

という想念がすすめた。彼はひとり筆をゆるめなかった。土色の肉塊と化した久江の口



からは、もう絶叫はほとぼしらず、ただぜいぜいと空気の出入するふいごのような音だけが洩れて出た。

ソファアの上で、この四時間半もの間、石のようになつてなりゆきを見ていた三人の女の中の、ゆかたを着た一人、三木雪子はのときふと祖母の臨終を思い出した。ふいに、あらゆる嫉妬の対象であつた久江の肉塊が、「同業者なのだ」

という考えが電光のように彼女の脳裏をかすめた。彼女はパツと立ち上がり、飛鳥のように山下の手首をつかんだ。

「もう許して上げてッ。高杉さんは限界まであなたにおつき合ひしたのよ。殺したければ、あたしがあなたに殺されてあげるわ。だからもう許してあげてッ」

このとき、山下の殺意を感じた背後の下士官——編集長であつた——が

「山下、もう許してやろう。おれの見た重慶のスパイだって、もう一時間も前に白状しているんだ」

と、サビのきいた声で命じた。失神したと思われた久江の口が、このときかすかに動いた。

「いいのよ。もっと責めてもいいのよ」  
そしてガクリと、その首がくずおれた。山下の手から筆がおち、その目からは二すじの涙がほほを伝った。

6

それから二十日過ぎた。八月ももう中旬にはいつていた。

新婚旅行には暑過ぎて、予定のコースを全部中止にして、松井良一と高杉久江は、今伊豆の東岸で海水浴をきめこんで一軒の家を借り切っていた。

山下の必死の求婚を

「感違いなさらないでね。あたしを水筆にかけたのは、あなたではなく、松井なのよ。あなたに憲兵の役をやらせてあげたのは、あなた、あなたに対する最後のサービスだったのよ。さようなら」

と軽くなした久江は、今、蜜のように甘い松井良一の愛情に、身も心も溶け切っていた。うぐいす色のビルの地下室でうつした五十数枚の写真と、録音テープは二人を結ぶ固い固いきずなとして、たえず二人の身边にたずさえられていた。

何故この伊豆にきたのか？ それは台風15

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

Mファン待望の超傑作集

Mフオト  
最新作

M場面決定版

大手札印画紙焼付  
各組 十二枚一組 三〇〇〇円

山原、大塚の二嬢によって展開される稀有の迫力あるMフオト。△まふ▽は分譲中止。各組十二枚一組三〇〇〇円に値上げ。事情に依り近く分譲中止の予定です。こんな真に迫ったMフオトは二度とできません。今の中にどうぞお早くお求め下さい。

二女の戯むれと男

略号  
(まも)

美女から縛られる

略号  
(まね)

男馬を乗り潰す女

略号  
(まめ)

痛烈ムチのご馳走

略号  
(まれ)

首絞めで刺す止どめ

略号  
(まむ)

汚臭と足舐の強制

略号  
(まり)

二女の臀臭に泣く

略号  
(まみ)

号のときに、ここで難破したモーター・ボートの中に山下の死体が見つかり、それが自殺であることを知っている四人——松井と久江と編集長と雪子の、だれもがショックさえ感じないで、それを当然のこととして受け入れ、二組の夫婦が生まれたからであった。独身主義の編集長も、久江の凄絶なばかりの愛情に、魂をゆすぶられたらしかった。

編集長と雪子が、上高地へ行くのを見送って、良一と久江の二人は、山下の死に場所へ花束を投げ入れることを、新宿駅のプラットホームで約束した。

ホームで雪子は大輪の菊の花のようにほほ笑んだ。

「久江さん、あたしとあんたとで攻守同盟を結びましょうよ」

「攻守同盟？」

「条約は簡単よ。水筆は一人対一人ではできないでしょう。だから、あたしが水筆を受けるときは、久江さんがあたしの乳首を攻めて下さる。そのお礼に、久江さんが水筆を受けるときは、あたしが同じところを攻めてあげるわ」

「……」

「でも実質的には、あたしが、あなたを責め

るばかりということになりそうよ。編集長って、案外サディストでないの。あたしがっかりしたわ。でも考えて見ると、この水筆のお祭りのいけにえは、あたしでなくて久江さんだったのだから——そう思って、あきらめることにしたの。そうしたら、急に久江さんを責めてあげたくなって、こんなことを考えついたのよ」

「それじゃ悪いわ。いいわ、お礼に……」

「おっとっと、それは駄目よ。こう見えてもあたしって案外貞淑なのよ。だから責められ役は貴女だけ。小説のヒロインの数と同じで、いけにえは一人にしておくのがいいのよ。一週間に一回くらいは、あなたの水筆のお手伝いに行つてあげるわ。でも、せいぜい重慶のスパイ程度よ。それ以上はあぶないわ」

「雪子さん、本当に有難う」

「お礼なんかいわなくていいのよ。あなたはあの池袋のビルで前人未踏のところまで行つたのよ。週に一回くらい、重慶のスパイになる特権があつてよ」

「……」

「またあの泣き声を聞かせてね。じゃ汽車が出るようだから、また」

こうして、四人は別れた。

雪子の申し出を伝えられて松井良一はひどくよろこんだ。その夜、久江はいつになくむごたらしく責められてたびたび失神しそうになった。海岸のはなれ家で、夜はずっと陸から海にむけてかなりの風が吹く。それがむちの音や、猿ぐつわから洩れるうめき声などをすべて包んで呉れる。十時ごろ、汗みどろになつて荒い呼吸をしている久江に、強壮剤の注射がうたれ、彼女は良一に連れられて波打ち際を歩いた。月がなく、星がガラガラと光りを放っている。人気ないところにかつこうの岩が波に洗われている。腰まで海水にひたつた久江の裸身を、鉄のくさりでぎりぎりとして岩に縛りつけながら良一は言った。

「まずアンドロメダになつておくれ」

「いいわ」

「二時ごろもう一度きて、六時まで水筆にかける。一人だから不完全だけど責められるだけ責める」

「嬉しいわ」

「その前にひどいむち打ちがはいるんだったな。きず口に塩水がしむよ」

「かまわないわ」



「憲兵隊の水筆と違って、洗面器が太平洋だよ」

「豪勢だわ」

熱い口づけの後で、良一は去った。満潮は十二時であった。海面は久江の乳房と首の間まで上昇した。当然波頭は頭をこえた。それがひいてへそまであらわれるとき久江は呼吸した。数度呼吸をあわすのを失敗してむせた。むせながらも、久江は、このこちよい夜具への愛着を強めた。

赤いカニが一匹、久江の肩を伝って鎖骨の内側のくぼみに満足して、そこで泡を吹きはじめた。そして波頭が久江を水中に沈め、濡れた髪がカニのまわりでゆらぐと、それを海草と間違えてハサミ切ろうとして、切れないのに驚いて、久江のからだだが水面上に出たときますます泡を吹いた。

編集長と雪子に約束した通り、花束として自分のからだだが、こうして水中に投げ入れられていること、そして明け方には水筆にかけられることを知った山下が使いにこのカニをよこしたのだと思えなかった。

かつて愛した恋人が酒におぼれ、私の方を妙な目つきで見ている。いわば海の怪物となつて私の身が破滅の危機にさらされたとき、

空をとんできて救って呉れたペルセウスが今の夫なんだ。ペルセウスに救われて、その妻になったアンドロメダは、その後どうしたかしら。きっとペルセウスの目をそばだてさせた女の装身具、鉄の鎖をせがんだに違いないわ。そしてペルセウスは、アンドロメダを一日に一度は鉄の鎖で縛り上げ、むちで打ってやった。これくらい呼吸のあった夫婦は決してなく、二人の間に波風など決して立たなかったんだわ。ペルセウス、アンドロメダ夫妻の後日談がないということは、波風が立たなかったというのを、うら返しにしたいだけなんだわ。

考えにふけて、久江はすっかり波に呼吸をあわせそこない、ひどくむせた。鎖骨の内側にうずくまっていたカニは、おどろいてどこかへ逃げて行ってしまった。

8

雪子は約束通り毎週土曜日の夕方やってきた。久江に対する良一の監視の目は、もう金曜日のひるごろから光っていた。夕食はとらせず、高手小手に縛り上げて、地下室へ文字通りぶち込んだ。土曜の朝、仕事に出る前に小さいアルミニウムの食器に昨日のつめたい

ごはんを入れ、これも昨日の朝のみそ汁をざっとかけたものを一ぱい持ってきてくれた。だしをとった後のニボシが三、四匹のついていることもあった。

夕方、食卓に連れ出される。輝やくばかりのドレスを着た雪子と良一が向いあって座っている。豪勢な夕食である。焼き肉の匂いが、鼻をさすように空腹にこたえる。食卓をかこんで三人が坐っているものの、一糸まとわず高手小手の久江は、夕食を見せつけられるために呼び出されたのであった。ビルの地下で、重罪人に対するものとして、幾重にもかけられた首縄のかわりに、今は黒びかりのする革の首輪がかけられ、それにつけられた鎖の一方のはしは、雪子のドレスのひざの上にあつた。運がよいときは飲み残しのスープにパンくずがちらばっているのを雪子が呉れることがあった。

仕置は夕食後一時間してからはじめられることになっており、それまで居間でテレビを三人で見ることが多かった。テレビを見ながら、久江は革のソファの上に投げ出されて、よく池袋のビルのソファを思い出した。そして処刑時刻の迫るのを待ちわびていた。それは三人の中、一人だけこんなあさましい姿

でテレビにむかわせられている——いれかわり立ちかわりブラウン管に登場する多くの人の視線にさらされているという羞恥もさることながら、もう三十時間もの間、今朝あたられたアルミニウムの小わん一ぱいだけのごはんは、かえって空腹を思い知らせるのに役立っているだけだからであった。処刑直前に一缶のコンデンス・ミルクが飲まされる——それが欲しさに処刑を待ちこがれているのであった。そしてビルの地下室で、苦痛を長びかせるためにうたれた強壮剤の注射と、このコンデンス・ミルクが本質的に同じものであることに気づいてか気づかないでか、そのミルクを嬉々として飲んだ。

今日はあいにくテレビに面白い番組がなかったので、良一と雪子は雑談をはじめた。良一は久江のことを単に「これ」と呼んだ。

「雪子さん。夜中にこれの処刑がおわるでしょう。新しいところみですが、来週雪子さんがいらっしゃるまで、このままのかっこうで地下へぶち込んでおこうと思うのです」  
「すばらしい考えだわ。でも食事はどうなさるの？」

「朝晩アルミのわんに一ぱいずつ、ごはんの残りをやることにします」

「徹底してらっしゃるのね。久江さんはもうこれからは一週間の間、新聞もテレビも見られず、夕方お帰りになる旦那さんの抱擁だけが生き甲斐の生活なのね」

「抱くために帰ってくるのか、折檻するため帰ってくるのか今に思い知るでしょうよ」  
「生き埋めと同じですのね。よし、そう聞いちゃ今夜のお仕置、ハッスルしますわ。今日こそもう重慶のスパイ程度じゃ、かんべんしないわ」

「どうぞごずい意に。私もまだ録音テープ以外、生まの声で『もう殺してくれ』というセリフを聞いたことがない。今日こそ聞けるわけだな」

「あたしも池袋での久江さんのあの泣き声、なつかしくて、もう一度聞いて見たくて仕方がなかったんですの」

久江は縛られたまま、ソファアの上で悶えた。自分を責めるむごたらしい会話を横で、聞くこと、それはたまらない戦慄をさそうと同時に、何と甘美に耳にひびくことか、今度生まれてくるときもきっとあたしは女に生まれてこよう。身の危険を直感して、ふとそんなことを思ってた。

雪子が立ちあがって、くる途中、買ってきたコンデンス・ミルクの缶を、缶きりであけはじめた。

それから一週間、久江は地下にとじこめられた。土曜日の夕刻、雪子の来訪を心待ちにしていた良一のところへ、頭の髪の半分が白くなった体格のよい初老の女が手紙を持参した。いぶかしく思いながら、それをひらくと簡単な文面で、先週の久江さんのなやましい肢体を見て、私も血が昂ぶり、自分の操に自信が持てなくなったので、今週から失礼したい。決して悪くおとりにならないように。そのかわり鋭意努力してSMに理解を持ち、力もかなりあるばあやを派遣するから、気が向かれたら、私のかわりにやとっていただきたい。ただ前身のことはお問にならないように。料理はかなり上手だと、誠意のこもった文面であった。

「雪子奥様から、こちらの奥様のお話しはよくうかがって参りました」

というので、良一は彼女を地下室に招じ入れた。もう少しばかり、肌寒くなっていたので、久江は先週の土曜日に悶絶したとき、一度縄をとかれて木綿の白い囚衣を着せられ、



その上から縛り直してあった。二人が降りて行ったとき、彼女は地下室の中央に正座して目をつぶっていた。その前に、老婆はていねいに手をついた。

「これは奥様でいらっしゃるのでしょうか。しのと申します」

「……」

目をあけた久江に良一が言った。

「これは今度から家で働いてもらうかも知れないお婆さんだ。雪子さんの紹介だ」

それから、そのばあやの方に向き直り

「紹介状には、君はSMに理解を持ち、力がある」と書いてあるが、どのくらい力があるの

## △お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の幹旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交換は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いいたします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書

か、ちょっと拝見したいので、これから久江を石抱きの拷問にかけからやって見せてくれないか。台はあそこにある」

目で知らせるのに、ばあやはすぐ部屋のすみにある、拷問台と一枚三十キロはありそうな石を一枚ずつ三枚と、つぎつぎに運んできた。良一は少し驚いて目をみはり、久江は観念して目をとじた。

しのがてきばきと久江を拷問台に坐らせ、そのひざの上に石を一枚ずつおいている間、良一は久江がうしろへ倒れないように背後から支えていた。久江の悲鳴が絶叫となり、ついに悶絶するまで、しのは久江のひざの上の

箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所などお知らせ致します。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚末着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

三枚の石を、ゆすぶるのをやめなかった。

その場で、しのの採用と、今後久江を地下室に鎖でつなぐことがとりきめられた。悶絶した久江のからだから、もう足が立たなくなつて不要になった縄目をといているしのをチラと見ながら良一は

「雪子さんは、いい人を紹介して呉れたものだ」と思った。

翌朝、鎖でつなげられることを知った久江は泣いて許しを乞うた。

「鎖でつなげられても本は読めるんだし、それに欲しいだけ買ってやるんだから」

といわれても、子供のように、両手首に鎖をつけられるのに抵抗した。しかし男一人と力の強いばあやが、足が立たなくなっている久江を鎖でつなぐのは、さして困難ではなかった。良二はしのにてきばきといった。

「虫歯だけは見苦しいから、毎朝ハミガキとハブラシで歯をみがいてやるように。それから、屋上にガラス張りの日光浴の部屋をつくって、週に三回は日光浴をさせるように」

ばあやは一々うなずいた。久江は床にくずおれて泣きじゃくっていた。その手首の鎖が痛々しかった。その他端は側壁のコンクリートの中に埋めこまれてあったのだ。

新しい生活がはじまった。久江は生き埋めと同じ境遇になり、ただ夫が欲するときだけ、引き出されて石抱き、むち打ち、木馬、えび責めにかけられ、呻吟の声で夫を楽しませる、いわばステレオかなにかのような家具の一つとなった。もうじかに良一が手を下すことはなく、彼は奉行のように安楽イスからばあやが久江を仕置するのを眺めていた。

歯をみがいたり、日光浴をさせられるのは、大事な家具がいたまぬように油をさしたり、手入れするという以外のなものでもなかった。それでもしのは久江のことを必らず「奥様」と呼んだが、それはもう家具の名前のようにしか響かなかった。

週三回の日光浴のときだけ、久江は外界を見ることができた。ガラス張りの日光浴室の中央にベッドがあり、その手すりに四肢を縛りつけられ、あおむけに一時間半、うつぶせに一時間半と、その縛り直しのとき以外は寝返りは許されなかった。しのもその部屋にすることが多かった。

「ばあや、空ってこんなに青いのね」

久江の裸身に見なれているばあやも、空ば

かり見ていた。久江は不安になって聞いた。

「ばあや、こんな愛情って、あるのかしら」

ばあやは即座に答えた。

「愛情ですとも、これ以上の愛情はございませんとも。旦那様は二日に一晚は必らず地下へ奥様をお抱きにいらっしゃるのを、ばあやは知っておりますよ。外で浮気をしていらっしゃらない証拠でございますよ。ああ、ばあやも若し奥様のようにならだきれいで若かったら、旦那様のような愛し方をなさる方を見つけて結婚致しますよ。サ、今夜は石抱きでございますよ。そのきれいな泣き声をたっぷり聞かせておあげなさいまし」

「そう、石抱きなの」

「そうそう、奥様にお知らせしようと思ってうっかりしていましたわ。旦那様がね、これから毎日曜、奥様にくじをお引かせになるそうですでございますよ。これがそのくじでございますわ」

ばあやはエプロンのポケットから、パラパラと真白いカードを取り出した。

「それなあに？」

久江は好奇心から頭をもたげた。

「カードが十枚ございます。このカードを、これから奥様は日曜の夕方、くじ引きされる

のでございます。五枚のカードの裏には、エーと「ラロのスペイン交響曲」でございますか。次は「ベートーベンの第三交響曲」それからこれは「ベートーベンの第六」と書いてございますわ。それから残りの五枚の裏には、これは「木馬」次が「むち打ち」それから「石抱き」に「えび責め」に「水筆」と。つまり、奥様が口ぐせに音楽が聞きたい、聞きたいとおっしゃられたでございます。それと、旦那様の晩しゃくのビールに、日曜日だけ奥様の生まのまの泣き声が聞かれないという御不満と。その妥協案として毎週日曜日に奥様にくじをお引かせになる。三度に一度のわり合いで奥様は音楽が聞きになれる。そのかわり、残りの一度は旦那様が日曜も奥様の泣き声がお聞きになれるというわけでございますよ」

久江の両眼に、みるみる涙が溢れてくる。

そして悲しげに顔がふられた。

「辛いわ、辛いわ。日曜日も、お仕置を受けるなんて」

空一ぱいにひろがった鰯雲が、少しずつずれて流れはじめた。

(おわり)



## ○臨月腹妊婦資料の部

## 臨月腹妊婦緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号 (にち)

## 診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 五〇〇円  
田中美佐子 略号 (にし)

## 臨月腹開陳

大手札四枚一組 五〇〇円  
田中美佐子 略号 (にり)

## 臨月腹開陳

大手札三枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号 (にす)

## 柱縛りの妊婦

大手札二枚一組 三〇〇円  
田中美佐子 略号 (にや)

## 臨月のヌード

大手札三枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号 (にわ)

## 妊婦の裸身像

大手札二枚一組 三〇〇円  
田中美佐子 略号 (にた)

## 縛られた妊婦

大手札二枚一組 三〇〇円  
田中美佐子 略号 (にる)

## 臨月の裸身像

大手札三枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号 (にお)

## 臨月の裸身像

大手札三枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号 (にぬ)

## 突き出た臨月腹

大手札三枚一組 四〇〇円  
田中美佐子 略号 (にい)

## ○刺青女体資料の部

## 入墨の高手小手

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いち)

## 縄に悶える入墨

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いへ)

## 足吊り三態

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いと)

## 剥れた腰巻

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いは)

## 女一匹御意見無用

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いお)

## 玉取姫が凄む

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いる)

## 全裸緊縛立像

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いに)

## 入墨ヌード

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いよ)

## 後手吊りの構図

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いほ)

## 黒細帯の裸身

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いわ)

## 黒褌を誇る

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いか)

## 入墨自慢

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いり)

## 黒ふんどし入墨姿

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (くの)

## 黒ふん媚態の魅力

大手札五枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号 (くな)

## 黒褌背面模様

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (くこ)

## 黒ふん手吊り責め

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (くり)

## 全裸入墨姿態

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (いれ)

## 晒六尺ふんどし

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (ろと)

## 白六尺褌一本の姿

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (ろに)

## 白褌後手高手小手

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号 (ろし)

## 日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号 (いら)

## 洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号 (いこ)

## 日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

## 山原 清子 略号 (いさ)

可憐島田髻全裸縛り  
大手札三枚一組 四〇〇円

山原 清子 略号 (いみ)

黒フン高手小手縛り  
大手札八枚一組 八〇〇円

山原 清子 略号 (ひろ)

入墨女体全裸像  
大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原 清子 略号 (ひへ)

黒褌刺青女体美  
大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原 清子 略号 (ひね)

六尺褌をするまで  
連続二十ポーズ組写真  
大手札二十枚一組 二〇〇〇円

山原 清子 略号 (ひは)

白ふんどし脇差切腹  
大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原 清子 略号 (ひに)

白ふんどし短刀切腹  
大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原 清子 略号 (ひぬ)

刺青姐御腹巻脇差  
大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原 清子 略号 (ひほ)

刺青姐御腹巻短刀  
大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原 清子 略号 (ひり)

入墨女体海老責姿態  
大手札三枚一組 三〇〇円

山原 清子 略号 (ほか)

文身女体股間縛り  
大手札三枚一組 三〇〇円

山原 清子 略号 (ほき)